

インフィニット・ストラトス～竜の血を継ぐ者～

G大佐

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

黒龍・ミラボレアスとの戦いから、十数年が過ぎた。

護と早苗との間に生まれた東風谷真は、にとりが回収したISを起動させてしまう。

その頃、ISの生みの親である篠ノ之束は、男でも動かせないかと検討していた。

それを知った八雲紫は、真がISを動かしたことを伝える……。 「東方竜人帳」の第二部です！ 前作を読まないと分からないところがあると思います。また、その関係上モンハンや東方要素もありますが、薄めです。そこをご了承ください。

2017年7月5日 タグ「クロスオーバー」を追加

2018年4月25日 タグ「紅椿は無し」を追加

## 目次

プロローグ①	1
プロローグ②	5
プロローグ③	9
原作開始	
1話 視線という攻撃は、思った以上に辛い	15
2話 セシリアによる、宣戦布告	20
3話 真の専用機。その名は……	26
4話 守矢の息子VS英国淑女	32
5話 代表決定！……ってあれ？	37
6話 授業風景と、中国娘あらわる！	42
7話 のほほんとした後は……模擬戦	48
8話 喧嘩。一方、とある場所では……	53
9話 乱入する者	58
10話 vs無人機	63
11話 無人機戦の後処理	69
12話 フランス貴公子とドイツ軍人。そして、新たな転校生	75
13話 ISの実習。本音との距離は縮まるか？	82
14話 仲間との出会い	89
15話 訓練にて起きた乱入	93
16話 デュノア社の危機	98
17話 動き出す者	105
18話 狂気	113

19話	多対一	121
20話	専用機「夜影」	127
21話	変貌するラウラ	132
22話	力と目標	139
23話	トーナメント戦後	143
24話	いざ、レゾナンスへ	150
25話	真、切れる。	155
26話	真たちと海と天災ウサギ	163
27話	初心(?)な真	169
28話	一夏の目標って？	174
29話	疑惑	177
30話	特命任務、そして出撃前	183
31話	海からの襲撃者	188
32話	作戦失敗の後(ミツル視点)	192
33話	不思議な空間(一夏視点)	197
34話	リベンジの誓い	201
35話	vs 銀の福音(前編)	206
36話	vs 銀の福音(後編)	211
37話	任務を終えて……	216
38話	仲間にかかるとき	222
39話	影のごとき男	226
番外編	もしも真が、アーキタイプブレイカーの世界に送り込まれたら	234
40話	狙われる学園(前編)	239
41話	狙われる学園(真視点)	244

42話	狙われる学園（ミツル視点）	251
43話	増えていく仲間たち	258
44話	開花	264
45話	ぶつかる姉と妹	270
46話	砕ける鎧	278
47話	飛び交う刃	283
48話	IS学園防衛戦（前編）	288
49話	IS学園防衛戦（中編）	298
50話	IS学園防衛戦（後編）	305
51話	父の懺悔、一夏たちの願い	313
52話	保健室での語り合い	319
53話	復活のコンビ、再来の男	325
54話	アリーナ整備	330
55話	金獅子との戦い！	334
56話	v s ドナー（前編）	337
57話	v s ドナー（後編）	341
58話	男子たちの想い	346
59話	修行、そして胸騒ぎ	350
60話	襲撃と悔しさ	356
61話	豹変	361
62話	それぞれの決戦！ その1	368
63話	それぞれの決戦！ その2	371
64話	それぞれの決戦！ その3	375
65話	それぞれの決戦！ その4	379
66話	決着	385



## プロローグ①

季節は春。幻想郷の妖怪の山は、緑色の中に桜色が混じるという美しきを出していた。そんな山の中を、ある親子が歩いていた。

「父さん。にとりが山の中で回収したってやつは、何なんだろうな?」「にとりが興奮するものだから、機械なんだろうな。それも外の世界で作られたやつだろう」

黒髪に緑のメッシュが入った青年が、自分より少し背が高い父親に話しかける。一方で父親は、息子の問いに苦笑いで答える。

今日は、河童の河城にとりから「面白いものを回収したから、ぜひ見に来て欲しい」と言われて、二人でにとりのラボへ向かっていた。ところで、この親子は何者なのか、読者も気になるだろう。

「父さん」と呼ばれた男の名は、こちやまもる東風谷護。

十数年前に幻想郷の支配を企てた龍、ミラボレアスを倒した一人である。

今は早苗と結婚し、守矢神社で家族に囲まれて幸せに暮らしている。

その家族のうちの一人、こちやまこと東風谷真は、東風谷家の長男だ。

小さい頃から父の話を聞き、今も憧れを抱きながら、強くなろうとしている。

黒髪の中に緑髪が混じっているが、これは地毛だ。きつと早苗の特徴も受け継いでいるのだろう。

二人は、少しわくわくした気持ちでラボに向かっている。しかし二人は……特に真は知らなかった。

にとりが回収したものによって、予想も出来ない大きなことを経験するということを……………。

山道を歩き、途中から川に沿って歩くと、目的地へと辿りついた。見た目はどこにでもありそうな掘っ立て小屋だが、実は中に入るとたくさんの機械が置かれている。

「ここが、河城にとりのラボである。」

「よく来たね、二人とも！まあ中に入ってよ！」

言われたとおり中に入ると、油の臭いが鼻を突く。しかし二人は気にしなかった。なぜなら、目の前に見たことの無いものがあつたからだ。

『ソレ』は、鎧のようなものだった。

全体的に灰色で、二つの盾のようなものがある。しかし気になるのは、その盾の持ち手の部分が存在しない事だ。そのせいで真と護は、一瞬だけ普通の鉄板と間違えそうになった。

「にとり。これは何だ？」

「これはインフィニット・ストラトス。略してIS。霖之助さんによると、本来は宇宙に行く為のものだったらしいよ。外の世界では、兵器やスポーツの一種になってるらしいけどね」

真は、なぜ本来の用途から外れてしまっているか納得できた。ISは身体の一部しか覆えないつくりになっている。これでは、大気圏を突破する以前の問題になってしまう。

そして何より、武器だ。これがあることにより、兵器の一種にもなってしまったのだろう。

「ははっ。全身を覆う形で、さらに武器が無かったら、宇宙に行けたかもしれないのにな」

苦笑いしながら真がISに触れた瞬間・・・真の視界は白一色に染まった。

「ま、真!?!」

場所は変わり、ここは外の世界のとあるラボ。その中で必死にキーボードを打ち込んでいる女がいた。

彼女の名は篠ノ之束。ISを生み出した天才、いや、天災科学者で



ある。

「うくん。どうして、いつくんがISを動かせたんだろう？ちーちゃんの弟だから？……とにかく今の状況はヤバイよね〜」

チラリと隣のディスプレイを見ると、親友の家に大量の取材者が押しかけている映像が映っていた。

本来、ISは女性にしか動かせない。その理由は東でも分からない。

しかし、親友こと織斑千冬の弟、織斑一夏は動かしてしまった。ISは男性にも動かせるという希望が生まれた反面、一夏が様々な危険分子から狙われる可能性も生まれてしまった。

「さてさて、他の子も動かせるかな？ いや、むしろ動いて欲しいんだよね〜」

東は、密かに飛ばした小型衛星で、各地の検査の様子を見てみる。映っている男子は、量産型IS『打鉄』に触れる。しかし何の反応もない。一人、また一人と気落ちしながら検査会場から去っていく。

そしてとうとう、どの男子も起動できないまま終わってしまった。

「そんな……」

東は、椅子の背もたれに寄り掛かる。彼女の目から一筋の涙がこぼれた。

「どこかにいないかな……。いつくんの他にもISを動かせる男性……」

「幻想郷（いじりまちのせかい）に居ますわよ」

「っ!？」

東が振り返ると、胡散臭い笑みを浮かべた金髪の女性がいた。普通に立っているならまだしも、沢山の目玉があるナゾの空間が異様さを引き立たせていた。

「ど、どうやって入ってきたのかな？ かなり嚴重にロックをかけていたから、そう簡単に入れないはずだけど？」

「私の能力があれば、この部屋へ一瞬で来ることなんて造作も無いで

すわ」

束の頭は、不可解なことで一杯だった。能力？こつちの世界？一体何のことだろうか？

「今は訳の分からない事が起きてるかもしれないけど、そんな貴女に吉報があるの。貴女の言う、ISを動かせるもう一人の男が誕生しましたの」

それは、束にとって吉報そのものだった。

「本当!？」

「ええ。何故か幻想郷に流れ着いたISに触れて、ね……」

どうして今まで男性には反応しなかったのか。もしも異世界と言う存在が本当にあるなら、ぜひとも見てみたい。

束は、初めて、空想上のものに興味を抱いた。

「色々とお話したいの。……来てくれないかしら?」

束は大きく頷いた。

## プロローグ②

真の目の前には、何やら部屋のようなものが映っていた。白衣を着た人達が自分を見て何かを言っている。

一瞬だけ映像が乱れると、今度は部屋のような場所を飛んでいた。飛んでいると分かったのは、真自身も空を飛んだ事があるからだ。自分は、飛びながら銃を乱射している。

また映像が途切れたかと思うと、また空を飛び、しばらくすると白衣の人達がやって来る。そんな映像が続いた。

すると、暗い雰囲気にする少女の声が聞こえてきた。

《見タイ……青イ空ヲ、白イ雲ヲ……見タイ……》

「お前は、部屋のような場所に閉じ込められていたのか？」

《飛バセテ……私ヲ空ニ、連レテ行ツテ!》

声は聞こえても、少女の姿は見えない。しかしこの娘は、空を飛ぶことを望んでいる!

まるでお伽話に出てきそうな、城に閉じ込められたお姫様のように……。

「良いぜ。空は気持ちが良いんだ。それをお前にも教えてやる!」

《……本当?》

「約束だ! 飛べるお前が空を感じることが出来ないなんて、勿体ねえ!」

《……アリガトウ!》

すると、また一段と目の前が眩しくなり……目の前には、機械が散乱する部屋と慌てている護がいた。

「真! おい真! しっかりしろ!」

「あ……父さん?」

「大丈夫か? 怪我は無いか? 俺が分かるか!」

「父さん、落ち着いて! 落ち着いてってば!」

「真……。自分の今の状態が分かる?」

護を宥めていると、にとりが驚愕の表情で真を指差す。

そう言えば、何で視線が高くなってるのだろうか?

真は少し疑問を感じながら、指を指されている方向……自分の左側を見てみる。

鉄板のようなもの、すなわち盾が目の前で浮いていた。

「な、なんじやこりやああ!?!」

「落ち着いて! とりあえず装甲を外して!」

「どうやって外せばいいんだよ!?!」

「念じればいいと思う! ……多分」

「だああああ! 外れる! 外れやがれええ!」

ヤケクソ気味に叫ぶと、装甲は細かい粒子のように変わる。

粒子が発する光に思わず目を瞑ると、足が地面に着いた感覚がした。と同時に首に違和感を感じた。

首下を見ると、勾玉の首飾りがあった。

「真! 大丈夫か!?!」

「大丈夫だよ、父さん。でも、これが……」

「……勾玉?」

「真! ISは? ISはどこに行ったの?」

「いや、知らないけど……あれ? いやまさか……まさか……」

「恐らく、この首飾りに変わったんだな」

「ええええええ!?!」

「このISは謎だらけだね。ぬふふふふふ……これを分解したくなってきたああああ!」

ISが首飾りに変わったことに、より興味を抱くにとり。

スパナやペンチを手に持ち叫ぶにとりを、護は落ち着かせる。

「まあ待つんだ、にとり。謎だらけと言うのは少し危険だ。もしも変に弄って真に異常があったらどうする?」

「ぬぐぐぐ……。さすがに盟友を危険な目にあわせる訳にはいかないなあ……」

「そういう事だ。申し訳ないが、これに関しては紫さんに相談してか  
らにしよう。我慢してくれ」

さすがのにとりも、友を危険な目にあわせるのは気が引けるらしい。

護は、外の世界の情報を知ってるかもしれない妖怪、八雲紫に相談する事にした。その案で、にとりも納得してくれたようだ。

一方真は、首飾りを握り締めて目を閉じる。何故か知らないが、この首飾りが話かけてきた気がしたからだ。

《アリガトウ……。コレカラ、ヨロシクネ♪》

さつきと比べて、明るい少女の声が聞こえた気がした。

にとりに別れを告げた後、二人は博麗神社へ向かっていた。紫はよく、そこへ遊びに来るらしい。

長つたらしい階段を上がると、脇を出している紅白の巫女服に大きなりボンが特徴的な女性が居た。彼女の名は博麗霊夢。護と同じ、ミラボレアスを倒した一人だ。幻想郷の異変を解決したりするのが仕事で、彼女の戦闘力と勘は只者ではない。この神社には、あと二人ほど護の仲間がいるのだが、今は不在のようだ。

「よう霊夢」

「あら、護に真。久しぶりね」

「久しぶりだな。……リオとレイアはどうした？」

「リオは妖夢に挑みに行つて、レイアは買い物中よ。ところで、何か用かしら？」

「紫さんに、ある事を相談しに来たんだが……」

「紫ねえ。あいつなら……」

「ここに居るわよ」

「どわああ!？」

突如現れたスキマから、頭だけを出す紫。いきなりの登場に、真は大きな悲鳴をあげる。

「いきなり現れないでくださいよー!」

「それは無理よ。とりあえず、紹介したい人がいるの」

スキマから出てきたのは、桃色と紫色が混ざったような長い髪、不

思議の国のアリスのような格好をした女性だった。しかし全員が注目したのはそこではない。

耳だ。機械の感じがあふれるウサ耳をその女性は着けている。

「彼女の名前は篠ノ之束。ISを開発した天才科学者よ」

### プロローグ③

東は、目の前の光景が信じられなかった。変な空間を潜ったかと思えば、神社に来ていたからだ。紫と話している男二人は何かを喋っているし、巫女は頭に手を当てて「やれやれ」といった感じで呆れている。

「こ、こらー！ 東さんを無視するなー！」

「あら、ごめんなさいね。護たちが思った以上に食いついてきてねえ」「そりやそうでしょ。真の首飾りについて知ってる人間が現れたんですから」

「とりあえず、ここは一体どこ!? っていうか金髪のアンタは何者なのさ!？」

その時、僅かながら空気が凍りついた。紫が、妖怪としての威圧をほんの少しだけ放ったからだ。霊夢は目を少しだけ開いて驚き、護と真は足が震えた。

「自己紹介ね。私の名前は八雲紫。この世界の管理者みたいな存在と思っってください」

「怖っ！絶対にあーちゃんよりも上の存在……。もしも政府の人間と同じように接したら、殺される！」

東にとつては、久しぶりの恐怖だった。しかし、彼女は負けじと質問を続ける。

「紫、ね。改めて聞くよ。ここは一体どこ？紫はここに來るとき、『こつちの世界』と言っていた。異世界と見て良いのかな？」

「半分正解ね。ここは幻想郷。科学などによって存在を否定されたものたちが集う世界。だけど、ここは完全な異世界ではなく、世界の裏側にあるようなものよ」

「へえ〜。ということは、吸血鬼とか妖怪なんてのも居るのかな？」

「ええ。当たり前よ」

「……………え？」

予想外の答えだった。冗談で聞いたのに、返ってきたのは「妖怪はいる」という答え。東は、思わずその答えを否定する。

「う、嘘だ！ そんなの架空の存在でしょ!？」

「あら？ じゃあ、ついさつき貴女が潜ったスキマはどうやって説明するのかしら？ 何も無い空間から裂け目が現れるなんていうのは、科学で解明できるかしら？」

「うう〜……。じゃあ、その巫女や親子はどうなのさ？」

「彼らは人間だけど……三人とも。見せてあげなさい」

霊夢と護、そして真は頷くと、自分の能力を発動した。

霊夢は空に浮かび上がり、護は鎧竜・グラビモスの甲殻を纏う。真も甲殻を纏うが、それはグラビモスの幼体であるバサルモスのものだった。

これには、さすがの束も否定しようが無い。機械無しで空を飛べたり、いきなり岩のようなものを纏うことが出来る技術は、見たことも聞いたことも無いからだ。

「どうかしら？ 幻想郷には、『ありえない』と呟いてしまいたいような能力を持つものがいるのよ」

「……参ったなあ。降参だよ。まさか妖怪が実在するとは思わなかったなあ」

「まず、束への説明は終了ね。次は貴女に説明してもらおう番よ」

「どうして、真にもISを動かせるのかしら？」

束は始めに、真の首飾りを見せてもらうことにした。触れると、そのISが喜んでる感じがした。母親にあえて嬉しいのだろうか？ 彼女は思わず微笑んでしまう。

「可愛いね。私が触れた瞬間、『お母さん!』って言ってきた。これは間違いなくISだね」

「あの、何で俺が動かさせてる事に、束さんは驚いていたんですか？」

真がISを起動させたと判った瞬間、束は思わず驚きの声を上げてしまった。それもそうだろう。本当に他の男が動かしていたのだから。

「それはね、ISは女性にしか動かせなかったからだよ」

「えっ!?! まさか俺って……女!?!」



「いやいや違うよ!? このISが、真くんに動かしてもらいたかったからだと思うなあ〜」

その時、真に疑問が生まれた。何故女性にしか反応しないのだろうか？

真が尋ねると、東は悲しそうな顔をした。

「……本当はね、誰にでも乗れるように作ったんだよ」

「じゃあ何で？」

「……『白騎士事件』」

「？」

「ISが世界中に広まるきっかけとなった事件だよ。これで世界は変わってしまったんだ」

東は紫や護にも聞こえるように、わざと大きな独り言を始めた。

宇宙に興味を持った東は、ロケットのような大きな物ではなく、もっとコンパクトな物で宇宙へ行けないだろうかと考えた。そして、全身を覆う鎧のようなもの……すなわちISの設計図を、学会に発表した。

「え？ISって、元々は全身を覆うものだったんですか？」

「そうだよ。そうでないと、大気圏を突破する時に危険じゃん。その衝撃を少しでも軽減する為に、全身装甲にしたんだよ」

東の話は続く。学会は、東の設計図を嘲笑った。しかし一部のものが、資金を提供してくれた。

早速開発に取り掛かる東。しかしその時……テロリストによって、ミサイル2341発が一齐に日本へ向けて発射されるといふ事件が起きた。

政府は東に、ミサイルをISで迎撃するように命令。東は「まだ不完全だ」と言ったのだが、政府の人間は出撃を強制する。東は、親友の織斑千冬に搭乗を頼み、彼女は全て迎撃したのだった。

しかし、ミサイルの破片などにより、完全に被害を防ぐ事は出来なかった。この大きな事件について報道陣が殺到したのは言うまでも無いだろう。その時に政府はこう言ったのだ。

『ミサイルを日本に向けて発射させたのは、篠ノ之東である』と。

「そんな……。捨て駒にしたんですか!？」

「信じられないよね。私を犯人扱いしたんだよ? その後に各国から、白騎士が現れなければ日本はもつと大きな被害だったと言って、ISの必要性を指摘して、私がある程度ISコアを作ったら、今度は国際指名手配。……私は人間が信じられなくなってきたよ」

なお、彼女の説明によると、後に作ったISコアの殆どが、千冬に対して狂信的な愛があるという。女性にしか反応しないのは、千冬Ⅱ女ということから、全ての女を千冬と勘違いしてるらしい。

「この子だけが、空を飛ぶことを求めてたんだらうね。……はい。ありがとう」

「どうもです。ところで、人間を信じられなくなった束さんは、どうして俺とかには接してくれるんですか?」

「いやいや。私が信じられないのは、政府の人間とかのようなお偉いさんさ」

クスリと笑う彼女はどこか、孤独のように見えた……。

「要するに、このISが俺に反応するのは、空を飛びたかったから?」「そう。この子はきつと、『空を飛ぶことには、男も女も関係ない』という事が分かってたからだと思うな」

真が納得していると、紫と護がやって来た。

二人とも、かなり真剣な顔をしている。

「真」

「父さん。どうしたの? そんな顔して」

「実はな……このISは、幻想郷にあるとマズイ物なんだ」

「これを妖怪か人間が手にしたら、互いを滅ぼしあう大戦争が起きてしまうかもしれないの」

「そんな……」

「だがお前は、そのISを空に飛ばしたいのだから? ……行ってみないか。IS学園に………外の世界に!」

真は驚いた。まさか、父の故郷でもある外の世界へ行く事になるとは思わなかった。

確かに、ISを纏って幻想郷を飛ぶのは危ない。妖怪と人間のパワーバランスも崩れる可能性がある。

束も、大きく頷いている。

「IS学園は、この子を動かす為の訓練とかも受けられるんだ。来てくれないかな?」

「でも、一度出たら戻れないんじゃない?」

「あら? 私を忘れてないかしら?」

「え? 紫さん?」

「私に頼めば、いつでもスキマを開いて家に帰る事が出来るわよ。それに、色々なことを知る良いチャンスじゃない。……行つてらっしゃいな」

ここまで言われたのでは、断れない。真は静かに頭を下げた。

「……よろしくおねがいします」

「決まりね。束。貴女には真の保護者代理人になってもらうけど、良いかしら?」

「勿論OKさ!」

こうして、真のIS学園入学が決定したのだった。

その日の夜、屋根の上で月を眺めていると、誰かが上がってくる音がした。振り返ると、母である早苗が隣に座ってきた。

「……いよいよ明日、行っちゃうんだね」

「母さん。俺、本当は寂しいんだ。母さんや父さんだけでなく、こつちの仲間と別れることが……」

すると、真は早苗に抱きしめられた。早苗の良い匂いが、不思議と気持ちを安心させる。

「母さんだって寂しいよ。大切な……大切な息子なんだもの。でもね」

早苗は、真と目で向き合った。その目には少しだけ涙が溜まっている。

「また帰ってこれる。そう信じているんだから……真も頑張りなさい」

「……うん」

真は最後に、力強く早苗に抱きついて……そのまま静かに寝てしまった。

朝。守矢神社には東風谷家全員と、紫、そして束が居た。

「それじゃあ父さん、母さん、神奈子さまに諏訪子さま。行ってきます」

「行ってらっしゃい」

「鍛錬は怠らないようにな」

「頑張つてきなさい」

「……」

護だけ腕組みをして黙っている。すると、いきなり大声を上げた。

「真！」

「は、はい！」

「……お前は俺たちの家族だ。その事を忘れるな！」

「はい！」

「行って来い！そして世界を知れ。真！」

父の力強い声援を受けながら、真はスキマへ入っていった。

こうして、外の世界と言う新たな場所で、新しい物語が始まったのだ！

## 原作開始

### 1話 視線という攻撃は、思った以上に辛い

幻想郷からIS学園へ入学した俺、東風谷真は、自分の机で項垂れていた。なぜかと言うと……

「ぐおおお……。これはマジでキツイ」

とんでもない視線攻撃を受けていたからだ。いきなり現れた2人目の男性操縦者。しかも保護者代理人は篠ノ之束という、強力な後ろ盾。注目するのも無理はないだろう。

隣に座ってる奴は織斑一夏。たぶんこのイケメンが、束さんが言っていた「いっくん」って人だろうな。束さんから聞いた話だと、彼の姉である「ちーちゃん」こと織斑千冬は、ISの世界大会で優勝した経験を持っているらしい。一夏が注目されるのは、そんな姉の存在もあるからなんだろうな。

今思い返すと、入学手続きの間は大変だった。

入学式の前に束さんが学園に連絡を入れたらしく、俺を待っていたのは不機嫌そうな顔をした千冬さん……。じゃなかった。織斑先生だった。一夏に加えて俺という存在。余計仕事を増やしてしまったんだろう。

軽い筆記試験を終えたあと、ISを使った実技試験が待っていた。相手は、外の世界に染まりきった女。すなわち、女尊男卑主義の女だった。ちなみにそいつが乗っていたISはラファール・リヴァイブで、俺は打鉄だ。

俺がまだ少ししかISの操縦をしていないのを良いことに、その女はマシンガンで集中攻撃。かなりエネルギーを削られた。まあ、必死に避けまくって近接ブレードで斬りつけたけど。

その女には負けてしまったが、試験監督の織斑先生曰く、「教師を相手にあそこまで立ち回れるのは、評価に値する」だそうだ。

「皆さんちゃんと席に着いてますね。それではS H Rを始めますよ」

過去の回想から現実に戻ると、童顔眼鏡の巨乳教師が教壇に立っていた。おいおい……。何がと言わないが、かなりデカくねえか？  
母さんのを上回ってるんじゃないか？

おっと、イカンイカン。先生の話をしつかりと聞かないとな。昔はよく、友達と喋ってばかりで慧音先生に頭突きを食らってたっけ……。

「私は、一年一組副担任の山田真耶です。皆さん、一年間よろしくお願  
いしますね」

「はーん」

『……………』

なっ!! 返事をしたのは俺だけだ!! お前らは「先生の言う事には返事をする」って教えられなかったのか!?

若干涙目になりつつも、生徒の自己紹介を始めさせようとする山田先生。ドンマイっす……。

とりあえず五十音順に自己紹介が始まって、今は『お』。つまり、一夏の番だ。

ん? おーい。お前の番だぞ、一夏。ボーっとしてるなよー。

「織斑一夏くんっ」

「は、はいっ!」

「ご、ゴメンね? 自己紹介、『あ』から始まっているんだ。今は『お』の織斑くんなんだよね。ご、ゴメンね? 自己紹介してくれるかな?」  
「あ、いや、その……自己紹介しますからとりあえず落ち着いてください」

山田先生がぺこぺここと頭を下げる。先生は悪くないと思いますよ? さあ、先生が落ち着いたところで、一夏の自己紹介が始まるぞ……

「織斑一夏です!」

ほうほうっ…

「……………以上です!」

終わるかよ！ 思わず、他の女子達と一緒にずっこけてしまったぞ。

なんとか椅子に座り直すと、一夏のやつが出席簿で叩かれてた。うん？あの人は……

「げえつ、関羽!?!」

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

バシインツ！ うわあ。あれは痛い。

だけどさすが織斑先生。一般人には出来なさそうな事を平然とやってのける。そこに痺れる、憧れるう！

「東風谷。変な褒め言葉を考えなかったか？」

「気のせいです」

俺も食らいたく無いからね、出席簿。すぐにはぐらかす。

黒いスーツに、戦いときの父さんのようにキリツとした目付き。

この人が、織斑千冬さん。でも俺は織斑先生と呼ぶ。

「織斑先生。会議はもう終わられたんですか？」

「ああ。面倒事を押し付けてすまなかったな、山田君」

「いえ、副担任の仕事ですから……」

山田先生、顔が赤くなつてまつせ？ いや、でもあの凛々しい態度は、一種のカリスマがあるんだろうな。レミアアさんみたいに。

「諸君、私が織斑千冬だ。君達新人を、一年で使い物になる操縦者に育てるのが私の仕事だ。私の言う事はよく聴き、そして理解しろ。出来なかつたら出来るまで指導してやる。逆らってもいいが、後悔はするなよ？ いいな？」

一瞬、どこの軍隊だよ！ っつて突っ込みそうになったが、織斑先生の言う事は良いことだと思う。

ISは、変な操縦をすればパイロットごと碎けてもおかしくない。それに今では兵器の一種にもなっている。

しっかりと教師の言う事を聞き、道を間違えたIS操縦者になるな。織斑先生はそう言いたかつたんだろうな。きっと先生は不器用なだけだと思うな。

「き……………」

「ん？」

「「キヤアアアアアアアアア!!」」

「ぎゃああああ!!」

突如響き渡る歓声。辛い声を上げているのは俺と一夏。山田先生も耳を塞ぎ、織斑先生は一瞬仰け反ったが、すぐに体勢を立て直し、呆れた表情になる。

「よく、これだけ騒げるものだな。あれか？私のもとには馬鹿しか来ないというのか？」

「本物の千冬様よ！」

「私、千冬様に会うために北九州から来ました！」

「私を躑けてください！でもたまには優しくして、また激しく躑を……」

「静かにしろ馬鹿どもが！」

すげえ。女つてときには変態的な思考を持つ事も出来るのか。男と同じだな。いたんだよなあ。人里に、女に虐げられる事で喜びを感じる、罪つて書いた袋を被った男の集団が。

あれ？ 織斑先生がこっちに視線を向けてらっしゃる。

「他の女子も、もう一人の男子が気になるだろう。東風谷、自己紹介をしろ」

「了解です」

俺は席から立ち上がる。おうふ、好奇心な視線が強くなりやがった。でも俺は負けない！

「俺の名前は東風谷真。趣味は木々を眺めたり読書をする事。ISはまだ少ししか動かせてないが、頑張つて物にしようと思う。これからよろしくな」

「（教師を相手にあそこまで立ち回っておいて、よく言う）」

「きゃああ！ 格好いい！」

「織斑君とは違う格好よさ！ なんだろう？ワイルド系？」

「一緒に木々を眺めて、そのまま東風谷君に膝枕をしてもらって……キヤアアアア！」

「うがああああ！うるせえええ!!」



もうホント、何なんだろう。女子っていうのは。  
ひとまず、織斑先生の一喝で、SHRは幕を閉じた。

## 2話 セシリアによる、宣戦布告

S H Rが終わると、一夏が女子の視線から逃げ出すような感じで、俺に話しかけてきた。

「ああー、しんどかった……」

「ドンマイだな、一夏」

「おう。改めて自己紹介だ。俺は織斑一夏。えっと……東風谷で良いか?」

「ああ。でも、出来れば真って呼んで欲しい。苗字だと呼びづらいだろう?」

「そうか。じゃあ、これからよろしくな!」

「ああ!」

俺と一夏は握手をする。このクラスの中では数少ない男友達だ。仲良くなつて損は無い。

周りの女子が「真×一夏……ありかも!」と叫んでいる中、ポニーテールの女子が話しかけてきた。確かこいつは……

「ちよつといいか?」

「ん?」

「一夏に用があるのだが……少しだけ、二人で話してきても良いだろうか?」

「構わないぜ。篠ノ之箒さん」

なるほど。幼馴染と数年ぶりに再会できたから、話がしたいんだな。彼女の名前は篠ノ之箒。苗字から分かると思うが、束さんの妹だ。

しかし、本当に姉妹なのか?束さんが悪戯好きな女の子と例えるならば、彼女はいかにも真面目な女の子という感じだ。

「な、何故私の名前を知っている!?!」

「束さんから聞いたのさ」

「……なんだと?」

束さんのことを小声で言ったら、目付きが鋭くなった。おお怖い怖い。

でも、無理もないな。姉の作ったISによって、重要人物保護プログラムを受ける羽目になった。結果として家族はバラバラにされ、彼女自身も各地を点々とする事になってしまった。これに関しては、束さんも凄く悲しんでいたな……。

とりあえず……

「俺のことは後でいい。早く一夏と話をしてきな？でないと、すぐに授業が始まるぜ？」

「……すまない。ありがとう。だが、必ず姉さんの事について聞かせてもらうからな」

幼馴染との再会を、たつぷりと味あわせたほうが良いよな？

「(何だよこれ。何だよこれ!)」

「(真、分かるか?)」

「(全っ然わからねえ! 唯一分かるとすれば、ISは凄いつてことだ!)」

俺と一夏は、ISの授業に着いていけてなかった。ただ今、絶賛混乱中である。

父さんに、数学やら科学やらは習ってたけど、ISは無かったからなあ……。

「織斑君に東風谷くん。分からないところはありますか？」

「ギクツッ!」

「分からない事があつたら、聞いてくださいね。私は教師ですから!」  
えっへんと胸を張る山田先生。いや、張らなくていいです。張つたら揺れてるんです。デカイ胸が。

俺と一夏は顔を見合わせると、うんと頷く。どうやら言いたい事は同じだな。

「先生!」

「はい」

「ほとんど……いや、全然分かりません!」

「……えっ?えっと、全部ですか?」

「その通りです！」

二人同時にドヤ顔を見ると、頭に衝撃がああああ!? 俺と一夏は同時に悶絶する。

見ると、織斑先生が呆れた顔で俺たちを見ていた。まさか、出席簿で同時にぶつ叩いたのか？

「東風谷の方は分かる。参考書を与える時間すら無かったからな。だが織斑。お前は参考書に目を通したのか？」

「えっと、あの電話帳みたいなものですか？」

「そうだ。必読と書いてあっただろう」

「ああ、あれか！あれは、古い電話帳と間違えてゴミ箱に——」  
「捨てるな馬鹿者！」

一夏、再び出席簿アタックをくらう。しかし一夏のやつ、参考書があつたのかよ。それを無駄にしてしまうなんて……ないわあ。

とりあえず、このままだとヤバイな。放課後に、山田先生とか織斑先生に質問攻めしてみるか。

「ちよつとよろしくて？」

「ああ？」

「まあ、何ですの。そのお返事は！私に話しかけられるというだけでも光栄だというのに！」

授業が終わって一休みしていると、金髪の……ツインテールか？そんな髪型の女子が話しかけてきた。

しかし、気に食わないな、その態度。まさに女尊男卑って感じだな。しかもこの女、見るからに「お嬢様」って感じだ。話し方も相まって、俺の苛立ちがどんどん上昇していく。

「聞いてます？お返事は？」

「てめえのような女に、『何でございましょうか？』って返事はしたくねえな」

「あ、貴方はどれだけ野蛮な返事をすれば気が済みますの!？」

「挑発的な態度を取るお前が悪いんだろうが」

俺と金髪女の会話に入ってこれなかった一夏が、イラついた表情で返事をする。ちなみに箒も不機嫌だ。

「ところで箒。この人は誰だ？」

「セシリア・オルコット。イギリスの代表候補生だぞ、一夏」

「なっ、まさか貴方たちは私の名前を知らない!? イギリス代表候補生である私を知らないとでも!？」

キーンコーンカーンコーン。

セシリアが何かを言おうとしたが、授業開始のチャイムによって遮られる。セシリアは俺たちを睨んで、元の席に戻っていった。

はあ……。面倒くさいやつに絡まれたなあ。

「それでは授業を始める。……………おっと。その前に、クラス代表を決めなければな」

織斑先生がそんなことを言ってきた。クラスを訳すと学級って言うらしいから、学級委員長みたいなもんか。寺子屋でもあったなあ。大妖精こと大ちゃん、しよつちゅう選ばれてたっけ。

「自他推薦でも構わない。誰かいないか？」

「はい！ 私は織斑君を推薦します！」

「えっ!？」

「じゃあ私は、東風谷くんを！」

「ちよつと!？」

「ちなみに、推薦されたからには、その期待に応えてあげべきだと思っぞっ。」

要するに拒否権は無いって事っスね、織斑先生。一夏も諦めた表情だ。仕方ない。ここは一つ、俺と一夏でじゃんけんをして……

「納得がいきませんわ！」

またあの金髪かよ！ つくづく面倒くせえ奴だな！ っただけ男嫌いなんだよ！

「その様な選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥晒しですわ！ そもそも実力からすれば……」

なんか金髪が、色々と言句を言ってる。しかもそれは俺たちへの侮辱から日本への侮辱に変わっていった。

……腹立つなあ。日本は、父さんと母さんがいた国だっていうし、白斗さんや影夜さんも居た国。すなわち英雄達の故郷って事になる。それを侮辱する事は、俺のヒーローを馬鹿にすることと同じだ。

「大体、文化としても後進的な国で過ごす事自体——」

「そこまでにしるや、金髪さんよお」

「なっ……真？」

「お前よお、さつきからキーキーうるせえんだよ。発情期の猿かテメエはよオ」

俺の口調がかなり乱暴になってるかもしれないが、それ程のことを、この女はやった訳だ。

「私が猿?! 極東の猿に言われたくありませんわ!」

「っていうか、島国って言ってたけどお前のほうも島国じゃねえか。しかも、世界のメシマズランキング何年連続1位だよ」

「なっ……な、な……。決闘ですわ!」

一夏の発言で切れた、えーと、セシリアか。セシリアは、俺たちを指差す。決闘かあ。幻想郷だと命を懸ける意味だから、俺は「決闘」なんて言葉は使いたくないんだよな。

しかもISでの戦いになってるし。

「良いぜ。ハンデはどれくらいつける?」

「あら、早速ハンデのお願いですか?」

「いや、俺と真がどのくらいハンデ着けたら良いのかなーってな」

すると、クラスは大爆笑。しかし、箒やのほほんとした女子といった一部を除く。

「織斑君、何言ってるの?」

「もう男が強かったのは、大昔の話だよー」

……はあ? 何言ってるんですかねえ、この女どもは。女が強い? 笑わせるな。それはISという存在があるからだろう。今年からは違う。俺や一夏というイレギュラーが現れたから、弱いかどうかなんてわからねえ。束さんも、ISコアを説得して、男にも乗れるよう

にするらしいから、そんな思考はもう古くなるだろう。

「一夏。俺たちにハンデはいらねえ。ただ全力でぶっ潰すしかないんじゃないかね？」

「くっ……。だったらハンデは良い。全力で当たってやる」

「おう、その意気だ！ そのついでに砕ける」

「当たって砕けろじゃ、駄目じゃねえか！」

すると、侮辱の大爆笑から、面白さによる大爆笑に変わった。セシリアは面白くなさそうな顔をしたが。

「仕方ない。では、1週間後の月曜日、放課後にクラス代表決定戦を行なう。オルコットと織斑、そして東風谷は準備をしておくように」

恐らくセシリアは、ISに関しては比べ物にならないほどの努力をしてるだろう。あいつはいわば、強者だ。

今の俺たちに出来る事は、知識をとにかく蓄え、ISについてより理解する事だ。

さあ、授業に取り組みましょう。

### 3話 真の専用機。その名は・・・

放課後。山田先生に授業の内容や、ISの基礎について教えてもらった。

しかしコアには意志のようなものがある、かあ……。東さんがISコアを説得するというのも分かる気がする。

「東風谷。少しいいか？」

「？・・・篠ノ之か」

「帰ろうとしていたのなら申し訳ない。だが・・・姉さんの事について聞かせてくれないか？」

篠ノ之箒が話しかけてきた。そうだった。そういえば「後で聞かせてもらう」とか言ってたな。

「良いぜ。まあ、いずれ話さないといけないとは思ってたしな」

「ありがとう。それと私の事だが、苗字ではなく箒と呼んでくれないか？どうしても姉さんと比べられそうで・・・嫌なんだ」

「そうか。それじゃあ俺のことも、名前で呼んで良いぜ」

一呼吸置いた後、箒から話してきた。

「噂で聞いたんだ。姉さんが保護している男性操縦者がいると。珍しかったんだ。他人に興味を持たないといわれている姉さんが、他の人を保護するなんて・・・」

「おいおい。まず東さんの印象から間違ってるぜ。東さんは俺の家族とも仲良くしてたし、色んな人と触れあってたさ。興味を持たないのは、政府の人間なんだとよ」

「・・・そうなのか？では、姉さんは・・・」

「お前のことや、家族の事を心配してたぜ？」

「っ！いい、今さら家族面されても嬉しくない！姉さんがISを開発したせいで私は・・・私は・・・一夏の他にも友達を作れなかった！それなのに！」

「だったら、お互いに話せばいいじゃねえか。そうでしょう。東さん」  
俺が窓の近くに目をやると、ウサ耳を着けた女性・・・東さんがいた。後ろでは、紫さんが「面白そうだから連れて来ちゃった♪」って



感じで舌をチロツと出している。あ、スキマで逃げた。

「え？」

「や、やあ……箒ちゃん。ゴメンね。そんなに辛かったなんて……ほんとうに……ゴメンね……！」

「箒。人払いはしてやる。……二人で話し合いな」

俺が教室から出ると、紫さんがまた出てきた。俺はジト目で紫さんを見る。

「紫さん。突然にも程がありますよ。東さんがどこかに現れるだけでも大騒ぎになるのは、知っているでしょう？」

「ごめんなさいね。でも偶然よ？本当は貴方にISを渡そうと思って来たの」

「俺のIS？まさか、あの打鉄つすか!？」

「そうよ。本当は今日中にしようと思っただけど、東があれじゃあねえ……。クラス代表決定戦の頃には渡すわ」

「了解つす」

「そろそろ部屋に戻りなさい。人払いの結界は、私にかけておくから」

後のことは紫さんに任せて、俺は寮に行く。どうやら、俺は女性権利団体だか何だかという変な奴らに狙われるから、無闇に手出しできないここが安全って訳だ。

あ、でも部屋はどうなってるんだろう？一夏だったら色々と安心だ。女子と同室になったら、気まずいからねえ。そんなことを考えてると、山田先生と織斑先生がやって来た。

「あ、東風谷くん！ここにいたんですか」

「山田先生に織斑先生。どうしたんつすか？……まさか、授業に着いていけないから補習!？」

「この時間帯で行なう訳無いだろう。寮の部屋割りについてだ」

「はあ……」

「えーつとですね。実は織斑君と同室にさせようと思ったんですが、

空き部屋が無かったんです」

「申し訳ないのだが、織斑と東風谷は、それぞれ女子と相部屋ってことになる。・・・本当に申し訳ない」

二人は申し訳なさそうに俺に謝る。いや、二人とも悪くないですよ？折角部屋割りが決まった状態なのに、俺が乱入したから、また部屋割りを考えなくちゃいけないなくなったんですよね？だから謝るのは、俺の方です。

とりあえず鍵を貰った。番号は・・・1034号室か。

コンコンとノックする。しばらくすると声が聞こえてきた。

「はいはい。どちら様々？・・・って、おお。東風やんだ〜♪」

「こ、東風やん!?!」

「うん。東風谷だから、東風やん〜♪」

部屋を開けてもらうと、狐のような着ぐるみ(?)を着た女子が歓迎してくれた。

・・・やべえ。全然名前が分からない。自己紹介は途中で終わってしまったからなあ。

「えーつと・・・?」

「私は、布仏本音。今日からルームメイトだね〜。よろしく〜」

「おう。よろしくな。ところで布仏?」

「う〜ん。苗字だと、お姉ちゃんと被っちゃうから、苗字以外で呼んでほしいなあ?」

「それじゃあ、本音?」

「はうっ!(う〜。てつきり、のほんさんで来ると思ったのに〜。でも・・・悪くないかも♪)」

「シャワーとかはどうする?どっちが先に入るか決めておいたほうがいい気がするんだが・・・」

「あ、え〜つとね。私としては、先に入らせて欲しいかなあ」

「OK。じゃあ次はベッドだが・・・」

こうして、本音と色々決め事をしたり、ISに関して教えても

らったりした。

それにしても、この子の笑顔には癒されるぜ……。

くその頃の一夏く

「女子と相部屋になってしまったけど、誰なんだ？女尊男卑でないことを祈りたいけど……」

「(コンコン)遅れてしまってますまない。私は篠ノ之箒と——」

「ほ、箒？」

「い、一夏あ!?(やったああ！姉さんと仲直りできて、一夏と同室になれて……今日は幸せな日だ!)」

セシリアとの決戦当日になった。

え？1週間の間に何があったか教える？ふーむ……特に変わりなかったんだよな。せいぜい一夏が専用機を貰う事になったのと、箒と友達になれたことくらいだ。

専用機をもらえるという事で、一時は女子が大騒ぎだった。しかし、織斑先生が箒の事を束さんの妹とあっさりバラして更にヒートアップ。だけど、箒は束さんと話し合ったことで吹っ切れたのか、「自分は姉さんとは違う」と言って、場を宥めさせた。

そのことがあって以降、箒は他の女子と仲良く話していることがあるし、休み時間のときは俺と一夏が理解できなかった所を教えてくれた。

しかし、態度で分かった。箒のやつ……一夏が好きなんだな。一夏にお礼を言われると顔が赤くなるもん。しかし惚れられている本人は気付かない、つと……。父さんだったら呆れそうだな。

一夏と一緒に居る事が多い箒は、今日は観客席で見守っているという。

「本当、箒には感謝だぜ。授業内容を分かりやすく教えてくれたり、訓練機の手配をしてくれようとしたからさ」

「あれ？確か訓練機は、予約数が多くて、大体1ヶ月待ちじゃなかった

か？」

「そうなんだよ……。とりあえず、昔やってた剣道で、箒に指導を貰いながら体力作りしてきた！」

「そうか、体力も基本だからな。ところで……」

「ああ。言いたい事はわかる……」

「専用機が来ねえ!!」

全然来ないんですけど!?紫さんと束さんは何やってるの!?

「お、織斑君に東風谷くん!来ましたよ!専用機が届きましたよ!」

よっしゃ来たあああ!束さん曰く「この打鉄を、格好良く仕上げちやうからね〜!」と張り切っていた。どんな姿になってるのだろうか。

すると、ISを運搬するトラックから、ある女性が降りてきた。

おいおい嘘だろ……。あの人は……

「こちらが、専用機の運搬をしてくださった、八雲藍さんです」

「私が八雲藍だ。それぞれの機体に関してのデータは、山田先生に渡させてもらう」

八雲藍。紫さんの式神で、九尾狐だ。今は何かの術で尻尾を隠してるみたいだが、まさかこの人が運んでくるとは……。

すると、藍さんが俺の耳元に口を近づけて呟いた。

「お前の父が心配していたぞ。元気でやっているかどうか、とな」

「はははっ。父さんに、俺は元気だと伝えておいて下さい」

「ふふっ。分かっているさ。……ではまたな」

藍さんは優しく微笑むと、再びトラックに戻っていった。

「ではコンテナを開けますね。まずは織斑君から!」

コンテナが開けられると、そこには……白がいた。まるで白い騎士のようなISだ。

「こちらが織斑君の専用機、『白式』です!」

「これが、俺の……」

さて、一夏が装着してる間に、俺の専用機も見せてもらいますか!

山田先生にコンテナを開けてもらう。

——そこには、鎧化した父さんがいた。

いや、正確に言えば、『鎧化した父さんのようなIS』があった。

「こちらが、東風谷くんの専用機。名は『グラビオス』です！」

「……こいつが」

俺はグラビオスに触れる。すると、久しぶりな感じがする声が聞こえた。

《マタ会エタネ！》

「ああ。さあ、思いつきり飛ぶ時間だぞ！」

《ウン！》

一回戦目は俺。さあ、始めるか！

「東風谷真、グラビオス、出撃する!!」

## 4話 守矢の息子VS英国淑女

グラビオスを纏ってアリーナに出ると、セシリアが蒼いISを纏って俺を見下していた。

「逃げ出さずに来た事は、褒めて差し上げますわ」

「そいつあ、どうもよ」

「ここで、英国淑女である私から、チャンスをあげますわ」

「チャンス？」

「ええ。ここで貴方が許しを請うのでしたら、この戦いを無効にしてあげてもよくなってよ？」

「……」

警告音が聞こえる。どうやら、IS『ブルーティアーズ』が射撃体勢に入ったようだ。

一方俺は、セシリアを見上げながら武器の欄をチェックする。

超大型砲に、これは……剣斧？射撃武器よりも、近接武器が多めだな。

「沈黙ですか。それならば……舞台から退場させてさしあげますわ！」  
「おおっと、退場はご勘弁！」

蒼いレーザーを避けて、剣斧『ファイアテンペスト』を展開する。  
え？射撃武器を使えよって？武器欄にあったマニュアルによると、大型砲は反動がデカイらしい。ちよこまか動きそうなブルーティアーズには、相性は最悪だろ？

しかもこのISはゴツゴツした鎧だから、機動力も向こうが上だ。だったら、一気に間合いを詰めて早めにケリをつける！

俺はブースターを全開にして、一気にセシリアとの距離を詰める。

「なっ!?その技術は……どうやって!?!」

「あ？ブースターを全開にしただけだ。名前でもあるのか？」

「くっ……。『インターセプター』！」

「させるかよー！」

剣斧は、あくまで別名に過ぎない。父さんの友達であるナナシさんから聞いた話だと、こいつは『スラッシュユアックス』というらしい。斧

のモードで斬りつけるとエネルギーが蓄積されていく。ある程度溜まったら、剣モードに切り替えて、重い一撃を食らわせる。それがスラッシュアックスだ。

斧モードのファイアテンペストを、セシリア目掛けて振り下ろす。「オオオラアアアアアアア！」

「お、重い……！」

バキバキバキバキ！

「イ、インターセプターが!？」

短刀みたいなので防ごうとするセシリアだが、威力だったらこちらが上。あっけなく砕け散った。

俺は構わずに、斧を振り回す。

——エネルギーが、基準値を超えました。剣モードに移行できません。

よっしゃ！剣モードに移行するコマンドを入力し、一気に構えろ。とびつきりのを食らわせてやるぜ、セシリアさんよお……ん？なんでセシリアは、余裕のある笑みを浮かべてるんだ？

その瞬間、背中に衝撃が走る。

「があああ!？」

「掛かりましたわね！このブルーティアーズの十八番であるBIT兵器に、貴方は引つ掛かったのです！」

「確か脳波で動かす武器だったか、コンチクショウ！」

「さあ踊りなさい！この『ブルーティアーズ』の奏でるワルツで！」

「あいにくと、神楽舞と盆踊りしか踊れないんでね！」

ちよつとした冗談を言ってみるが、これはマジでキツイぞ……！恐らくコイツは、死角さえあればそこに回りこんで攻撃するつもりだ。ファイアテンペストは隙が大きい。ちよつでも大技を出そうものなら、BIT兵器でシールドエネルギーを削られてしまう。

クツツ……。こんな時、父さんならどうする!？

『肉を切らせて骨を絶つ、という言葉がある』

『だが、それで相打ちという結果になっては元も子もない』

『真……。信じる。何をとは言わん。何かを信じるんだ』

・・・分かったぜ、父さん！グラビオス！お前を信じる！  
《任せテ！》

——警告。BIT『ブルーティアーズ』を後方に確認。  
「そこだあああ！」

俺は後ろへ意識を向ける。すると、肩に装着されてる竜の頭みたいなものが分離し、レーザーを防いだ。

何々？ 肩部装着型浮遊盾『グラビド・ヘッド』か・・・。

「なっ!? まさか、貴方もビットを!？」

「驚いてる場合か？」

「しまっ・・・！ ティアーズ！」

右、左、下と様々な方向からレーザーが飛び交う。俺は必死で避けるが・・・

「くそ！ 速いな！」

「当然ですわ！ 私のBIT適性を舐めないでくださいな！」

セシリアの奴はBITに命令で高みの見物か。いい身分・・・いや、待てよ？ もしかしたら奴は、命令をしてるだけというわけじゃない。きつと、動けないんだ。

考えれば簡単なことだ。BIT兵器は、脳波で動かす武器。動かすだけでなく、相手の手の予測や、自身の機体の制御もあるため、動きながらの操作は難しいんだ。

だったら、懐へ潜り込んでやればいい！

「動いていない分、捉えることは簡単だぜ」

「くっ・・・。こんなところで・・・」

「剣モード。さあ、ぶちかますぜえええええ！」

——警告！ 敵機腰部に、熱源反応！

・・・え？

バゴオオオオオン！

それは、情報不足によるものだった。

ミサイル型のブルーティアーズ。物凄い爆音の正体はそれだ。



これは完全に、油断による敗北だった。父さんに「慢心はするな」って言われてたのに……。

結局俺は……武器の最大攻撃を見せることなく……負けた。

……

「危ねえ！グラビド・ヘッドを展開してなかったら死んでたぞ！」

「そ、そんな……。隠してた切り札まで……」

「さあさあさあさあ！ぶっ飛ばしの時間だぜ！」

剣モードのファイアテンペストで斬りつける。こいつは膨大な熱を秘めていて、いわば某機動戦士に登場するザ○のヒートホークみたいなものだ。相手の装甲を溶断する。

……あ、このままだとエネルギーが切れてしまう。そうすると、またエネルギーを溜めなおさなくてはならない。

「そんじゃあ、そろそろフィニッシュだ！」

「くっ！ティアーズ！収束ですわ！」

「おおっ?!」

さすが候補生。残ったやつを一気に集めて、攻撃の威力を上げたのか。目の前にいきなり現れ、目の前で太い光線が放たれる。

グラビド・ヘッドは肩に収納してしまったから、シールドエネルギーが大幅に減らされる。

「……どうやら俺は、セシリアを「ただの慢心している代表候補生」と侮っていたようだ。やっぱり実力は向こうが上。ISを動かして少ししか経ってない俺とは違うんだ。」

「けどよお……！」

「諦めきれぬわけ……ねえだろうがよお！」

「も、もう堕ちなさい！堕ちろお！」

「うおおおおおお！」

『格上の相手と1対1で戦っていると、きつと差を見せ付けられるだろう。だが……諦めるな！』

BITを斬りおとし、シールドエネルギーを削ろうとしたところで……試合終了のブザーが鳴った。

【勝者——セシリア・オルコット】

## 5話 代表決定!・・・ってあれ?

俺が戻ると、一夏が何故か悔しそうな顔をしていた。

「お?一夏、どうした?」

「お前は・・・」

「ん?」

「お前は、悔しくないのかよ!あんなに頑張って追い詰めたっていうのに・・・なんで・・・」

なんだよ。お前が負けたわけじゃねえだろ、一夏。なんでお前が背負い込むんだよ・・・馬鹿たれが。

「一夏。俺は当然悔しいぜ。・・・ああ、悔しいさ!だが俺が負けたのは、自分への慢心と、経験不足だ。・・・負けてしまうのは当たり前だ」

「で、でも!」

「一夏。俺たちはまだ未熟だって事・・・自覚した方がいいぜ」

さてさて、俺は観客席で試合を見ますかね。

「(東風谷・・・お前はもっと自信を持って。瞬間<sup>イグニッション・ブースト</sup>加速を・・・お前は行なっていたんだぞ)」

観客席へ行くと、皆が一斉にこっちを向いた。

「あ・・・やっぱり負けた奴がそう簡単に来て良いわけが」

『『お疲れ様ー!ー!』』

「え?」

俺を待っていたのは、劳いの言葉だった。

・・・なんで、だよ。俺はセシリアに負けたのに。

「東風やん、目が丸くなってる」

「凄いよ東風谷くん!ミサイルを受けた時はどうなるかと思ったんだもんー!」

「どうしてオルコットさんに、あそこまで立ち回れるの!?!」

「あ、あはは・・・」

「東風谷」

「あ、箒……」

「……良い戦いだっただぞ!」

「……ありがとよ」

箒にまで言われたのでは、これ以上情けない顔をするわけには行かない。俺は苦笑いをしながらアリーナの方を見る。さあ一夏……油断するんじゃないやねえぞ。

結果でいうと負けました。零落白夜というのを使おうとして、自らエネルギー切れを起こしたのが原因らしい。

「自分の武器の特徴くらい、覚えておけよ!」

「そこまで消費が激しいとは思わなかったんだよ!」

「武器欄があつたらろ!そこにマニュアルがあるんだから、俺の試合の間に見れば良かったじゃねえか!」

「そうか!」

「うっかり○兵衛かお前はああ!?!」

くっだらねえ口喧嘩をするが、こいつは凄い。セシリアのBIT兵器を4機落とす、ミサイルはセシリアの方へ誘導させようとしていた。これは俺も思いつかなかった。

「織斑さん、東風谷さん」

「ん……セシリアか」

「どうしたんだよ。勝ったって言うのに、浮かない顔して」

「当たり前ですわ!東風谷さんとの試合は、もう少し時間があれば貴方の勝ちでしたのよ!織斑さんも、私のブルーティーズを斬りおとして、いい所だったのに……」

彼女は俺たちのことを褒めているが、それは勘違いだ。

俺は制限時間以内にセシリアを仕留めればよかったし、一夏は武器のチェックし忘れというミスを犯した。彼女は試合結果に満足していないようだが、もう終わったんだ。俺たちの負け……。それで良いじゃねえか。

「オルコット。どう言おうが、俺たちは勝負に負けたんだ。おめでとう。クラス代表」

「こ、東風谷さん！」

「俺は早めに戻るとするぜ。次は絶対に、お前を落としてみせるからよ。訓練しねえとなあ」

「・・・良いでしょう。貴方は私の、ライバルですわ！」

何でだろうな。負けて悔しいのに・・・嫌な気がしない。そうか、これが父さんの言っていた、『負けても絶望するな。成長できる喜びと思え』か。

翌日。朝のSHRにて、セシリアがクラスの皆に謝罪をしてきた。

「皆さんに対して、不快と思わせるような発言をしてしまい、本当に申し訳ありませんでした」

「いいよ、オルコットさん」

「凄い試合を見せてくれて、ありがとう！」

「私たちも、貴女に追いついて見せるわよ！」

皆が、セシリアの謝罪を受け止めて、そして許す。良いねえ。仲が良くなるっていうのは。

すると、山田先生があることを言った。

「クラス代表なのですが、オルコットさんが辞退したので、織斑君か東風谷くん、どちらかに決めてもらえませんか？」

・・・ええ？

「オルコット！どういうことだ！」

「慢心している私がクラス代表になったのでは、このクラスの評判が悪くなって皆様にご迷惑をおかけしてしまいます。ですが、織斑さんたちがクラス代表になれば、代表同士の試合の時、ISでの訓練にもなりますのよ？」

マジか。代表同士の試合もあるの？プ、プレッシャーだぜ・・・。とりあえず、俺と一夏はじゃんけんをする。勝った方が代表だ。

俺↓グー

一夏↓パー

「ちくしよおおおお!!」

「頑張れ、一夏」

「それでは、一年一組のクラス代表は織斑君で決定ですね。・・・あ、『一』繋がりで縁起が良いかもしれませんね」

山田先生。そこに食らいつかないでください。ほら、織斑先生が呆れてるし・・・。

そんなこんなで、夜。俺を含めた皆で、一夏のクラス代表就任。パーティーを開いた。

『織斑君、クラス代表就任おめでとー！ー！ー！』

「あ、ありがとう」

「よう、一夏」

「あ、真」

「クラス代表になったからって、んなシケた面すんなよ。お前一人だけじゃなく、皆がいるんだ。いざと言うときは俺たちが助けてやる」

「そうだぞ、一夏。私も精一杯サポートしてあげるからな」

「ほら。箒やクラスの皆が頷いてるんだし、今晚は楽しもうぜ?」

「・・・そうだな」

ジューズとかを飲んでいると、ルームメイトの本音が転びかけていた。俺は本音のところへ行き、受け止めてあげる。

「おっと。危ねえぞ。大丈夫か?」

「あ、東風やん。そ、その・・・ありがと（ふわわわ!ギユってしてもらっちゃった。東風やん・・・良い匂い）」

「それにしてもお前、そんなダボダボな服着てるから、転びかけるんだぜ?」

「うう。でも良いじゃん」

なんというか、頬を膨らませて少し睨む本音は、怖さがほとんど無い。少し注意したつもりだったんだが、これ以上怒らせたらヤバイだろう。女は怒ると怖いもんだ。

「ほれ、新聞部の人が出来たから、そっちに行くぞ」

「あ……う、うん」

俺が一夏の所へ戻ろうとすると、新聞部の腕章をつけた2年生の人が俺のほうへ近づいてきた。

「お、やっと来たー。どうもどうも、新聞部の黛薰子です」

「どうも」

「いきなりですが取材をさせてもらうわよう。じゃあ、オルコツトさんの試合に関して何か一言」

「うーん……。俺なりに頑張ったつもりだが、やっぱり経験不足だったツス。これからは精進あるのみ！……これで良いですかね？」

「何で疑問系？ま、まあ良いや。後でちよこつと盛り付けしとけばいいか♪」

「おいつー！」

捏造って……。文姉ちゃんじゃないんだから。

文姉ちゃんっていうのは、天狗の射命丸文さんのこと。天狗でもかなりの実力者だが、いつも新聞の取材のために幻想郷を飛び回っている。俺が小さかった頃はよく一緒に遊んでくれたから、文姉ちゃんと呼んでる。初めてそう呼んだときに、なぜか鼻血を垂らしていたけど……。

その後、みんなと一緒に記念撮影をしたりして、パーティーを楽しんだ。

## 6話 授業風景と、中国娘あらわる！

「それではこれより、IS基本操縦を見てもらう。専用機持ちの3人は、ISを展開してみせろ」

4月下旬。あの戦いからしばらく経ち、俺たちは今日も織斑先生の授業を受けていた。

さて、と。グラビオスを纏った俺は、次の指示を待つ。

「よし。飛べ」

おうふ。よりによって飛行……。グラビオスは見た目通り、飛行が苦手だ。地面すれすれの低空飛行なら何とかなるんだけど……。空高く飛ぶことは、かなり難しい課題なんだよなあ。

恐らく出力スペックは、白式＜ブルーティーズ＞グラビオス、だと思う。

けどまあ、「機動力悪いので飛べませーん」なんて言っただけ出すのは、一番恥ずかしい事だよな。飛ぶとしますか！

「行くぞ、グラビオス！」

《ウンー！》

空を飛べるととても嬉しいようだ。このコアは、とても無邪気な子と言うイメージだな。でも……。やはり飛び辛い感じになってるのは申し訳がない。

グラビオスは、実を言うと打鉄のコアを使っている。装甲も武器もリセットさせて、記憶はそのままに……。東さんなら出来てもおかしくないと思う。

打鉄でありながら、新しい名と武器を与えられたIS。それがグラビオスだ。

そうこうしている内に、一夏にぐんぐん追いついていく。「何をしている織斑。グラビオスよりも出力は上だぞ。追いつかれてるじゃないか」

おお、俺を追い越していった。こつちもそれなりにスラスターを噴かせているが……。ふう、ようやく追いついた。

「織斑さん。イメージは所詮イメージ。自分のやりやすい方法を求め



る方が、効率的ですわ」

「そうは言ってもなあ。大体、空を飛ぶ感覚がまだあやふやなんだよ。人間が空を飛べるのって、ISか飛行機くらいだと思ってるし・・・真はどうなんだ？」

「そうだなあ。両手を広げて、風の中を突っ走ってるって感じだな。小さい頃やってなかったか？飛行機ごっこ」

「おお！何となく分かった気がする」

幻想郷に飛行機は無いから、正しくは天狗ごっこをやってたんだけどな。

そんなことを考えていると、織斑先生から新たな指示が来る。

「次は急降下と完全停止をやってみせろ。目標は地表から10センチだ」

「ではお二人とも、お先に失礼♪」

セシリアはそう言って急降下していく。それじゃあ、俺も行きますか！

「Go！」

俺は風を感じながら、どんどん地面に近づいていく。・・・ここだっ！

「ふむ・・・13センチか。『完全』停止なのだから10センチで停まれるように」

「了解ッス」

少々辛口の評価を頂いてると、上からキイインって音がしてき・・・

!?

バゴオオオオオオオオオン!!

わああ、地面に大穴が出来ちゃった♪しかもその中心には、一夏が・・・。

「誰が地面に大穴を開けると言った、馬鹿者」

「す、スイマセン・・・」

「大丈夫か、一夏!?!」

「織斑さん、ご無事で!?!」

さすがにふざけてる場合じゃないよな。ISには、搭乗者の命を守

るための絶対防衛というのがあって、衝撃まで軽くする事はできない。もしかしたら、その衝撃で骨にヒビが入るかもしれない。

俺と筈、そしてセシリアが一夏の、元へ駆け寄る。

・・・ふう、無事みたいだな。

「よし。次は武装の展開だ」

おつ、これはいけるんじゃないか？確か、特訓しながら武器をどんどん展開していった覚えがある。

俺はすぐに、紅蓮の炎をした剣斧をイメージする。・・・よし、俺の手元にファイアテンペストが現れる。隣を見ると、一夏はイメージする事に四苦八苦していた。一方セシリアはスターライトmkⅢを展開していたのだが・・・

「さすがだな、オルコット。さすが代表候補生だと言おう。だが・・・お前は仲間に向かって、銃を放つつもりか？」

「おわっ!?危ねえ!」

「ですが、これはイメージを固める為に必要な事で——」  
「直せ。いいな」

「——はい」

俺に銃口が向けられていた。これには、さすがにヒヤヒヤする。

セシリアは先生の指示に対して何かを言おうとするが、鋭い眼光に睨まれたのか、渋々頷いていた。

「では、オルコットは近接武器を、東風谷は射撃武器を展開してみろ」  
「はい」

「は、はいっ」

今度は、漫画とかにありそうなバズーカ砲を想像する。俺の手元に現れたのは、超大型砲『カブレライトキャノン』。反動がデカイ代わりに、徹甲榴弾のような威力が大きい弾丸を装填出来る。

一方セシリアは、一夏と同じく苦戦していた。・・・まさか、射撃が得意で近接戦は不得意なのか？

「うっ・・・くっ・・・」

「どうした。早くしろ」

「ああもう!『インターセプター』!」

ヤケクソ気味に彼女が叫ぶと、近接武器が展開された。だが、武器の名前を呼んで展開するのは、初心者が多いらしい。やっぱり苦手なんだな。

「何秒掛かっている。相手に、武器を展開するのを待ってもらってもりか」

「じ、実戦では近接の間合いに入らせません！ですから、問題ありませんわ！」

「この間の戦いで、初心者二人に一気に間合いを詰められていたのを、お前は忘れたのか？」

「あ、あれは・・・その・・・」

セシリアが言っている事は、おそらくスポーツの方だろう。だが、「本当の実戦」というのはそこまで甘くない。

相手は絶対に俺たちを殺しに掛かってくるだろう。間合いを取りながら武器を取り出すのに時間が掛かってしまったら、確実に殺される」

「東風谷。途中から声が出ているぞ」

「あつ。すみません・・・」

「だが、東風谷の言う事も、あながち間違いではない。戦場ではそう簡単に奇跡は起きない。自分の腕が物を言うということ覚えておけ」  
すると、丁度よく授業終了のチャイムが鳴る。

「では、織斑は穴を元に戻しておけ。解散！」

「ええつと、土はどこだっけ・・・」

「私も手伝うぞ、一夏」

「おお！サンキュー、箒！」

「っ！ほ、ほら！早くしないと次の授業になるぞ！」

「おわあ！ひ、引っ張るなって！」

一夏と箒のラブコメみたいな会話を聞きながら、俺は戻っていた。  
・・・二人つきりにさせてあげた方が良いだろ？多分。

翌日。なにやらクラスが騒がしい。

「ねえねえ東風やん。あの噂、聞いたく？」

「噂？」

「うん。何でも、二組に転校生が来るんだって。それも中国の代表候補生らしいよ」

「マジか・・・」

ルームメイトの本音によると、転校生が来るらしい。それにしても中国か・・・。「アイツ」の住む紅魔館の門番さんも、たしか中国読みの名前だったな。

「あら、私の存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

『いや、それは無い』

「このクラスではなく、隣のクラスだろう？騒ぐほどのことでもあるまい」

セシリアの発言には全力でツッコませてもらう。一夏の方を見ると、何かを思い出しているような表情だった。まるで、どこかに行ってしまった友達を懐かしんでるかのような・・・。

「中国、か・・・」

「何だよ一夏。気になるのか？」

「まあ、少しだけな」

「しかし、来月にはクラス対抗戦がある。転入生よりも、自分の機体を少しは心配するべきじゃないか？」

そう。箒の言うとおり、来月にはクラス対抗戦がある。景品は・・・確か、学食デザートの半年フリーパスだったよな？絶対に勝てよ、一夏！」

「ま、真？お前・・・目に闘志が宿ってないか!？」

「当たり前だ！ここの食堂のデザートは、とんでもなく美味いからな！」

「こ、東風谷さんが甘いもの好きだというのは、意外ですわ・・・」

「だが、気持ちは分かる。頑張れよ、一夏！」

「今のところ専用機を持つてるのは一組と四組だけだし、余裕だよ」

「——その情報、古いよ」

俺も含めたクラス全員が声のしたほうへ目をやると、そこには……腕を組み、片膝を立ててドアにもたれている、ツインテール少女がいた。

なんというか……小柄なせいで似合ってなかった。

## 7話 のほほんとした後は・・・模擬戦

「鈴・・・？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン 鳳鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

彼女が代表候補生か・・・。そういえば、「専用機持ちが一組と四組という情報は古い」みたいなことを言ってたが、まさか彼女が二組のクラス代表になったのか!?

そして、驚きの声を鳳とやらにかける一夏。おいおい・・・知り合い同士が戦うって事になるのかよ。

「何やってんだ？その格好、似合わないぞ」

「な、何言ってるのよ一夏！」

二人とも俺の緊張を返せ！俺がクラス対抗戦について考えてたつてのに、一気に空気が崩れたぞ！

・・・あ、織斑先生だ。だが鳳はまだ気付いてない。ほーら、織斑先生が苛々し始めたぞ。

「あー、鳳。後ろ後ろ」

「え？後ろ？」

バシインツ！良い音を頂きました。

「もうSHRの時間だ。早く教室に戻れ。それと、入り口を塞ぐな」

「うう・・・。千冬さん・・・」

「織斑先生と呼べ」

「・・・はい。また後でくるからね！逃げないでよ、一夏！」

織斑先生に睨まれ、走って教室へ戻っていく鳳。さあ授業が始まるぞ。さっさと席に着かないとなく。

いやはや、一体筈はどうしたんだ？いつもは真面目にノートを取ってるはずなのに、今日はボーっとしてばかりだ。おかげで、耳にタコができるぐらい出席簿アタックの音を聞いたぞ。

・・・はっはーん。さては、あの鳳をライバルだと思ってるな？そ

れは無いだろう。いくらイケメンの一夏といえど、そんなにモテるわけ無いだろう。

そんなことを考えながら教科書を机に突っ込んでいると、ルームメイトの本音が話しかけてきた。

「ねえねえ、東風やんく。今日は誰かとお昼ご飯食べるの？」

「え？いや、今日は一人だが・・・」

「やったく。それじゃあ、一緒にご飯食べない？」

「構わないぜ。じゃあ、一緒に行くか？」

「やったく！」

満面の笑みで、袖が余っている腕をバンザイさせる本音。いやく可愛いもんだ。では、早速行くとしましょう！

「モグ・・・モグ・・・。いやく、この定食は本当に美味しい！」

「東風やんって、基本的にご飯と味噌汁だねく」

「パンとかも何回か食べたけどよ、やっぱり味噌汁の味が恋しくなるんだよなく」

俺と本音は、向かい合うような形で昼食を食べていた。俺が頼んだのは日替わり定食。ご飯と味噌汁、野菜の煮物に日替わりの主菜がメニューとなっていて、今日はトンカツだ。結構ボリュームがあるな・・・。

「本音は何を頼んだんだ？」

「私はねく、チャーハンく」

「へえ、美味そうだな。俺も注文すりや良かったかな」

「うひひく。あげないもくん」

「ちえっ」

唇を尖らせる俺。だって食べてみたいんだもん、チャーハン。でも怒る気は全く無い。もしかしたら本音から、のほほんオーラというのが溢れてるのかもしれない。

周りから暖かい視線を受けながら味噌汁を味わっていると、本音が不意にある事を言ってきた。

「東風やんって、しののんやおりむーとかと仲良しだよねく」

「ほら・・・保護者代理人の関係でな」

「あく、なるほど」

本音は理解してくれたようだ。俺は、あんまり束さんの事を話題にはしない。それだけで大騒ぎになるのは目に見えてるし、箒とかにも迷惑をかけてしまう。

「私だけじゃなくて、せつしーとかも名前呼びだよね」

「え？セシリアって苗字じゃ・・・」

「え・・・？せつしーの苗字はオルコツトだけど・・・」

えええ!?知らなかった・・・いや、待てよ？レミアアさんとかフランちゃんも、スカーレットという部分がある。あれって苗字だったのか・・・。

「おっと。急がないと、授業に遅れてしまうぜ」

「あう。怒られるのは嫌だよ」

「ほら。早く食器を片付けようぜ」

「うん」

食堂を去るときに、一夏たちの席を見た。何か一夏の顔を見てるときとかに、凰の顔が赤くなってるのを見た。・・・まさかな？

放課後の第三アリーナ。俺とセシリアは模擬戦をしていた。お互いの技術向上のために、たまにこうして模擬戦をしているんだ。ちなみに一夏は、箒と共に近接戦の練習だ。ふむふむ。恋人と練習でき、嬉しそうだ。

「なあ、箒。さっきのやり方だが・・・」

「ん？いや、それはこうズバーンって感じだ」

「いや、別の例え方が・・・」

「分かりづらかったか？別のたとえなら、ズバババツ！って感じだ」  
「・・・」

ツッコまないぞ。箒の例えが擬音だらけだって事には、決してツッコまないぞ・・・！

「余所見厳禁ですわよ！」



「おっと、危ねえ！」

目の前をレーザーが通り抜ける。見ると、BITが凄いスピードで迫ってきた。俺はカブレイトキャノンを構えながら、地面すれすれを飛ぶ。

彼女は、攻撃をする時にその場から動かない。BITを動かすのに精一杯だからだ。あらかじめ装填させておいた散弾を放つ。

こいつは弾丸の中に小さな刃が入っていて、空中で弾丸が割れて、刃が飛び散る仕組みだ。打鉄のブレードにも使われる刃が、セシリアを襲う。

「キ、キヤアアアア!! 貴方、なんちゅーモンを使ってやがるのですか!?!」

「口調が壊れてるぜ」

「く……。まさか、クラスター爆弾のようなものを使ってくるとは。ですが、こちらをお忘れではなくって!?!」

「忘れてるわけ無いだろ? グラビド・ヘッド!」

肩に装着させているヘッドを展開して、セシリアの放つミサイルBITを防ぐ。爆風で目が見えなくなったところで、俺は後ろへ回り込んでファイアテンペストを構える。

「う、後ろに!」

「遅いぜ! オラアツ!」

「イ、インターセプター!」

「させるかよ!」

忘れたのはお前の方じゃないのか? クラス代表決定戦で、この斧がお前のブレードを砕いたのを。俺はブレードを蹴り飛ばすと、斧を振るう。

「いただき!」

「ティアーズ!」

後ろから嫌な予感がする。避けると、後ろからBIT兵器が飛んできた。危なかったぜ……。ってヤバイ!

「絶好の距離ですわ! くらいなさいな!」

「ちっ! キャノン! 貫通弾、装填!」

今度は、先端が尖った弾丸『貫通弾』。名前の通り貫通力が高く：

「は、速い！」

「もう一発！」

「テ、ティアーズ！」

セシリアは、動けない俺をBITで狙うが・・・これを待ってたんだ！

「散弾装填！ぶちまけやがれ！」

後ろへ振り返って、散弾を発射する。大量の刃がばら撒かれると同時に、BITが爆発する。すると警告音が鳴ったので、その場から離れてテンペストを展開する。

さあ、接近戦に持ち込んでファイナーレだ。

「ブ、ブルーティアーズが・・・」

「愛しい子がやられて残念だな」

「っ!?しまっ・・・」

「属性解放・・・ファイナーーツシュー！」

今回の模擬戦は・・・俺の勝利で終わった。

8話 喧嘩。一方、とある場所では・・・

更衣室で着替えた後、俺は部屋に戻る為に、寮の廊下を歩いていた。「今回は勝てたが、競技で戦うことになった場合は、どれだけ素早く行動するかがポイントになるな」

今日の戦闘について考えながら歩いていると、通り過ぎようとした部屋が騒がしい事に気付いた。ここは確か・・・一夏の部屋か。その中から、箒と凰が言い争っている声が聞こえる。

とりあえず、ノックをして入ることにする。

「入るぞーって、一夏。お前隅っこで何やってんだよ」

「いや、二人の会話に入れなかった・・・」

「真か！聞いてくれ！凰が突然、部屋を替われと言うのだ！」

「・・・はあ？」

一体、何がどうやってそんな展開になるんだ。

「ほら、篠ノ之さんも男子と一緒だと、シャワーとか夜とか気を遣うでしょ？だけどアタシは平気だから替わってあげようかなーってね」

「そんな事はない！むしろ同室で嬉しい・・・ハッ!？」

「・・・へえ、アンタ結構いい度胸してるじゃない？」

父さん、恋人をめぐるっての喧嘩は恐ろしいぜ。二人から般若と虎のオーラが見える・・・。

だが確信した。箒が「一夏と同室でうれしい！」発言をしたら、凰の目の色が変わった。あれは恋&戦闘者の目だ。

「だけど一夏・・・お前、凄いや。箒の発言に対して、キョトンと首を傾げていることが。」

「あー、だが凰。部屋替えは無理だと思っぞ？」

「アンタは・・・確か二人目の男子操縦者ね。どういうこと？」

「俺の名前は東風谷真だ。さっきのお前の疑問だが、こここの寮長は織斑先生だぜ？」

「・・・マジで？」

「マジで。『仕事を増やす気か馬鹿者！』の一言で、追い出されるだろうな」

「・・・良いわ。だったら、部屋替えは諦めるわよ」

「そう挫けるな、凰。休み時間とかに会いに来れば良いだろう」  
箒が、少し諦めた表情の凰を慰める。

すると、一夏が声を掛けてきた。

「あー、鈴。さっき言ってた約束っていうのは」

「あ・・・覚えてて・・・くれてるよね・・・？」

「なんだ？何か約束でもしてたのか？凰の顔が赤くなってるって事は・・・まさか告白か!？」

「確か、鈴の料理の腕が上がったら毎日酢豚を――」

「そうそれっ!」

「――奢ってくれるってやつか？」

「・・・へ？」

「だから、鈴が料理できるようになったら、俺にメシをご馳走してくれるって約束だろ？」

「・・・一瞬本当にそういう約束なのかと思ったが、どうやら違うようだ。」

なぜなら、凰の目に涙が溜まっていつている。だが一夏はそれに気付いてない。

おい・・・他の人の感情には鋭いくせに、何で今の彼女の状態を察してあげないんだよ・・・!

「いやあ、それにしても俺の記憶力に関心――」  
パアッ!

「最っつ低!女の子との約束もちゃんと覚えてないなんて、男の風上にも置けないやつ!アンタなんか、犬に噛まれて死ね!」

一夏にありったけの大声でそう言うと、床においてあったバツクをひったくって出て行った。

一夏は、何故平手打ちされたか分からない表情で呆然としていた。  
「・・・約束って、別の方か?でも鈴との約束なんてそれぐらいだし・・・」

「一夏あー!」

「ま、真!?!」

「歯あ食い縛れえええ!!」

俺はありつただけの力を込めて、一夏を殴る。俺は今の一夏を許せない。彼女の言った約束には、きつと別の意味があつたんだと思う。何の意味かは分からない。

だが、俺が許せないのは、泣いている事にも気付かずに「自分の記憶力に感心」なんてぬかしやがった事だ！

「な、何するんだよ！」

「痛いかな？痛いよなあ。だが・・・あいつの悲しみはもつと痛いんだよ！てめえは、少しは女子の気持ちという物を考えやがれ！」

もう知るか！俺は言うだけ言った後、部屋を出て行った。

「それはきつと、『私の味噌汁を毎日飲んでくれますか？』のアレンジバージョンだよ」

「ほうほう」

「そして、その言葉は、『私と結婚してくれますか』とか『私と付き合ってください』という意味があるのです」

俺は部屋に戻った後、本音にさつきことを話した。クラスの皆には言わない約束で、嵐が言っていた「毎日酢豚を——」の意味を聞いた。

なるほど・・・あれも告白の一種だったのか。父さんと母さんは、スレートに自分の気持ちを伝えて結婚したらいいから、てつきりそれだけが告白だと思ってた。

・・・俺も、人のことは言えないな。なんか、一夏に対して申し訳ない気持ちで一杯だ。

「さて・・・そろそろ消灯時間だし、寝るか？」

「さんせうい。ふわあゝ・・・」

小さい欠伸をする本音。いやはや、癒されるね。

歯は磨いたし、宿題は本音と一緒に終わらせた。さあ、寝るとしますか・・・。

くその日の夜中く

「スウー……スウー……」

「うわー。意外と静かな寝息……。東風やん、明日の朝はビックリするだろうなく。えへへ……」

くどある島く

「ハア……ハア……。スコール！無事か!?」

「こっちは異常無しよ。貴女こそ大丈夫？オータム」

世界のどこかにある島。その海岸に、二人の女性が打ちあげられていた。一人は金髪の長い髪と豊満な胸が特徴で、もう一人は橙色の髪が特徴だ。

金髪の女性の名はスコール・ミューゼル。橙の髪の女性は、オータムという。二人は、テロ組織「ファントムタスク亡国企業」のIS実働部隊に所属していた。……そう。して「いた」のだ。

「あのクソISめ！私たちを見たと勝手に襲い掛かってきやがって！」

「……駄目ね。通信機器も壊れてるせいで、本部へ繋がらない。多分死んだことになってるでしょうね」

二人は、上層部からの命令でアメリカのIS開発企業を襲うつもりだった。しかし、途中で謎のISと遭遇し、見事に敗北。運よくこの島に流れ着いたのである。

「……にしても、ここはどこだ？」

「見るからに無人島よね」

二人が辺りを見回すと、目の前の草むらがガサガサつと揺れた。二人は隠し持っていた拳銃を構える。

草むらから出てきたのは、目を閉じている銀髪の少女だった。

「……硝煙の臭いを確認。お二人とも、銃を降ろしてください」

「何者かしら、貴女？この島に住む人かしら？」

「はい。ですが、銃を降ろしていただけないでしょうか？緊張のあま

り、噛んでしまいしようでしゅ」

「早速噛んでる!?!」

すると、今度は森の奥からドドドドド!という音が聞こえてきた。

「クウウウウウウウウウウちやああああああん!!」

叫び声と同時に、ウサ耳の女性が銀髪少女に抱きつく。だらしない顔をして少女に頬ずりする姿は、どこか危ない。

「噛んじやったクーちゃん、超可愛い!それよりも大丈夫だった!?!何もされてない!?!」

「束さま、落ち着いてください。私は大丈夫です」

二人は驚愕した。少女が呟いた名前、機械のウサ耳。これらに当てはまる女性は一人しかいない。

「二し、篠ノ之束!?!」

島・・・いや、篠ノ之束のラボに、二人の女性の驚きの声が響いたのだった。

## 9話 乱入する者

さて、すっかり5月になった。俺は放課後の食堂で恋愛相談を受けていた。相手は・・・不機嫌顔の凰だ。

なんでも、あれから未だに一夏と仲直りできていないらしい。ついさつきも、ピットで思いつきり喧嘩してきたという。

「・・・で、何で俺なんだよ」

「どうしても聞きたいの。凄く失礼かもしれないけど・・・男って、みんなあんな感じなの？」

「あんな感じ?・・・ああ。恋に関して鈍感なのかっていうことか」

「それよー!」

「うーん・・・。必ずそうとは限らないぜ? 恥ずかしくて気付いてないフリをしてるか、一夏のようにマジで分からないかのどちらかだと思う」

「そつか。じゃあ、どうやったら気付いてもらえるのかな?」

「ええく・・・」

とりあえず俺から言えるのは、凰は大事なところで強気になってしまふタイプだと思う。俺はこの数週間の間一夏を見てきたが、あいつは恋に関しては鈍感だ。未だに箒をただの幼馴染だと思ってる。恐らく・・・凰もそう見られてるんだろうな。

「そもそもさ、お前はなんで一夏に惚れたんだ?」

「え!?そ、それはそのお・・・」

モジモジしつつも、そのきっかけを教えてくれた。

小学生の頃、中国人だからと馬鹿にされていたのを、一夏がぶち切れたらしい。そこから段々と惹かれていったという。何とまあ・・・良い話だねえ。

「それで、中二の終わり頃にあのことを言ったんだけど・・・」

「見事に勘違いされていて、今に至るってか」

「うっ!・・・うん」

「うーん。まず、もつと素直になるべきだと思う。正直言って、あの約束は俺も理解できなかった。お前の泣きそうな顔見てすぐに、別の意



味があるとは思ったけどさ。でも・・・一夏にあれば効果ゼロだな  
「そ、そう・・・」

「まあ、対抗戦の日とかは良い機会なんじゃないのか？」

「え？あんたなら『早く仲直りしろ』とか言いそうな気がするけど」  
「だってよお・・・」

あ、そうだ。忘れていたが、ピットで凰は「貧乳」と言われたらしい。それは・・・イカンよなあ!!

「俺のダチ曰く、『女性のスタイルには、心で思っても口には出さな』だそうさ。一夏の貧乳発言には俺も許せねえ！思いつきりボコれ！」

「へ？アンタ・・・」

「あ、でも優勝の方は渡さねえぞ！フリーパスは、一組のものだからな！」

「アタシを応援してるのか、宣戦布告なのかどっちなのよ!？」

「と・に・か・く・！素直に想いを伝えてやれ。もちろん、『異性として』という言葉も忘れんなよ！」

「っ！あ、アンタねくくくくく！」

♪ さあ、彼女が怒る前に逃げよう。三十六計逃げるにしかず、つてな

さあ、いよいよ対抗戦。空は青く、太陽が眩しい。今月一番の晴れなんじゃないか？そう思いつつ、俺は観客席に座っていた。ちなみにセシリアと箒は、一夏のサポーターみたいな感じでピットにいる。

「一回戦目は、一夏vs凰。幼馴染同士の対決だ」

「あれ？東風やんは、リンリンがおりむくとの幼馴染だって事をどこで知ったの〜？」

「ちよつと彼女から恋愛相談を受けていな。その時にサラつと話してくれた」

「えっ!?!うく・・・。悔しい・・・」

「そう悔しそうな顔すんなって。ほら、始まるぜ」

早速、一機のISが出てきた。今回は少しばかり調べたぞ。あれは中国第三世代IS「甲龍」シエンロンと言っらしい。しつかし・・・派手な色だなく。ブルーティ Airways といひ、派手な奴が多い気がする。いや、別に嫌いじゃないけど。

でも俺は、色ばかりに注目してはいいない。あの左右に浮かんでる棘付きの何か。やっぱり、非固定浮遊部位アンロック・ユニットがあるっていうのは常識なのか？

俺の専用機「グラビオス」は、非固定浮遊部位が無い。グラビド・ヘッドは打鉄の非固定浮遊部位を改造したものだ。だが、デザインや性能上、肩に装着する形になっている。相手の意表を突く為のものだろうな。

「(でもまあ、周りで何かがフヨフヨ浮いてるのは落ち着かないから、別に良いけど)」

「東風やんく。ちゃんと試合を見なよく」

「つと。悪い悪い」

上を見ると、二機のISが空中戦を繰り広げていた。甲龍がブレードを構えて白式に詰め寄る。だが一夏は、すぐに避けて距離を取る。

良いぞ。白式は、近接ブレードしかないISだ。迫られたら距離を取るか、相手を上回る力で抑えれば良い。・・・だがなんだ？あいつはまだ「何か」を隠し持っている気がする。

すると、距離が離れてるにもかかわらず、一夏が吹き飛んだ。

「なんだあ!?!」

「も、もしかしたら、第三世代兵器かも。セシリアのBITみたいな感じだよ」

俺の右隣にいる谷川が、驚いてる俺に軽く説明してくれる。調べた情報が正しければ・・・砲身も砲弾も目に見えない、それに加えて死角無しの「龍砲」か？まさか、本当に見えないとは・・・。

く管制室 三人称 sid く

「一夏!」

箒が、悲痛な声を上げる。最初は良い感じだったのに、だんだんピッチに追い込まれている状況にハラハラしていた。一方、千冬は鈴の映像を見て、口の端を上げていた。

「不可視の砲身に砲弾・・・どうすれば良いんだ」

「篠ノ之。龍砲には、対抗策がないと思ってるだろうか？」

「はい。ハイパーセンサーで空間の歪みなどを探し当てても、避けようと思った頃には攻撃を受けているはずですよ」

「さすが、織斑と特訓をしてきた一人ではあるな。だが忘れていないか？龍砲はあくまで、砲弾が見えないだけだ。見えない部分を除けば・・・」

「あっ！射撃武器であることに変わりはない！」

「その通りだ。オルコット。射撃を行なう際には、腕や身体だけではなく何をを使う？」

「はっ、はい!?ええと・・・大切なのは、やはり目ですわ。狙いを定める為にも・・・」

すると、箒とセシリアにある答えが浮かぶ。こんなにも正確に一夏を撃つ事が出来ているのは・・・

「目で狙いを定めているから。という事は、上手く目線を探れば避けられるんですね？」

「そういう事だ。おつ、イグニッションブースト瞬時加速で距離をつめたな。これで零落白夜が命中すれば・・・」

「織斑先生！」

アリーナのシステムを管理していた山田が、慌てた声で千冬を呼ぶ。

「変です。アリーナのシールドエネルギーが、徐々に減少しています！」

「何!?システムの異常か!?!」

「分かりません!それと同時に、外部から識別不明の物体が接近中!」

「くっ、こんな時に・・・篠ノ之、オルコット。今ならまだ間に合う。

観客席へ行き、避難通路を確保しろ!」

「了解しました!」

く 観客席 真sidく

少し考えているうちに、不可視の砲弾をくらいまくる一夏。予想外の攻撃に、あいつもヨロヨロとしている。

一夏、どうした？立てよ。何のために俺と戦いまくったんだ？セシリアや箒と模擬戦をしたんだ？見せてやれ。そしてもう一度彼女を惚れさせろ。立て……立つんだよ！

すると一夏は立ち上がり、一瞬の間にして距離を詰めた。

「よくやったぜ、一夏！」

「あれって、東風谷くんが使っていた……」

「瞬時加速〜！」

本音がその技術の名前を言う。あれは、セシリア戦の時に俺が無意識にやった技術。一瞬で距離をつめる代わりに、少しばかり身体に負荷がかかるやつだ。

さあ、そこから零落白夜を……

《クロス……》

「っ!？」

とてつもない殺気を感じた。これは……空からか！とてつもないスピードで迫ってやがる！

これは……マズイ！

ズドオオオオオンツ！

凄まじい音と共に、中央に何か落ちてきた。このアリーナは強力なシールドで覆われている筈。考えられるのは、シールドを突き破るほどの勢いで落ちてきたか、シールドを貫くほどの攻撃をしたことだ。

土煙が晴れると、そこには緑色のISもどきがあった。人肌は見えず、全身を装甲で覆っている。頭の部分からは黄色い光が見えた。目か何かだろう。

その途端、観客席は女子達の悲鳴で響き渡った。

## 10話 VS 無人機

突然乱入してきた謎のIS。しかし、様子がおかしい。ただのテロリストなら、すぐに一夏達に攻撃を仕掛けるはずだ。それなのに、動く気配が無い。まるで何かを探しているような……。

「みんな、大丈夫か!？」

「織斑先生から避難命令が出されましたわ!早く避難を!」

ピットにいたはずの箒とセシリアが、みんなに避難を呼びかける。確かに、あのISは何をするか分からない。他の女子達が素早く避難を始める。

すると、乱入者は俺を見つけた瞬間、バズーカ砲を展開して撃ってきた。

「ヤベっ!」

「「キヤアアアアアア!」」

幸い、観客を守るためのシールドで防がれたが……シールドが鉛細工のように溶けはじめている。もしかしてアイツ、観客席を狙ってるのか!?

だとしたらヤバイ!シールドが完全に溶けてここまで侵入して来たら、避難している皆が大怪我……いや、死ぬ事だつてありえる!

俺は急いで、開放回線オープンチャンネルを開いて織斑先生へ繋ぐ。

「私だ」

「織斑先生。乱入者のやつ……観客席を狙ってるかもしれない!」

「……そうか。現在、警備に当たっている先生達に協力を呼びかけている。増援が着くまでの間、織斑たちと時間を稼げ!ISの使用も許可する!」

「了解!セシリア、行けるか?」

「当然ですわ。恐らく火力は向こうが上。畳み掛けましょう」

「真。私は……私は、どうすれば良い?」

「箒は、パニックになっている女子達を落ち着かせてやってくれ。あまりの展開に、呆然としているやつもいるからな」

「分かった。……みんな、無事でいてくれよ」

箒は、他の女子達にも声をかけて避難を進ませる。俺が一夏たちのもとへ行こうとすると、袖を引つ張られる感じがした。見ると本音が・・・不安そうな顔でこつちを見ていた。

「東風やん・・・怖いよお。行かないでよ、東風やん・・・」  
「・・・本音」

不安がる本音の頭を優しく撫でてあげる。これは俺が小さかった頃、夜が怖くて眠れない時に、母さんがよくやってくれた。これで心が落ち着いてくれると良いんだが・・・。

「・・・ふわわあく!?」

「落ち着いてくれたか?」

「う、うん」

「それじゃあ行ってくる。箒、本音を頼む」

「あつ・・・」

やれやれ・・・。幻想郷ではモンスターを相手によく戦ってたが、I S戦・・・それもこういう事態は初めてだ。

だが、絶対に生きて帰つてやる。こんな所で死んだら、映姫さんにも怒られるしな。俺は溶かされたシールドの穴から入ると同時に、グラビオスを身に纏った。

俺を察知した敵は、爪を伸ばして俺に襲い掛かってきた。橙色の鎌のような爪が、俺を真つ二つにしようとして振り下ろされる。だが・・・  
「効かねえよ!!」

両腕をクロスして防御の体勢をとる。さすが、鎧竜グラビモスをモデルにしているだけある。その防御力は半端ない。すると、一夏が後ろから、雪片式型で敵を斬りつける。超グツジヨブ。助かったわ。

「真!」

「俺は大丈夫だぜ、一夏。鎧竜を舐めんなよ?」

「一夏!それに東風谷!あいつ、何なのよ!?!」

「分からん。今、セシリアが狙撃しつつ相手を確認している。俺達に

出来る事は・・・時間稼ぎだ」

「分かった。ところで、鈴と真。俺・・・さつきアイツを斬って不思議に思ったんだ」

「何だ？言ってみろ」

「さつき雪片で斬ったんだけど・・・少しは痛がってもおかしくないのに、何も言わなかった」

「・・・ほう」

「恐らく、無人機だと思う」

「ありえないわよ！ISは、人が乗らないと動かせないのよ!?!」

その時、無人機（仮）がバズーカ砲を撃つ。俺達は急いで散開する。「とにかく、敵であることは確かだ！観客席を狙わせるな！」

さあて、どうしますかねえ・・・。武装は恐らく、鎌のような爪と、バズーカ砲。

あのバズーカ砲は要注意だな。あれをくらったら、恐らく装甲も溶かされるだろう。俺達がさつきまでいた所が硫酸をかけられたかのように煙を出しているのが、何よりの証拠だ。

攻撃の隙を与えないために、凰がブレードの連結を解除して双剣のように振り回す。俺はカブレライトキャノンを展開し、貫通弾を装填する。

こいつを使うのは、一か八かの賭けだ。これで相手の身体をぶち抜いて、もしも血が出なかったら無人機確定だ。しかし人が乗っていたら・・・俺は人を殺した事になる。

「凰！避けるー！」

「っ！」

貫通弾が、相手の身体を貫いた。溢れてくるのは・・・オイルのようなもの。決まった。こいつは無人機だ。

「一夏！お前の勘は当たったぜ！」

「やっぱりな。だったら、手加減必要なしってことだな！」

「どうするの？無人機でも、あいつ相当硬いわよ。長期戦になるかもしれないわ」

「いや・・・零落白夜がある」

「一夏？」

「俺の零落白夜は、シールドエネルギーを消費する代わりに、相手のエネルギーを大きく削れるんだ。上手く当てられれば・・・倒せるかもしれない」

「・・・よし。俺がうまい具合に奴の動きを止める。その際に二人で叩き込め！」

普通に喋ってるように見えるが、相手の攻撃を避けながら話している。おかげで、アーリーナは所々溶けている部分がある。これはヤバイかもな・・・。

未だに増援部隊が来ない中、俺は攻撃を掻い潜りながら様子を伺っていた。鳳は衝撃砲を放ち、一夏も少しは相手のエネルギーを減らすと、雪片で斬りつけている。

こっちはカブレライトキャノンに通常弾を装填する。相手の装甲はかなり硬いから貫通弾が有効かもしれないが、装填数やリロード時間を考えると、通常弾が良いかもしれない。

・・・よし、装填完了。くらいやがれ！

「・・・ショット！」

《・・・》

あ、こっちに狙いをつけてきた。そしてこっちに向かって・・・つて、かなり速くね!?なんで俺の時だけ勢いが強くなるんだよ！

ヤバイヤバイ！振り下ろされた爪を砲身で受け止めようとするが、受け止めたと同時に横から斬られる。

「ガッ・・・！衝撃が半端ないな」

ISには、絶対防御というのがある。操縦者の命を守るための機能らしいが、全てのダメージから守ることは出来ない。今の場合は、身体が真っ二つに斬られるのを防いでくれたが、衝撃は打ち消せなかった。

しかも、今の攻撃でシールドエネルギーがかなり減った。これが底を尽いたら、ISは強制的に解除されてしまう。そしたら俺は危険な状況に置かれてしまう。



「武器が使えないなら、手足がある！」

敵が接近し過ぎていて、キヤノンを構えることが出来ない。だが、それなら蹴り倒すまでだ。

今のはさすがに予想してなかったのか、無人機は蹴り飛ばされる。そこへ凰が、ブレードを構えつつ衝撃砲を連射する。砲撃で怯んだ隙に、俺と一夏で接近する。加速しながらファイアテンペストを展開、一気に攻撃だ！

「畳み掛けるぞ、一夏！」

「おう！」

「アタシも忘れてもらっちゃ困るわよ！」

全員が近接武器で攻撃を仕掛ける。しかし、それがいけなかった。

《……ッ！》

「なにっ!？」

「ぐあっ！」

「キヤアアア！」

無人機は突然立ち上がり、身体を軸にして爪を振り回した。刃が届く寸前だったから、避ける事ができない。俺達は吹き飛ばされる。

そして、そんな俺達を嘲笑うかのように空を飛び、そのままタックルを仕掛けてくる無人機。

「全員……散開しろお！」

俺達は、急いでその場から離れる。すると、凄まじい音と共に壁にめり込む無人機の姿が。

……あれ？今思うと、あんな感じのモンスターと戦ったことがあるような？

「一夏、今よ！」

「よっしや！うおおおおお！」

壁にめり込んだ隙を狙って、一夏が猛スピードで突っ込む。すると、徐々に雪片から光が発せられていく。おそらく、零落白夜が発動しているのだろう。壁から抜け出して体勢を立て直す無人機だが、時既に遅し。

《ッ!?!》

「終わりだあああ！」

零落白夜が命中すると、無人機が一気に弱々しくなった。脚がガクガクと震え、最後まで抵抗しようと爪を振り上げる。しかし、それは当たる事も無く、無人機はそのまま前のめりに倒れた。

## 11話 無人機戦の後処理

「はぁ……。疲れた」

無人機の戦闘が終わった後、ようやく先生達が来てくれた。けど、俺達が倒したことで出番が無くなってしまうただけだな。先生達は気まずそうな顔をして、無人機の回収をしていた。

ピットに戻った後に待っていたのは、織斑先生による労いの言葉と、何か様々な報告書。一体何の目的で攻撃したか分からない上に、今まで作られてこなかった「人が乗らないIS」という存在。どういう相手だったのかとか、質問に近い内容が書かれていた。

とりあえず報告書は書き終わったし、今回の事については緘口令が出たのも知っている。精密検査も終えた。だが、俺にはまだ試練があったんだ……。

「た、ただいま……」

「……………」

恐る恐る部屋に入ると、頬をプクプクと膨らませて怒っている本音の姿が。

部屋に戻る時に他の先生が、「布仏さんが心配していた」と教えてくれた。本音は今、心配だった故に怒っているんだろう。

「あ……………その……………ごめん」

「……………ふーんだ」

「アハハ。馬鹿だよな。行かないでって言ったのに、戦いに行っちゃったからよ」

「本当に、その通りだよね。ほ・ん・と・うに、心配したんだよ？」

あく……………。マジで怒っていらっしやる。今回は、心配させたことを俺自身が分かってるつもりだ。彼女の怒り顔は、胸にチクリと痛む。

「だけど……………これだけは言わせてくれないか？」

「何？」

「皆が、お前が無事で本当に良かった」

「っ!!」

これは本当の気持ちだ。もしも、怖気づいて戦えていなかったら・・・きつと、凄く後悔してたと思う。

俺の言葉を聞いた本音は、ビックリしたように俺のほうを見て、そして抱きついた。

「え!?!」

「東風やんく! ううく、ごめんねく!!」

「い、いきなりどうしたんだよ!?!」

「だってえ、私たちのこと守るために、ひつく、戦ってくれたんでしょ? それなのにい・・・!」

泣きながら、俺の胸に顔を埋める本音。・・・しようがないなあ。

「よしよし。それじゃあ、お相子だな。本当にごめんな」

「ううく! 東風やんく!」

それから本音は、しばらくの間ずっと泣きっぱなしだった。その内疲れたのか、今は穏やかな寝息をたてて眠っている。本当に、優しい子だなあ。本音は。

・・・ん? なんだろう。彼女を見ると、胸が暖かくなる。

「気のせい、だよな」

とりあえず、彼女を寝かせてあげよう。そつと抱きかかえて、ベッドに連れて行く。そして丁寧に降ろすと、毛布を掛けてあげた。おやすみ、本音・・・。

いや、本当に馴れ馴れしかったと思う。いきなり頭撫でて、お姫様抱っこして・・・。名前呼びですら、他のクラスメイト達に驚かされているのに・・・。

そんなことを考えてしまい、俺はその日の夜、ずっと恥ずかしさで一杯だった。

く I S 学園、とある地下室 千冬視点く

今回乱入してきた、謎の I S。東風谷や一夏の証言によると、この

ISは無人機らしい。最初こそ否定したいものだったが、パーツの解  
体現場に立ち会ったからこそ言えるだろう。これは無人機だと。な  
にせ、誰も乗っていないなかったのだから。

私の視線の先では、真耶が無人機の解析を急いでいる。すると、  
ポーンという無機質な音が鳴った。どうやら解析が終わったみたい  
だな。

「解析が終わりました。織斑先生」

「すまないな。・・・結果は？」

「はい。この機体はどの国にも所属しておりません。しかし、それ以  
前におかしいものがあるのです」

「おかしなもの？」

そう言つて真耶が見せたのは、ISコアのような球体だった。今は  
光を完全に失っているが、どこがおかしいのだろうか？

「こちらの物質を解析してみたのですが、何故か『解析不能』という文  
字ばかりで・・・」

「何？」

「それだけではありません。このISコアらしきものに何か小さな文  
字が彫られていたのですが・・・」

その小さな文字とやらをスクリーンに映すが、これはヒエログリフ  
か何かだろうか？見たことの無い文字だ。

「どの国の文字にも、これらと一致するものがありませんでした。一  
体これは・・・」

「・・・」

私はてつきり束が作ったものだと思っていたが、どうやら違うかも  
しれない。

「織斑先生？」

「ああ、すまない。今日はもう休んでいいぞ」

「はい。では、失礼します」

私は考え事をしていて。ピットから出る時の東風谷の顔について  
だ。

あの時の彼は、何か心当たりがあるような顔をしていた。ずっと顎

に手を当ててブツブツと呟いていた。試しに聞いてみたが、

『いや、どこかでアレと似たような生き物と戦ったような気がするんですよ』

と言っていた。東風谷真・・・彼は何者なのだ？普通の高校生は、戦ったという環境にいることは少ないはずだ。

それに彼は、私と出会ったときに不思議な表情をしていた。どうやら私の目付きは、彼の父親がたまに見せる目つきに似ているらしい。つまり・・・彼の父親は、それなりの経験を持っているということだ。

「ぜひその父親と手合わせを（～～♪～～）・・・束からか」

独特な着メロが流れたので、電話に出る。聞こえてくるのは・・・あの挨拶だ

『もすもす、ひねもすく？束さんだよく!!』

「切るぞ。物理的な意味で」

『ま、待ってよ！電話の切り方は刀で斬るんじゃないよ!』

「冗談だ。何の用だ？」

『ちーちゃんの冗談は、本当に実行されそうだから怖いよ・・・。さてさて、今回お話しするのはですねく・・・』

どこからかドラムロールが聞こえてくる・・・いや、これ絶対に誰かがドラムを叩いているよな!?

『なんと、3人目の男性操縦者が見つかりましたー!やったね、ちーちゃん!男が増えるよ!』

「おい馬鹿やめろ」

なんか言わなきゃいけないような気がした。電話の奥の方からも、「その台詞は駄目えええ!？」という声。そうか。3人目の・・・「はあ!？」

『真くんと同じように、私が保護者代理人です!よろしくお願いねー!』

「お、おい!束!・・・切られた」

ま、また部屋割りやら入学手続きやらをしないとイケないのか!?

うう・・・。胃が・・・。頭が・・・。

く東の研究ラボ 束視点く

ぬっふっふく！久しぶりにちーちゃんの慌てる声が聞けた気がするよ！色々聞きたいことがあるんだろうけど、こっちはこっちで忙しいのだ！

「博士ー。ISの塗装が終わったぜー」

「あ、お疲れ様ー」

奥から作業着の姿で現れた橙色の髪の女は、オータム。何か、テロ組織の任務で失敗してこの島に流れ着いちゃったらしい。居場所がなくなつた以上、ここで私の助手として働いてくれている。

彼女には、3人目の男性操縦者である「あの子」の専用機の塗装を頼んでいた。

「にしても博士。本当にいいのか？あのISの武器、携行型マシンガンを除いて殆どブレードだぜ？」

「良いんだよ。あの子の戦闘スタイルはナイフ投げ。刃の扱いには慣れてるだろうさ」

他愛も無い会話をしていると、別の部屋から金髪の女が出てきた。名前はスコール。彼女も、オータムと同じくテロでの任務に失敗してここにいる。当然、今は私の助手だ。もしかして、頼んでいたことが終わったのかな？

「博士。違法研究施設の居場所を見つけました」

「やっぱり・・・」

私が密かに飛ばした人工衛星からの映像には、たまに違法施設が映っていることがある。くーちゃんも、その時に見つけ、急いで保護したので。

今回スコールをお願いしたのは、映っていた違法施設の居場所の捜索。映像から研究所の存在を明らかにしたのは良いものの、分厚い雲がかかっっていてよく見えなかったのだ。

「研究所の場所はイギリス。博士。どうなさいますか？」

「当然、私が行くよ。くーちゃん。お留守番をお願いね」

「かしこまりました」





## 12話 フランス貴公子とドイツ軍人。そして、新たな転校生

「いやー、寝坊するとはなあ」

俺は少し急いで教室へ向かっていた。こここのところ、勉強だの訓練だので忙しくなっていたから、寝る時間が遅くなってしまっていたのだ。でも、今日は朝食を少し軽めにして、さらに急いでいたおかげか早く着くことができた。

「おはよー」

すると、教室にいた奴ら全員が俺のほうを向く。どうした？俺、何かしたか？

戸惑っていると、本音がトコトコと歩いて説明してくれた。

「東風やん、おはよー」

「おはよう。で、この状況は一体何なんだ？」

「それはねー、2組の方に3人目の男性操縦者が転校してきたんだってー」

「へえー……ええっ!？」

そんな事聞いてねえぞ。凄いな、女子の情報収集能力。あれ？でもそれって、俺が注目されるのと関係あるのか？

「なんかね、その人は篠ノ之博士が保護者代理人なんだってー。東風やんは知らない?」

「いや、知らないが……」

まさか、幻想郷の人間とかがISを起動させたのか？だとしたら一体誰が……。

そんなことを考えていると、山田先生と織斑先生が教室に入ってきた。もうこんな時間だったのか。俺は急いで教科書をしまう。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます!」

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練ではあるがISを使用しての授業になるので、それぞれ気を引き締めるように。ISスーツ



「はい？」

「キヤアアアアアア！」

ぐあああ！耳を塞いでいてもキーンとくる！一夏も必死に堪えているが、デュノアの方は・・・顔が青くなってる。大丈夫かなあ？トラウマにならなきや良いんだけど・・・。

「あー、静かにしろ」

「静かにしてくださいー！まだボーデヴィツヒさんの紹介が終わってませんからー！」

やがて、段々と静かになっていった。さてもう一人の方は女子だが・・・かなりの異端だった。白に近い銀髪を腰近くまで降ろし、左目に眼帯をつけている。そして、何か俺たちを哀れむかのような赤い目と冷たい気配。

雰囲気からして、訓練された人間か？山を警備する天狗たちに雰囲気似ている。・・・まあ、あの人たちには足元も及ばないと思うがな。

「挨拶をしろ、ラウラ」

「はい。教官」

ピシツと敬礼をするボーデヴィツヒ。織斑先生が教官？なんか、一夏の家族は色々とワケありのようだな。

すると、織斑先生はまた面倒くさそうな顔をして彼女に注意をする。

「私はもう教官ではない。それに、ここではお前も一般生徒だ。織斑先生と呼べ」

「了解しました」

すると、かかとを合わせてたった一言。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「えーと・・・それだけですか？」

「以上だ」

うわあ・・・。コイツ、一夏以上に酷いわあ。雰囲気からして最悪だ。すると、急にこっちへやって来た。なんだ？

バシッ!!

突然の出来事だった。ボーデヴィツヒはいきなり、一夏の頬を叩いたのだ。それも平手で。

クラスの皆や俺は、ただポカンと見るごとしか出来なかった。

「い、いきなり何しやがる!」

「ふん。私は認めない。貴様があの人の弟など、認めるものか」

そう言っただけで去って行くボーデヴィツヒ。はあ・・・

「いきなり人の頬を叩くとか、常識がなっていないんじゃないか? おチビさん」

「・・・貴様、今何と言った?」

「テメエと一夏にどんな事があったか知らねえけどよ、折角盛り上がってたこの雰囲気はどうしてくれるんだよチビ」

「貴様はドイツ軍人を馬鹿にするのか!」

「はっ! 俺はあいにく田舎出身なんでね。ドイツ軍人がどれだけ偉いか分からねえや」

俺が彼女を鼻で笑ってやると、頭に凄い衝撃があ!?! うずくまりながら上を見上げると、呆れた表情の織斑先生が。

「ボーデヴィツヒを注意したい気持ちも分かるが、転校生を挑発してどうする。常識がどうか言っていたが、貴様も人のことを言えんぞ」

「す、スイマセン・・・」

皆が啞然とした状態のまま、SHRは終わった。

「えーっと、織斑君と東風谷くんだよな? 初めまして。僕は――」

「あー、それは更衣室とかで良いか? 今日は1時間目からISの実戦訓練だからさ」

「一夏、デユノア。早く向かうぞ。何か嫌な予感がする」

俺たちが廊下に出ると、他のクラスの目がキュピーン! と光る。遅

かったか！

「いた！1組の転校生よ！」

「黒髪や緑メツシユもいいけど、金髪もいいわね！」

「私たちの方は紳士的だけど、あつちは守ってあげたくなる系！」

紳士的？幻想郷で紳士的な人たちといったら「あの人たち」だが・・・そう考えているうちに女子達はジリジリと寄って来る。こ、怖い！

「一夏、先に行け・・・つてもう行きやがった！」

「ありがとう真！お前のことは忘れない！」

「え、死んじゃうの!？東風谷くん死んじゃうの!？」

「まずは東風谷くんからよ！全員突撃ー！」

「うおおおおお!!」

こいつらは罪袋どもか!？と、とにかく、ここはとつてききの秘策を使わなければ！

そう。それは、俺が某波紋戦士の漫画を読んで得た技・・・いや、元から持っていた技を強化したもの。

「逃げるんだよオオooooooooooooooっ!!」

「技ってそれ!？」

「つていうか、速っ！」

逃げればよかろうなのだあoooooooooooo!

俺はそんな事を思いつつ、更衣室へ向かった。

女子を振り切って、今いるところは男子更衣室。入ると、デユノアと一夏がいた。本当は、俺を置き去りにした一夏を殴りたいところだが、逃げるほうに体力を使ってしまったため、殴る気力が無い。

とりあえず着替えるでしょう。そう思いながら制服を脱ぎ始める  
と・・・

「わあっ!？」

「!？」

いきなり悲鳴を上げた。どうしたんだろう?もしかして・・・俺の

体の傷が気になったのか？こいつは父さんとの修行や、モンスターとの戦いで付いてしまった傷だが、知らない人が見たら驚くだろう。一夏も最初はそうだったし。

「あー、デュノア？」

「あ、別にシャルルで良いよ。さつき一夏にも言ったんだ」

「そうか。じゃあ改めて……。いきなり悲鳴を上げてどうしたんだ？」

「い、いや……」

「早くしないと遅刻するぜ？今朝俺がくらった出席簿アタックを見た  
だろ？」

「う、うん。そうだね……。じゃあ、むこう向いててくれるかな」

「え？まあ、シャルルがそう言うなら」

俺と一夏はむこうを向く。すると、一夏が俺の体をジロジロ見  
てきた。

そんなに傷が気になるのか？同じ更衣室で着替えてたから、結構見  
てるだろ。

「お前、周りから見たら誤解されそうだぞ？」

「え？いや、お前の身体の傷が凄くなって思ってただけで……」

「お前、ホモという言葉を学ぼうか」

「いやいや、どうみたって男子が話したりしているだけだろ。なんで  
ホモとかと言う話になるんだよ」

「……はあ」

ヤバイ。俺の胃がキリキリしてきたぞ。一度、本気で殴ってもいい  
よね？弾幕ごっこでボコボコにしてもいいよね？

ところで疑問に思ったことがある。今ここにいるのは、俺と一夏と  
シャルルの3人だ。じゃあ、転校してきた男子はどこにいる？

そんな事を考えながら着替えていると、シャルルも着替え終わった  
ようだ。よし！グラウンドに向かうか。

「着替え終わったよ」

「よし。それじゃあ、行くか」

「そうだな……。って、あともう少しで始まるじゃねえか！」

「マジかよ!?!よし、もう一度走るぞ！一夏、シャルル！」

「お、おう！行くぞシャルル！」

「うん！」

「(・・・ん？この匂いは・・・)」

その時に、俺は違和感を感じた。それは・・・シャルルの髪から、女子のような匂いを感じたからだ。一瞬だけ感じたシャンプーのような香水のような、不思議な匂い。

・・・今思うと、シャルルはどこか怪しいな。何者なんだ？

### 13話 ISの実習。本音との距離は縮まるか？

今日はISの実戦訓練。織斑先生に「遅い！」と言われながらも、すばやく列に並ぶ。うーん……。やっぱり、女子に囲まれてると変な緊張感があるなあ。

・・・やはり例の男子は見当たらない。まさか、女子の歓喜の悲鳴を聞いてぶっ倒れたんじゃないよな？

「随分ごゆつくりでしたわね」

「仕方ないだろ。俺たち男子の場合は、首まですっぽり覆うタイプだからな。・・・ところで、真はなんで辺りをきよろきよろしてるんだ？」

「いや、2組の男子が気になるんだ。一体どこに行つたのかなつて思つたんだ」

「ああ、あの転校生の事ね」

後ろを振り返ると、2組の代表候補生である鈴がいた(無人機戦後、下の名前がいいと言つてくれた)。そうだ、彼女なら詳しいことを知ってるかもしれない。

「その転校生、なんか急にこっちに来ることが決まったらしくて、専用機の手続きとかをやつてるらしいわ」

「へえ。それはまた面倒なこつたな」

「全くだ。遅れておきながら堂々と無駄話をしている生徒を注意する事も、面倒な事だ」

「・・・え？」

振り返つた瞬間に見えたのは黒い板。出席簿アタックだと分かつたところには、俺の頭はズキズキと痛んでいた。後ろでは鈴がうずくまっている。俺はこれで二回目……。もう最悪だ。

「では本日より、格闘及び射撃を含む実戦訓練を始める」

「鈴に真……。大丈夫か？」

「母さんに平手打ちされた時と同じくらいに痛い・・・」

「あんたの母さんはどんな人なのよ・・・」

ロボット好きな普通の巫女です。俺がまだやんちゃだった頃に受



けたあの平手打ち、痛かったなあ。身も心も……。

「では、今日は戦闘を実演してもらおう。それじゃあ……凰！オルコツト！」

「わ、わたくしまで!？」

「どんまい、セシリア。決まったからには仕方が無いぜ。これは完全なとぼつちりだな。」

「織斑と東風谷は、まだ経験不足だからな。二人とも早く前へ出ろ」「うっ。そう言われてしまいますと……」

「セシリアはまだ良いわよ。アタシなんか、出席簿くらった後よ?」「そうひがむな、凰。あいつにいい所を見せられるかもしれんぞ?」

「よっしゃ!やっつてやるわよ!」

「変わり身が早すぎませんこと!？」

「うわあ。織斑先生、一夏をダシにしたな?俺のジト目を気にせずに織斑先生は……あれ?そういえば、山田先生はどこだ?」

「それで、誰が相手なのかしら?もしかしてセシリア?」

「あら、それでしたら私のB I Tで落としてさしあげますわよ」

「そう慌てるな。二人の相手は……」

「わああ~~~~!退いてください~~~~!!」

「なんか空気を裂くような音が聞こえる。見上げると、ラファールを纏った山田先生が……つて、凄い速さでこつちに向かってきてないか!?!このままじゃヤバイ!」

「一夏! I Sを展開だ!」

「おう!」

「一夏が白式を、俺がグラビオスを展開する。すると、タイミングが良かったのか、前に居る一夏が山田先生を受け止める。だけど、それだけじゃ勢いは殺せないの、俺も受け止める体勢に入った。」

「そして、腕に衝撃が入ったと同時に足に力を込める。うおおお……!意外と勢いが強い……あ。」

「ちよっ!真!」

「え……?」

「かかるとに落ちていた小石につまずいて、俺は後ろへ倒れる。さらに」



拡張領域というのは、いわば武器を入れるポケットのようなもの。今の俺の拡張領域には、ファイアテンペストとカブレライトキャノンが入っている。グラビド・ヘッドは元から肩に装着されているから、まだ空きがあるんだよな。

・・・おつと、そうこうしている内に戦いの終わりが近づいてきたようだ。セシリアのほうに弾丸が飛び、彼女がそれを避ける。しかしその先には鈴がいるわけで、見事に二人が衝突。そこへ、先生が戦闘終了の声をかける。

「よし。そこまで！」

山田先生の戦い方は凄いな……。相手を誘導させるような正確な射撃、状況に応じての武器の切り替え。これは立派な戦術だ。何というか、地底のモンスター研究者、ナナシさんと似ている。雰囲気もそっくりだしな。

あと、今回の戦闘は、鈴とセシリアの連携が上手くいつていなかったのも関係してるな。

「アンタねえ、なに面白いように回避先読まれてるのよ！」

「り、鈴さんこそ！無駄にバカスカ撃つのがいけないのですわ！」

見苦しい……。見苦しいぜ、二人とも。お前らそれでも代表候補生か？

「さすが、射撃部門でトップだったことはあるな」

「い、いえ！それでも織斑先生には敵いませんよ！それに私、結局代表候補生で留まってきましたし……」

「そう謙虚になるな。さて、これで教員の實力も分かっただろう？これからは敬意を持って接するように」

ああ、そういえば山田先生は沢山のニックネームを持つてるんだっけ？それを知っていて今回の戦闘をやらせたのか？

「では、これから専用機持ちごとにグループを作って実習を行なう。8人グループに分かれる」

すると俺や一夏、デユノアのほうに女子が群がる。特に一夏とデユノアは凄い。俺にも来てるには来てるが、それでも10人程度。半分は1組、残りは2組だ。

「東風谷くん、ぜひともご指導お願いします！」

「この時だけ、お兄ちゃんって呼んでもいい？」

「あ、私もお兄ちゃんって呼ばせて〜！」

「何で俺がお兄ちゃんなんだよ!？」

「二、雰囲気がお兄ちゃんっぽいから!」「」

「綺麗にハモるな!」

俺は一人っ子だっつうの!

「馬鹿どもが……。均等に分かれると言っただろう!次騒ごうものなら、グラウンドを百周させるぞ!」

「二は、はいっ!」

軍隊のようにバババツ!と移動する女子たち。織斑先生の声は迫力があるからなあ。

では、俺も出来る限り教えていきますかね。そう思いながら訓練機の格納庫へ向かった。

「というわけで、これから歩き方とか教えるんだが……。真面目にやれるな?」

「は〜い!」

「元気がいい事で。じゃあ始めに、鷹月さんかな?装着と起動、出来れば数歩歩いてみてくれ」

「分かったわ」

クラスの中では結構しつかり者の鷹月さんが、打鉄に乗り込む。そして慎重に歩行する。

「転びそうになってもうまい具合に支えるから、もう少し自信を持って歩きな?」

「う、うん……」

「そうそう。いい感じだな。よし、次の人に移ろう。でも気をつけることが」

「降りたわ」

あちゃー。鷹月さん、最後の最後でやらかしちやったな。訓練機は

盗まれないように、粒子変換が出来ないように設定されている。立つたまま降りてしまうと、当然立ったままの状態になる。すると、次に乗る人がコクピットに届かなくて乗れなくなるのだ。

「うゝ、届かないよゝ」

「ごめんね、本音」

「東風やんゝ」

「うゝん、どうすればいいんだ?」

すると、他の方の指導をしていた山田先生がこっちの事態に気づいてくれた。よし、どうすればいいか聞いてみよう。

「あのー、立ったままの状態ってどうすれば良いツスか?」

「これは初心者によくある失敗ですね。それじゃあ東風谷くん、グラビオスを展開して布仏さんを抱っこしてください」

「え?」

「「ええーっ!?!」」

「やったゝ。ラツキゝ」

だ、抱っこ!?!さすがに女子を雑に抱きかかえるわけにはいかないよな。ということとは・・・お姫様抱っこかよ!俺がチラリと本音を見ると、彼女は少し頬を赤らめながら期待した目でこっちを見ている。

ぐ、可愛い・・・。

「てへへゝ。お願いしますゝ」

「わ、分かったよ。・・・よつと」

その時俺は感じてしまった。ISスーツというのは、ISを纏いやすくする為にスーツの下に下着類は着けない。

すなわち・・・彼女の豊満な胸を感じてしまったわけで・・・

「東風やん!?!鼻血がいつぱい出てるよ!?!」

「大丈夫だ、問題ない」

「全然大丈夫じゃないと思うよゝ!?!」

「ほら、ISに乗れたから次は歩行だぜ」

「う、うん・・・」

全く何を言っているんだか。鼻血を出している訳無いじゃないか。確かに、鼻の辺りが生暖かいような感じがするけど。しかし何という

か・・・彼女に触れることが出来て、嬉しかった。本当に何なんだ？この気持ち。

あれ？そういえば一夏たちはどうなんだろう？ちよつと見てみよう。

「あ、ごめくん！立ったまま降りちやつた〜！ごめんね篠ノ之さん」

「い、いや別に構わないが・・・」

「あーやっちゃつたな。じゃあ・・・よいしょつと」

「なっ!?何をするんだ!?!」

「いや、こうしないとISに乗れないだろう?」

「それはそうだが、これは・・・いや、むしろお姫様抱っこしてもらえて役得か?」

「ん?何か言つたか?」

「な、何でもない!」

おく。箒が一步リード。ふむふむ、変な強がりも言わずにされるがままになる箒。これはポイント高いんじゃないか?最近、鈴と共に「好きな人を振り向かせ隊」というものを作つたらしいし、箒は笑っていることが多くなつた。

まあこんな感じで、無事に訓練を終えることが出来た。

「そういえば箒。アンタ、一夏と何を話していたの?」

「鈴か。なに、屋上でお弁当を食べるという約束をだな・・・」

「なっ!?ずるいわよ、ただでさえ同じクラス・同じ部屋なのに!」

「そ、そう言われても困るぞ」

「・・・勝負よ」

「え?」

「私も、一夏のためにお弁当を作つたの。どっちが美味いか勝負しましょう!」

「ほう、望むところだ!」

どうやら、一夏の方は一悶着ありそうだな。

## 14話 仲間との出会い

ISの実習を終えて、俺は食堂で飯を食おうと思っていた。すると一夏が「皆で飯でも食わないか？」って誘ってきやがった。一夏よ、前には乙女の勝負の審判という役目があるんだぜ？なんで俺まで誘うんだよ……。

まあ、どんな勝負か見てみたい気持ちもあつたし、断ることが出来なかつた。仕方なく、俺は購買でパンを買って屋上へと向かつた。そこにはすでに箒、鈴、セシリア、シャルル、一夏がいた。全員が輪になるように座って、それぞれの弁当を広げる。

俺がジャムパンの封を開けようとする、隣からゴゴゴゴという音が聞こえてきた。

「私の弁当は自信作だぞ、鈴。お前はタツパーだけが良いのか？」  
「ふっふっふ。確かに並大抵の料理だったら、あんたの方が有利かもね。でも、アタシはこれ一つで勝つ自信があるわ！」

「え、いや、二人とも……普通に仲良く……」

「一夏は黙ってて(ろ)！」

「あ、ハイ」

「東風谷くん。これって……」

「恋する乙女の戦いってやつだぜ、シャルル」

弁当対決で燃えているからか、二人から般若と竜のオーラが見える。あまりの迫力に、セシリアやシャルルはドン引きだ。

俺はオロオロしている一夏を眺めながら、もごもごとパンを頬張る。

「はい一夏、アンタの分」

「おお！酢豚だ！」

「今朝、早起きして作ったのよ。前に食べたいつて言つてたでしょ？」

「い、一夏。私のも見てくれ」

「どれどれ……おお！これは凄いな！」

「ふっふっふ。食べ過ぎを控える為にも揚げ物は量を少なく、野菜類を少々多めにしたぞ」

「それじゃあ箸の弁当から・・・」

「はい、一夏」

「え?」

「あーん」

ほう、鈴による「あーん」攻撃か。母さんもよく父さんにやってたなく。今もやってるんだろうなく。・・・うつ、ジャムパンが甘ったるく感じる。

父さんやその知り合いの人たちは、「幻想郷の英雄」と呼ばれている。俺もその強さは知ってるし、何より勝ったためしがない。でも疑問に思うことがある。そんなに強いのに、どうして母さんにはデレデレなんだ!幻想郷にいた頃は、よく渋いお茶が甘くなっていた。そう感じるほどに仲が良いんだ。

「なっ!?!り、鈴!」

「あら、早い者勝ちよ箸?はい、一夏」

「え・・・いや、皆が見てるし」

「い・・・か・ら!（むしろ見せ付けたいのよ、バーカ）」

「わ、分かったから押し付けるな!モグモグ・・・」

鈴は期待に満ちた目で、一夏の返事を待つ。さあ、果たして結果は!?

「・・・うん。美味しい。ほのかな酸味が、疲れを取ってくれそうだ」

「そう。それにしても、随分普通な感想ね?」

「いや、いきなり口に押し込まれても、なんて言ったら良いか分かんねえって」

「(ぐっ!ちよつと強引過ぎたかしら・・・)」

「さあ一夏!次は私だ!自信作の唐揚げだ!さあ、さあ!」

「だから押し付けんなって!」

お預けをくらって唸っていた箸が、ここぞとばかりに「私の料理を食べてアピール」をする。いやあモテるって良いですねえ。

恋する乙女の戦いを眺めていると、屋上のドアが開いた。

「おや、先客がいました・・・か」

入ってきたのは男。それも、このIS学園の制服を着ている。皆は



いきなり聞こえた男子の声に振り返る。

だが俺はこの声を知っている。俺はソイツに声をかける。

「転校生が誰かと思ったが・・・お前とは思わなかったぜ！相棒！」

「やはり・・・。お久しぶりです！真さん！」

前髪で右目が隠れていて、少し細い体型。それでありながらどこか力を感じさせるこの男は・・・俺の幼馴染だ。

「紹介するぜ。コイツは俺の幼馴染の・・・」

「十六夜ミツルと申します。どうぞよろしく」

全員が、相棒の存在に驚いている。しかし一番驚いているのは鈴の方だった。俺だってビツクリしたよ。もう二度と会えないかと思っただけだからな。

「まさか、あんた達が知り合いだったなんてね」

「いやはや、全くです」

「そういえば、十六夜って・・・」

「ミツルで構いませんよ。私はそのほうが慣れてますので」

「じゃあミツル。ミツルは、何がきっかけで動かせるようになったんだ？」

一夏の質問に、全員が「そういえば」という視線で相棒を見る。俺も含めた6人の視線があるにもかかわらず、相棒は微笑んだままでその質問に答える。

「一夏さんや真さんの件以来、束さんも、男性もISを動かせるようにする研究を開始したんです。それでたまたま目をつけられたのが私です・・・」

「なるほどな。いや、また相棒と居られるなんて嬉しいぜ！」

「真さん、先ほどから相棒と呼んでいます。何故相棒なのですか？」

「あ、それ僕も気になる」

セシリアの質問に、シャルルも頷く。そういえば言っていなかったな。俺と相棒の関係を。

「俺と相棒は、父さん達の宴会に連れて行かれたときに知り合ったん

だ。最初はギクシヤクした感じだったんだが、小さい頃に二人でいじめっ子と喧嘩して以来、仲が良くなつたのさ」

「それで真さんは、私のことを相棒と呼ぶようになったんです」

この話は、半分が嘘だ。俺と相棒が初めて共闘したのは、寺子屋からの帰りにモンスターに襲われた時だ。しかも、ギクシヤクどころか顔を合わせるたびに喧嘩をするほど仲が悪かった。

喧嘩の理由はまあ、そのお……。俺の父さんと相棒の父さん、どっちが強いかというくだらない物だったんだが。

「喧嘩ゆえに芽生えた友情、でしようか」

「良いなあ、そういう友達が居て。僕はほら……」

「ああ、デュノアって確かラファールを開発してる会社だっけ？」

「そう。その事もあって、みんな遠慮した感じで話してくるんだ」

「だったら、ここで新しい友達を作れば良いじゃないですか」

「十六夜さんの言うとおりですわ。こうやって皆でお弁当を食べるのも何かの縁。よろしくお願い致しますわ」

全員がシャルルに握手を求める。友情の証って奴だ。

「みんな……ありがとう！」

シャルルは涙を浮かべている。良いねえ、友情ってやつは……。すると、昼休み終了のチャイムが鳴った。教室へ戻らないとな。

「じゃあ戻るか？」

「ぐっ……。食いすぎて腹が……」

「早歩きで行けば問題ないと思うぞ」

「急ぐぜ、相棒！」

「はい！」

「セシリア、僕達も」

「お先に失礼！」

全員が立ち上がって教室へ目指す。箒と鈴は一夏を介抱しながら、な？

ちなみに二人の弁当対決は引き分けだそうだ。一夏の判断に、二人は渋々頷いていた。これは、二人の戦いは続きそうだな。

だけど俺や相棒、一夏は知らなかったんだ。まさかアイツが……。

## 15話 訓練にて起きた乱入

相棒との再会から数日後。俺や一夏はアリーナで訓練をしていた。今日は土曜日で、午前中は普通に授業をして、午後からは完全な自由時間となっている。

今一夏は、シャルルから射撃の特徴を教えてもらっている。

「ええっと、一夏がオルコットさんや鳳さんに勝てないのは、射撃の特徴を把握しきれていないからなんだと思うな」

「そ、そうなのか？ 真との模擬戦のときは、目線を見たりして避けたりしてたんだが・・・」

「一夏。俺のはあくまで単発で発射してるから避ける事ができるんだ。セシリアはスナイパーライフルだからともかく、鈴の衝撃砲は連射も可能な武器だから、目線を探って避けてるうちに2発目をくらってしまうぜ?」

一夏のはブレードしかないからなあ・・・。瞬時加速で詰め寄る事は可能だが、一直線になってしまいうから避けられやすい。一夏は、ほとんど瞬時加速に頼って早く終わらせようとしてしまうのが欠点だな。

「せめて射撃武器が搭載できれば良いんだが、白式って拡張領域が空いてないんだっけ?」

「そうなんだよ。だから、追加武器・・・ええっと、後付武装イコライザがないって言われた」

「多分、それは唯一ワンオフ・アビリティ仕様の方に使ってるからじゃないかな?」

シャルルが、また何か重要な事を言った。確か教科書に書いてあった気がする。確か・・・

「超必殺技! ってやつか?」

「う、うーん・・・。正確には、ISと操縦者との相性が最高になった時に発生する能力なだけだね。でも、白式の零落白夜が唯一仕様なら、必殺技ってイメージがピンと来るかも」

「なるほど・・・。でも、確かその唯一仕様って第二形態になってから発動するんだろ? 俺の機体って・・・」

お、ちゃんと一夏も教科書の内容を覚えてた。そう。普通は第二形態からなんだが、どうやら一夏の白式は最初から使えているようだ。だとすると、この白式という存在はイレギュラーということになる。さらに、シャルルによると、第二形態になっても発動しない事がほとんどらしい。それを補うかのように、各国特有の武器があるわけだ。セシリアのB I T兵器や、鈴の衝撃砲とかもそれなんだとか。うーむ……。ますます白式はイレギュラーっぽくなってるな。

『な、何故シャルルだと納得しているのだ……』

『やっぱり性別？ 男同士だからこそ分かり合える何かがあるの？』

『私の説明のどこに不満が……』

あ、一夏の嫁二人とセシリアが項垂れている。そういえば3人は、一夏によく説明をしていたんだっけ。でもよお……。箒は擬音が多いし、鈴は大雑把すぎる。セシリアにいたっては細かすぎるんだよな。そんなんじや、理解できないと思うんだ。

いつか言つてやらなきゃいけないかねえ……。そんなことを考えていると、向こうがやけに騒がしいのに気がついた。

『ウソでしょ？ あれって……』

『ドイツの第三世代型だ』

『トライアル段階にあるはずだよ？』

見えたのは、巨大なレールカノンが特徴の黒い機体が居た。乗っているのは……ボーデヴィツヒだ。

「織斑一夏。私と戦え」

「嫌だよ。戦う理由が無い」

「(よく言つたぜ、一夏)」

「私にはある。貴様がいなければ、教官が大会二連覇を成し遂げる事ができたというのに、貴様のせいだ……！ だから私は、貴様の存在を認めない」

大会二連覇？ そういえば、織斑先生は第二回 I S 世界大会……確か『モンド・グロツソ』の決勝戦を棄権したって束さんが言っていた。一夏が何者かに誘拐されて、それを助けたのが織斑先生なんだとか。コイツが一夏を恨んでいるのは、そのせいか。

だが……非つ常にくだらねえ。そもそも、コイツが言っている事は、織斑先生の家族愛を否定する事と同じだ。言っている事が矛盾している。

「……確かに、あの時俺に力があれば千冬姉が大会を棄権する事は無かった。だけど、それが俺とお前が戦う理由にはならない。ここには他の人たちもいるんだ。戦うなんてご免だ」

「そうか……ならば、戦わざるを得ないようにしてやる!」

そう言つて、ボーデヴィツヒはレールカノンを……馬鹿かアイツ!?! よりによつて訓練生に向けやがった!

俺はすぐに瞬時加速を発動させて、訓練生を庇う。

『グラビド・ヘッド』!」

「え!?!」

刹那、機体に衝撃が走る。本当に撃ちやがったよ、コイツは……。ヘッドを展開してなかったら危なかったぜ。

すると、ボーデヴィツヒが俺を睨む。

「くっ! 東風谷! 邪魔をするな!」

「テメエ、頭脳が間抜けか? よりによつて、無関係の訓練生を撃ちやがって!」

「これは私と織斑一夏の問題だ。部外者は関係ない」

……やべえ。そろそろ俺も我慢の限界だ。コイツは回りのことも考えない、とんだクソガキだ。

俺がぶち切れそうになったと思いきや、ボーデヴィツヒのレールカノンが、何者かによつて撃たれた。そこには、61口径アサルトライフル……だっけ? それを手にしているシャルルの姿があった。

「ドイツの人間は、沸点が低いんだね。ビールだけじゃなくて頭もホットなのかな?」

「東風谷といい貴様といい、そんな旧型の機体で私の前に立ちふさがるとはな」

「未だに量産化の目処が立っていない新型よりはマシじゃない?」

何というか、この光景を見たことがある。どこだっけなあ? ……ああ、そうだ。小さい頃の、相棒と俺が喧嘩を始めるときと似てるん

だった。

『その生徒、何をしている！ 学年と所属クラス、名前を言え！』  
げっ、担当の教師が放送をかけて来やがった。すると、ボーデ  
ヴィツヒは興が冷めたかのように、すぐさま立ち去っていった。やれ  
やれ、本当に面倒くさいぜ……。

俺が自室に戻ると、ルームメイトの本音が迎えてくれた。ああ、こ  
の笑顔は本当に癒されるぜ……。

「訓練はどうだった？」

「最初は良かったんだけど、ボーデヴィツヒが乱入してきてなあ……  
危うく大喧嘩になるところだった」

「それはご愁傷様です。よしよし」

本音が、背伸びして俺の頭を撫でてきた。……結構恥ずかしいけ  
ど、なんか安心する。この子の動作一つ一つが、癒し効果を与えてる  
んじゃないだろうか？

苦笑いしながらお礼を言って、俺はベッドに横になる。そして枕元  
に置いてあった本を手取る。本の名前は、「モンスター図鑑(仮)」。  
父さんと同じく幻想郷の英雄と呼ばれている、ナナシさんが書いた物  
だ。今まで出会ってきたモンスターの特徴や絵が書いてある。何で  
(仮)なんて付いているかと言うと、ナナシさん曰く、

『生物は、無限の可能性を秘めている。ちよこつと調べた程度で満足  
しているようじゃ、完全に大自然をなめているよ』

……とのことだ。俺は、父さんたちが戦ってきた相手、モンスター  
に非常に興味がある。だから、この本を持ってきたわけだ。まあ他人  
が見ても、何かのゲームの本だと思うかもしれないから、見られても  
大丈夫だろう。

「……ん？」

ふと、ある生き物のページで手が止まった。モンスターの名前は  
「アルセルタス」。俺と相棒で共闘する機会を与えた、結構デカい虫  
だ。

そいつの特徴は・・・緑色の甲殻に、橙色の鎌のような爪。これの特徴は本当に良く覚えている。何故なら、この間アリーナに突っ込んできた無人機の特徴が、それだったのだから。

「東風やん？ どうしたの、そんなに難しい顔をして？」

「あ、いや。何でもないぜ。腹減ったな。アハハハ・・・」

「そういうえば、もう5時くらいになるもんね。今日は何を食べようかな？」

何てこった！ 特徴といい動きといい、あの無人機はアルセルタスと酷似してるじゃねえか。何で気付かなかったんだ、俺は！

だが、すぐに疑問が浮かび上がる。ISコアを作れるのは、束さんだけだという。無人機戦後、束さんが慌てて俺に電話してきたから、束さんが作った可能性は低い。じゃあ、一体誰が？ そもそもアレは、本当にISコアで動いていたのか？

・・・駄目だ。あまりにも情報が少な過ぎる。俺が溜め息をついていると、ふとドアがノックされた。

「真！ いるか!？」

「はいはい、今出ますよ。一夏、そんなに慌ててどうした？」

「実は、かなりヤバイ問題が起きたんだ。すぐに俺の部屋に来てくれ！」

「お、おう・・・」

あまりの勢いに、俺は一夏にズルズルと引きずられて行った。本音がハンカチを振っていたのが、俺への哀愁感を漂わせてしまった。

そして、そのまま部屋の中に入る。どうやら、一夏と筈は部屋をチェンジしたらしい。主に織斑先生によって。だから今はシャルルと同室らしいんだが・・・

「嘘だろオイ・・・」

目の前には、シャルルが居た。しかし、おかしい点がある。それは、女性特有のふくらみを胸部に持っていること。

すなわち・・・シャルルは女だったってことだ。

## 16話 デュノア社の危機

「連絡を受けて来たのですが、まさかシャルルさんが・・・」

俺は一夏の部屋に入ったあと、シャルルが女だった事を知った。そこで、少しでも理解者を増やそうと、相棒にも連絡をしてここに来てもらった。

今この部屋には、一夏、シャルル、俺、相棒がいる。結構広い部屋だから、全員が正座して話し合うことにした。

「それで、男装してた理由は何ですか？ シャルロット・デュノアさん？」

シャルロット・デュノア。それがシャルルの本当の名前。相棒はあえて、本名のほうを強調した。今の相棒の目は、笑っているように見えて疑っている目だ。それもそうだろう。彼女はスパイ行為に近い物を行なってるのだから。狙いは恐らく、俺たち男性操縦者のデータだろう。

「・・・会社の人に言われたんだ。男性操縦者の一夏、真のデータを採取しろって」

「ま、そんなことだろうとは思ったぜ」

「なあ、その会社の人つてもしかして・・・」

「一夏の予想は当たってるかもね。・・・僕のお父さんだよ」「っ！」

「じ、実の娘にそんな事させるのかよ！」

「違うよ、真。僕は愛人の子・・・妾の子なんだ」「え？」

話を聞くとところによると、シャルロットの父親は一夫二妻だったそう。どうやら二人の女性が一人の男に恋して、男は二人を受け入れた。それが、デュノア社長だ。

残念な事に、本妻の方は不妊症を患っていて、それでも子供が欲しかったそう。しばらくしてもう一人の妻が妊娠した。その子供がシャルロットだという。

もしマスコミがこれを嗅ぎ付けて報道すれば、デュノア社は危ぶま



れる。そう感じたシャルロットの母親は、二人に相談した上で別の場所へと離れ、シャルロットを育てたそう。だが、その母親はガンを患い、しばらくして静かに息を引き取った。その時に父親と本妻の二人も看取りに来たのは今でも鮮明に覚えていると、シャルロットは少し嬉しそうな顔で話していた。

しかし、彼女には更なる試練が訪れた。デュノア社はラファールの開発によってかなり有名な企業になった。しかし一方で、「第三世代型を未だに作れない時代遅れ」という汚名も付けられているという。ようするに・・・企業経営が駄目になってきたってことだ。そこでデュノア社社長はシャルロットに、男性操縦者のデータ取りを命令した。

「とまあ、こんな感じかな。ごめんね。今まで騙しちやつて・・・」

「うーん・・・。相棒、一夏。この話、どう思う？」

「おかしい点がありますね」

「ミツルの言うとおりで。変な部分があるな」

「え？」

相棒も一夏も、今のシャルロットの話におかしさを感じたようだ。

彼女は分からない感じだから、話してあげましようかねえ？

「まず、お前の母親が亡くなったあと、義母のところに行っただら？」

「うん。『本当に母親そっくりだわ〜！』って、いきなり抱きしめてきた・・・」

「そこだよ。父親も義母さんも、抱きしめるほどシャルロットのことを大切にしている。なのに・・・一夏、続きを言いな」

「お、俺!? えっとな、そんなに大切にしているのに、どうしてスパイ行為をさせるのかってことだよ」

「そうですね。スパイをやったら重罪になることぐらい、両親は分かっているはず。それなのに何故・・・」

「・・・嫌な予感がするぜ」

何つーか、シャルロットの家族にとんでもない危機が迫っている気がする。俺の勘がそう言っている。嫌な予感だけ当たるのが取り柄

なんだよな。嬉しくないけど。

すると、シャルロットの机にあつた携帯電話が鳴った。シャルロットの表情から察するに、父親からなんだろうな。俺たちは、電話に出ても良いという意味で頷く。シャルロットが電話に出た。

「・・・もしもし?」

「(シャルル、出来れば俺たちにも聞こえるようにしてくれ)」

一夏が、小声でシャルロットに合図する。彼女はコクンと頷くと、向こうの声も聞こえるように設定した。

《シャルロット。どうだね、調子は?》

「・・・」

《シャルロット?》

「・・・男装していたことがバレました》

《なにつ!?!》

「今この部屋には、織斑一夏と東風谷真、新しい男性操縦者の十六夜ミツルがいます」

《そうか・・・》

「(シャルロットさん。今回の理由を聞くようにしてください。それも、真実のほうを)」

相棒が小声で伝える。再びシャルロットは頷いて、その理由を尋ねた。

「お父さん。どうしても聞きたいことがあるの」

《・・・なんだ?》

「どうして、僕を男装させてここに編入させたの?」

《決まっているだろう。我が社の営業成績は日々低下している。それを取り越える為にも、男性が乗ることの出来るISの開発のために――

――

「そういう事じゃないでしょ!!」

《っ!》

「僕は覚えてるんだよ? お母さんが亡くなったときに、お義母かあさんと一緒に静かに泣いていたのを。お父さんは・・・僕のことを愛しているの?」

しばらくの間、電話からは声は聞こえなかった。ただずつと呼吸の音が聞こえるだけだ。

《……愛していないわけが無いだろう》

「じゃあどうして!？」

《我が社は今、お前にとって危険な状態なのだ。男装がばれてしまったなら仕方がない。シャルロット。すぐにでも学園長に頼んで――

――》

そのとたん、声が聞こえなくなった。シャルロットは通話を切っていない。社長さんは何かを伝えようとしていた。それなのに切れ たってことは、第三者によって切られたことになる。

「お父さん？ お父さん!!」

「真、これって……」

「どうやら、俺たちでは手出しできないところまでヤバイようだな」

本当のことを聞きだせずに呆然とするシャルロット。俺たちも悔しくて、爪が食い込むくらいまで拳を握り締めていた。

だが、悔しがってばかりでは前に進めない。相棒はシャルロットを慰める。

「シャルロットさん。とりあえず、織斑先生に相談しましょう。もう私達だけでは手に負えません!」

「そんな! そんなことをしたら父さんにまで迷惑をかけちゃう……」

「その心配は無いと思うぜ、シャルル」

一夏は腕を組んで、目を閉じた状態で口を開いた。俺と相棒とシャルロット、全員の視線が一夏に集まる。

「社長は電話で、『我が社はお前にとって危険な状態』と言っていた。これは俺の勝手な予想だけど、もしかしたら社長は、何か脅迫をかけられてると思うんだ」

「何でそう思うんだ?」

「デュノア社は、まだ第三世代のISの開発が出来てないって言った だろ? しかも経営困難になっている。もしデュノア社の所有している機体とかを狙ってる奴らがいたら、それにつけ込んで……」

確かに、デュノア社はIS学園ほどではないけど、実験用の機体と

かがあるだろう。それを欲しいと思ってる奴等は、開発資金とかを引き換えに交渉するかもしれない。

交渉内容は察する事ができた。娘にスパイ行為をさせずに過ごせば、最悪、家族は路頭に迷う事になる。もしスパイを成功させれば：デユノア社は安泰だ。

きっと社長は、悩んだ末にこういう決断をしてしまったんだろうな。

「ど、どうしよう。もし父さんを利用して人たちが今のを知らら……父さんが殺されちゃう！」

「よし！こうなったら千冬姉に相談しよう。この学園は特記事項の二十一によって、3年間は安心だ」

IS学園には、五十五個もの特記事項がある。その中に『ありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は許可しない』というのがある。それが特記事項第二十一項だ。

簡単に言えば、国家……今の場合フランスから「シャルロットを返せ！」って言われても、「シャルロットが帰りがつてないので無理です」と言えるものだ。

だが、これには『在学中のみ』という条件付だ。俺は一夏に問いかける。

「だが、一夏。たったの三年だ。シャルロットが卒業したら、第三者の手がすぐに迫るぞ」

「その第三者が二度と手を出せないようにするのさ。『デユノア社は無理矢理スパイ行為をさせられた』って感じで。IS委員会なんかは、血眼でその第三者を特定させようとするだろう」

「……中々考えますね、一夏さん」

「いや、これでも結構慌ててる。成功するかどうかもわからないし……」

いや、中々良い考えだと思う。シャルロットは国家代表候補生であろうとも、国を代表している。そんな大切な存在に犯罪を起こさせようとしたんだから、二度と日の出は拝めなくなるかもな。

さて、あとはシャルロットの同意が必要だ。彼女の同意があれば3年間は何とかなる。その間に、デユノア社には無実を証明してもらわないとな。

「さて、どうする？ このまま無理矢理下手な演技をやり続けるか、救えるかもしれないという可能性に賭けて本当の自分として過ごすか」  
「僕は……」

俯いたまま迷ってる感じのシャルロット。

「……僕が正体を明かしても、父さんはきつと裁かれるよ。だったら——」  
「そうやって、自分を偽り続けるのかよ!？」

「一夏!？」

「一夏さん!？」

諦めたような発現に、一夏は立ち上がって叫んだ。俺たちは驚きのあまり声が出ない。

「もう……やめようぜ。無理をしようとするお前は、もう見てられねえよ」

「い、一夏……」

「頼ってくれよ、俺たちを、みんなを。そんなに信じられないのか?」  
「う……うわああああああん!」

シャルロットは泣き崩れた。そして大きく叫ぶ。

「僕は、もう騙し続けるのは嫌だ! お願い! お父さんとお義母さんを助けて!」

「よく言いましたね、シャルロットさん!」

「これはお前だけ抱え込むには、あまりにも大き過ぎる問題だ。先生達にも協力を頼もう!」

「私たちも、ご協力いたしますわ」

いきなり聞こえた、別の声。それも女性。俺たちは思わず振り返るが、一夏とシャルロットはいきなりの声に、俺と相棒は聞いた事のある声に驚いて振り返った。

そのひとは金髪で、この世界で見たら奇妙と思わせるような服を着ていた。そして……胡散くさそうな笑みを浮かべている。

俺と相棒は思わず、その名を叫んだ。  
「ゆ、紫さん!?!」

## 17話 動き出す者

くフランス、デユノア社く

デユノア社は、第二世代型IS「ラファール・リヴァイブ」の開発・量産化に成功した会社である。世界各国に訓練機として配備され、現在でも日本産の「打鉄」と共に並ぶ有名機である。

そんなISの開発に成功したデユノア社の社長は今、ある男によって痛めつけられていた。

「ガッ！ ぐうっ！」

「言ったはずだぜえ？ 『余計な事をしたらタダじゃおかない』ってよお。テメエの耳は飾りか？ ああ!？」

青い髪をした男が、社長の腹に蹴りを入れる。「イグニツション・プラン」からも除名され、政府からの援助も大幅にカットされた時に現れたこの男。髪の色は変わっているものの、「サメジマ」という名前から日本人のように感じられた。この男の提案は、社長の胃をさらに痛くするものだった。

「言ったはずだよな？ 『娘をIS学園に潜入させて男性操縦者のデータを入手させろ』ってな」

「今でも覚えているぞ。我が社が無くなつてシャルロット達と路頭に迷うか、娘に危ない橋を渡らせて成功するかという選択肢を与えた事をな！」

「その結果、お前さんは娘に犯罪を起こさせた最低な野郎に成り下がったんだなあ？」

サメジマは、ニヤリと嘲笑った。彼の言っている事が事実なだけに何も言い返せないデユノア社社長・・・フィリップ・デユノア。

思えばあの時はどうかしていた。そう簡単に人を騙せるはずが無い。シャルロットは今まで女の子として育ててきたのだ。それなのにいきなり「男子として過ごせ」と言って送り出してしまった。それに気付いていたはずだ。スパイは重罪である。娘は裁かれてしまうということに・・・。だが、成功するかもしれないという可能性に目がくらんでしまった。まるで、勝てるかもしれないと思ひ込み全財産

をつぎ込んで落ちぶれる、ギャンブラーのように。

だからこそ、せめてもの償いで、彼女に「学園長に頼んで、匿ってもらえ」と伝えようとした。もつとも、サメジマがすぐにフィリップを殴ったために最後まで伝える事はできなかつたが。

「お前の娘さんは正体がバレた。要するにデータ盗りは失敗だ。倒産はもう決定だな。条件は覚えてるだろう？」

「・・・試験機として置いてある我が社のISを、全て回収する事だ」「そういう事。安心しろ。ISは頂くが娘さんに手は出さねえ。ブリュンヒルデが厄介だからなあ。その代わり、お前さんを楽にしてやるよ」

サメジマは腕をまくる。その光景を見たフィリップは、目を見開いた。そこには、人間には無い筈の鱗があつたのだ。

化け物。そういう単語が相応しかった。

「別荘に逃がした妻に言うことはあるかい？」

「・・・すまない」

「OK。そんじや、死ねよ」

開いた手のひらから球状の水が現れる。さつきから続く不可解な現象に、フィリップは尋ねた。

「・・・お前は何者なんだ？」

「モンスター、だよ」

サメジマはニヤリと笑うと、その水球を投げつけようとした。その時――

「まさか、外の世界で戦うとは思いませんでしたよ」

「久々に来たのが、観光じゃなくて戦闘だとは。今日はツいてねえな」  
そんな声でした。

八雲紫。俺や相棒が住んでいる幻想郷を創つたと言われていて、俺たちの大先輩である白斗さんを幻想入りさせた人でもある。弾幕ごっこなどの実力も凄くて、俺はおろか父さんだって勝てていない相手だ。そんな人がなぜここに？



相棒と俺は少しだけ驚いたが、すぐに冷静になる。この人は、能力を知らない人を驚かせるのが好きだ。簡単に驚いたら、紫さんは悪戯を成功させたかのような笑みを浮かべるからだ。

「い、いつの間に!？」

「ついさっきですわ」

「あんた、誰だよ!？」

「ああ、紫さん。お久しぶりです」

シャルロットと一夏は驚いている。あくあ、やっぱり笑みを浮かべている。そんなに驚かせるのが好きか？ まあ俺たちの反応に対しては残念そうな笑みだけだ。

「いや真、なんでそんなに冷静なんだよ!？」

「そうだよ！ い、いきなり出てきたんだよこの人!」

「まあまあ落ち着いてください。この方は八雲紫さん。私達の故郷ではそれなりの地位を持つてゐるんです。今は来校者のカードも下げますし、話を聞いてみましょう」

「・・・分かったよ」

二人は相棒の少し強引な説得に納得がいけない表情をしているが、渋々引き下がった。

俺は紫さんに、さっき言ったことを聞く。

「紫さん。デュノア社を救う方法があるんですか?」

「ええ。と言うよりも、もう完了してるんだけどね」

『「え?」』

「デュノア社を脅していた奴は、私の仲間達が押さえつけてくれたわ。さて、シャルロット・・・だったかしら? お父さんに繋げてご覧なさい」

シャルロットは、言われるがままに父親へ電話をかける。「完了した」って言うのはどういうことなんだろうか? この人は本当に、何を考えているのか分からない。一夏は紫さんのことを教えてほしいような視線を向けるが、あいにく俺たちは詳しく教える事はできない。この世界では妖怪の存在を信じている人が少ないし、話したとしても、頭がおかしくなったと思われるだろう。俺たちは首を横に振っ

た。

すると、携帯から声が聞こえてきた。

《・・・シャルロット?》

「と、父さん! 大丈夫!」

《ああ。私も死を覚悟したが、何故か他の者たちがサメジマを・・・》  
サメジマつてのは、きつと脅していた奴の事だろう。きつと幻想郷の誰かがソイツを取り押さえたんだな。でも一体誰が・・・?

すると、社長さんの近くに誰か居るのか、声が聞こえた。

《つたく。水を使う攻撃がきたとき、マジで死ぬと思ったぞ》

《それでも蒸発させるのが、護さんでしょうが》

《よく言うぜ影夜。お前が奴の攻撃を避けたおかげで、社長室がポロポロだ》

俺と相棒は、顔を見合わせた。相棒も口をあんぐりと開けている。一方で紫さんは笑いを必死に堪えている・・・! 紫さんのドツキリ作戦に嵌っちまった!

何でだ? 何で父さんと影夜さんがデュノア社にいるんだ? 相棒に視線を送るが、相棒は首を横に振っている。一夏は・・・あ、俺たちに説明を求めてるんですね。

「なあ、真。何でそんなに驚いてるんだ?」

「・・・父さんだ」

「え?」

「第三者を潰したのは、俺の父さんと相棒の父さんなんだよ!」

「へえー・・・つて、ええ!? マジかよ!」

「本当だ。声が少しばかり聞こえた。な、相棒?」

「ええ。紫さん、どういうことですか?」

俺と相棒、一夏が紫さんに視線を向ける。ちなみにシャルロットは社長さんと話し続けている。

それにしても今回の騒ぎはおかしい。紫さんや父さんが動くほどだ。一体何が起きてるんだ?

【生徒の呼び出しをします。織斑一夏くん、シャルル・デュノアさん。学園長室まで来てください。繰り返しします――】

クソツ！ 何でこんな時に！ 俺は、全く付いていけてないこの状況にイライラしている。

一方、呼び出しをくらったシャルロットは、顔を青ざめていた。

「ま、まさか・・・」

「シャルロットちゃん、安心しなさい。正直に話せばいいだけ。父親の証言もあるし、きっと自由があるわ。それと、織斑一夏くん」

「は、はい」

「誰かを守ろうとするのは、一人では至難の業。誰かを頼る事は犯罪ではない。その事を覚えておきなさい」

「は、はい！」

「そろそろ行きなさい。客を待たせるのは良くないわよ？」

「そうだった！ 行くぞ、シャルル！」

「えっ!? ま、待ってよお！」

一夏はシャルルの手を取って立ち上がると、部屋を出ようとする。だけど何かを思い出したのか、俺たちのほうへ顔を向けた。

「真、ミツル。ありがとう！」

そう言つて、部屋を出て行ってしまった。彼女も何か言おうとしていたが、一夏に手を引かれてしまう。「ありがとうおお・・・」と言葉がどんどん小さくなっていくのは、初めて聞いたぜ。

さて、と。俺は紫さんへ向き直る。見ると紫さんは、一夏とシャルロットが部屋を出て行って安心していているようだ。これはすなわち・・・幻想郷が絡んでるんだな？ だとすれば、二人が出て行ったのは丁度良かったかもしれない。

「では紫さん。今回の騒動・・・紫さんは第三者の正体を知ってるんですね？」

「その通りよ、ミツル。下手をしたらあなた達にも動いてもらう事になるわ」

「・・・モンスター、ですね？ 紫さん」

相棒と紫さんが驚いたような顔をしてこっちを見る。なんだよ。俺だって真剣に考えてるんだよ！

簡単なことだ。モンスターは、この外の世界とはまた別の世界から

やって来た生き物のことだ。かつて父さんが戦ったモンスター達は、幻想郷にいる人間や妖怪などを滅ぼして、自分達の住みやすい世界を作ろうとしていたらしい。そのモンスターを束ねていた奴は、父さんを含めた8人の英雄達によって倒されたという。

だけど、もしその部の部下達が生き残っていてこの世界に居たとしたら、そいつらはISを狙ってるんだろう。ISから技術を盗んでしまえば、人間を滅ぼせるだろう。人間の姿になっても、モンスターとしてのタフネスはそのままだし、コアは別の物で代用できるかもしれない。だからこそ、倒産寸前のデユノア社を狙ったんだな。成功しない作戦を成功できると偽って、最後は会社を潰す。そしてISを頂く、と……。

そんなことを説明すると、二人は目を丸くしていた。え？ 紫さんも考えてたんじゃなかったのか？

「ま、真。あなた……」

「意外と頭が回るんですね」

「意外とつて何だよ！ 意外とつて！」

「でも、その可能性もありえるわ。真、ナイスよ」

「ど、どうも……」

えへへ、紫さんに褒められた……。すると、相棒がハツとした顔になる。……まさか。

「相棒。何か感じたのか？」

「目を閉じてみてください。恐らく庭園に、これは……モンスターです！」

「なっ!? ついに堂々と来やがったか！」

相棒は、モンスターの力を持つ人間である影夜さんと、紅魔館の図書館に勤める小悪魔さんの間に生まれた子供だ。要するに、人間と悪魔のハーフだ。悪魔の部分なのかどうか知らないが、気配に敏感になる時が多い。

俺も目を閉じると、ここから少し離れた所で禍々しい気配を感じた。俺はモンスター能力を使っているせいなのか、集中力を研ぎ澄ませると気配を感じることが出来る。ヤバイな。もし学園を襲撃して

きたら……。

「紫さん！ 俺たちは……」

「分かったわ。私は霊夢たちに、このことを知らせてくるわ。幻想郷がまたピリピリしそうね」

相棒が俺を見て頷くと、すぐに気配のするほうへ走って行った。その時紫さんが何か言っていたようだけど、一体何なのか分からなかった。

「護、影夜。あなた達の子供も、モンスターとの戦いに巻き込まれる運命みたいよ……」

くらウラ視点く

何故だ！ 何故教官はドイツ軍に戻ってくださらないのだ！ あんな、ISをファクションのような物と勘違いしている者達のところにいるべきではない！

必死に説得を試してみたものの、教官には「選ばれた人間気取りか」といわれる始末。このままでは、教官に私を見てもらえない……！

「どうすれば良いのだ……」

「力を見せれば良いのだ」

「っ!？」

この学園には少ないはずの男の声が聞こえ、私は後ろを振り向く。そこには、暑いというのに黒い外套に身を包む男が居た。顔まで見ることは出来ない。それなのに、こちらを嘲笑っているような気がした。

一体、どうやってこの学園に入ってきたのだ？ 学園の警備は厳重だ。来校者のカードも提げていない。まさか……

「貴様、何者だ!？」

「あまり詳しくは言えないな。……おっと、そのナイフで私を殺せると思うなよ？ 私を殺せるのは吸血鬼のような人間の力を超えるような者だ」

男から溢れるのは殺気。さつきも教官から、覇気とも呼べるような

ものを浴びた。拒絶されるような恐怖に対して、今浴びているのは、食われるような恐怖に身を包まれている……!

ナイフを抜く手が動かない。それどころか足が震えて、声も出せない。なんなんだ、この男は?

「ふむ、無闇に抵抗しないのは良い事だ。さて、君は教官とやりに振り向いてもらいたいのだな?」

私はコクリと頷く。

「ならば、力を見せればよい。力と言うのは無限だ。君は無限の可能性があるとかわせるんだ」

そう言うと、男はどこからか紫色のような宝石を取り出した。何か禍々しきを感じる……。

「これを君の I S に着けなさい。そうすれば、普段よりも更に力を引き出せるだろう」

私は恐る恐るその宝石に触れる。

その時だ。何か得体の知れないものに身体を覆われる気がした。あらゆる物を破壊したい。そんな衝動に駆られる。

「つあああああああ!」

早く……あの織斑イチ夏を倒シテ、教官ニ認メテモラウンダ……  
「ふっふっふ……。さあ、その狂竜結晶を使って、君の憎む存在を叩

きつぶs——」

「何してやがるんだ、テメエ!」

「ボーデヴィツヒさんに、何をした!」

アノ二人ハ確力……。イヤ、今ハどうでも良い。早く奴ヲ……  
「すまん、ボーデヴィツヒ!」

「ガアツ!」

あれ? 視界が……。

## 18話 狂気

強大な力を感じて走った先は庭園。色とりどりの花が咲いているこの場所は、今は緊迫した空気を作り出している。というのも、目の前に俺たちを睨みつけている人間……いや、モンスターがいるからだ。

黒い外套に身を包み、顔も闇に覆われて分からない。だが俺には分かる。こいつはヤバイ。下手したら飲み込まれそうな闇……。そんな雰囲気がいじわりと迫っている。

「ほう？ 貴様ら、東風谷と十六夜の子か」

「っ!? 父さんと護さんを……?」

「テメエ、ボーデヴィツヒに何しやがった! あいつの目が正気じゃなくなってたぞ!」

さつきボーデヴィツヒを見たんだが、目が虚ろな状態でフラフラと何処かへ行こうとしていた。それと同時に殺気と狂気が混じったような胸糞悪い雰囲気を感じた。彼女はさつき当て身をしたから気絶している。

多分、この男が彼女に何かをしたんだと思う。いくら一夏を目の敵にしているからって、この変わりようは異常だ。催眠術か? 薬物か? 一体何をしたんだ……。

相棒は目を赤く光らせて警戒している。変な動きをすれば、すぐに能力を発動できるような状態だ。

「彼女は、尊敬する者に振り向いてもらいたいそうだ。私はその手助けをしたに過ぎない」

「本当にそうですか? 助言程度で彼女を豹変させる事はありません。答えろ。何を目的に彼女を利用するつもりだ」

「それは言えんな。せいぜい、己の力を最大まで利用できない自分を恨むが良い」

「ま、待ちやがれ!」

今までに無い力を当てられて動くのもままならない。だが、最後の抵抗ってやつなんだろうな。俺は男の肩を掴もうと手を伸ばす。だ

が、手が届く前に奴は漆黒の翼を広げて飛び去ってしまった。目の前には茜色の空が広がっている。

結局、奴が何をしようとしているのか分からなかった。俺は舌打ちをして地団太を踏む。そして少し冷静になると、相棒に声をかけた。

「相棒。アイツは……」

「おそらく、シャルロットさんとは別件だと思います。だけど、ボーデヴィッツヒさんに何をしたんだ？」

まだ敵の目的は分からない。だけど、何かやばい事が起こる。そんな感じがしてならなかった。

ボーデヴィッツヒを保健室に送り、俺は廊下を歩いていった。保健室の先生に一体何があったのか聞かれたが、階段から滑り落ちたつて言っておいた。そのついでに、彼女の専用機の検査も。あの男が何か細工をした可能性があるからだ。だから今日は、ボーデヴィッツヒは保健室から出られないかもしれない。

さて部屋に着いた。ドアを開けると、ルームメイトの本音が笑顔で迎えてくれた。

「おかえり〜!」

「はははっ。ただいま」

彼女は俺の懐へピョーンと飛び込んでくる。あんまりにも可愛いもんだから、思わず頭をワシャワシャしてやった。この子は何というか、妹のような感じがして頬が緩んでしまう。だからクラスみんなから、「のほほんさん」って呼ばれてるんだな。

すると、彼女がほんわかした顔のまままで話し始めた。

「東風やんは、今度の学年別トーナメントでは誰かと出るの〜?」

「そうだなあ……。一応、相棒ごとミツルと一緒にしようかなと思ってる」

「ほうほう〜。みっちーって、強いのかな?」

「み、みっちー? ……ああ、相棒の事か」

「そうそう。東風やんと長い間組んでるってことは、強いのかな?」

「……ああ。強いぜ。あいつは」



あいつは素早さを生かした戦い方が得意だ。相手の死角から攻めたり、高い跳躍力で相手との距離をすぐにつめたりする。俺も、何度やられそうになった事やら……。

まあ、アイツには弱点があるんだが、あえてそれは言わない。ふとした事ではばれてしまったては、対策を練られてしまうからな。

「本音はどうするんだ？」

「うくん。実は、訓練機の予約が一杯だし、今年は代表候補生が沢山だから止めとく〜」

「そうか。じゃ、俺が一夏を応援していてくれ」

「モチのロン〜♪」

そう言って、本音は近くの棚からビスケットを取り出す。この部屋で彼女が何かお菓子を出すのは、「一緒に食べよう？」と言う合図なのだ。俺はずっと立ちっぱなしだったから、椅子を寄せて腰掛ける。

彼女はビスケットの箱を開けると、ダボダボの袖をまくってビスケットを取り出し、俺に渡してくれた。

「へへっ、ありがとな」

「どういたしまして♪」

テレビをつけて一緒に談笑したり、俺が緑茶を入れて二人一緒にホッコリしたり……。こんな毎日が、俺は好きだ。今日はシャルロットの男装だったり、ボーデヴィツヒの異変だったりで疲れた。今はこのまったりとした空間を満喫する事にしよう。

「しかし、本当に美味しいな。今まで煎餅くらいしか食べてなかったから……。」

「そうなんだ？　もしかして、あんまり洋風なお菓子を食べてなかったり？」

「そうかもしれないな。たまにカステラとかを貰った時は、家族みんなで食べたけど、あれは本当に美味かった」

「美味しいよね〜♪　そうだ、いつか一緒にケーキとか食べてみない〜？」

「お、ケーキか。食堂の人作ってくれるかな？」

「チツチツチ。このIS学園の食堂メニューはいつぱいだから、ケー

キなんてお茶の子さいさいだよ〜！」

「そりやすげえや！　じゃ、いつか食うか」

「やったく〜！」

本音は、バンザイのポーズをして喜んでいいる。俺は緑茶を飲みながら、今後の事について考えていた。リラックスしてる時と真面目な時とで、しつかりと切り替えないと、もしものときに大変だからな。

「(ラウラ・ボーデヴィツヒ。彼女を何とかしなければ)」

彼女は、ドイツの代表候補生らしい。しかも彼女の「教官」と言う癖やビシツとした敬礼から見ると、軍隊に所属しててもおかしくない。すなわち、一番の強敵になるかもしれないのだ。あの異常な状態についても調べないといけないしな。

明日にでも、相棒と訓練した方が良さそうだ。いや、待てよ？　そもそもトーナメントのペアについては相談してなかった。

……しかたない。まずは相談してからだな。

〈学園長室（一夏視点）〉

俺とシャルルは、目の前に居る人たちの前で緊張していた。入学式の時に激励の言葉を送っていた水色髪の先輩……更識楯無さんこと生徒会長。今まで用務員のおじさんと思っていた轡木十蔵さんこと、理事長。そして千冬姉。

呼び出しを受けて最初に待っていたのは千冬姉だった。それから理事長と生徒会長が出てきて、シャルルのことについて聞いてきた。当然嘘をつけるはずがない。シャルルは全て話した。会社が脅されていたことも、自分が妻の子だったことも。見ると三人は「やっぱり……」みたいな顔を浮かべていた。

「千冬姉、気付いてたのか？」

「織斑先生だ。……まあいい。もし男性パイロットが見つかったなら、世界中が大騒ぎするはずだからな。少々違和感を感じていたんだ」

「先生。あの、僕は……」

シャルルが心配そうに尋ねようとした。だけど、生徒会長と理事長

が優しい笑みを浮かべて、その心配を打ち消した。

「さつきフランス政府から謝罪の電話があったわ。『入学に必要な書類に、不手際があった』って」

「他の人の書類が混じってみたいで、性別を誤って記入したらしいです。そのため、間違つて予備の男子の制服を渡してしまったと言いつ訳が出来ます」

す、凄い……。あまりにもトントン拍子で進むから、逆に不気味さを感じてしまう。

そうだ、シャルルがこうして女子として振舞えるのは、確か紫さんという人だったはずだ。お礼を言わないと。

「千冬ね……。織斑先生。紫さんは、まだ学園に居ますか？」

「紫？ 誰だそれは？」

「この学校に来てた方なんですけど……」

「おかしいわね？ 今日に来校者は一人も来ていないはずよ？」

「え？」

さらに千冬姉が言うには、来校者といえども生徒のプライバシーである寮には立ち入らせないらしい。

じゃああの女性は一体どうやって？ デュノア社を脅していた存在にいち早く気付き、真たちの父親を派遣してその行動を止めてしまふ人物……。紫さんは一体何者なんだ？ そもそも、そんな人を知っている真たちって……。

「織斑、デュノア。詳しく話せ」

千冬姉に鋭い目付きで説明を要求された。俺は、背中に嫌な汗が流れるのを感じながら、部屋で何があったかを説明するはめになってしまったのだった……。

〜夏視点終了〜

次の日。俺は相棒と共にアリーナへ向かっていた。相談したらあっさりと受け入れてくれたから、早速訓練をしようと思ったわけだ。

「それにしても・・・クラスの奴等はどうしたんだらうな？」  
「ええ。なにやら男子には話せない内容らしいですが・・・」

そう。朝教室に入ったら、女子達が一夏に対して何かソワソワしてたのだ。箒だけが頭を抱えて唸っていたんだが・・・何があつた？  
聞いても慌てた様子ではぐらかされるし・・・。少し気になることはあるが、すぐに振り払う事にした。これから始まるのは、仮とはいえ戦い。気を引き締めなければ。

そうこうしているうちに、アリーナに着いた。今日は下にISSスーツを着ているから、制服を脱ぐ程度で良い。それじゃあ、行きますか！

グラビオスを纏って出てみると、セシリア、鈴、箒の三人がそれぞれ訓練をしていた。

「おつす。お前らも訓練か？」

「勿論ですわ。今回は鈴さんと組ませてもらいましたの」

「アタシが近距離をサポートして、セシリアが遠距離。これでバツチリでしょ！」

「二人なら分かるが・・・箒も出るのか？」

「う、うむ！ たまには実戦で腕を磨かないといけないからな！ うん、そうだ！」

うん？ なんて顔を赤くして・・・さては、一夏絡みか？ きつと「トーナメントで優勝したら付き合っただけ」とかじゃないかな。そんな恥ずかしい事でもないと思うんだが・・・

——警戒、熱源反応あり！

センサーがISSをとらえたらしい。反応がしたほうへ振り向くと、隣で爆音がした。見るとセシリアが膝をついている。鈴と箒は砲撃を放った少女・・・ラウラ・ボーデヴィツヒを睨んでいた。

彼女の纏うISS「シユヴァルツェア・レーゲン」。カラーリングは黒だったはずだが、今のそれは明らかに変わっていた。前のを美しい黒とするなら、今のは禍々しさを混ぜた・・・毒を連想させるような色だ。間違いない。彼女は豹変してしまっている！ なぜだ？ なぜ検査に引っ掛からなかったんだ？

「ふむ、織斑一夏は居ないようだな」

「あんだ、いきなり砲撃してきて謝罪もないわけ？」

「私があるのは織斑一夏だけだ。邪魔だから撃った……。それに何の問題がある？」

「どうやら貴様は、どこまでも私達に無関心なようだな……。！」

箒が近接ブレードを握り、今にも突撃しそうだ。まずい。砲撃だけで操縦者をふらつかせるということは、攻撃力がそれなりに上がっているという事だ。

「箒、今の彼女はおかしい。下手に刺激するな！」

「だが真！ 砲撃だけであれだと……。一夏が危険だ！ 私達が何とかしなければ……。！」

ただ怒っているって訳ではなかった。一夏を守る。そんな気持ちがあるみたいだ。鈴も「双天牙月」を連結してる。

「だけど……。それでも危険だ。」

「無闇に突っ込むのは自殺行為だ。お前達が傷付いたのを知ったら、一夏が今度は突っ込む」

「じゃあ、どうしたら良いのよ！ セシリアはなんか様子がおかしいし！」

「なに!?」

見ると、セシリアの身体から紫色の煙みみたいなのが出ている。ま、まさか……。まさか、ボーデヴィツヒはウイルスに侵されてる

「(狂竜化……。！ まさか、ボーデヴィツヒはウイルスに侵されてるのか!?)」

ナナシさんが研究しているやつだ。確か、凶暴性を上げさせ、動物の場合は共食いすら引き起こす代物だ。セシリアは今そのウイルスに感染している。激しい運動をすれば、初期症状を振り払う事ができるはずだ。

「セシリア！ 今は逃げろ！ ウイルスを振り払え！」

「ウ、ウイルス!?!」

「激しい運動をすれば良い！ 今はボーデヴィツヒから逃げろ！」

「わ、分かりましたわ!」

セシリアがすぐにその場から飛行を開始する。だが、奴は逃がさないようだ。

「地べたに這いつくばってる!」

「クツ・・・! 絶対に振り切って見せますわ!」

「狙うんなら・・・」

「私達を狙え!」

俺、箒、鈴で狙いを向けさせる。セシリアのウィルス克服の時間稼ぎだ。するとボーデヴィツヒは、プラズマブレードみたいなのを出した。狙いは・・・俺かよ!?

「余計な事を・・・貴様から潰す!」

「そうはさせねえよ、ドイツ軍人!」

突っ込んでくるボーデヴィツヒと、ファイアテンペストを出して構える俺。鈴と箒が叫んでいる。そこへ・・・レーゲンとはまた違う黒いI Sが割り込んできた。

「全く・・・何をやってるんですか」

相棒、登場が遅いぜ・・・。

## 19話 多対一

目の前にいる相棒が纏うISは、一言で言うなら「黒」だった。見た感じは全身真っ黒なラファール・リヴァイブだが、よく見るとスラストアームが少し大きかったり、非固定浮遊部位はナイフのように鋭くなっている。

なるほど……。確かに相棒らしい感じが漂う機体だな。

「随分と遅い登場だったな、相棒」

「スーツを着るのに手間取りましてね……。これからは下に常時着用ですかね？」

「ははっ、そうした方がいいと思うぜ」

俺と相棒で軽く喋っていると、ボーデヴィツヒがニヤリと笑みを浮かべながらレールカノンを構える。相棒のクラスメイトである鈴が、すぐに叫んだ。

「い、十六夜！ 危ない！」

「消えろお！」

カノン砲が火を噴く。このままだと直撃するだろう。だが、俺はしっかりと見ていた。……。相棒がニヤリと笑っているのを。

それはまさに一瞬だった。相棒の手が少し光ったかと思うと、その手にはセシリアが使っていたインターセプターに似たようなものが握られていた。その瞬間にそのブレードを投げつけて砲撃を相殺し、すぐにもう一本のブレードを出す。そして……

「き、消えた!？」

「見ろ。彼はボーデヴィツヒのところにいる。は、早すぎる！」

——ガギンツ!

そんな鈍い音が聞こえたかと思うと、カノン砲が切り裂かれて驚いているボーデヴィツヒと、ブレードを握る手を振り上げている相棒がいた。

よっほど切れ味が良い武器なんだな。箒と鈴はあんぐりと口を開けている。俺がアリーナの上を見ると、黒い粒子がだいぶ取れたセシリアの機体が見えた。すぐに通信を繋ぐ。

「セシリア、もう大丈夫だ。すぐに来てくれ」

「ようやくですか？ ふう・・・って、何ですのこの状況は!？」

「なあに。相棒が奴の動きを止めてるだけだ」

すると、ボーデヴィツヒのやつが手を前にかざした。ニヤリと笑みを浮かべたかと思うと、相棒の周りがまるで水に油を混ぜたかのようにグニヤリと歪んだ。それと同時に相棒の動きがピタリと止まってしまう。

「っ!？」

「喜べ。貴様はこの学園で初めて、A I Cの餌食になるのだ!」

「あ、あれがドイツの第三世代兵器・・・。あんな簡単に動きを止めてしまふんですの!？」

「驚いてる場合じゃないでしょうが！ とつとつと十六夜を助けるわよ！」

「私も加勢するぞ、鈴!」

鈴と箒が、相棒を助けるべくボーデヴィツヒへと突っ込む。・・・駄目だ。嫌な予感がする！ こういうときに限って当たってしまうんだ！

俺はすぐに二人の後を追う。そしてグラビド・ヘッドを肩から外して浮遊させる。少しでも盾になれるようにだ。

「貴様らなら、そう来ると思っていたぞ」

「がっ!？」

「ぐうっ!？」

「ふっ、しよせん格闘戦しか能がない日本と中国。A I Cで止めるまでもない。ワイヤーブレードで十分だ」

ボーデヴィツヒに斬りかかろうとした二人はワイヤーのようなものに絡まれる。そして思いっきり振り上げたかと思うと地面に叩きつけた。何度も、何度も。

俺はすぐにファイアテンペストを展開して、ボーデヴィツヒに斬りかかる。俺のほうに視線が行ったのでワイヤーの動きは止まるが、今度は俺の動きが変な歪みで止められた。

「なん・・・だよ、これっ!」



「ふふふ、凄い。凄いぞこれは！　これなら織斑一夏を叩き潰す事ができる！」

「やらせませんわよ！」

横からレーザーと二基のミサイルが飛んできた。どうやらセシリアが全てのビットをボーデヴィツヒに向けて放ったようだ。その途端、変な歪みが消えて俺の動きが軽くなった。

・・・まさか。A I Cの欠点は――

「何やってんだよ！」

突然、大きな声が響く。そこにいたのは白式を纏った一夏と、ラファール・リヴァイブカスタムⅡを纏ったシャルロット。どうやらアリーナでのこの騒ぎを見て慌てて来たらしい。二人は俺たちをありえないようなもので見える目で見ていた。

「二人の人間に対して複数でやるって、恥ずかしくないのかよ！」

「違うんだ一夏！　いきなり私達を撃ってきて・・・」

「だからってリンチをするのか!?　それが専用機持ちのやることかよ！」

「お願い！　話を聞いて一夏！」

一夏は話を聞こうとしない。そうだよな。事の始まりを知らないで見たら、明らかに俺たちがリンチしているように見えるもんなあ。箒や鈴たちが必死に説得してるものの、頭に血が昇ってる一夏は聞く耳を持つとうとしない。

「これはどういうこと、真？」

「ボーデヴィツヒが、いきなり俺たちに撃つてきやがったんだ。セシリアはそれでエネルギーを減らされたし、箒と鈴はワイヤーブレードで叩きつけられてる。俺や相棒はまあ大丈夫だが、第三代兵器をみごと見せ付けられたね」

「それじゃあ、これは・・・？」

「あの雰囲気じゃあ、生身に戻ってもI Sでやられそうだったからな。それぞれで押さえてた」

もし一方的に攻撃をくらってたら、俺たちパイロットは殺されたたかもしれないだろう。そうならないように、ボーデヴィツヒの攻撃を

受けてるやつを見かけたら、攻撃で気をそらしてやるという風に押さえてたんだ。

「その、ごめん。僕たち勝手に変な勘違いをして・・・」

「別に良いよ。一夏には、あとで説明しておいてくれ」

「うん。分かった」

さてと、誤解を早く解くためにもさっさと解散して一夏に説明を――

「死ねえっ！ 織斑一夏あ！」

いきなり、ボーデヴィツヒが手からブレードのような物を出して襲い掛かってきた。マズイ！ これではさすがに間に合わない！

・・・だが、それは気鬱に終わった。箒が打鉄のブレードを展開して、ボーデヴィツヒの攻撃を防いからだ。

「ちっ！ またしても邪魔をするか！」

「一夏！ これでも私達を信じないのか!? このままじゃお前は確実に殺されるぞ！」

「ほ、箒・・・」

手刀と刀の鏢迫り合いが起こる。だが、相手は軍隊で過酷な訓練を受けてきたやつだ。剣道で鍛えている箒とはいえ、徐々に後ろへ押されていく。俺はすぐにブースターを噴かしてボーデヴィツヒを羽交い絞めにする。

「ぬぐあっ！ この打鉄もどきが！」

「へへっ、俺の力を舐めるなよ！」

「一夏さん。今のボーデヴィツヒさんはヤバいです！」

「十六夜の言うとおりよ！ このままじゃアンタ、本当に殺される！」

「二一夏っ!!」

その時、一つの影がアリーナに入ってきた。そして静かに一言。

「そこで何をしている、ガキ共」

それは、我らが担任織斑先生だった。

アリーナを出た後、俺たちは事情聴取をされてた。といつても、アリーナの監視カメラが始まりから終わりまで映していたので、俺たちは過剰防衛による嚴重注意、ボーデヴィツヒはISの一時没収とアリーナの使用禁止の罰を受ける事になった。

取調べが終わった後、一夏が俺たちの前で謝罪をした。勝手に勘違いをして勝手に熱くなってしまったと、彼は苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「だからさ、頭を上げてくれて。始まりを知らない奴が見たら、確かにあれはリンチの光景なんだからさ。お前が怒ってしまうのも無理はない」

「だけど・・・」

「それに、謝るなら私達ではなく、篠ノ之さん達でしょう？」

「あっ・・・」

「行って来い。一夏！」

俺が言つてやると、一夏は大急ぎで走っていった。さて、殆どいないな。よし。

「相棒。ボーデヴィツヒの機体だが・・・」

「間違いありませんね。彼女は狂竜ウイルスに侵されています」

凶暴性を引き出し、見境なく襲い掛からせるウイルス。まだナナシさんも研究中のものだ。厄介なのは、感染个体からの攻撃を受けると、受けた者も感染していくということだ。セシリアが掛かっていたのはまだ初期症状だから何とかあった。身体の動きがどんどん鈍くなつていくのだが、敵を攻撃し続けたり、とにかく激しく動く事でそれを克服できる・・・らしい。

問題はボーデヴィツヒだ。彼女は、身体に大ダメージを与えなければならぬくらいまで感染してしまっている。今はまだ大暴れしている段階だが、このままでは彼女の命すら危うくなる。いや、暴れてしまう時点でヤバイんだけどよ・・・。

「もしタッグトーナメントで彼女が出場したら、大変な事になりますね・・・」

「ああ。それに、いつ一夏を殺すか分からないぞ、あいつ」

「嚴重警戒、ですね」

「いつでも一夏を守れるようにしておこう。能力はあまり使わないように、な」

「了解です」

俺たちは頷くと、それぞれの部屋へ戻る事にした。・・・あれ？  
そういえば相棒って誰と同室なんだ？

「ただ今帰りました」

「・・・お帰りなさい」

ミツルが部屋に戻ると、水色髪の子が振り返ってくれた。眼鏡をかけているが、その下から見える瞳は、どこか疲れているような感じがした。ミツルは少し溜め息をつくとき、彼女の近くに腰掛ける。

「今日も専用機の組み立てですか？ 簪さん」

「うん。こうでもしないと、お姉ちゃんに証明できないから・・・」

「証明？」

「・・・あなたには関係ない」

ミツルは肩を竦めて苦笑いするしかなかった。部屋が同室になってから、彼女・・・更識簪は徹夜をすることが多い。よく早めに寝るように声をかけているのだが、それでも疲労が消える感じが無い。正直言って不安だ。姉を見返すらしいが、その前に倒れてしまうのがオチだ。

「(やれやれ・・・。問題が山積みですね)」

そう思いながら、ミツルは紅茶を淹れる準備を始めるのだった。

## 20話 専用機「夜影」

あの多対一騒動から早数日。ついに学年別トーナメントが開催された。この間、一夏とのペアを巡って女子が殺到したが、一夏はデュノアとペアを組むらしい。俺も狙われたが、相棒とのペアを伝えると諦めていった。一部の女子は「本のネタになる!」とか言ってたけど……。

さて、俺と相棒で、最初の相手を見てみる。

「最初の相手は、鈴とセシリアのペアか……」

「遠距離と近・中距離、互いの欠点を補ってますねえ」

「厄介だなあ。俺セシリアの狙撃苦手なんだよ。相棒に任せたわ」  
「では、真さんは鈴さんの方を」

二人で作戦を立てる。まあ、単純に俺が片方の相手をしてる隙にもう片方を相棒がやるってだけなんだけど。とりあえず時間になったから、行くとしますか!

「グラビオス、出るぞ!」

「夜影、出ます」

俺がピットから飛び出すと、歓声が沸き起こる。そして相棒の機体が出てくるとその音量はさらに高まった。

相棒の専用機「夜影<sup>よかげ</sup>」は、量産機であるラファール・リヴァイブをスピード特化に改造したものだ。黒のカラーリングや少し大きめになっているブースター、ナイフのように鋭いウイングスラスタターなど相棒らしさが伝わってくる機体だ。相棒の武装が気になるところだが、「秘密です」の一点張りでも教えてくれなかった。まあ、俺にまで被害が来るようなモンじゃないことを祈りますかね。

「やっぱりあんた達が来たわね」

「私たちの力、見せてあげますわ!」

鈴とセシリアが俺たちに堂々と宣戦布告する。それと同時に試合開始のブザーが鳴った。俺は瞬時加速で鈴に詰め寄り、ファイアテンペストを展開して斬りつけた。

「うだらあ!」

「がつ!? やっぱり真の武器は重いわね!」

「そいつあ、どうもよ!」

「だけどわざわざ突っ込んでくれたのはありがたかったわ。食らつときなさい!」

鈴によつて先制攻撃が防がれる。その瞬間、後ろから衝撃がきた。なるほどねえ。コイツが・・・

「衝撃砲か」

「その通り・・・って、よろけてすらいないってどういう事よ!」

「機体の防御力を舐めてもらつちや困るぜ?」

ファイアテンペストで切り上げるが、その前に鈴が双天牙月を二つに分離させた。武器を壊す作戦は失敗か。すると今度は胴体に衝撃。

・・・マズツたな。これは連続で来るパターンだ。

「ほらほらあ! どんどん行くわよ!」

「ぬっ、ぐっ、がつ!」

双天牙月によつて何度も斬られて行く。これはアレだ。ナナシさんがたまに見せる双剣の戦法にそっくりだ。むう。だいぶシールドエネルギーが減つたな。

「そいやあ!」

鈴によるヤクザキックで、軽くよろける。すると鈴が少し笑みを浮かべる。

「セシリア! 今よ!」

ほお? 俺の隙を見つけて狙撃させる作戦か。だが残念だったな。

おそろくセシリアは・・・

「キヤアアアアアアア!」

「セシリア!」

鈴がセシリアの悲鳴がするほうへ顔を向けると、彼女は「影」によつて滅多斬りにされていた。俺も見てみるが・・・うん。やっぱり相棒らしいぜ。よく見てみると、相棒が二本のブレードで様々な角度から斬りつけていた。そしてヤクザキックで突き飛ばしたあとにマシンガンを取り出して一箇所を撃ち込む。

・・・うわあ。えげつねえ。あまりの光景に観客はおろか鈴も唾

然としていた。

「くっ、ブルーティアーズ！」

セシリアがB I Tを展開して牽制。四基のうち二基を囲にして、マシンガンの弾が機体のシールドエネルギーを削るのをやわらげた。さらに追い込みをかけるように側面から、残り二基のレーザーで狙い撃つ。

「ぬうっ!？」

衝撃を受けて姿勢を崩す相棒。だが、そんなんで倒れるほどアイツは弱くない。

なんと相棒は、ブレードを二本ともB I Tに向かって投げやがった。それに気付いたセシリアはすぐに動かして破壊されるのを免れようとするが、相棒はこれが狙いだったんだろう。セシリアへ詰め寄りながら武器を・・・同じブレードを取り出して、一気に斬り付ける。《セシリア・オルコット、シールドエネルギー0》

セシリアの負け判定が出る。さて、と。相棒がここまでやったんだ。俺も行きますか！

「何よ、あれ・・・」

「俺の頼もしいパートナーだぜ。行くぞ、鈴！」

「セシリアの分も行かせて貰うわ！」

俺はファイアテンペストを、鈴は双天牙月で大きく振りかぶった。

く千冬視点く

「まあまああの戦いだっただな」

私はコーヒーを飲み、ポツリと呟く。東風谷の瞬時加速や、十六夜のラピッド・スイッチなど目を見張るものがあつた。もちろん、専用機持ちである二人にも成長性が見られた。オルコットは射撃武器を盾にするという発想を使い、凰も容赦の無い斬撃によって、防御力がかなり高いグラビオスのシールドエネルギーを大きく減らした。

だが、四人ともまだ攻撃が荒い。東風谷と凰は攻撃が大振りだし、オルコットはまだ近接武器の展開が遅い。十六夜は自分の得意武器

を相手に伝えてしまった。これではまだまだだな。

「良かったとは思わなかったんですか？ 織斑先生」

「山田君か。良い所もあったさ。だが、あいつらはまだまだ若造だ。変に褒めちぎって天狗になられたらたまらん」

「だから弟さんにも厳しいんですね。勉強になります！」

「ふふっ。さて、次のペアは・・・織斑&デュノアペアと、篠ノ之&四十院ペアか」

「どちらもアリーナで特訓してたらしいですよ。篠ノ之さん達にも期待しちやいます！」

箒も変わったな。前に見たときは東やISを恨んでいるかのような雰囲気だったのに、今では積極的にそれに関する授業に取り組んだりしている。東との和解も近いか？ いずれにせよ、彼女が変わったことに嬉しさを隠せなさそうだ。

だが・・・

「ラウラ・・・一体どうしてしまったんだ」

私は、ラウラのあの表情が信じられない。今彼女は精神安定剤を飲ませつつ保健室で待機させているが、情緒が非常に不安定だ。私の前では冷静にしていられるが、それ以外だと殺気を出してくる。特に一夏に対しては。

第二回モンド・グロッソの時、私の棄権を狙った者たちが一夏を誘拐した。その時の捜索に協力してもらったのがドイツ軍で、その借りを返すために教官としてやって来たときに彼女と出会った。

彼女の才能を開花させるために、私は色々な指導を行なった。彼女は見る見るうちに成長していき、そして・・・私に心酔した。そのときに一夏の話をしてしまったのがいけなかったのだろう。棄権の事を根に持つようになっていった。

だが、なぜ彼女は殺そうとしてくる？ 彼女のあの気持ちは、恐らく私と家族でいる事への嫉妬だ。たとえ私が許してやれと言っても、彼女は渋々了承するか、少し屁理屈を言う程度だっただろう。なのに・・・

『教官は分からないのです！ ブリュンヒルデを手にしたとき、その



功績によってどれほどの人間があなたに尊敬と畏怖の念を抱くか！  
織斑一夏をそれをぶち壊したのです！ それは死に値する！』

あの時、ラウラはそう言った。なぜだ。家族を失ってまで手にした  
栄光など、私は手にしたくないというのに……。

「織斑先生、緊急事態です！」

「ど、どうした？」

「嚴重に保管していたシユヴァルツエア・レーゲンが、盗まれました  
！」

「何!?!」

プログラムに異常があったラウラの専用機は、我々が没収して検査  
をしていた。搭載されていたのは、『ヴァルキリートレースシステム』  
ともう一つ、謎のプログラム。非常に危険なため削除している最中  
だった。かなり嚴重に保管していたのに、なぜ？

「監視カメラを映せ！」

「はいー！」

映像には、保管室にいる担当の教師が倒れていた。すぐに映像を逆  
再生させる。すると、清掃員の格好をした者が何かを教師に打ち込ん  
で倒れさせている。無人機の件以来警備を強化させているつもり  
だったが、変装すら見抜けなかったとは……。

「先生！ 保健室からの連絡で……」

「何だ？ まさか……」

「ラウラ・ボーデヴィツヒさんが専用機を持ってアリーナへと向かっ  
ています！」

## 21話 変貌するラウラ

真たちの戦いが終わって、次は俺とシャルルの番となった。真が鈴の双天牙月を壊し、それで動きが止まった隙に鈴へ蹴りを放った。そしてキャノン砲でトドメを刺して試合が終わった。その後にミツルと無言でハイタッチしてたのが印象的だった。

さて、俺達の相手は箒と四十院さんのペアだ。そういえばよく二人が一緒にいるのを見かけたことがある。きつとコンビネーションは抜群だろう。ちなみに、二人の機体は共に日本の量産機「打鉄」だ。「では行くぞ、一夏!」

「お手柔らかにお願いしますね」

「行こう、一夏!」

「ああ!」

俺とシャルルが二手に分かれる。シャルルが四十院さんに向かって行ったということは、俺の相手は必然的に箒となる。白式の雪片式型と打鉄の葵が鏢迫り合う。ぐっ……! やっぱり剣道の力強さが活かされてるな。重い……!

「やっぱり受け止めると思っていたぞ! 素早く反応するとはな!」

「伊達にお前に鍛えてもらってないからな!」

「だが、足元が空いてるぞ!」

「があっ!」

いきなり足払いをしてきた。意外だぞ!? 普通だったら「武士としてやるものではない!」とか言いそうな感じなのに。

「意外そうな顔をしているな。だが、これは剣道ではなくISの戦いだ。……真がよく使うのを真似させてもらったがな」

「なるほど。納得だ……な!」

「むう!」

雪片で切り上げるが、箒は後ろへ下がって避けた。奇襲は失敗か……。

そこから先は、互いに喋らない。俺が斬りかかれば葵で受け止められるが、装甲目掛けて蹴りを放ったりしてシールドエネルギーを削る

ようにしていく。箒は剣で受け止めるだけでなく、身体を捻らせて避けながらも攻撃を仕掛けてくる。まだまだ……。まだ零落白夜を使うには早い。箒が構えを取る。目付きは、獲物を狙う鷹か鷲そのもの。俺も……。負けてられねえ！

俺はスラストターを噴かして距離を詰めようとする。箒も同様だ。そして、互いの刃がぶつかり……。..  
ダアン!!

何かが入り込んできた。俺と箒だけでなく、シャルルや四十院さんも音のしたほうへ顔を向ける。

「……。ボーデヴィツヒ?」

箒が呟く。目の前にいる黒い機体に長い銀髪。まさしくラウラだ。だけど、何か様子がおかしい。目は限界まで開かれていて、口から何か黒い霧のようなものまで漏れている。それに後ろの大穴……。まさか、ピットを無理矢理突き進んだのか!?

箒と四十院さん、シャルルたちで一ヶ所に集まって警戒する。

「二夏、あれは何だかヤバイよ」

「シャルルさんの仰るとおりです。何でしょうか、この殺気は……。」「すると、彼女の身体が紫色に光り始めた。何か泥のような物まで出てくる……。なんだよあれ!?

「いや……。だ……。嫌だあああああ!!!」

その瞬間、ラウラの機体が姿を変えた。腕の部分は鉤爪のようなものが生えた前足となり、背中からは膜が生えた翼のようなものが現れる。紫色の泥のような物はラウラをすっかり包み込むと、やがて頭のようなものへと変わった。

例えるならば……。怪物だ。

《緊急事態発生! クラス代表及び専用機操縦者は生徒の避難誘導を、警備担当の職員はアリーナへ出動してください!》

山田先生の切羽詰ったようなアナウンスが聞こえる……。ってヤバ

イ!

「うがあっ!」

「い、一夏!」

ラウラだったモノは、いきなり俺に向かって腕を振り下ろしてきた。不意打ちを受けた俺は大きく吹き飛ばされて壁に叩きつけられる。やっぱり、俺が狙いなのかもしれない。けどラウラ……。お前は、俺を倒すためなら何だっていいのかよ?

すると、千冬姉から通信が入ってきた。

「一夏! 大丈夫か!」

「も、問題ないぜ。千冬姉……」

「鎮圧部隊がそっちへ向かってる! それまでの間持ちこたえてくれ! 無闇に戦おうとするなよ!」

「そうは言っても……」

顔を見上げると、大きな前脚が俺に向かって振り下ろされようとしていた。ブースターを噴かしてその場から離れる。だが、その振動があまりにも強すぎたのか、衝撃波のような物を感じて姿勢が崩れた。

……あれ、中にラウラが取り込まれてるんだよな? もしあんな強すぎるのを放ったら、ラウラだって無事ではないはずだ。

「一夏! 大丈夫か!」

箒が駆け寄ってくる。シャルルはマシンガンを構えて俺の盾になるように、四十院さんは打鉄のブレードを構えてシャルルの横に立つ。

ラウラだったモノは、俺たちを見てグルルと唸ってる。もう完全に獣だな……。

「あー、あー。聞こえるか?」

「真? どうしたんだ?」

「いきなりでスマン。ただ、ちよつと嫌な仮説が出てきてしまつてよ……」

「嫌な仮説?」

「ラウラが変貌してしまつたが、あれはかなりヤバイ。お前達だけでなく、ラウラもな」

「そりやそうだろう。あんな人間でも辛そうな動きは……」

「それだけじゃねえ。アイツから嘖き出てる黒い霧のような奴は、精神に異常をきたすんだ」

「えっ!?」

オープンチャンネル

開放回線で話されてるのでシャルルや箒たちにも伝わる、衝撃の事実。黒い霧が精神異常を起こす? じゃあラウラは一番危険じゃないか!

〔鎮圧部隊が来る前に、ラウラが死ぬぞ。身体だけじゃなく、心もな……〕

「そんな……」

すると、ラウラだったモノが黒い塊を吐き出す。すぐに散開して被害は防げたが、着弾したところから黒い霧が円状に広がる。

すぐさま相手はシャルルに向かって噛み付いてきた。

「うわっ! こ、このおっ!」

「シャルルさん!」

相手の頭の部分にブレードを突き刺す四十院さん。俺と箒も、翼のような部分に向かってブレードを振り下ろした。無闇に戦うなっって言ってたけど、ここまで来たら戦うしかないじゃないか!

対してダメージは与えられないと思っていたけど、すんなりと刃が通った。立て続けに斬られたことに痛みを感じたのか、苦しそうな悲鳴を上げてシャルルを離す。噛み付かれた部分は、黒い霧が蠢いていた。

箒が慌てて駆け寄る。

「シャルル。その霧は……」

「うう……。痛くは無いのに気分悪い……」

「セシリアの時と同じだ。あの機体からの攻撃を受けると、こうなっってしまうのか」

「キャアッ!」

「四十院さん!」

相手は頭を振って、四十院さんを振り払った。それだけなのに大きく吹き飛ばされている。俺は雪片を構えて静かに突っ込んだ。再び

翼を斬りつける。

『奇襲をするときは大声を上げるな』。特訓のときに真が教えてくれた事だ。

「グルオオオオツ!」

「ラウラ! お前はそんな姿になってまで、俺を叩き潰したかったのか!」

「グアアアアア!」

「ぐっ! 力に溺れてしまつてどうするんだよ!」

「ゴアアアアア!」

「がああっ!」

相手が爪で引つ掻いてこようとするが、雪片で受け止める。すぐに斬ろうとしたが、尻尾が生えていたのか大きく吹き飛ばされた。さっきの壁に叩き付けられたときといい、頭がクラクラしてくる。

すると、後ろから何かが突っ込んでいった。

「ボーデヴィツヒいいい!」

「箒!」

「貴様、代表候補生ならば、そんな姿にならなくても一夏と渡り合えるのではないのか!」

「グウウウツ!」

「私は・・・かつて姉さんを憎んでいた・・・。幼馴染だった一夏と離れてしまつて、私は荒れた!」

首の部分を、箒はブレードで斬りあげる。

「そして剣道の全国大会のとき・・・。私は決勝戦で、相手を滅多打ちにした。だが!・・・虚しかった。優勝という名を手に入れても、嬉しくなかなかつた!」

箒は、喉が裂けるんじゃないかという勢いで叫びながら、胴体を斬る。そうか。入学した時に、箒が全国大会優勝の事を話題にしたら悲しそうな顔をしたのは、そんな事があつたからなのか・・・。

「ボーデヴィツヒ! 千冬さんとお前の間に何があつたかは分からない! だが、その様な姿になる事を千冬さんは望んでないはずだ!

目を・・・覚ませええ!」

「グルウウウアアアア！」

箒の叫びを掻き消したいかのように腕を振り上げる。その時、発砲音が響いた。音のしたほうを見ると、アサルトライフル『ヴェント』を構えているシャルルがいた。もう一発と言わんばかりに弾丸を装填し、頭部へ。かなり効いたのか、相手はよろめいた。

その時のシャルルと四十院さんの会話は、ブースターの音で聞こえなかった。

「・・・凄いい」

「え？ どうしたんですか、シャルルさん？」

「さっきまで気だるさのようなものがあつたのに、何か・・・撃つたら少し清々しいって言うのかな？ そんな気分になつたんだ」

「箒。下がっててくれ」

「一夏？ さっきまでフラフラだったではないか。大丈夫なのか？」

「箒が戦つてる間に頭がスツキリしたよ。ありがとな」

雪片を握り締める。これ以上時間をかけたら、ラウラがもたない。さつき以上に力を込めて斬りつけることを考えた。

相手は俺に向かつて唸ると、牙の生えた口を開けて一気に駆け出した。俺はブースターを噴かして振りかぶる。

「おおおおおっ！」

「ガアアアアアッ！」

胴体と首の付け根を、大きく切り裂く。そこから現れたのは、死んだように目を瞑っているラウラの姿。俺は手を伸ばして彼女の身体を抱きかかえる。

呼吸の音が聞こえる。良かった・・・生きてる・・・。

「グルアアアアアア！」

「っ!？」

振り返ると、前脚を振り上げる怪物がいた。まだ動けるのかよ!?

俺はラウラを庇うように抱きしめ、攻撃を受けようとする。すると・・・

——ババババンツ！

マシンガンによつて怪物は大きく仰け反り、黒い霧に覆われた身体は消えた。

発砲したのは、四十院さんに身体を支えてもらっているシャルルだった。彼女は少しニヒルな笑みを浮かべる。

「最後まで油断しちゃ駄目だよ？ 一夏」

「シャルルだったか。・・・サンキューな」

その後、俺達は先生方に肩を貸してもらいながら帰還。ラウラは保健室へ運ばれた。千冬姉による説教と、専用機の検査、反省文などの処罰はあったものの、トーナメント戦は幕を閉じた。

「・・・相棒？」

「ちよつと保健室へ行つて来ます。彼女と、話をしたいんです」



## 22話 力と目標

ラウラは保健室で目を覚ました。夕日が窓から差込み、美しい雰囲気を醸し出していた。ラウラは視界がはつきりしていくのを感じながら、ポツリと呟く。

「私は・・・何をしていたんだ？」

保健室のベッドで大人しくしていたが、フードを被った男から没収された専用機を受け取ってから、記憶が無い。身体がズキズキと痛んでいるのだが、何があつたのだろうか？

「目を覚ましましたか？」

「っ！ 十六夜・・・ミツル・・・」

声が出たほうへ顔を向けると、かつて自分の機体を斬りつけた細身の男、十六夜ミツルがいた。椅子に腰掛けて、リンゴの皮を剥いている。

ラウラはミツルを睨みつけるが、気付いていないのかそれとも敢えて無視しているのか、気にしていない様子だった。

「・・・なぜ貴様がここにいる」

「少々気になったのですよ。貴女がなぜ力に執着したのかを。あ、リングを食べます？」

「・・・いらん」

少しお腹が空いていたのだが、兎の形に剥かれているのを見た瞬間食べる気がなくなった。ミツルは「そうですか」と言うと、そのリングを食べ始めた。

静かな保健室に、リングを租借する音が聞こえる。その空間に戸惑いながらも、ラウラの口が動き始めた。

「教えてくれ。私はこの数時間の間に何をしていたのだ？」

「・・・貴女は知らないといけませんからね。自分が何をしようとしていたのかを」

「・・・?」

そこから先の話は恐ろしい物だった。フード男が渡した結晶は、心身に影響を及ぼす危険な物であったこと。そしてそれを手にした者

はとてつもない力を得る代償として、段々と狂気に飲み込まれてしま  
うという事を……。

思えば、ここ最近の織斑一夏に対して抱いていた憎しみのような嫉  
妬のような感情は、殺意に変わっていたような気がする。あれは恐ら  
く、狂気によって引き起こされたものだったのだろう。

そして今回、その狂気の塊に飲み込まれて機体に変貌し、アリーナ  
で大暴れしたという。

ラウラは、自分が悪魔の取引に応じてしまったことを知った。顔を  
俯かせる。

「私は……何と言うことを……」

「さて、私は貴女の質問に答えました。今度は私の質問に答えてもら  
いますよ？　なぜ、そこまでして強くなるうとするのです？」

「強くなければ認めてもらえない。私に光を与えてくれた教官  
に……」

ラウラは己の過去を語った。自分の目に施された『越界の瞳』ヴァーダン・オージェの  
事を。そしてそれが暴走状態に陥ったために、部隊内で『落ちこぼれ』  
の烙印を押されたことも。そんな自分を部隊内最強へ導いてくれた  
のが、一夏を救出してもらった借りを返すために教官としてやって来  
た織斑千冬だったことも話した。

ミツルは黙って聞いていた。彼は理解していた。絶望の淵にいた  
人間が光を与えられた時、救ってくれた者に対してどのような感情を  
抱くかを……。

「貴女は、織斑先生に憧れを抱いていたのですね」

「私は分からなかった。なぜ教官が自らの栄光を捨ててまで弟を取っ  
たのかを。世界最強という称号を投げ捨てるほどの価値があるのか  
と、思っていた」

「……貴女には、目標はありますか？」

「目標、だと？」

「私は持っています。『東風谷真を打ち負かす』。それが私の目標で  
す」

「な!？」

ラウラは驚いた。ミツルと真は周りから見ても良きパートナーだ。互いに支えあうこそ、パートナーではないのか？

「真さんも、私を倒すために強くなろうとしています。しかし、かつて私達は……強さを求めるがあまりに道を踏み間違えそうになった事があるんですよ」

「なんだと？」

ミツルは目を閉じて思い出す。あの時……真と仲が悪かった頃、真を倒すがために『モンスターの宝玉』に手を出そうとしたことがあった。

幻想郷を壊滅させる力を持つという言い伝えに惹かれたとき、それを父である影夜が引き止めた。その時に言われた言葉は今でも覚えている。

『自分と言う存在をかなぐり捨ててまで、果たしたい目標なのか？』。私は、強くなろうとしていたはずが人間を止める道へと走っていたのです」

「……私は」

「ん？」

「じゃあ私はどうすればいいんだ！ 私はもう、教官を失望させてしまった。クラスの皆だつて私のことを軽蔑してるだろう。私はもう……独りだ」

ラウラは俯いて涙を流す。肩は震え、ベッドの布団を握り締める力は強かった。

怖かった。あの、落ちこぼれと呼ばれていた頃がまたやって来るのではないか。もう、あの時のように手を差し伸べてくれる人はもう居ないのだと分かっていれば、なおさらだ。

その時だ。両頬をミツルが押さえ、こっちへ無理やり振り向かせた。突然の事に目を白黒させるラウラ。彼女の目の前に映るのは、自分よりも赤く、紅く目を光らせるミツルの顔だった。彼は真剣な表情で言った。

「良いですか？ 人間と言うのは必ず何かの支えがあつて生きていられるのです。自分の力のみで生きる事も、出来るには出来るでしょ

う。ですが……それはあまりにも脆すぎる。他の人たちの支えは、とても強力です。それを自ら捨て去るとするのは、あまりにも浅はかだ」

「だが、私はもう……」

「他の者たちと関わらないようにすると？ やれやれ……。ドイツ軍人が聞いて呆れますね。要するに、悪口を言われるのが怖くて逃げているだけじゃないですか！ 聞けば貴女は隊長らしいですね。矢面に立つ立場の貴女が、そのような物から逃げてどうする！」

その時ラウラは、千冬の後姿を思い出していた。何かしらのアドバイスを貰った後に去るその背中、日本代表だった頃と比べて、とてもピンとしていた気がする。

もしかして、弟……。一夏のことを語るとき表情がどこか優しげだったのは、一夏という存在が居たのかもしれない。

「(私は教官と同じになりたいのではない……。私は……。)」  
気付くと、ミツルは保健室から出て行こうとしていた。

「貴女と同じくらいしか生きていないのに、偉そうな事言ってます。ですが、これからどうするか。それは貴女次第だと思いますよ」

ラウラのほうへ向ける彼の『黒目』は、どこか優しげだった。

彼が出て行った後に食べた、いつの間に向いたのか半月形にカットされたリングは、甘酸っぱかった

## 23話 トーナメント戦後

「み、みなさん、おはようございます……」

タッグトーナメント戦の翌日。俺たちの副担任こと山田先生が、何やら疲れた表情で教室に入ってきた。一体何があつたんだ？

すると、一夏が顎に手を当てて呟いた。

「目玉焼きが半熟じゃなくてテンション上がりません、とかか？」

「お前は何を言ってる……いや、山田先生だと、何か否定できねえ」

こう言っちゃ悪いけど、慌て方とか弱気なところって子供っぽく感じてしまうんだよな。……あつ、ジト目で睨んでる。

「今日は皆さんに転校生を紹介します……。転校生って言うよりは、もう皆さんに紹介済みと言いますか。はあ……」

『?』

山田先生の言葉に首を傾げる俺たち。転校生でありながら紹介は済んでいる？ どういうことだ？

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

ん？ この声は……。そうか、なるほど。どうりで朝から姿を見ない訳だ。

「シャルロット・デュノアです。よろしくお願いします」

ペこりと頭を下げるのは、『女子の制服を着た』デュノアだった。そうかあ。女子として過ごすことに決めたのか。デュノアは俺と一夏をチラリと見ると、小さく手を振っていた。俺たち二人は、彼女が行き方を決めたことに安堵の笑みを浮かべてしまう。

一方教室では、男子だと思っていたのに女子だったということに対して、驚きや落胆などの声が出てくる。だが、誰かのある一言によって、その空気は固まる。

「確か織斑君って、デュノアさんと同室だったよね？」

……あ。そういえばそうだった。

「昨日って確か、男子が大浴場使ってたよね!？」

え、そうだったの？ 俺は帰ってすぐにシャワー浴びて寝てたか

ら、分からなかった。

横目で一夏を見ると、嫌な予感を感じ取ったのか顔を青くしていた。それと同時に、後ろから殺気のような物を感じる。恐る恐る振り返ると、般若の如きオーラを漂わせてる箒が・・・って、怖っ！

「一夏！ まさか、デュノアが女だということを知っていたのか!？」

「えっ、あ、いやあ・・・そのお・・・ハイ」

「では、風呂に入ったのは本当なのか!？」

「いや、それはさすがに・・・」

「酷いよ一夏。昨日は背中をピツツツタリと合わせたじゃないか」

「あ、ちよっ!？」

「一夏あ！ そこに正座だ!」

「待て、箒！ 確かに風呂には入ったけど、やましいことはしていない！ 無実なんだああ!」

・・・修羅場と化してる。っていうか、一夏とデュノアは何やってんだよ？ よく見ると、デュノアの奴は顔を赤くしながらクネクネしてるし・・・明らかにこの場を楽しんでるだろ？

すると、扉がガラツ！と勢いよく開かれた。あれは・・・鈴？

「一夏あ！ 廊下まで聞こえたわよ！ 私にも詳しく説明しなさい!」

「鈴さん！ まだSHR中ですから!」

衝撃砲を展開しようとしてる鈴と、それを抑えようとしてる相棒。教室では箒が一夏に説教をして、デュノアがその場を乱してる。セシリア？ 彼女は風呂場の出来事を妄想してしまったのか、顔を赤くしてる。えーと、もしかして俺って空気？

そう思っていると、鈴が突如崩れ落ちた。スパアンツ！という音と共に。彼女の後ろには、ボーデヴィツヒを連れた織斑先生がいた。最近俺の中で、出席簿が武器の一つに数えられてもおかしくないような気がしてきた・・・。

「SHRを抜け出すな馬鹿者。十六夜、教室へ戻ってくれ」

「はい。かしこまりました」

相棒が一礼をすると、鈴を引きずって戻っていった。それを見送った織斑先生はそのままツカツカと箒とデュノア、一夏の後ろへ立ち、出席簿を振り下ろす。

「「ぎゃうんっ!?!」」

「SHRでは無闇に騒ぐな。それと席を勝手に立つな」

「(き、教官……。ドイツ軍での時代よりも威力が上がっている……。)」  
「さて、遅くなってしまうって申し訳ない。見ての通り、ボーデヴィツヒの体調が回復した。これからは再び彼女も授業を受ける事になるが……。その前にボーデヴィツヒから言いたい事があるのだそうだ」  
すると、ボーデヴィツヒは少しだけ前に出ると勢いよく頭を下げた。

「こ、今回は、皆にこのような迷惑をかけてしまい、本当に申し訳ありませんでした!」

……。ほう。昨日、相棒がボーデヴィツヒと話がしたいとは言っていたが、まさかこのような事になるとはね? どうやら彼女は何か新しい目標のようなものを見つけたみたいだ。たった一言の謝罪の言葉だが、彼女の真剣な眼差しと姿勢、雰囲気から、何かが変わったと分かる。

すると、一夏がジッとボーデヴィツヒを見ていた。

「……………」

「織斑一夏。私はお前を倒そうと思うがあまりに悪魔の取引に応じてしまった、愚か者だ。だが、今度はその様なものに頼らずに、お前を倒してみせる!」

「……………望むところだ!」

一夏とボーデヴィツヒが硬い握手をする。その瞬間、箒とセシリアが二人に拍手を送った。当然、俺もだ。そしてそこからクラス中に拍手が沸き起こる。

……。なんつーか、俺と相棒がコンビを組んだ時と似てるなあ。

『絶つつつ対に、テメエに参ったと言わせてやる! 正々堂々と、自分自身でぶつかってやらあ!』

『望むところですよ！ そのゴツイ身体、大きな傷を刻んでやりますよ！ 宝玉に頼らなくともね！』

いけねえ。チビだったころを思い出しちまった。幻想郷にいた頃を思い出して、少しだけ心が切なくなる。

「さて、それではSHRを終了する」

織斑先生の一言で、この大騒ぎのSHRは幕を閉じた。

昼休み。俺は本音や一夏たちと共に、食堂で昼飯を食っていた。

「それじゃあラウラさんは、今はドイツの代表候補生ではないと？」

「うむ。専用機の詳しい検査と、イベントを潰してしまった事に対する罰と言う事で、代表候補生の資格を一次剥奪するというそうさ。最悪、そのまま資格は取り消され、軍からの降格か退役処分もあるだろうな・・・」

シャルロットとラウラから、それぞれ下の名前で呼んで良いと言われた。それで今俺たちが話しているのは、二人のこれからについてだ。

「しかし、他人との書類が混じってて記入ミスとは・・・政府側も大変みたいですね」

「そ、そうだね。アハハハ・・・(ううう！ 会社の命令で男装してたなんて言えないよ)。確かに、政府側が間違えたって事にはなってるけどさ」

セシリアとシャルロットが話をしている。え？ 一夏はどうしたの？ そりゃあ・・・

「一夏、アンタねえ・・・。アンタのラッキースケベは違う意味で天才よ！」

「女子の告白に気付かないのにラッキースケベは起こるといふのは、一種の才能ではないのか？」

「があっ！ 心が抉られる！ そんな道端の石ころを見るような目で



見ないでくれ！」

シャルロットとの生活を聞き出して、なにやら男装が判った瞬間について自白させられてる。つかシャワーを開けたときに男装が分かったって……。あいつは凄いな。あんまり憧れないけど。

「むい〜」

「お前は相変わらずのほほんとしてるな、本音」

「東風やんのご飯は〜、ぽわぽわして美味しいんだ〜♪」

柔らかい笑みを浮かべて美味しそうにオムライスを頬張る本音。何だよ。嬉しくなっちゃうじゃないか。顔が少しだけにやけてるのを自覚しつつも、味噌汁を一口。うん、美味しい。

すると、他の奴らが俺と本音を見ている。ん？ 何だ？

「思ったけど、真とのほほんさんって……」↑一夏

「お似合い、ですわね」↑セシリア

「さりげなく甘い雰囲気を作り出してるな」↑箒

「何というか……お兄ちゃんと妹って感じ？」↑鈴

何で俺がお兄ちゃんの立ち位置になってるんだよ……。前にも言っただかもしれないけど、俺は一人っ子だつっうの。

俺が豚のしょうが焼きを食っていると、本音はその皿をじっと見つめている。まさかと思うが……。

「東風やん〜。そのしょうが焼き一切れ頂戴〜」

「やっぱりな。そんじゃあ、オムライスと交換だぞ？」

「大丈夫だよ。だから……あーん」

「え？」

「あーん♪」

少し大きめに口を開けて待機してる本音。周りがざわついているが、その理由は分かる。これは……俺が食べさせてあげるやつだ！

マジで？ 母さんが父さんにやってるやつと同じことをするの!?

「ほら真？ 布仏さんも待ってるんだからやってあげなよ〜」

「シャルロット、てめえ……！ 相棒！ 助けてく——」

「しかし、あの時の剣さばきは中々だったぞ。高速切替というものか？」

「そうみたいです。しかし、私よりも父のほうがナイフの取り出しが早いですよ。本当、修行の時は死にそうになりました・・・」

「と、遠い目をしてるが何があったのだ!?」  
駄目だ。ラウラのやつと話をしてる・・・って、こっち見てニヤけてないか!? わざとだろ相棒!

見ると本音は、少し悲しそうな顔をしながら俺を見てる。

「むう~~~~~」

「あ・・・そのお・・・」

「あくん」

「分かったよ。あげるから。あげるからそんな目で見ないでくれ。・・・ほら。あくん」

「わーい! あくん」

満面の笑みでしようが焼きを頬張る本音。ところで、何で皆はもつと騒いでるの?!

『いま、東風谷くん自分の箸であげてたわよね!』

『ってことは、関節キスよね!』

『『『キヤアアアアアア!!』』』

本音はオムライスを一口分スプーンですくうと、俺のもとへ運んでくる。癒されるのほほんスマイルを振りまきながら。

やる方はやる方で恥ずかしいんだが、やられるのも恥ずかしいな・・・。

「お返しだよ。はい、あくん♪」

「お、おう。あくん、むぐむぐ・・・」

『『『キヤアアアア!』』』

「た、互いに間接キス!? どうしてアタシ達には出来なくて、あの娘には出来るのよ!?!」

「気が合うもの同士だからこそ出来るものなのか? むむむ・・・。私も一夏に積極的に仕掛けるべきか?」

外野が何か騒いでるが、俺たちはその事を気にせずに食事を続けたのだった。

「美味しかったね、東風やん」

「そうだな。俺もさ、本音と一緒に食べるご飯って、心が暖かくなって  
楽しいんだよ」

「はうっ!? あ、ありがとう」

「おーい? 顔が赤いぞー?」

## 24話 いざ、レゾナンスへ

『おとーさーん！ ご飯だよー！』

『ああ。今いくよ、真』

晴れ渡っている幻想郷の空の下、俺が大きな声で呼びかける。すると、神社の湖の近くの畑でクワを振るっていた父さんが、俺のほうへ顔を向けて笑顔で答えた。

また午後にも作業の続きをするんだろう。クワをそこら辺に置くと、首に掛けてた手拭いで汗を拭う父さん。そんな父さんに、俺はあるおねだりをする。

『おとうさん。肩車してー！』

『はっはっは。お前は肩車が好きだなあ』

『うん！ とっても高くて、好きー！』

目の前がぐつと高くなって、地面を見渡すような高さになる。遠くから守谷神社の鳥居が見える。今日のお昼ご飯は、母さん特製のおうどんだ。八雲藍さんがおすそ分けした油揚げを使ったきつねうどんだから、早く早くとせがむ。父さんは笑いながら、はいはいと答えて、歩くスピードを少しだけ早くした。

・・・しばらく歩くと、俺は、ある疑問を思い出した。

『おとうさん。どうして僕の名前は真なの？』

『え？ どうした、いきなり？』

『諏訪子さまとか神奈子さまが言ってたよ。名前には意味があるんだって。なんで僕の名前は真なの？』

『え、あ、いやあ……。今のお前には、理解できるのが難しいんじゃないかなあ？』

『おーしーえーてー！』

『あ、危ない！ 頭を揺らすな！ 分かった！ 分かったから！』

いっつもそうだ。父さんは、「お前には難しいから」って質問を誤魔化す時がある。俺は父さんの頭を両手で掴んでグラグラと揺らす。

でも、父さんの力には敵わない。脇腹を両手で掴まれると、そのまま地面に降ろされた。もうちよつと高い景色を見たかったのに……。

父さんは俺の頭に片手を置くと、優しく撫でる。そして俺に視線を合わせるようにしやがんで、俺を見つめながら答えた。

『真。お前の名前の意味は――』

「――やん！ 東風やん！」

「・・・んあ？」

「もうちよつとで着きますよ。起きてください」

肩をゆさゆさと揺られて目を開けると、父さんの顔は無く、車窓から景色が流れていた。ちらりと横を見ると、学園の制服を着た本音が、俺をじつと見つめている。

少し目を瞬かせたあとに周りを見渡すと、同じように制服を着た相棒と、眼鏡をかけた水色髪に赤い目の女子・・・確か、簪って名前だったか？ その二人も俺を見つめている。

「あれ？ 俺・・・」

「忘れたの？ 今日、臨海学校に向けてお買い物するって話だったでしょ？」

「・・・ああ。ああ、そうだった」

思い出した。もう少ししたら、校外実習こと臨海学校ってのがあるらしい。3日の日程のうち初日が自由時間で、その遊び場所と言うのが・・・

「海、かあ」

「東風やんは、海を知らないの？」

「いや、父さんや母さんから話を聞いたことがあるくらいで、な。行くのは・・・」

「もしかして、東風谷くんと十六夜君は、海無し県出身なのかな？」

「ま、まあそうですねえ。アハハハ・・・」

そう。海っていう、妖怪の山や紅魔館の近くにある湖よりもデカイ水たまりなのだ。父さんや母さん、白斗さんなんか偶に話してくれ

て、そのインパクトが強すぎて印象に残っている。とても塩辛いつて聞いたけど、どんな感じなんだろう？ 味噌を入れすぎた味噌汁みたいな物なのかな？

とにかく、泳げるほど広いらしいから、水着を買いに行こうと本音に誘われたのが昨夜のこと。そして今朝、相棒のルームメイトである簪も一緒になったんだ。(互いに自己紹介をした後に、姉と混同されない為にも下のほうで呼んでほしいといわれた)

それで、このモノレールつてのに乗ってデカイ店に向かっている途中、日光の気持ちよさに俺は眠ってたわけだ。

「海に行ったことがないってことは・・・泳げないの？」

「いえ、泳げますよ。川とか湖で泳いでましたので。ただ、真さんは・・・」

「言うな。言わないでくれ、相棒！」

「川を泳ぐというよりは、流されてるのが多かったですよね？」

「言うなっつってんだろぅがあー！」

修行の一つに、にとりの操る激流を耐え抜くつてのがあった。河童の河城にとりは「水を操る程度の能力」つてのを持つ。その力で川の流れを激しくして、俺はそれにひたすら踏ん張って耐え抜くつてやつだ。

だが、俺の能力「岩竜になる程度の能力」は、水に弱い。水圧による痛みは尋常じゃなく、下手したら死ぬような内容だ。だが、父さんは言った。

『敵に弱みを見せるような鎧となるな。弱みを見せない、不動の要塞となれ』と。

これは俺だけじゃなく、父さん自身にも言いつけていることらしく、父さんも似たようなことをやっているのを見たことがある。だから、俺は文句を言わずにやってこれた。

・・・まあ、もの見事に山の中腹から一気にふもとまで流されたけどな！

「泳げないわけじゃないんだよ。そこは勘違いしないでくれよっ！」

「大丈夫。いざと言うときは、私がレクチャーしてあげるからさっ」

「本音、その優しさは偶に物凄いダメージを与える劇薬になるからな？」

「つていうか、本音のレクチャーつて不安・・・」

そういう内には、駅までついたようだ。俺と相棒は、本音と簪と共に、外の世界の喧騒へと突入した。

く本音視点く

「おお、スゲエ。相棒。あれが車つてやつじゃねえか？」

「真さん、あまりキョロキョロするのはみつともないですよ。・・・うわ、本当だ」

東風やんとみつちーは、辺りをキョロキョロとしながら興奮している。二人とも田舎の出身だつて聞いてたけど、車もないような遠い山奥から来たのかな？ 一体どんな場所なんだろう？ いつも東風やんはお父さんやお母さんの事を嬉しそうに話す。そして周りの人たちも、厳しい人もいるけどいい人たちばかりだつて言つてた。それに、女の人が男の人より偉いなんて考えを持つ人もいないつて言つてた。きつと、いい場所なんだろうな。

ずつと前に、東風やんとかみつちー、おりむーのことを良く思っていない先輩達が、東風やんのことを『マザコン』とか『ファザコン』なんて言つて馬鹿にしてるのを聞いた。聞いてしまった。その時に胸がチクリと痛くなった。彼はただ親のことが大好きなだけなのに、なんで馬鹿にされなくちゃいけないんだろう？ そう思つたんだ。

「二人とも、大きな街に来たのは初めてみたいだね」

「そうだね。そういえばかんちゃん、どんな水着にするの？」

「・・・考えてなかった」

「ほえ？」

「十六夜くんが、たまには外へ出てリフレッシュしてみましようつて、無理やり・・・」

そっか。きつと、みつちーはかんちゃんが少し無理してるに気付いたんだ。

かんちゃんとは日本代表候補生だけど、専用機がまだ完成してない。倉持技研がおりむーの白式を開発する事を優先しちゃったから、かんちゃんの打鉄式が遅れてしまった。そしたらかんちゃんは、自分ひとりで作り上げるなんて言い出して、いつもいつも夜遅くまでプログプログラミングとかをしている。

見ると、前まで疲労が顔に出ていたのに、何か顔色が良いような気がする。きつとみっちーが、色々と気を使ってくれてるんだなあ。

「・・・私は全然駄目駄目だなあ」

「・・・どうしたの、本音？」

「ううん。ひとり言う。早く行こうよ。東風やんとみっちーも〜！」

「うん？ ああ、待つてくれよ〜！」

「あ!?! いつの間にあんなところまで!?!」

東風やんとみっちーは、私達と距離が離れることに気がついて、大慌てで走ってきた。おおく、はやーい。

「悪い悪い。俺とされたことが、はしやぎ過ぎたぜ」

「真さんならともかく、私まではしやいでしまうとは・・・」

「おうコラ、どういう意味だ？」

東風やんは言葉では怒っているけど、表情は笑ってる。この二人はとても仲が良い。

私はちらりとかんちゃんを見る。・・・やっぱり、まだ仲良く出来ないのかなあ。

「冗談ですって、全く」

「相棒の冗談は笑えねえんだよ。さて、バカはこれくらいにして行こうぜ。店の名前はなんだっけか？」

「レゾナンス、だよ」

「サンキュー、簪。そんじゃあ早速行こうぜ！」

東風やんの掛け声に、私は「おー！」と腕を上げて答える。

でも、私は知らなかったんだ。まさか、東風やんのあんな顔を見るなんて・・・。



## 25話 真、切れる。

俺たちは、デカイ店こと『レゾナンス』に来ている。こう、建物の中に店があるってのは不思議な雰囲気だ。幻想郷では併設つてのはあまり無いからなあ。

上をチラツと見ると、なにやら英語とかで書かれた看板やら和食レストランの看板やらがぶら下がってる。うへえ、迷子になるな。こりゃあ。俺と相棒は本音たちについて行き、レゾナンスの案内図を見る。

「んで、本音たちは水着を見に行きたいと・・・」

「うん。東風やんの泳ぐ姿とかも見たいし」

「はあ!? 俺の水着か!?!」

「うん。東風やん、家に帰ってないんでしょ? 水着とか無いと思うし、買っておくべきだと思うんだ」

「マジかよ・・・」

水着、かあ・・・。テレビで見たあのパンツみたいな奴だよな?

幻想郷にいた頃はフンドシだったから、どうにも実感が湧かねえ。

・・・あ、相棒のやろう、俺が悩んでることを笑ってやがるな?

だが、笑ってられるのも今のうちだぜ?

「十六夜君の水着も・・・買うよ?」

「ええ!?!」

「だろうな。俺だけ泳いで相棒だけ泳がないなんて、おかしいもんなあ?」

「で、ですが・・・何も私まで・・・」

「女子達はお前の水着姿を期待してるかもしれないんだぜ? 期待を裏切ることには出来ないんじゃないか?」

「ぐっ・・・!?! この野郎・・・!?!」

ふっふっふ。相棒。口が悪くなったって、俺とお前が水着を買うつて運命は変わらないぜ。

結局、相棒は頭をガツクリと垂らして、買うことを決めた。と言うわけで、二階へレッツゴーだぜ。

「・・・簪、本音。俺たちは水着を買いに来たんだよな？」

「う、うん」

「そうだよ、東風やん？」

「そうか。だけどよお——今の世の中は、男に女物の水着を買うように勧めてるのかい？」

目の前にある水着売り場。ものの見事に、女物しかねえ。ピンクやら黒やらカラフルな水着が盛りだくさんだ。きつと一部の男だつたら、狂喜乱舞してこの売り場に突っ込んだことだろう。だが俺たちは、そこまで変態じゃねえ。だからこのように、一步も入れないって訳だ。

「レ、レゾナンスにはちゃんと男物もあるよ・・・？」

「ですが、そのような場所なんてどこも・・・」

「あつたよ〜！」

見ると、売り場の端っこに、ちよこんと男物の水着が陳列されている場所があった。

・・・マジかよ。え、いくらなんでも目立ってないだろ！俺と相棒は思わず顔を見合わせる。簪と本音にいたっては、ありえないという風な表情だ。

すると、簪が口を開いた。

「多分、女尊男卑によるものだと思う」

「はあ？」

「こう言ったらなんだけど・・・男物売ることに、抵抗があるんじゃないかな？」

「・・・」

相棒は眉間にシワが寄ってる。多分俺も、同じ表情をしてるだろう。

女尊男卑。呼んで字の如く、女性が尊ばれ男性は疎まれるという、俺たちからすればクソツタレな思想。その理由が、「最強であるIS

を動かせるのは、女性だけだから。」

そんな理由だけで、男という存在を全否定する奴だっているらしい。実にくだらない。ISを動かせるかどうかで強弱を決め付けるなんて、どれだけ浅はかなんだろうと思う。

「こ、東風やん。顔が怖いよ……」

「え？ ……ああ、悪い。やっぱり男である俺からすれば、こんな思想は嫌だからよ」

「私もです。そもそも、ISに乗ったことがない人が偉ぶってるのは、気に入らないんですよ」

「乗ってる人の中にも、いるんだけどね。女尊男卑の人……」

本当、外の世界ってのは驚きのほかにも苛立ちなんかもあるんだな。そこは、ちよつと気に入らないところだ。

「ちよつと、アンタ達。そこ退きなさいよ」

「ん？」

「あんた等がそこに突っ立てるから、ワタシ達が店に入れないうんですけどー」

不機嫌そうな女の声だったので振り返ると……なんつか、すっげえ気色悪い化粧をしている女が3人ほどいた。そんな女3人衆は、俺と相棒に対して侮蔑の視線を送っていた。

もしかしてこいつ等、女尊男卑の思想を持つ奴等じゃないよな？

「すみません。すぐに退きますので。ほら、真さん。行きましょう」

「あ、相棒？」

「……私たちはIS学園の制服を着ているんですよ？ 彼女達が私たちに変なあてつけでもしたら、学園に迷惑をかけてしまいます」

「……ああそうかい」

気に食わないが、相棒が小声で言った事はもつともだ。俺は苛立ちをグツと堪えて、黙ってその場から離れようとする。

だがそれを、肌を痛々しいくらいに茶色くしている女が呼び止めた。

「ちよつと待ちなさいよ。アンタ、今不機嫌そうな顔したわよね？

何様のつもりよっ」

「・・・それってもしかしくなくても俺のことか？」

「アンタをこうやって呼び止めてるんだから自覚しなさいよね。アンタ以外に誰がいるのよ」

「そうかい。んで？俺が不機嫌そうな顔をして、アンタに不都合があるのか？」

「男の癖に、なにそんな顔してんのよ！」

その瞬間、俺の頬に痛みが走った。つまりはビンタされた。俺の周りには、啞然とする者とクスクスと笑ってる者の二つの人間がいた。当然、簪たちは前者だ。

「素直に『すいませんでした』って言っていなくなればよかったのに、何よそのツラ？男の癖にISを動かしちやってさあ、調子に乗ってるんじゃないの!？」

「・・・」

俺は返事をすることも無く黙る。なぜか？

・・・無性に苛立ってるからだよお！

もしビンタした相手が、俺のことが嫌いで且つ俺も顔を知っている奴だったら、ビンタされてもそこまでイラつかなかった。俺が調子に乗った覚えが無くても、相手にとってはそう見えたかもしれないからな。だが今回は、見ず知らずの奴にいきなりのビンタ攻撃を受けたのだ。しかも「男の癖に」という単語を繰り返して。

この事に俺はかなり苛立ってるんだぜ？これで暴れてないのがまだ良いほう——

「そもそも男なんて育てるこいつの母親ってさあ、ロクでもない奴なんじゃないの？」

「ありえるー！こいつのお父さんなんか、絶対にブサイクに決まってるって！」

「「キヤハハハハハハハハハハ!!」」

ああ？今、なんだった？

俺の中でブツツンという音が聞こえた気がするが、気のせいだろう。

今こいつ等は何て言った？ こいつ等・・・俺の父さんと母さんを馬鹿にしたか？

「こ、東風やん・・・」

「東風谷くん・・・？」

俺の身体が、自然とブルブルと震える。それと同時に熱がこもっていくのが分かる。本音と簪が何か言っているような気がするが、気のせいだろう。

「真さん！ 落ち着け！」

ああ駄目だ。もう我慢できねえ。俺の大好きな父さんと母さんを、こいつ等は・・・！ こいつ等は・・・！

「・・・黙れよ」

「は？ 何を言っつて黙れつつつてんだろうが！」ヒイツ!?」

「俺のことを何て言おうが関係ねえ。だがな・・・だがよお・・・俺の親を馬鹿にすることだけは、絶つつつ対に許さない!!」

「ア、アンタ、もしかしてファザコンとマザコンかよ。キモイわ！」

「ああそうだろうな。周りから見れば気持ち悪いだろうなあ。だが！

それでも俺は、父さんと母さんが大好きなんだよ！」

目の前の女は足をガクガクと震わせながら、俺に何かを言おうとしてくる。だが震えてるせいでまともに喋れていない。久しぶりだぜ。親を馬鹿にされてここまで切れたのはよお。

いつそのこと能力を発動してこの女をぶっ飛ばそうかと考えた矢先に、凜とした声が聞こえた。

「一夏の次はお前達か・・・。何をしている」

「お、織斑先生・・・」

「ブ、ブリュンヒルデ!? なぜここに・・・」

「私がショッピングモールにいてはおかしいか?・・・さて、これは一体何があったのだ？」

声の正体は、俺や一夏の担任こと織斑先生だった。隣には、この状

況にしどろもどろになっている山田先生もいる。いきなりの先生の登場に、俺の身体から熱が抜けていった。

「東風やん……」

「……悪い、本音。怖い思いをさせてしまった」

「……私は、東風やんのお母さんやお父さんを馬鹿にしないよ？」

「え？」

「逆に、私もムカーってなったもん。東風やんが楽しそうに教えてくれるような人、私は会ってみたいなく」

「本音……」

ああ、本当に彼女は優しい。俺は、本音の笑顔をみて、心が温まるのを感じた。

すると、相棒や簪から話を聞いていた織斑先生が、女3人衆を睨み付けた。

「話は聞かせてもらったぞ。彼らが貴様らの要求に応じてその場から去ろうとしたが、その一人が私の生徒の表情が気に入らないという理由で呼び止めた挙句、手を挙げたそうだな？ 無抵抗の者にいきなり手を挙げるとは、たとえ女性優先法と言うものがあっても、警察は見逃す事は出来んぞ」

「ぐっ……！」

「おまけに、その家族まで馬鹿にするとは……。それは、相手が織斑一夏だったら、家族である私を馬鹿に出来るということだな？ ？」

「そ、そんな訳では……」

「とつとと行け！ 貴様らのような存在は、目障りだ！」

そう言うと、女たちは蜘蛛の子を散らすように逃げていった。それを冷めた目つきで見届けた先生は、今度は俺のほうへ向く。

「お前の気持ちは分かる。だが、あまり余計な騒ぎを起こすな。お前は感情的になる面がある。もっと抑えることが大切だという事を学べ」

「……すいませんでした」

俺はただそう言うと、そのままトイレの方へ走って行った。

「ぐっ……うっ……」

トイレの鏡がが歪んで見える。理由は簡単だ。俺は今、泣いている。

「馬鹿にされた事に対して切れちゃあ、いけないのかよお……！」  
嫌なことを嫌と言ってはいけないのだろうか？ あんな命令っぽい口調で言われたら、不機嫌になるだろうが。そんな顔をしただけでも駄目だなんて……。外の世界は窮屈過ぎる。

「あーあー。やっぱり泣いてましたか」  
「……相棒か」

どうやら俺の後を追ってきたらしい。相棒は、やれやれといった表情で俺を見ていた。正確には、鏡に映っている俺の顔を、だ。

「まあ、気持ちちは分かりますよ。私だって実際は、能力を押さえ込むのに必死でした。下手したら私が暴れてたかもしれない」

「……この世界は、本当に女尊男卑なんだな。改めて実感しちゃった」  
「そうみたいですな」

「父さんや影夜さんのことといい、外の世界って、汚い世界なのかな……」

俺はポツリと呟く。父さんが俺と同じ位の頃、能力のことを知った人たちは父さんを忌み嫌ったらしい。影夜さんに至っては母親と父親、すなわち相棒の祖父ちゃんと祖母ちゃんに当たる人を殺されている。

その話を神奈子さまや文姉ちゃんに聞いたことがあるから、最初は外の世界は行きたくなかった。でも、本音や一夏、箒やセシリアに鈴、最近ではシャルルやラウラのような仲間達と出会えたことで、俺の中の外の世界の印象は変わりつつあったんだ。

だけど今は、それが元の状態に戻りつつある。外の世界はやっぱり汚い世界。そういう思いが芽生え始めてしまった。それを言うのと、相棒は否定した。

「例え話をしましょう。埃がたくさん積もってる部屋があると思って

ください」

「え?・・・まあ、汚い部屋だよな」

「貴方はそれを嫌いなながらも入ってしまいます。すると、紙などで被せられていたのか、埃が被ってない金細工を見つけました。・・・どうです?」

「・・・なるほどね」

相棒の言いたい事は分かった気がする。埃だらけの部屋つてのは外の世界を指してるんだ。そして部屋で見つけた金細工つてのは、本音たちのこと。

つまりこう言いたいんだ。「外の世界全体が汚いというわけではない」ってな。

「その金細工を見れるだけでも、幸せだと思いませんか?・・・まだ外の世界を見限るのは早いですよ」

「へっ。相棒には励まされてばかりだ」

「まさか。真さんだつて、私が挫折そうになったときに、熱い言葉をかけてくれるじゃないですか」

「ありやあ父さんとかの受け売りだ」

「そういうことにしますよ。そろそろ出ましよう?　本音さんたちも付いて来てるので、待たせてるんですよ?」

「おっと、そりゃいけねえ。早く行こうぜ!」

久しぶりに怒って、泣いて、心が軽くなったような気がする。

見限るのはまだ早い・・・。そうか、そうだよなあ。もう少しだけ、外の世界を見てみよう。そう思いつつ、俺は相棒の後を追った。



## 26話 真たちと海と天災ウサギ

「真。もうすぐだぜ」

「いよいよか……。ワクワクするな」

ついにやって来た、臨海学校。俺たちはバスに揺られながら、今回泊まる宿へと向かっていた。目の前には木々の隙間から青い色が見えた。前を見ると、木が無くなっている。つまりもう少ししたら広い海が見える訳だ。

「3……。2……。ああ！ 見えるの早いつて！」

海が見えるまでのカウントダウンをしていた相川が、悔しそうな声を上げる。一方、俺は、バスの窓から現れた光景に見惚れてしまっていた。

空の青と、海の蒼。その二つが挟むのは一本の線、水平線ってやつだ。そこには果てが見えなかった。今まで見て来た湖の景色では、空と湖面の間に森林の緑があった。それに比べたら色は一色だけ減ってるけど。目の前の景色はそれでも十分なほどの、なんて言うのかなあ？ 雄大さみたいなのがあった。

「おお……。すげえ……」

「自由時間になったら泳げるから、まだお楽しみはこれからって感じだな」

「何だよ一夏。随分落ち着いてるんじゃないか？」

「いやいや、俺だってこう見えてテンションが上がってるぜ。でもほら……。もう少して宿に着くぞ」

「え？ ……あ、本当だ」

こうして、初めて見た海に感動しながらバスを降りると、僅かながら不思議な匂いがしてきた。これが潮の香りってやつか。本当は、この身体中を駆け巡るウキウキ感を発散させるために叫びたいところだが、そんなことをすると織斑先生の出席簿が炸裂するからな。大人しく整列する。

「ここが、今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の方々の迷惑とならないように心がけるように」

「よろしくおねがいしまーす！」

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があつてよろしいですね」

俺たちの気合の入った挨拶にも、朗らかな感じで答えてくれる女将さん。すると、俺たちと目があつた。

「あら？ そちらの方々が・・・？」

「はい。今年は異例の事となつてしまい、浴槽の振り分けを難しくしてしまつて申し訳ありません」

「そんな事はありませんよ。3人とも、しっかりしてるような雰囲気かして良いじゃないですか」

「あくまで雰囲気です。お前達、挨拶をしろ」

「お、織斑一夏です」

「東風谷真です」

「十六夜ミツルです。よろしくおねがいます」

織斑先生に促されて、俺たちは慌てて頭を下げた挨拶をする。そのようすが可笑しかったのか、少しだけクスクスと笑うと、女将さんも頭を下げた。

「はい、こちらもよろしくおねがいますね。やはり男子も元気が一杯でよろしいですねえ」

「ありすぎて困るほどです」

織斑先生が額に手を当てて、やれやれといった感じで首を横に振る。え？ 俺たちって何か迷惑な事してたか？ うゝむゝ。アリーナで相棒やセシリアたちと模擬戦やったときに砲撃で穴だらけにしたことか？ 女子の集団に追われて廊下を走ったことか？ 心当たりが多すぎて逆に分からないぜ。

「それでは、お部屋を案内しますね」

「男子達は私が案内する。ついてこい」

そういえば、さすがに女子と同室はマズイつてことで、俺たちは別の部屋なんだよな。俺たちは素直に頷いて織斑先生の後について行く。

そうしてついて行った先の部屋の扉には、大きく『教員室』とかかれた張り紙が。

「え？　これは・・・」

「最初こそ男子のみの部屋にするべきという話だったんだが、お前達の注目度は尋常じゃない。就寝時間を無視する者たちが必ず出るだろうという話もあったので、こういう事になった」

「良かったな一夏。大好きなお姉ちゃんと一緒にだぜ？」

「茶化すんじゃない!!」

「アデエツ!」

本当のことを言ったのに、何故か姉弟に同時に叩かれた。解せぬ。

「おっしやー！　泳ぐぜー!」

「早く行きましょう、一夏さん!」

「いやいや、お前らはしやぎ過ぎだつて・・・ん?」

俺たちは織斑先生と山田先生が出て行った後に着替えて、海へと向かっていた。遠くから聞こえる波の音が、俺と相棒を誘っているようだ。一夏も早く来るように誘うが・・・

「どうした?」

「いや、これ・・・」

「・・・ウサ耳?」

一夏の前には、大根の葉っぱのようにニョキつと生えているウサ耳があった。・・・なんだこれ?　しかも看板みたいな物には、『引っ張ってください』と書かれている。

俺たちが戸惑っていると、箒がそばへやって来た。

「む?　どうしたんだ?」

「ああ、箒か。これ・・・」

「ん?　・・・あ、これは姉さんだな。このウサ耳は間違いない」

「束さんが?　なんでこんな所に?」

「・・・なぜだ?　凄く嫌な予感がする。先に行ってるぞ、みんな!」

箒は身体を一瞬だけブルリと震わせると、慌てた様子で海へと向かって行った。嫌な予感?　俺はそんなの感じなかったが・・・

すると、遠くからキイイイン・・・と何かが飛んでくるような音が

聞こえてきた。なんか、山田先生がラファールに乗って落ちてきたときのことを思い出すなあ。っていうか、これヤバくね!?

「た、退h・・・ギャアアア!?!」

「二相棒（ミツル）——!?!」

相棒は退避と言おうとしたが間に合わず、空から落ちてきたデカイ金属の塊に吹き飛ばされた。

ちなみに飛行物の正体は・・・人参だった。その人参から扉みたいなのが開かれ、そこから女の人が出てくる。

「呼ばれてないけどジャジャジャーン！　　いつくんに真君にミツル君、久しぶりー!」

「ど、どうも・・・」

「お久しぶりです・・・」

「あれれー？　ミツル君は？」

「あそこツスよ」

「え？　・・・わあああ!?　ミツル君ー!?　誰がこんなことを!」

「二アンタのせいだろうが」

相棒は伊達に鍛えられてないおかげで、少し土で汚れた程度で済んだ。軽い漫才のようなものを終わると、束さんはここに来た理由を話し始めた。

「束さんはどうしてここに?」

「いやー、ちよつと箒ちゃんと話をしたくてね？　　箒ちゃん見なかった?」

「え、さつき向こうに・・・」

「あ。でもこの束さん特製『箒ちゃん水着レーダー』があるから、大丈夫だよー。ぐへへへ。さあ、箒ちゃんのおっぱいを堪能してやるじゃない!　　そんじゃ、バイビー!」

それが本音かい!　　心の中でツッコむ内に、束さんは箒の後を追って行った。なるほど。箒の言っていた嫌な予感ってのは、束さんにイチャイチャされることだったのか。

嵐のように去っていった束さんを見送った後、再び海へ向かって走り出した。

三人称 sid

「・・・行つたかな？」

真と離れた後、束は草むらに隠れて周りの様子を伺う。束がここに現れたのは、確かに箒に会うためである。しかし、それはただ箒とイチヤイチヤするだけではない。

束は紫からある条件を出されていた。それは、幻想郷に入れるようにするかわりに絶対に口外しないこと。もしもその条件を破ったならば、幻想郷の実力者たちが束を潰しに来るといふもの。

束のほうが大償が大きいような気もするが、幻想郷側が白騎士事件の話最後まで聞いてくれたこともある。彼女はその条件を受け入れた。そのため、自分のラボにいる者たちには話していない。当然、千冬にもだ。

しかし、真たちの様子を見せに幻想郷に来た日のこと、リオという男が束にあることを聞いた。

「確か、お前の家は神社だったな？」

「そうだよー。まあ私はISの開発と研究ばかりだったから、神楽舞とかは箒ちゃんが上手だね」

「・・・もしかしたら、お前の妹は能力に目覚めている可能性があるな」  
「・・・え？」

リオとその妻の一人である霊夢が言うには、信仰心を多く集めている神社は強い力を持つという。祀られている神は、信仰者には御利益と言うものを、神主や巫女の血縁者には力を与えるのだとか。

束の家である篠ノ之神社は元から近くの住民に信仰されていたが、ISの誕生によりそこへ参拝しに来る者たちが増えている。それによつて起こる影響は、束だけではなく箒にも起こっているかもしれないというのだ。

「ましてや、その箒つて子は神楽舞も担当してるんでしょ？ 神楽舞つてのは読んで字の如く、神様を楽しませる舞だから、能力を持ち

始めてもおかしくないわね」

「うむ。様子を見に行つた方が良いかもしれないぞ?」

こうして、束は箒の様子を見に来たのだった。

「・・・誰もいないね。よし。マドちゃん! 出てきて良いよ!」

束は周りに誰もいないことを確認すると、未だに地面に突き刺さつてゐる人参ロケットに声をかける。すると、そこから一人の少女が出てきた。

束がここに来た理由は、実はもう一つあった。それは、この少女を自分の友人に会わせることである。

「うう・・・。。死ぬかと思つた・・・」

疲労困憊な様子で出てきたその少女は・・・織斑千冬と瓜二つの顔をしていた。

## 27話 初心(?) な真

「熱っ！ あっちい！」

砂浜に着くと、その熱さに思わず爪先立ちになってしまう。まるで地底にある砂風呂みたいだ。

「ふっふっふ。熱さに強い真さんでもこの熱さにはお手上げですか？」

「口角を引き攣らせながら言われても説得力ねえぜ、相棒？ お前も熱いんだろ？」

「お前ら、なんで張り合ってたんだよ・・・」

海パンを履いている一夏が、呆れた感じで額に手を当てる。ちなみに俺と相棒も同じようなタイプで、一夏が青、相棒が黒、俺は全体が緑だけど側面に白いラインが入っている。

熱い砂浜の上で火花を散らしていると、遠くから女子達の声が聞こえてきた。

「あつ、織斑くん達だ！」

「わあ。鍛えられてる」

「っていうか、東風谷さんと十六夜くんも凄いつて！」

「うそ・・・。十六夜くんって、意外とマッチョ？」

1組だけでなく他のクラスの奴らまで俺達の側まで寄って来る。一部の奴なんかは、腹筋を触ろうとして腕を伸ばしてくる。

「へえ。東風谷くんは身体にいっぱい傷跡があるって聞いたけど、本当だったんだね」

「まあな。不快にさせちまったか？」

「ううん。むしろ、ワイルドって感じで格好良いかも！」

思えば、俺達のISスーツは胸の部分を隠してるから、身体の傷は一部しか見えてないんだよな。こうして全身を晒すのは初めてかもしれない。

っていうか、身体を触ろうとする腕が増えて、その光景はさながら蠢く触手だ。気持ち悪い！

「相棒、一夏。逃げるぜ！」

「は、はい！」

「おう！……って、海パンに手を伸ばすな！」

「いっち、にー、さん、しー」

「ごー、ろく、しち、はち」

俺たちは女子の大群から逃げた後、水泳競争をすることにした。だけれどその前に準備体操。湖で泳ぐ前にも、欠かさずやっていたことだ。

ちなみに掛け声は、俺の後に相棒達が続く感じだ。

「い、ち、か〜〜〜〜！」

「のわっ!？」

一夏の驚いた声を聞いて視線を戻すと、鈴の奴が一夏に飛び乗っていた。身軽な奴だなあ。そしてそのままシユルリと駆け上って肩車の体勢に。

「ほら、体操が終わったんなら早速泳ぐわよ」

「お、おい！ 準備体操しとけて！」

「大丈夫よ。アタシ、前世は人魚かもしれないし」

「しれない、かよ」

「っーか、こう堂々とくっ付くって勇氣あるな、お前」

「ふっふっふ。アタシは一夏と同じクラスじゃないからね。今日は目一杯イチャついてやるわ。と、いうわけで一夏！ 海へレッツゴーよー！」

「あがっ！ 頭をグリグリすんな！」

こうして一夏と鈴は海のほうへと行ってしまった。俺と相棒は、しばらく呆気に取られていた。

「あー要するに、だ。鈴はひたすらスキニシップを取って、一夏の好感を持たせる作戦に出たってことだな」

「そういうことですね」

「……とりあえず泳ぐか」



「・・・はい」

周りを見渡すと、日傘の下でゆったりとしているセシリアや、ちよつとオドオドしながらも友達と海へ向かっている簪など、かなり平和な光景が広がっていた。

こうしちやいらねえ。俺達も早く泳ぎたい！ 目配せをすると、相棒も頷く。

「よし・・・行くぞオラアアアア！」

「あゝ、待って〜！」

「あらら?！」

走り出そうとした時に、待ったをかける声が出て俺はそのままコケた。ついでに、砂浜に顔面から突っ込んだ。

「うおおおお！ アツチイイイ！」

「だ、大丈夫？ 東風谷くん・・・」

ヒリヒリするような感じに涙が出そうになるが、何とか堪える。そして声のしたほうを見ると、そこにはいつも本音と行動している相川と、自称ウザキヤラの岸原がいた。そしてその後ろには本音がいるんだが・・・

「本音、お前・・・暑くねえの?！」

「ふっふっふ。これはねゝ、着ぐるみタイプの水着なのだゝ！」

「はあつ?！」

彼女が着ているのは、部屋で寝巻きとして着ているものと大差ない、狐(?)の着ぐるみだった。見るからに暑そうだな・・・あれ? 確か俺達と一緒に水着買いに行ったよな? 買ってなかったのか?!

すると、相川が呆れたような感じで、岸原はニヤニヤした感じの顔をしていた。

「もう、騙されちゃ駄目だよ、東風谷くん！」

「本音ってば、見せるのが恥ずかしいからって着ぐるみ着てるんだよー」

「わわあ!? あっちーにリコリン、何言ってるのさゝ?！」

「・・・え?！」

「理子！」

「ふっふっふ．．．．後ろ取ったりー!!」

本音が何か慌てた様子で二人を止めようとするが、岸原が後ろへと回る。え？ まさか．．．ファスナーを降ろす気か？

「えーい！」

「あうあうくくく!!」

「さあ、本音のナイスバディをごらんあれー！」

後ろへ対処する事も出来ずに、そのまま着ぐるみを脱がされる本音。

「あううう．．．．み、見ないでよお．．．．」

．．．．そこには、女神がいた。俺は水着に詳しくないからどういうタイプなのかは分からない。ただ、普段のISスーツとはまた違った．．．色気があった。

それに、いつもは笑っていることが多い本音が、今は恥ずかしがっている。普段は見られない表情に、自然と顔が熱くなってきた。

「ねえ、もしかして東風谷くんと本音って．．．」ヒソヒソ

「うん。お互いのことが好きだよ。でも．．．」ヒソヒソ

「自分の恋心に気がついてない！」

どうしよう。本音はモジモジしながら俺のことをチラツと見ている。これって、水着のコメントをすればいいんだっけ？

で、でも何て言えばいいんだよ! 『似合ってるな』だけではシンプルすぎるし．．．。ええい、もうどうにでもなれ。思ったことを言えば良いんだ!

「お、おう。結構似合ってるぜ。着ぐるみを着てるのが勿体無いくらいだな。うん．．．可愛いよ」

結局この一言しか思いつかなかったよ、チクシヨウ!

だが、本音は少しだけ目をぱちくりさせると、頬を赤らめながら微笑んで一言。

「えへへ．．．．ありがとう」

「くくくつ！ お、俺は泳いでくるぜ！」

か、可愛過ぎるだろう！ 俺は顔が熱くなるのを感じながら、海へ

と走っていく。

顔が熱いのは、さつき砂浜に顔面からダイブしたからだ。そうに違いない、うん。

「ありやりやく。東風谷くんは初心なのかな？」

「かもしれないねー。．．．本音？」

「可愛いって言われた：：可愛いって言われた：：可愛いって：：：：」

「あー、これは思考が飛んでるね」

「早くくっ付きゃえば良いのにねえ」

「おおお．．．。マジでしょっぺえ。これが海の味か」

顔の熱さを冷ますために海へ飛び込んだが、少しだけ海水を飲んでしまった。そのしょっぱさに少しビツクリする。

．．．うう。全然顔の熱が冷めねえ。最近の俺は、何か変だ。

「お？ あれは相棒か？」

本音たちと話をしている間に何処かへ行った相棒は、まだ海に入らずに砂浜にいた。あいつの側にはシャルロットと、何かバスタオルお化けがいた。

．．．あ、シャルロットが何かニヤニヤしながらバスタオルお化けに話している。それに反応したのか、そいつがバスタオルを取った。その正体は、水着を着て髪型も少し変えたラウラだった。

「何だよ、ラウラじゃねえか。何だってあんな格好をしてたんだ？」

ラウラがモジモジしている。一方で相棒は、微笑みながら何かを言っている。

あ、ラウラが顔を赤くして走っていった。．．．すげえ。水面を走れる人間を見たのは初めて見たぞ。

「うし。一旦上がるか」

ちなみに砂浜へ戻ってきた瞬間、何故か女子が鼻血を噴出した。なぜに？

## 28話 一夏の目標って？

「ふう……。いい湯だ」

「今日一日の疲れが吹き飛びそうですねえ」

すっかり日が沈み、波の音が神秘的に聞こえる中、俺と相棒は温泉に浸かりながら星空を眺めていた。めちやくちや美味しい夕飯を食って、温泉に入れて……。顔はすっかり緩んじまってる。

「二人とも、美味そうに刺身を食べてたよな。おかげで俺も食いすぎちゃったよ」

「いやあ、生の魚なんて食べても大丈夫なのかって思ってたけどよ。いざ食ってみると美味いから、箸が止まらなくなっちゃった」

「私達は加熱したものしか食べたことがありませんからね。とても新鮮な体験をさせていただきました」

「……。あれ？」

「おお？ 相棒が珍しくギャグを言ったぜ」

「え？ 一夏さん？ 真さん？」

あ、相棒の奴……「新鮮な刺身」と「新鮮な体験」を掛けやがった。ククク……。駄目だ、口角が上がってしまう。普段はクールな相棒が天然ボケをかますなんてよお！

「あつははははははは！」

「ミ、ミツル……。お前……。あはははは！」

「ちよっ!? 何を笑ってるんですか、二人とも！」

こうして、相棒からお湯を思いつきかけられるまで笑い声が響いた。

「なあ、一夏は何か目標ってあんの？」

「え？」

しばらくしてから、少しだけ気になったことを一夏に問いかける。最近、アリーナで一夏が凄い真剣な顔つきで、雪片で素振りをしているのを見かけることが多くなった。確かに、俺たち男子はISを動か

す経験が少ないから、少しでもスムーズに動かせるようにしようと練習している。

だけど、この間、箒から相談を受けた。一夏が凄い疲れた様子で帰ってきて、倒れこむように眠ることが多いってな。相棒から聞いた話では、鈴が一夏のために、元気になれるような料理を研究しているらしい。そういえば、シャルロットはアロマのカタログを眺めていたな……。

「お前が強くなろうとすることに、俺は反対はしねえ。けどな、無茶しすぎてぶっ倒れたらどうする？ 箒に鈴、シャルロット達はお前のことを心配してんだぞ」

「箒たちが？」

「ええ。アリーナで練習する時、彼女たちは時々あなたの様子を伺ってるんですよ。どうして、そこまでムキになるのですか？」

一夏は、俺たちの言葉を聞いて俯いてしまった。幼馴染やクラスメイトに心配をかけたことを、申し訳なく思ってるんだろいな。

しばらく、静寂が続いた。髪を洗ってる間も、一夏は何も言おうとしない。もう一度湯船に入っても、黙ったままだ。……いい加減にしないと、のぼせちまう。

「……俺たちはそろそろ上がるわ。悪い。いきなり変なこと聞いて」「私も、言い過ぎました。申し訳ありません。ですが……私たちは仲間です。何か悩みがあったら、言ってく下さいね」

「……ごめん」

「気にすんなって。お前なりの理由があるんだろうよ。それじゃ、のぼせんよ」

俺たちは、浴衣に着替えて、部屋へと戻った。

〜一夏視点〜

「マドカ……俺は……」

二人が出て行った後、俺は「妹」の名前を呟いた。

強くなりたい目標……。俺にはある。千冬姉を支えられるくらい強くなること。そのために、真やミツル、セシリアやラウラなどのライバルに勝つ。そして強くなって……。マドカを取り戻す。

第二回モンド・グロツソで、確かに誘拐された。でも、それは俺だけじゃない。俺よりも一つ下で、顔付きだけじゃなくて気が強いところが似ている妹。それがマドカだ。彼女も、俺と同じように誘拐されたんだ。

当然抵抗しようとした。でも大人たちの力に負けてしまいそうだった。その時だ。マドカが誘拐犯の手を噛んで抜けだし、俺を掴んでいる手を引き離そうとしたんだ。

でも、すぐに他の男たちに捕まってしまい、ハンカチみたいなので口と鼻を覆われて……。目が覚めたときは廃工場にいたけれど、マドカは見つからなかった。千冬姉が駆けつけたときも、そして、帰国の飛行機に乗るときも……

あの時……。あの時俺がもつと強かったら！ 大人を振りほどけるほどの力があれば、マドカが攫われずに済んだのに！ 千冬姉が泣くこともなかった！

あいつ等に攫われてから、彼女がどうなったかは分からない。普通に銃を持つような連中だったから、おそらく……。

でも、もしも……。もしも彼女が生きているのならば、俺は絶対に取り戻す。いや、死んだとしても、この日本へ連れて帰る。

「神様がいるとしたら……。こんな弱っちい俺の願いも、聞いてくれるかな……」

## 29話 疑惑

さて、真たちが温泉を楽しんでいる間、箒たちは千冬がいる部屋で女子会を開いていた。

なぜ彼女達が、怒らせると恐ろしい千冬の部屋にいるのかというと、そもそも部屋に入ることを千冬本人が許可したからだ。現に今も、生徒の前であるにもかかわらずビールを片手に楽しんでいる。(もつとも、口止め料として箒たちもサイダーなどを飲んでいるが)

箒たちも、本当は一夏や真やミツルと話をしたかったが、まあ一夏をどう思ってるか等で盛り上がったから寧ろ温泉に行つてて良かったと思つている。

こうして楽しい時間は過ぎていったのだが、きつかけは鈴の一言から始まった。

「真とミツルってさ、何者なのかしら?」

部屋にいる全員は「何言ってるんだコイツ」みたいな目をしているが、鈴は気にせず続ける。

「この間ミツルと話したんだけどさ、彼、スカーレット家っていう家に仕えてるんだって。どんな家かなーって調べてみたんだけどさ……。そんな貴族は居なかったのよ」

今でも栄えている名門の貴族なら、それなりに情報はあはず。だが、鈴が調べた範囲では、スカーレット家という貴族は存在してないという。

だが、そこへ口を挟んだのはセシリアだった。

「スカーレット家ですって!?!」

「何か知ってるの?」

「スカーレット家は、今はとっくに消えてしまった貴族ですわ。私の家に、僅かですが資料がありますの。ですが……」

途中から、セシリアは口を震わせる。

「情報が少ないのは……その家は、吸血鬼の館と言われているからで

すわ」

「吸血鬼い？ 血を吸ったり、日光を浴びると灰になるっていうあの？」

鈴は信じられないような顔になる。

「はい。まるで血のように赤い館、あそこに入った人間は帰ってこない。そう言われてますの。あのジャック・ザ・リッパーは、実はスカーレット家に血を与えるために仕えてた者じゃないかと考えられてる程ですわ」

全員が息をのむ。殺人鬼が従者……。と言うことは、ミツルは切り裂きジャックの子孫？ そんな考えが浮かんでしまう。

「突然消えたという事もあって、謎が多いのです。だから情報が規制されているのです。それにミツルさんの名前は十六夜……。日本名ですわ。なんでスカーレットという家名を……」

セシリアはすっかり考える姿勢に入ってしまった、ブツブツと呟いている状況になった。

一方、少しばかり酒が入って酔ってきた千冬も、思っていた事を口にする。

「私が気になるのは、東風谷のことだ」

「真……ですか？」

シャルロットは千冬の言葉に首を傾げる。

確かに、真は身体能力的に常識外れな所があるが、それ以外は普通だ。どこがおかしいと言うのだろうか？

「今まで東風谷の戦い方を見てきたが、あれは相手を倒し、生き残ることを優先にしたやり方だ」

「教官も気付いていましたか」

「ああ。だが問題は、そのような戦い方を得るような人生とはどういうものだったのかという事だ」

このご時世、戦わなければ生き残れないという環境は限られている。だが真は明らかに日本人だ。そのような環境に居たというのは、信じがたい。

「もしくは親に鍛えられた、と言うことだな」



「それはあり得ますね。真は、よく父親の事を話しますから」  
「確かに、箒の言うとおりだ」

千冬の仮説に、箒とラウラが頷く。

だが、シャルロットだけはまだ納得がいかないような顔だ。

「真はさ、海を知らなかったんだよね？」

「ああ。初めての海に感激してたな」

「山奥の田舎で育ったと言っていたぞ」

「テレビでも海の映像が流れるのに、海を全然見たことがないって、あり得るの？」

箒とラウラは難しそうな顔になる。疑問が解決したかと思えば、別の視点からの疑問が出てくる。今まで一緒に勉強してきた仲間への疑惑は、まるで湧き水のようにどンドン出てくる。

「本当に……何者なんだろう？」

鈴の一言で、部屋は静かになった。

しかし、すぐにその沈黙は破られる。

「あー、サッパリしたー……ん？ どうしたんだよ、お前ら？」

真とミツルが、風呂から戻ってきた。部屋が静かになっていることに首を傾げている。

「真、ミツル。お前たちはムグムグ」

「な、何でもありませんわ！ 少々真面目なお話をして、何も言えなかっただけですわ！」

「あ、ああそうぞぞ！ それよりも、風呂はどうだった!？」

ラウラが率直に聞こうとしたのを、セシリアが抑える。さらに箒が別の話題をすることで、話を逸らそうとした。

「いやー、良い湯だったぜ！ なんつーか、身体のコツってる部分がほぐれたって感じてよお！」

「景色も最高でした。いやー、下見をしてくれた山田先生に感謝ですねえ」

どうやら、逸らすことに成功したようだ。奥で鈴とシャルロット、千冬が小さく安堵のため息をもらす。

そんな三人の事に気付いてない真は、時計を見てあることを伝え

る。

「にしても、部屋に戻らなくて良いのか？ そろそろ消灯時間だぜ？」

「えっ？ うわ、ホントだ！」

「では、お先に失礼しますわ」

「おやすみ、真！ ミツル！」

箒や鈴は慌てて部屋に戻り、セシリアは丁寧に挨拶をし、シャルロットはラウラと一緒に戻っていった。

「ところで、一夏は？」

「俺たちが先に上がったんで、少し遅く来ると思いますよ？」

「ふむ、そうか……」

「さーて、明日は実習だし、歯磨いて寝ようぜ？」

「ええ、そうしましょう」

洗面所へ向かう2人を、千冬はほんの少し疑惑を込めて、見つめていた。

～ I S 学園、生徒会室～

「どういふことかしら……」

その日の昼間、生徒会室で『ある生徒』の書類を睨む女子がいた。

彼女の名前は更識楯無。 I S 学園の生徒会長である。女子高生でありながら、対暗部用暗部『更識家』の当主でもある。

彼女が見ていたのは、学校で補完しているデータと、特殊経由で手に入れた詳細なデータ。書類の記名欄にはそれぞれ、『東風谷真』と『十六夜ミツル』と書かれている。

「人間じゃないのが混じってる……。何者なのかしら？」

ミツルの血液検査の結果を見ると、人間以外の生物の遺伝子があつたという。さらに、視力や瞬発力も全国平均を越えていた。

「おまけにこの東風谷くんは……」

東風谷真のデータを見る。真の出身中学校を見ていた。だが、別のデータで見たところその中学校は……

「五年前に別の中学校と統合、校舎は解体……」

どうしてそんな昔のデータを書いているのか？ そんな疑問が浮かんでくる。

「学園の敵ではないことを祈るしか無いけど……」

「それは、あなた方次第ですわ」

「っ!？」

突如聞こえる謎の声。楯無は辺りを見回す。だが、部屋には誰もいない。普段は側にいる幼馴染も、今は席を外している。

「誰!？」

「私が信頼するものにしか、あの二人の素性を教えられません。ですがもし、あなた方が二人に害する行動を取ろうものなら……」

「崇られる、かもしれないわね」

どこか冷たさを感じる謎の声に、楯無は震え上がった。生徒会室全体の温度も、心なしか下がってる気がする。

「それでは、時が来たら……二人が立てなくなった時にでもお会いしましょう。その間は、陰から協力させてもらいますわ」

すると、部屋全体を包んでいた重苦しい空気が、一気に軽くなった。

「っ!？ ハア、ハア、ハア……」

体から汗がドツと噴き出る。足もガタガタと震えていた。

殺されるかと思った。見えないものほど、恐ろしいものはない。自分はその実力があると思っていたが、相手は自分より遥かに上の存在。本能がそう告げていた。

「……でも、敵対しなければ良いのよね？」

だからこそ楯無は燃えてきた。自分はIS学園の生徒会長。生徒を脅威から守らなければならない。相手が何者なのか……。まだ敵と決まったわけではない。ならば、調べてやろうじゃないか。

「その前に、シャワー浴びてこないと……」

取りあえず、汗をかいた体を何とかしようとして、生徒会室を後にした。

### 30話 特命任務、そして出撃前

合宿二日目。俺たちは周りを崖に囲まれた試験用ビーチにいた。

今日行なうのは、専用機持ちの場合、新しく追加された装備とかの点検だ。と言っても、俺と相棒の場合は専用機がどの企業にも属していないから、スラスターとかの整備がメインになる。

「あの、真さん？」

「ん？ どうした、相棒？」

「今日の箒さん達、妙によそよそしい気がするんですが……」

ふと箒たちを見る。すると、目が合った瞬間に慌てて目を逸らしやがった。

俺、何かしたか？ ちよつと傷ついちまうぜ……。

「では、それぞれ振り分けられた班で装備試験・点検を行なうように。分からない事があったら山田先生か私に質問すること」

織斑先生が指示を出す。手をパンツ！と鳴らすと、生徒の皆が散らばった。そんじゃあ、俺もやりますかね！

「真さん……機械弄り、大丈夫なんですか？」

「はっはっはー！ 心配するな相棒！ この間のテストで、ISの科目は赤点をギリギリ免れたからな！」

「（あ、これダメなやつだ）」

何か相棒が失礼なこと言ってるような気がするけど、気にしな～い！

「私の心配を返せー！」

「なぜに!？」

俺は今、スラスターの煤汚れを落として、油を注していた。これをやっておかないと方向転換とかに支障をきたす恐れがあるからな。

しかし、順調に整備してたのに何故か相棒が怒ってスパナを投げつけてきやがった。何なんだよ、全く。

「テストで赤点ギリギリだったんでしよう!?! 何でスムーズに出来て

るんですか!？」

「そりゃあお前、グラビオスが教えてくれるんだよ」

「……え？」

そう。俺はさっきからグラビオスに、どこの調子が悪いかを聞いている。するとコアが「ココが変な感じ」っていう風に教えてくれるんだ。しかも、パーツの外し方までアドバイスしてくれる。何ていい子なんだ。

《エへへ》

あ、照れた。

「相棒だって、今まで機械弄ったこと無いくせに、スムーズに出来るじゃねえか。たぶん、機体が教えてくれてるんじゃないの？」

「ふうむ……。では、少し意識してみますか」

さて、と。だいぶ終わったかな？ 今度は何をしようかなあ。

「た、たたたた大変ですー！ お、織斑先生ー！」

すると、山田先生が大慌てて走ってきた。何かやばそうな雰囲気だ。織斑先生も真剣な表情になり、手話らしきもので山田先生とやり取りしている。

何だ？ 聞かれてはマズイ事でもあるのか？

「……かなりヤバイ事態みたいですね」

「何か聞こえたのか？」

「特命任務レベルAという単語が聞こえました。何か緊急事態があったに違いありません」

「だな」

すると、山田先生が旅館へと戻り、織斑先生は俺たちの方へ向き直る。

「今日のテスト稼働は、緊急事態につき中止とする。速やかにISを片付けて旅館へと戻れ！」

凄みを感じさせる声に、他の生徒達は慌てて片づけを行なう。

「なお、代表候補生及び専用機所有者は私のもとへ集合ー！」

「おっと、これはまさか……」

「恐らく……」

俺たちも、緊急事態の対処に当たるパターンだな。

今起こっていることは、かなりヤバイ状況らしい。と言うのも、アメリカとイスラエルが共同開発していた銀の福音シルバリオ・ゴスペルが暴走。このままでは、俺たちの近くの空域を通過すると言う。日本政府はすぐに防衛線を張ったのだが、相手はそれを突破。部隊を再編成するのに時間が掛かるため、俺たちが対処しないといけないらしい。

しかも厄介な事に、相手は軍用IS。前にラウラから聞いた話では、大きい攻撃力と機動性、エネルギー量を誇っているという。

「相手は長期稼動にも耐えられるよう、シールドエネルギーが高いと思うわ」

「しかも、私たちが止めなければ、日本国内に被害が出る可能性もありますわ」

「だとすると、早めにエネルギーを無くして、無力化する必要があるね」

鈴やセシリア、シャルロットが相談している。

つまり、短時間でデカイダメージを与えないといけないってことだ。そんな強そうな武器を持つてるやつと言えば……

「お、俺か……」

緊張した様子を漂わせている一夏だな。しかし、緊張してるとはいえ、そんなにガチガチで大丈夫だろうか？

「これは実戦だ。私は無理強いはしない」

織斑先生が一夏に言う。だけど、一夏のあの目は……やる気だ。

「俺、やります」

「よし。後は誰が一夏を運ぶかだが……」

「私の強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』なら、行けますわ」

「超音速下での訓練時間は？」

「二十時間ほどです」

ふむ、一夏の運搬役は決まったな。だとすると俺たちは……

「ボーデヴィツヒと更識は私達と共にオペレーターをしろ。嵐、デユノア、十六夜、東風谷は織斑とオルコットの援護として出撃しろ。では……作戦開始！」

俺たちは動き始める。その時、遠くから相棒とラウラの会話が聞こえた。

「私のレーゲンがドイツからまだ返還されて無い以上、私は戦力になれない。だから……頼む」

「分かりました。任せてくださいな」

「それと、これは私個人のお願いなんだが……」

「何でしょう？」

「その……いや、やっぱり後で良い！ 聞きたかったら、生きて帰ってくるのだ！」

「フフ、分かりました。それでは」

「ああ……」

……もしかしてラウラの奴、相棒の事が？ ま、まさかな。

すると、誰かが肩をチョンチョンとつつく。誰だろ？

「お、簪か」

「うん。私も日本の代表候補生だから、ここにいる。でも、まだ専用機が完成してない……」

「そーいや、本音がそんな事を言ってた気がするな。だからなのか、俺は特に驚かなかった。」

簪はどこか不安げな表情だ。やはり、怖いんだろう。

「今回の相手は強い。軍のISだから……」

「そうだな。俺の勘もそう言ってる」

「でもね……」

「では、援護する者は出発地点まで移動！」

おっと、織斑先生から呼び出しが掛かった。急いで行かなくては。

「悪い、話は後でな！」

「あっ……」

俺はグラビオスの状態を確認めると、走って出発地点まで走り出した。



「無事に帰ってきてね……。本音のためにも……」

### 31話 海からの襲撃者

《現在、私たちの方では異常がありません。真さんの方は大丈夫ですか?》

「大丈夫だ相棒。今のところ、おかしな点は見当たらない」

作戦が開始して数分。俺は、一夏と福音が激突すると思われる場所から最も近い位置の岩場で待機していた。俺のISは長時間の飛行が苦手なため、空中戦ではなく地上から援護射撃するという作戦だ。

……しかし、俺としては、申し訳ない気持ちで一杯だ。初めて会ったときに俺は、「お前を空へ飛ばしてやる」と約束したのに……全然飛ばすことが出来ていない。

「怒ってるよな、グラビオス」

《……………》

「応答無し、か……………む!？」

奥の方から光が見えた。二つの光だ。恐らく……

「一夏と福音が戦ってるのか! よし!」

ハイパーセンサーの感度を最大にして、カブレライトキャノンを展開する。

「徹甲榴弾、装填完了! さあて……」

スコープを覗き、相手を確認する。

……速いな。狙いが定まらない。これじゃあ一夏とセシリアに当たってしまう! フレンドリーファイアなんて、洒落になんねえぞ!

「クソツ! せめて相手がこっちに來てくれれば……」

——警告、生体反応確認!

「何っ!？」

その瞬間、足を何者かに掴まれる。そしてそのまま……………

「おおおおおおお!？」

海に引きずり込まれそうになる。俺は慌てて背中のブースターを全開にして抵抗した。このパワー……! やはりモンスターか!

「ぬおおおっ！ クソツたれえええ！」

歯を食いしばって一気に飛ぶ。その瞬間現れたのは、青い髪をして  
いる上半身裸の男だった。

「ぬうっ！ やはりバサルモスの力を持つのは伊達ではないか！」

「お前、俺の力を!?!」

「当たり前だ！ 私の……いや、我々の主はかつて貴様の父によって  
殺されたのだ！ 主の無念を晴らすためならば、子孫の名前すらも調  
べ上げるのだ！」

男はそう言うと、体の周りを発光させる。このバチバチという音は  
まさか……

「俺はヴァレッタ！ 人間からはラギアクルスと呼ばれた男よ！ 主  
の無念を晴らさせてもらう、東風谷真お！」

雷を身に纏って突っ込んで来る。俺は急いで避けようとするが  
……。

「しまった！ この足場じゃ……！」

岩場が崩れそうになり、慌てて足を引っ込める。この小さい足場  
じゃ、ISを着けてても駄目だ！ こうなったらISを解除するしか  
ない！ でも解除したら、おそらく福音の………ああクソ！

「流れ弾が来ませんように！ すまん、グラビオス！」

《頑張ツテ、オ兄チャン！》

俺はグラビオスからの応援を受けながら解除し、拳を鎧化させる。  
こうやって海に潜んでいられるって事は多分、コイツの弱点は炎だ！

「ファイアウォール！」

「むっ!?!」

炎の腕を交差させてガードすることで、相手の攻撃を中断させる。  
炎を察したヴァレッタは一瞬だけ動きが止まる。隙ありだ！

「オラアッ！」

「ガアッ！」

そのまま奴の顔面に一発拳をぶち込んでやる！ もう一発だ！

「何度もくろうかあ！」

ヴァレッタが、身体の周囲を雷で覆う。ぐっ………大きなダメージに

はならないけど、バチバチとしびれる感じが鬱陶しい！

「ぐっ！」

「ぬおらあー！」

「おおっと!？」

今度はタツクルしてきた。さらに掌に雷を……!？

「やらせねえー！」

俺は靈力を集中させて光弾を作り、相殺する。ヴァレッタは一瞬驚きはしたものの、今度は口から雷の球を放った。何とか避けるが……

「コイツもくれてやる！」

「やばっ……!？」

今度は周りに球状の雷を3つほど回転させる。その軌道上に俺がいる。ま、間に合わねえ！

その瞬間、俺の体を痛みが駆け巡る。針で何度も刺されているような、チクチクとしたものではなく、ブスツブスツと刺されてるような痛みだ。それが全身を駆け巡るのだからヤバイ。

「あががががが!!」

「はっはっは！ 大海の王という名は伊達ではない！」

「嘗めんじゃ、ねえ！」

「むっ!？」

頭を鎧化させて頭突きをする。拳で殴り、足払いで転ばせる。

「おおおおおお！」

「ぐっ、ぐっ、があっ！ おのれええ！」

顔を何度も殴り、今までやられた分を返す。だがヴァレッタもやられっ放しではなく、俺に頭突きをり返す。仰け反った隙を見て、奴は立ち上がった。

「おのれ、俺としたことが。慢心していたようだな……」

「そのまま油断してくれてたら助かったんだけどよ」

「ぬかせ。主の遺志のためにも、我々と渡り合える貴様ら……モンスタ―能力者は邪魔なのだ」

モンスタ―と渡り合える……? この世界にはISや戦車と言った物もあるのか？

「確かにアレも厄介だ。だがな、お前は这个世界の人間どもを見たであらう?」

「?」

「同じ種族である人間は今、男と女に分かれて対立している! 男が女を恨み、女は男を蔑んでいる!」

確かに、ISの登場で女尊男卑になっちまった。俺も、そんな女たちに父さんたちを馬鹿にされた……!

「同族で争ってる以上、そんな人間を相手にするのは力と時間の無駄だ。ならば貴様らから排除する」

「そういう事かい……。色々教えてくれてありがとうさん……」

「そんな口も、すぐに叩けなくしてやる……む!」

その時だ。俺たちのいる足場に、大量の光弾が降り注いできた。あたりが爆発に包まれる。

「ぐうっ! ISとやらの流れ弾か!」

どうやら、福音によって広範囲の攻撃が放たれたようだ。このままでは、俺とヴァレッタがいる所はくずれてしまうだろう。

ヤバいな。体力が少ないこんな状態では逃げられねえ。出来る事といったら……

『鎧化』……。これしか出来ねえ、か……」

「ちいっ! そのまま爆発に飲まれて消えるが良い!」

ヴァレッタはそう言うのと、海に飛び込んで逃げた。俺だけがこの場に残される。



この声……相棒と鈴か? ボンヤリとしか見えないが、セシリアとシャルロットの二人がぐったりしている一夏を背負っている。

ああ成る程……。失敗、しちまったのか……。

そして、俺の視界は真っ暗になった。

### 32話 作戦失敗の後（ミツル視点）

「真が戦っている頃」

「あれが……福音」

私は思わず呟いてしまいます。銀色の翼を広げるその姿は、言うならば機械仕掛けの天使、でしょうか。悪魔の血をひいてる私からすれば、少しばかり嫌悪感があります。

「ましてや敵ならば……尚更！」

「一夏！ しっかり当てなさいよ！」

まずは私たちが気を引かせましょう。私は、名称もないごく普通のブレードを展開し、接近します。相手は超音速で移動するみたいですが、私からすれば今の奴の動きは止まって見えます。

「ミツル、近付き過ぎは……」

「心配いりませんよシャルロットさん」

『!?』

「……………え？」

福音は全身装甲のため表情は分かりませんが、驚いている雰囲気があります。それもそうでしょう。

福音ですら感知できない速さで、懐に飛び込んだのですから。

驚いている隙を作ってしまったのが命取りです。すぐさまブレードで斬りまくります。身体を、腕を、翼を……………！

「は、速い……。タッグマッチの時よりも速くなってる……………」

「鈴さん！ 衝撃砲を！」

「！ わ、分かってるわよ！」

鈴さんが見えない砲弾を当てる。その時、無機質な声が聞こえました。

『敵機A、Bを優先対象に設定。排除』

「やはり私と鈴さんに注意を向けましたか。ですが」

「僕も忘れないでほしいな！」

シャルロットさんが、アサルトライフルで牽制します。作戦はおおむね順調ですね。後は……………

「真さん、敵の動きが鈍りました。行けますよ！ 福音を混乱させてください！」

真さんからの射撃で福音を混乱させ、その隙に一夏さんの零落白夜でフィニッシュ！ これが私たちの作戦です。

……しかし、いつこうに返事がありません。

「真さん？ どうしたんですか？」

《……………》

「……真さん？ 真さん！ 応答してください！」

「どうしたのよ？」

「おかしい……。真さんからの応答がない！」

「真が!？」

鈴さんもシャルロットさんも驚きます。それもそうでしょう。掛け声には必ず返してくれた真さんからの応答がないのですから。

しかも援護射撃がいつこうに無い……。まさか、何かあったのか？

《ミツル、鈴、シャル！ 緊急事態だ!》

「どうしたの、一夏？」

《封鎖してるはずの海域に、密漁船がいるんだ！ 下手すると、福音の攻撃に巻き込まれちゃう!》

「っ！ 何でこんな時に入ってくるのよ！」

「最悪だよ……」

私だって、鈴さんと同じ気持ちですよ。死んでまで金が欲しいか!？ 封鎖してるって言うてんのによお！

……おっと、取り乱してしまいました。今は冷静になるべきです。

《みんな、大丈夫だ。福音はミツルたちに気を取られてるんだろう?》

「敵がわざわざ言ってくれましたが……まさか!？」

《ああ。作戦は少し混乱があったけど、続けるよ。零落白夜を当てる》

「ま、待ちなさい、一夏！」

《セシリア、速度を上げてくれ。少しでも気づかれないうちに……速く!》

《り、了解しましたわ!》

「一夏さん！」

《みんなは密漁船を頼む!》

功を焦り過ぎだ。焦りは余計な隙を生んでしまう。止めようにも、一夏さんは福音に接触しようとしてる。……クソ!

「鈴さん、シャルロットさん。二人は密漁船の護衛および誘導をお願いします」

「ミツルはどうするの?」

「真さんのところへ向かいます。何かトラブルがあったかもしれませんが」

「……ああもう! 本当に一夏も真もミツルも、あんた達三人はバカよ! 自分から突っ込んで行ってさ!」

「鈴さん……」

「行くわよ、シャル! ミツルも、真を引きずってでも戻ってきなさいよ!」

「……了解です」

鈴さんの言い方には棘がありますが、それは私たちを心配してくれているのでしょう。その心配を無駄にしないためにも、私は急いで、真さんの待機場所へ向かう。頼む……! 無事でいてくれ……!

ハイパーセンサーに映ったのは、ISを解除して謎の男と戦う真さんでした。

「能力を使つて戦つてる……? まさか、モンスターか!」  
私も援護しなければ……。

《皆さん、避けてください! 福音の攻撃が来ますわ!》

「何っ!?!」

その瞬間見えたのは……

《があああああッ!!》

「一夏あ!」

もう少しで零落白夜が届きそうだったのに避けきれず落ちていく一夏さんと、悲鳴を上げるシャルロットさん。そして

「っ! 真さん! 真さああああん!」

「真おおおお!」

攻撃に巻き込まれる真さんの姿でした……。



負傷した一夏さんと真さんを運んで何とか帰投しましたが、空気はとても重いです。シシャルロットさんと鈴さんは想い人が意識不明の状態になっていることに気を落とし、セシリアさんは作戦失敗には自分に責任があると抱え込み、そして私は……相棒がISの攻撃を受けたことにショックを受けています。

幸い、寸前に鎧化して身を守ったからなのか命に別状はありませんでした。しかしそれで威力を無くすことが出来るかというと、そうではありません。あくまで軽減するだけなのです。

完全に油断していました。心のどこかで、ISに巻き込まれるような行動はしないだろうと思いついていました。ゆえにこのような結果になってしまった！

「クソ……クソオー！」

俺は悪くないと正当化する自分と、俺が悪いと責め立てる自分の二つの気持ちがごちゃごちゃになってしまい、思わず近くのゴミ箱を蹴飛ばしてしまう。

「ミツル」

「……ラウラさんに、簪さん」

「お前のそういう顔は、初めて見た」

「うん。いつも、微笑んでることが多いから……」

「……すいません」

確かに、人前で激昂するというのは初めてかもしれませんがね。だからなのか、ラウラさんは意外そうな、簪さんは少し怯えたような表情をしています。

「ミツル、少し聞きたいことがある」

「何でしょう？」

「真のことだ」

「……………真さんの？」

「ああ。あの時、真は福音の広範囲攻撃に巻き込まれたんだな？」

「はい」

「……なぜ、真は五体満足なのだ？」

「……仰ってる意味が分かりませんが」

「ISは、現代兵器を凌駕するパワードスーツだ。そんな奴の攻撃に巻き込まれたならば、手足が失われてもおかしくない。それなのに、なぜ意識を失ってる程度で済んでいる？ 長い間タッグを組んできたミツルならば、知っているのだろうか？」

「マズいですね……。彼が無事だったのは、能力で鎧化していたからだ。だが知らない人が見れば、ましてや異能や異形を恐れるこの外の世界なら、彼は恐れられ、最悪の場合、敵とみなされるかもしれない。「運が良かったのでしよう。爆発の衝撃波で気を失ったのでは？」」

「狭い足場にも着弾してるといふのにか？ それに、あれは運が良かった程度で済む話ではない」

「ミツル……。どうしてもはぐらかすの？」

「……………」

「言えるわけないでしょうが……！ このような時どうすれば良いんですか、父さん……………」

### 33話 不思議な空間（一夏視点）

「……は……？」

目を覚ますと、俺は海岸にいた。足の裏からは砂浜の熱さが、耳には波の音が響いている。さつきまで福音と戦って……そうだ、福音！白式を展開しようとするけど、ふと見ると待機形態であるブレスレットが無い。

「何で……？」

「お兄ちゃんは、何で強くなりたいの？」

「え？」

声のした方へ振り返ると、白いワンピースを着て大きな帽子をかぶった少女がいた。表情は帽子に隠れて見えない。

「君は……？」

「お兄ちゃんには、とーっても強いお姉ちゃんがいるよね？ それなのに何故強くなりたいの？」

どうしてこの子は千冬姉のことを知ってるんだろうか。俺の疑問にも答えず、少女は尋ねる。いや、質問されてるのに質問しようとしてるからか。

俺が強くなりた理由。それは……

「大切な人を、失いたくないんだ」

「大切な人？」

「俺が弱かったせいで……妹を失ったんだ。そして千冬姉も悲しむことになった。そんなのはもう、嫌なんだよ……！」

俺が弱かったせいで、マドカは行方不明になってしまった。だからもう……失いたくないんだ。大切な人を。

「……大切な人って、家族？ それとも恋人？」

「な、何で恋人が……？」

「お兄ちゃんは気づかないの？ お兄ちゃんに恋をしている人に」

恋……俺を好きだと思ってる人が！

「おい、これ以上は言うな。そこから先は本人が気づかなければ意味がない」

「あ、お姉ちゃん」

「……千冬姉？」

どこからか、騎士の格好をした女性が現れた。その雰囲気や口調は千冬姉そっくりだけど、何か違う感じもする。

騎士は、俺の正面に立つ。

「敵を倒さなければならぬ。誰かを失うことは嫌だ。それ故に、強くなりたいたいのか？」

「……ああ」

「……お前は、強さを勘違いしている」

「え？」

勘違いをしている？ 騎士の言ってる意味が分からなかった。

「求める理由は良い。だが、今のまま力を渡せば、お前は自ら死を選ぶだろう」

「死……」

「そうだ、死だ。死の先に何があるのか、お前は知っているのか？」

そんなの……分かるわけないじゃないか。死んでしまったら……そこでおしまいだ。

「分かるわけないだろ……。そもそも、死にたくない！」

「だが、お前の求める強さとは、自己犠牲の上に成り立ってしまったている。それは強さではない。自殺志願、あるいは無謀、蛮勇とも言う」

「で、でも、誰かが前に立たないと……」

「仲間を信じてよー！」

大きな声が聞こえた。その方を見ると、緑色の長い髪をしていて巫女服を着ている少女がいた。しかも、彼女の周りとその後ろは森が出来ており、今までのいた海辺が一変して湖になっていた。

「お前は……そうか。コアネットワークを使って入ってきたのか」

「そうか。あのお兄ちゃんは君の声が聞こえるからね」

二人は納得してるけれど、巫女少女は怒りながら俺に近づいてくる。

「信じてくれる人たちが信じないで死んじゃったら、それこそ一番の裏切りだよー！」

「だからって、仲間たちを放置するなんて出来ないだろ！」

「それに、元々は入ってきた密漁船が悪いじゃん！ 戦力を分散したからこうなったんだ！ 分かる!? 君のせいで下手したら、待機してる生徒達が死んじゃってたんだよ!」

っ！ 言い方は厳しいが……冷静に考えたらそうだ。確かに、そのまま鈴たちと合流して福音に集中攻撃すれば撃墜できたかもしれないし、こうやって不思議な場所にいる間も、みんなが部屋で待機することは無かったかもしれない。

俺は心のどこかで、鈴たちが落とされるかもしれないって思ってたんだ。ミツルや真を除けば、みんな代表候補生だ。実力も彼女たちが上だ。それなのに……

「……俺、どこかで浮ついてたんだな。千冬姉の弟だから、俺一人でも出来るって。そんな気持ちだが、あつたんだな……」

「一夏、お前に問おう。お前は何を望む？」

騎士が尋ねてくる。

……たぶん、俺の答えを聞いて、納得してくれないかもしれない。でも、言いたいことを言おう。

「俺は……弱いせいで誰かが泣くのを見たくない。せめて……みんなの足を引っ張らないような力が欲しい！」

「そうか……。それが、答えか」

「お兄ちゃんらしいね」

「強くなるのは茨の道。求める強さにたどり着けず、絶望するかもしれないぞ?」

「だったら、それも乗り越えてやる！」

「……そうか。そう言うのなら、使いこなして見せろ。新しい力を！」

「これまで以上に、攻撃の時にエネルギーを消費してしまうけど……乗り越えて見せてね！」

騎士と少女が、俺に微笑む。そういえば、あの巫女少女は……?」

見ると、湖をパチャパチャと走りながら、俺のもとを去ろうとしていた。湖と森林がどんどん遠くなっていく。彼女の向かう先には、人

影が見える。

「お兄ちゃんが目を覚ましそうだから、もう行くね」

「ま、待ってくれ！ 君は……」

俺が言いかけた瞬間、目の前が眩しくなった。

それでも何とか目を開けたけれど、最後にハッキリ見えたのは、岩のようなものに覆われた男だった……。

### 34話 リベンジの誓い

「……………湖?」

トンネルを抜けると……………じゃなくて目を開けると、そこは湖だった。周りを木々が覆っていて、見上げれば青空が見える。

おかしいな? 俺はあの時ヴァレットと戦っていて、空からの光弾の雨に巻き込まれて……………。

《お兄ちゃん……………》

「ん? ……母さん!」

少し視線を下げると、そこには、小さくなった母さんがいた。な、何で母さんがいるんだ!?! ていうか、何か幼くなってるような……………。

ん? この声で「お兄ちゃん」と呼ぶのは……………。

「もしかして、グラビオスか!」

《正解〜!》

「何だよお前、巫女服なんて着ちゃって!」

《わ〜! 高い高い〜!》

思わず高い高いをしてしまう。まさか、自分のISコアが人間の姿をして話しかけてくるとは思わなかった。初めて起動したときは、ただ声が聞こえてくるだけで、姿は見えなかったもんな。

てことは、ここはISコアの世界ってことか?

《うん。正確には、お兄ちゃんに似合いそうな景色を選んで映し出してるだけなんだけどね。あまり詳しく話すと……………分からないでしょ?》

「おい、俺がバカだと言いたいのかコラ」

《うにゃ〜! 頭をワシヤワシヤしないで〜!》

遠回しに俺のことバカと言ってるみたいなので、頭をワシヤワシヤしてやる。反省しなさい、全く。

「で? ただこの景色を見せたいだけじゃないんだろ?」

《……………うん》

グラビオスは、少し悲しそうな顔になる。

《……………ごめんなさい》

「ん？ 何で謝るんだよ？ さっきのことはもう気にしては……」  
《そうじゃないの。お兄ちゃんにはとても強い力がある。だけど、私まで加わったせいで、お兄ちゃんが全力を出せない状態にしちゃった……》

つまり、俺の足枷になっちまつてるって言いたいのか。やれやれ。んなこと気にしなくても良いのに。これは、俺がグラビオスをうまく扱えるかどうかの問題だ。

「これは、お前じゃなくて俺の問題だと思っただがなあ」

《お兄ちゃん一人じゃ駄目なの！ お兄ちゃんは私に、動き回る楽しさを教えてくれた！ いろいろな人と話して、私に人間を見せてくれている！ それなのに……私だけお兄ちゃんに何もしてあげられないなんて、嫌だよお……》

「お前……」

涙をこぼしながら訴えてくるグラビオス。その様子に罪悪感が芽生えてきた。

《もつと私に頼ってよお……！》

「ううっ……。そうは言っても……」

俺に出来る事と言ったら、精々、敵を殴るか蹴るくらいだし……。

《……お兄ちゃんは、その戦い方が得意なんだね？》

「え？ あ、いや、まあそうだけど……」

《私、お兄ちゃんが戦いやすいように、武器とか変えてみるよ！ 頑張る！ ふんすー！》

「おおう!? そ、そりゃあ頼りにするけど……」

すると、目の前が眩しくなってきた。グラビオスの姿も見えなくなってくる。マズイ！ せめてあの子に、俺が言いたいことを伝えな  
いと！

「グラビオス！」

《ふえ？》

「俺も力を貸すぜ！ お前がもつと空を飛べるように！」

《！ うん……うん!!》

そして、目の前は完全に真っ白になった。



目が覚めると、旅館の天井が見えた。つまり、あの不思議な空間から帰ってきたということだ。

「真、大丈夫か?」

「……一夏?」

ふと隣を見ると、一夏が俺を心配そうに見ていた。

あれ? 確かお前ってボロボロになってなかったっけ? 見た感じすげえピンピンしてるけど?

「お前、傷とか大丈夫か?」

「ああ、大丈夫だ。目が覚めたら治ってた」

「マジかよオイ!」

たぶん寝かされてたんだろうけど、寝ただけで治るとか……。あ、それは父さんたちも一緒か。何はともあれ、一夏も回復したみたいだから良かったぜ。

「なあ真。福音……どうなったんだろうな」

「いや、さすがに別の部隊とかが食い止めたんじゃないか? 俺たちが寝てる間によ」

「そうだと良いんだけど……」

「とりあえず、だ。今の状況を織斑先生に聞きに行こうぜ?」

「……だな。行こう」

さすがに俺たちが再び出撃するのを待ってるわけなんて無い……よな?」

俺と一夏が部屋を出て廊下を歩いていると、3人の姿が見えた。相棒とラウラ、そして簪だ。見た感じ、相棒が二人に問い詰められるように見える。

「よう、相棒。どうした?」

「ま、真さんに一夏さん!」

「ええ!」

「おいおい、何だよその反応。まるで幽霊でも見てるかのような顔しやがって。」

「き、傷はどうした!」

「奇跡的に軽傷だけ。一夏に至っては全快よ。なあ?」

「ああ。なあ、ラウラ。銀の福音はどうなった?」

「えっと、奴はなぜかその場から動いていない。その場で静止している」

「おうふ……」

予感的中しちまったよ。静止してるとか、本当に俺たちの出撃を待ってるのか? まあ良い。だったら、これは福音をボッコボコにするチャンスって事だよな! 迎撃する部隊の再編成もまだ出来てないっていうし、また俺たちが出撃することになるだろう。

俺を巻き込んだ仕返しをしてやるぜ、へっへっへ……。

「ま、真が怖い笑みを浮かべてる……」

「あれは、敵をぶん殴ると決めた表情ですね。間違いないです」

「こ、怖い……。なぜか恐怖を感じるぞ……」

簪と相棒とラウラが何か言ってる気がするけど、気にしない。さあて、福音をどのくらいの手で殴ってやろうか。

そんなことを考えてると、鈴たちが戻ってきた。

「ふえ!? あ、あんた達……」

「大丈夫なの!」

「ああ、大丈夫だ。心配かけさせてゴメン、二人とも」

鈴とシャルに謝る一夏。想い人が無事だったことに、二人は安堵の表情を浮かべている。一方で、セシリアも笑みを浮かべている。

「ご無事で何よりですわ、真さん」

「ありがとよ、セシリア。サポート出来なかった上に心配させちゃって、申し訳ねえ」

「ふふふ。でしたら、まだ福音が静止してますわ。リベンジするチャンスですわね」

「だな。そんじゃあ、行きますかね！」

俺はゴキゴキと首を鳴らしながら、出撃する場所へ向かう。

すると、相棒や鈴、簪にラウラまで引き止めようとしてきた。

「ま、待ってください！ リベンジするにしたって、あなたの機体は……」

「飛行が苦手なはずよ！ 相手はすばしっこいのに、どうやって戦うのよ!？」

「それに、エネルギーも大きく減ってるはず……」

「今から福音に挑むというのは無茶だ！」

みんなの言いたいことは分かっている。確かに、俺の機体は飛行が苦手だった。そう……「だった」んだ。

エネルギーは問題ない。知らないうちに回復していたようだ。だとすると、残りは戦い方だが……。俺は、思わずニヤリと笑みを浮かべてしまう。

「心配すんな。グラビオスは……飛べるさ」

### 35話 VS 銀の福音（前編）

月がくつきりと見える空を、俺たちは飛行していた。今回の出撃でケリをつけると決めたセシリア達は、それぞれ祖国から支給されたパッケージを装備していた。セシリアは強襲用パッケージ『ストライク・ガンナー』を、シャルは防御パッケージ『ガーデン・カーテン』を、鈴は機能増幅パッケージ『崩山』を装備している。

そんな名前からして凄そうなものを身に着けているのに、彼女たちの視線は、なぜか俺の方に向いていた。さすがに見られればなしだとむず痒い感じになるから、セシリアに聞いてみる。

「なあ。何で俺の方を見てんだよ？」

「い、いえ。未だに信じられませんか。そんな重そうな見た目なのに、私たちと同じくらいの速度で飛べてるなんて……」

「言ったろ？ グラビオスは飛べるって」

「だからって、さっきまで低空飛行が精一杯だった機体がいきなりスイスイ飛んでるのを見たら驚きますわ！」

ああ……。そう言われると納得できるかも。でも、飛行が可能になった理由はセシリア達には話せない。話したとしても信じてくれるとは思えないし、相棒くらいにしか話せない内容だからだ。

「（真さんから霊力が溢れてる……？ まさか……）」

どうやら相棒は気付いたみたいだな。そう、俺は自身に蓄えられている霊力を、ISに流し込んでいる。

俺は、能力は父さんから受け継いでるけど、霊力といったものは母さんの影響を受けているらしい。幻想郷に住む人間よりもほんの少し霊力を多く持っていて、疲れにくい体なんだとか。そこにモンスター能力の影響も加わって、よりタフネスになってる……というの、神奈子さまが教えてくれたことだ。

話を戻すと、俺は機体に霊力を流し込む。するとグラビオスはその霊力をシールドエネルギーに変換して、飛行として利用できるわけだ。

さらに、俺の能力を霊力から読み取ったのか、攻撃するもしくは受

けそうになった瞬間に装甲を強化するというテクニクも覚えた。これによって、普段の装甲は軽くなった。これも飛行能力アップに繋がるわけだ。

まあ、これだけ大幅に追加された物があれば、当然、消えるものもある。射撃武器『カブレライトキャノン』と近接武器『ファイアテンペスト』が無くなった。武装は俺の拳と、シールドビットになる『グラビド・ヘッド』に限定されちゃった。

「だけど……むしろ俺らしくて良いかもな！」

幻想郷にいたころの俺は、基本的に武器は使わなかった。せいぜい、そこら辺に転がってた丸太を振り回すといった程度だ。今の装備ならシンプルでやりやすい。

すると、シャルから通信が来る。

「みんな、福音が見えたよ！」

「……本当に待機してますね」

「まるで、腹ん中で眠る赤ん坊みてえだな」

膝を抱きかかえて浮かんでる姿は、まさにそれだ。だが、動かないってことは今がチャンス！

「セシリアあー！」

「了解ですわ！」

セシリアが、2メートルはあるかと思うレーザーライフルを撃つ。奴が攻撃に気付いた時には、すでに命中していた。寝起きドツキリを仕掛けられて混乱している中を、俺たちが距離を詰める！

ちなみに、遠距離はセシリアが、中距離はシャルが、近距離は俺と相棒と一夏と鈴が担当だ。俺たちが殴る蹴る斬るをやってる間に、セシリアとシャルが援護射撃をするって戦法だ。

「まずは私から行きますー！」

相棒がブレードで斬りつける。スピード特化の機体だからか、福音が反撃しようにもすぐに後ろに回り込んだ。

「その翼は飾りかあ!? ああ!?!」

もはや顔芸なんじゃないかと思わせるほどの恐ろしい表情で叫ぶと、二本のブレードでXの字を描くかのように胴体を斬りつけた。か

なりのダメージを受けたのか悲鳴を上げるが、その隙を俺は見逃さない！

《キィアアアアアアアアアア！》

「うっせえんだよー！」

拳に炎を纏わせて福音の腹を殴る。だが、一発決めたくらいで引き下がるほど、俺は甘くねえ。今度は何も細工をせずに蹴りをぶちかます！

《っ!? 打鉄型ISを攻撃優先対象に……》

「やらせるかってのお！」

今度は鈴が、衝撃砲を連射する。不可視の砲弾ではなく、俺と同じように炎を纏わせた砲弾による猛攻撃。雨のように降り注ぐそれは、まるで隕石が降り注いでるような光景だ。

そこへ追い打ちをかけるように、シャルのショットガン二丁撃ちが決まる。しかし、あの撃ち方……

「カッコいいなあおい！俺もやってみてえー！」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ、真!? ほら、来るよー！」

シャルの視線の先に俺も顔を向けると、福音が攻撃を放とうとしていた。

「ヤバイ予感がするな……。相棒は俺の後ろに隠れな！一夏と鈴はシャルの後ろに！」

「わ、分かった！」

「了解！」

相棒が俺の後ろにつくと、俺は『グラビド・ヘッド』を起動させる。こいつはシールドビットって奴だが、セシリアのブルーティアーズのように、複雑に動くことはない。俺を庇うように前に出るくらいの動きしかできない。

……その代わり、ちよつとした特殊機能を備えているがな。

「真さん、来ましたよー！」

「つとおー！」

《銀の鐘、稼働開始》

その瞬間、水色のエネルギー弾が襲い掛かる。この大雨を連想させ

るような攻撃……まさか！

「真さんの考えてる通りです！ 一夏さんも、そのシルバーベルとやらで落とされたんです！」

「ついでに、俺を気絶させたのもこれか！」

威力も相当のものらしいが、シャルは防御用パッケージだし、俺の機体も防御に秀でている。だからダメージは軽い。

しばらくすると、相手の弾幕が薄くなってきた。福音は無防備になっっている。

「今だああ！ 一夏あああ！」

「るおおおおおおおおおおおお!!」

《っ！》

シャルの後ろから一夏が飛び出て、距離を詰めていく。どうやら、距離を詰めた後に『零落白夜』を当てるつもりらしい。

だが、相手もただやられてる訳にはいかないようだ。素早く翼を広げると、さつきに比べたら軽めの、それでもかなりのダメージを与えられるであろう弾幕を放ってきた。

「一夏、危ない！」

「大丈夫だ、鈴！ 『雪羅』をシールドモードへ！」

すると、一夏の左手からシールドが発生し、相手の光弾を打ち消していく。すげえ！ 何だありや!?

「驚いている場合ではありませんわ！ あれはおそらく、エネルギーをシールド状に形成しているもの……。長くは保ちませんわ！」

セシリアが俺に解説しながら、レーザーライフルを撃つ。背中に撃ったもんだから、福音の攻撃が一瞬止まった。今だ！

「いつけえええええ！」

一夏の叫びと共に、光の刃が福音を切り裂いた。さあ、これで相手はもう……!!?!

「嘘でしょ!! まだ動けるの!?!」

シャルの悲鳴にも似た叫びが、俺たちを動揺させる。殆どのISなら一撃で落とせるであろう『零落白夜』。それを受けたにもかかわらず、福音はまだ動いていた。

《……………》

「ま、真さん……」

「言いたいことは分かるぜ、相棒……。嫌な予感がする……」

その瞬間、福音が光に包まれた。あまりの眩しさに俺たちは目を瞑ってしまふ。

《キイイイイアアアアアアアアアア!!!》

辺りに響く獣のような声が、ヤバい状態になってしまったことを告げていた……。



### 36話 VS 銀の福音（後編）

目の前で獣のような叫び声をあげる福音。あまりにもおぞましい声に、俺たちはそれを見つめる事しかできなかつた。

「チクショウ！ しぶとい野郎だ！」

「最悪ですわ……。こんなタイミングで第二形態移行なんて……」

バッドタイミングって奴だな。今の福音は、エネルギーで作られたであろう翼が頭から生えている。俺の勘が言つてやがるぜ……。あの翼はやバいつてな。

「今は避けることに……。ぐううっ!？」

「相棒!？」

相棒がいきなり攻撃を受けた。光弾が飛んできた方向を見ると、腕をかざしている福音がいた。なんつー攻撃速度だよ……。つていうか、近くにいる一夏がやべえ！

「一夏あ！ 避けるお！」

「分かつてる！」

福音からの猛攻を必死に避ける俺たち。だけど、仲間につつからず且つ高速で避けるというのは至難の業だ。俺も、撃たれた相棒を抱えながら飛び回ってるもんだから、何発かくらつてしまった。シャルの方は『ガーデン・カーテン』によつて守られてるが、彼女の表情は険しい。鈴は元々実力が良いからなのか、何とか避けてる。セシリアも高速機動で避けてるし、一夏も、被弾はしてるものの掠り傷程度で済んでいる。

「真……さん……」

「相棒、無理して喋るな！」

「真さん……。このままではジリ貧です……。日本からの増援が来るのも怪しいでしょう……」

「分かつてるそんな事！ だから何とかしようと考えてるんだらうが！」

「……能力を使いましょう。モンスター能力を」

「……は？」

何言ってるんだ、コイツは？ モンスター能力を使う……？ みんながいる前でか!?

「撃たれて気でも狂ったか!? 能力を使う？ んな事したら……!」  
「ええ、分かっています。最悪、皆さんに私たちの正体がバレるでしょう。ですが、今はそんな躊躇いすら許してくれないですよ……!」

「っ！ キャアアア！」

「セシリア!? シャル、セシリアを……!」

「分かっているけど……攻撃が激しすぎて近づけない!」

「クソオ！ 俺が気を引く！ 鈴とシャルでセシリアを!」

「ちよ、一夏！ バカやってんじやないわよ!」

「が、ぐ、おおおおおお!」

……ああもう！ やるしか無いってのかよ！ 上等だ！ やってやる！

「しよがねえ！ やってやるよ!」

「それでこそ真さんです。さて、もう大丈夫です。私も……全開で行きますから!」

相棒の目が赤く光る。それとともに、相棒の傷が音を立てて塞がり、気配も殺気に似たような物に変わる。相棒がそこまでやる気なら、俺もやらないとなあ!

「グラビオス。ちいとばかし付き合ってくれよ？ 能力を開放する!」

《分かった!》

俺の体や頭がピキピキと音を立てる。俺の能力、それは……「岩竜になる程度の能力」。鎧竜グラビオスの幼体であるバサルモスの力を、俺は扱うことが出来る。そして今俺がやっているのは、体を岩竜の甲殻で覆う『鎧化』というやつだ。

「防御は俺の能力で……飛行能力はISのエネルギーで……!」

腕や足の装甲も解除し、代わりに岩のような甲殻が手足を覆う。一夏たちから見たら、前に襲ってきた無人機のような全身装甲フルスキンに見えるだろうな。

体中を熱湯が駆け巡っているような感覚が、俺に襲い掛かる。能力を使うのは久しぶりだからな……！

「行く……ぜ。相棒……！」

「ああ……。ぶちかましてやるぜ……！」

「グルアアアアアアアア!!」

俺たちは雄たけびを上げると、瞬時加速で一気に福音との距離を詰める。驚いている雰囲気を出しているのを無視して殴りつける。

「ダラア！」

《っ、熱源反応を確に——》

「遅いんだよアホンダラあ！」

後ろから相棒が斬りかかる。福音は大きく仰け反るが、まだ止まる気配がない。なら……止まるまで殴り続けるだけだ！俺は拳に炎を纏わせてラツシユをかます。

「ドラドラドラドラドラドラア！」

《ガッ……ギッ……》

銀色の装甲がどんどん焼け焦げていく。苦しそうな声も上げているが知ったこっちゃやねえ。敵ならばぶちのめす……それだけだ！

俺がヤクザキックで蹴り飛ばすと、追い打ちをかけるように青いレーザーが福音に着弾する。その方を見ると、狙撃の体勢に入っていたセシリアがいた。

「なぜ真さんが全身装甲になってるのか、ミツルさんの赤い目は何だとか聞きたいことは沢山ありますわ。ですが……！」

「終わったらたっぷり聞かせてもらおうからね！」

鈴が炎の衝撃砲をぶちかます。俺の拳の跡もあって、かなり痛々しい姿になった。そこへ赤い残光が空を駆ける。相棒だ。

「ずえりやあああああ！」

「僕がいることも忘れないでよー！」

相棒のブレードが福音の装甲を削り、手を付けてないところをシャルのマシンガンが襲う。それはまるで、福音を中心に二人が回ってる

ような動きだ。そしてシャルが離れると、相棒が腕からブレードを生やす。

「食らいやがれええええ！」

ズガンツ！という音が聞こえそうな勢いで切り裂くと、今度は一夏の番だ。手の平からエネルギーの弾丸を浴びせる。俺たちの隙を与えねえ攻撃に、福音はただ攻撃を受けてるだけだった。しかし……

《キィィィィィアアアアアアアアアアアア！》

いい加減にしろよ！って感じの咆哮を上げる。すると相棒が、一夏の肩を引つ張った。

「うあ!？」

「ヤバい予感がする！ 真の後ろに行きなあ！」

「どわあああ!？」

「あぶねえ!？」

相棒の奴、俺に向かって一夏を投げ飛ばしやがった！ それと同時に、福音から物凄い数の光弾が放たれる。俺やシャルがシールドを展開して防ぐ。近くに盾となるものが無いセシリアが不安だったが、相棒が弾幕を潜り抜けて彼女の手を掴み、退避させる。にしても、すごい威力だ。シールドに着弾したときの衝撃が伝わってくる……！

「ぐっ、おおおお……！」

「このままじゃヤバい……。こうなったら俺の『雪羅』をシールドモードにして……！」

「心配すんな一夏。これぐらいでぶち破られるんじゃないやあ……。要塞になんかなれねえ！」

『グラビド・ヘッド』は、ただ攻撃を防ぐだけじゃないんだぜ。福音の光弾が当たつてからしばらくして、目の前に文字が浮かぶ。

——熱エネルギー、チャージ完了。

「一夏。ちよいと熱くなるぜ。火傷するなよ?。」

「え? それってどういう……！」

「お前ら避けるお! ぶちかますぞおお！」

『グラビド・ヘッド』は、鎧竜グラビモスの頭のような形をしている。口にあたる部分が開くとそこに見えるのは……砲門だ。そこが発光

を始める。そう。これこそ、俺の能力をグラビオスが読み取ることで得た新機能。シールドに着弾した熱を吸収して、熱線として放つ！

『真、よく見てろよ？　これが、いつしかお前も使えるようになる技だ！』

父さんが見せてくれた技を、俺は……強化してぶっ放す！

「ツイン……ファイアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

二つの砲門から放たれる極太の熱線。それは福音の装甲を焼き、さらにエネルギーで作られた翼を焼き落とした。

熱線が出し尽くされた頃には、福音は光を放っていた。やがて機体が完全に解除されると、金髪のパイロットが海へ向かって落ちていく。だが俺たちが行くよりも速く、セシリアと鈴が保護してくれた。

「ぐっ……フウウウ……」

俺はゆっくりと、鎧化を解除していく。いくら溶岩にも耐えられる甲殻をしていたって、殴った時の痛みとかも来てしまう。それに、長時間の緊張のせいか疲労が尋常じゃない。

「真さん……」

「相棒か……」

いつも通りの口調で相棒が話しかけてくる。どうやら相棒も、元に戻ったようだ。

「……帰りましょうか」

「帰ったら、面倒くさいことになりそうだけどな」

明らかに非常識な部分を見せちまったからな。最悪の場合、幻想郷のことも話さないといけないかもしれない。だけど今は……ゆっくりと休みたい気分だった。

### 37話 任務を終えて……

星がはつきりと見える夜空の下。大海原を一望できる崖の近くに、千冬はいた。彼女の右手に握られている携帯には、『この場所まで来て』と書かれたメールが表示されていた。差出人は……東だ。

いくら福音を稼働停止にさせたとはいえ、一夏や真たちが行なったのは無断出撃だった。千冬は彼らに説教をしたあと、身体検査などを真耶に任せてこの場にいる。

「メールで招いておいて隠れているとは、礼儀がなっていないんじゃないか?」

「何言ってるのさ。ドツキリ番組とかではよくあるでしょ?」

呆れたような、それでいて警戒しているような声で、背後に立つ東に声をかける。それに対して東は、いつも通りのテンションで答えていた。

「随分と珍しい文面だったな。いつもだったら顔文字とかを連発するようなメールだというのに」

「いやー、今回ちーちゃんに話したいことって言うのは、とても、とーっても大切なことだからね。流石の東さんも真剣になるよ」

先ほどまでの間延びしたような話し方とはうって変わり、真面目な口調になる。その変貌に、千冬は思わず息を呑んだ。改めて見ると、その表情は真剣な目つきは今まで見たことが無かった。

「……お前がこうして話すという事は、よっほどなのか?」

「うん。ちーちゃん……。君はもう一度、剣を取らないといけない」

「……なんだと?」  
「亡国機業ファントムタスクって言ったっけ? ちーちゃんなら聞いたことあるよね?」

「……………その亡国機業、壊滅したよ」

「何だと!」

「それがどれだけヤバイ事分かるよね? この事を知ってるのはご

く一部の奴らだけど、たぶんかなり混乱してると思うよ」

「……亡国機業を壊滅させるほどの組織が、IS学園を襲撃するかもしれないと？　だから私に……『暮桜』にもう一度乗れと？」

「そういう事。これ、『暮桜』の解凍プログラム」

素早く千冬に近寄り、それを握らせる。驚きと戸惑いの隙を突かれたため、嫌だと言って返すことも出来なかった。

モンド・グロツソにて自分が乗っていた相棒。しかし千冬が持つ強さによって、それを恐れた者たちが弟と妹を奪おうとした。結果、妹を失った。だから決めたのだ、自らの牙を折ることを。だということに……

「お前は……マドカに続いて一夏も失えと言うのか!？」

「ちーちゃん。亡国機業を壊滅させた奴らは、人を殺すことにためらいがないんだよ。それどころか喜んで殺すような連中だ。そんな連中に、いつく人を殺されても良いの?」

「……もはや、逃げられないということか」

千冬は、渡された解凍プログラムをポケットに突っ込んだ。

「ところで、お前の話し方はまるで敵のことを知ってるような口ぶりだな?」

「あは、分かっちゃう?　そうだよ。私は『奴ら』のことを知ってる……いや、教えてもらったの方が正しいかな?」

「教えてもらった?　誰に?」

「……ごめん。それはまだ言えないよ。私も命が惜しいからね」「なっ……」

亡国機業を壊滅させた存在すら驚きだというのに、その正体を知っていて且つ束ですら「命が惜しい」と言わせてしまう者がいるのだ。千冬にとって、それは大きすぎる衝撃だった。いつものふざけた態度だったなら、いつもの強気で問い詰めることが出来たかもしれないが、彼女のその申し訳なきような表情が、その気を失せさせた。

「私を呼んだ理由はそれだけか?」

「いや、もう一つあるよ。良いニュースと悪いニュースの2つがあったんだ」

「それなら、どちらから先に聞か尋ねる流れだろうに……」

「それだと、大抵は悪いニュースからでしょ？」

「全く……。で？ 良いニュースというのは？」

額に手を当てて呆れる千冬。しかし、再び驚きの表情を束に晒すことになる。

「姉さん……」

「っ!? マド……カ？」

束の後ろから、千冬を幼くしたような顔つきの少女……マドカが現れた。もう二度と会うことが無いと思っていた妹。そんな彼女が、目の前に居る。

「……マドカ！」

「姉さん……姉さん……うう……」

もはやこの場に、「凜とした織斑千冬」は居なかった。涙を流しながら抱きしめるその姿は、「妹との再会に涙する姉」の姿だった。

そして、しばらく抱きしめた後、マドカを撫でながら束に尋ねる。

「束。マドカはあの後、今までどこに……」

「イギリスの非合法な研究所。多分、あの時に誘拐した連中……亡国機業が売り渡したんだよ。研究目的は、高いB I T適性を効率よく付加させる方法らしいけど……」

「……V Tシステムのような、人工のブリュンヒルデを作るのが本当の目的なんだろうな」

聞けば、かなり厳しい訓練をさせられていたらしい。幼いというのに大人がやるような訓練メニューをやらされたり、B I T適性を無理やり高めるような処置もしていたという。この事を聞いた千冬は怒りに震えた。すぐにでも『暮桜』の封印を解いて、イギリスに殴り込みをかけそうなほどの怒りだった。

そんな千冬を、束は「落ち着いて」と宥めた。

「その研究所から研究データを盗んで、政府に流しておいたからね♪  
今ごろ職員の間中は路頭に迷ってるさ」

「そうか……。しかし、こうして生きて再会できるとは思わなかった。これから、マドカはどうすれば良い？」



「私のラボで検査したり治療したりするよ。無理やり高められたBI  
T適性は戻せないかもしれないけど、体の傷を癒すことぐらいは出来  
るからね♪」

「……何から何まですまない」

「もく、ちーちゃん！ マドちゃんとも再会出来たのに、『すまない』な  
んて言葉は辛気臭くなるからダメ！」

「し、しかし……」

『ありがとう』だよ、ちーちゃん」

「っ！ ……そうか、言い直そう。……ありがとう」

「ふふふっ、どういたしまして♪」

千冬が礼を言うと、束も満面の笑みで返す。その光景はまさに、親  
友同士のかけ合いだった。

翌日。真たち専用機持ちチームは機体をそれぞれ片付け、自分のク  
ラスのバスに乗っていた。一夏の隣に座る真は大きなあくびをする。

「ふわ〜あ。眠い……」

「眠そうだな？」

「何でお前は平気なんだよ……。 お前も俺や相棒と一緒に、反省文と  
自分の機体についての報告書を書いてただろうが……」

「それは、お前が何度も書き直しを食らったからだろ？ 『自分の中  
にある竜の力を反映させてます』って何だよ」

「本当の事なだけどなあ……」

真、ミツル、一夏の三人は、反省文だけで解放してもらえなかった。  
一夏は第二移行をした為、その性能を報告する羽目になった。真とミ  
ツルも、最初に報告された以上のスペックを見せてしまったため、そ  
の説明を求められたのだ。

しかし、やけに吹っ切れたような顔をした真とミツルの二人は、「自  
身の中にある竜の力を、機体にも反映させた」と説明。当然納得され

ることなく、報告書の書き直しをさせられたのだ。そのため寝不足なのである。今ごろ二組のバスでも、ミツルは大きなあくびをしているだろう。

「あなた達が、男性操縦者さん？」

声が出た方を見ると、そこには二十歳くらいの、青いカジユアルスーツに身を包んだ女性がいた。ちなみに胸元は開けている。

最初こそ頭にハテナマークを浮かべる二人だったが、その長い金髪を見て思い出した。

「確か、銀の福音の……」

「ナターシャ・ファイルスよ。私の大切な子を助けてくれたお礼をしに来たの」

「お礼……!?!」

突然、ナターシャは一夏の頬にキスをする。突然の事に一夏はおろか、隣の真も周りの女子も固まった。

「ありがとう、白い騎士<sup>ナイト</sup>さん♪」

そう言うと、今度は真に顔を向ける。思わず「うえっ!?!」と声が出てしまった。そして……真の頬にもキスをする。

「友好の意味でのキスよ、初心なドラゴンさん？ それと貴方のその拳……。とても効いたわ。イーリと仲良くなれそうね」

バイイと言うと、バスから降りて行ってしまった。二人ともまだ固まっている。そんな中、真に対して視線を向けている人物が二人いた。

「(むく。何でく？ 何で東風やんがキスされたのを見ると、イラってしちやっただのく?)」

一人は、真のルームメイトの本音だった。少しだけ頬を膨らませて怒っている。ナターシャにキスされたのを見てから、やけにムカムカするのだ。

だが、この気持ちを理解することは出来なかった。

二人目は、意外なことに筈だった。しかし、その目は本音のような嫉妬によるものではない。彼女の真を見る目は……怯えていた。

「(何だ!?! 真から……気というのか？ あの靄のような物はなんだ

!?)」

箒の目には異様な光景が映っていた。ラウラも、シャルロットも、セシリアも、そして一夏にも霧のようなものが見える。この場にいる生徒・教師全員から、霧が噴き出ているのだ。

だが真の霧は違う。彼から噴き出ている霧の濃さは、周りよりも何倍も濃いのだ。それと共にプレッシャーのような重苦しさも若干感じる。

「顔色悪いけど大丈夫？ 先生呼ぶ？」

「い、いや……。大丈夫だ」

「そう？ もし辛いんだったら遠慮なく言っただけ？」

「(何でみんなは平気なんだ!? 私が……。私がどうかしてしまったのか!?)」

隣に座っている女子は平然としていた。まるで自分がおかしくなってしまったかのような感覚に陥る。

「(きつと疲れているんだ……。寝ていれば見えなくなる……。見えなくなるはずだ……。)」

どうか、次に目を開けた時には見えなくなっていてほしい。そう願いながら目を瞑った。

### 38話 仲間にもかすとき

臨海学校を終えてしばらく経ち、俺たちはいつも通りの日々を送っていた。勉強したり、特訓したり、クラスの人々と話に混ざったり……。こういつちや何だが、結構楽しい毎日だった。

……いや、少しだけ変わったことがある。本音の様子だ。

「なあ、本音？ 何で俺の膝の上に乗ってるんだ？」

「座り心地が最高なのだ♪」

「そうなのか？ ってか、相川！ お前写真撮ってるんじゃないか！ 他の奴らもだ！」

最近、俺に対するボディタッチが激しいような気がするんだよなあ。ずっと前にやった「あくん」をねだる事も多くなったし、俺と一緒にいることが多くなった。

さすがに、相棒や一夏たちとの訓練の時は一緒じゃないけど、今のように彼女との距離が近いと……凄くドキドキする。顔も少し熱くなるし、胸がバクバクと高鳴っちゃう。

「（すげえ苦しいはずなのに……どこか嬉しい気がしちゃうんだよね）」

「どうしたの？ もしかして、重かった？……？」

「そんな事はねえよ。ちよいと、な。ドキドキしちまって」

「……えへへ、そっかあ♪」

その POWワンとした笑顔に、またドキツとしちまう。どうしちまうんだ、俺の心は……。

昼休み。俺は鈴に呼ばれて屋上に来ていた。言われるがままに来ると、そこにはセシリアにシャルにラウラ、鈴に簪に一夏と、福音戦の時のメンバーがいた。ていうか、俺の隣にはいつのまにか相棒がいた。

「あれ、相棒？ お前もか？」

「はい。鈴さんに屋上へ来るようにと呼び出されて……」

困ったような笑みを浮かべる相棒。困惑してる俺たちを無視して、鈴が口を開く。

「さあ！ 教えて貰うわよ！」

「教えてもらう？ 何を？」

「あの時に言ったでしょうが！ あんた達の事を教えてもらおうって！」

「……………ああ、そう言えばそんな事を言ってたような気が」

「すっかり忘れてたぜ…………」

嘘だ。本当は覚えてる。だけど……………本当に大丈夫だろうか。俺と相棒は、この外の世界に人間からすれば、化け物と見られてもおかしくない。父さんも影夜さんも、能力が原因で周りの人々から避けられていたと言うし、不安で仕方がない。

「しかし、なぜ急に私たちを疑うようになったのです？」

「最初は、ほんの些細な事だったわ。あんた達は『海を見たことが無い』って言っていた。その時は、テレビで見たことくらいはあるんだろうなーって思ってたわ」

「でも、いざ海に来てみれば、真たちは海そのものを初めて見たかのよくな反応だったよね？ そういう事って、あるのかなって思ったんだ」

鈴とシャルが、俺たちに理由を説明する。だが、「最初は」って事はまだあるのか？

っていうか、俺と相棒はそんなに分かりやすい反応だったか？

「次に気になったのは、ミツルさん。貴方についてですわ」

「私、ですか？」

「はい。鈴さんから聞きました。貴方はスカーレット家に仕えていると。ですが、その家は既に消えている名門。ましてや『吸血鬼の館』と呼ばれている曰く付きの家ですわ。日本人である貴方が、なぜスカーレット家のことを知っているんですの？」

「……………」

相棒の顔が、ちよいと歪んだ。「しくじった」って感じの顔だ。おいおい何やってんだよ…………。

俺が呆れていると、今度は簪が聞いてきた。

「次は真くんだよ」

「お、俺か？」

「福音との最初の戦いとき、攻撃に巻き込まれたよね？ それなのに軽傷だった。これはなぜ？」

「え？ あ、いや、ISを展開してたからで……」

「嘘。展開していたら、ISの反応を私たちがキャッチしているはず。でもあの時は反応が無かった。つまり、ISを展開してなかったということ」

「ぐ……」

い、いつにも増してよく喋りやがる……。くそ、オペレーターをしていた簪だからこそ言えるってことか。

「そして……あの機体。真のグラビオスは全身装甲じゃないはずだ。俺みたいに第二移行したわけではないのに、どうして……」

一夏は俺の機体について聞いてくる。

「相棒……」

「これは、逃げられないかもしれませぬ……」

相棒と共に、大きな溜め息を吐く。一夏たちからしたら、追い詰められてとうとう観念した犯人のように見えるだろう。

「……分かりました。話しましょう」

「こうも疑われてはなあ……」

それに、人化モンスターがこの世界にいる以上、連中は俺や相棒を狙うだろう。その時にみんなを巻き込ませないという自信がない……話すしかないだろう。

俺たちが一通りの説明をするが、ほとんどの奴らが啞然としていた。そりやそうだろうな。神様や妖怪、吸血鬼といった存在が一緒に暮らしてるなんて言われても、いきなり信じられるわけがない。

「つ、つまりその幻想郷というところから来て……」

「モンスターという存在と戦っている……?」

「まあ、そういう事になるな。福音戦の時に援護できなかったのは、人化モンスターに襲われたからだ」

シャルや一夏の言葉に、俺が答える。モンスターの存在も話したところ、ラウラが震えていた。

「で、では、あの時に私を狂わせようとした男も……」

「はい。私たちが狙っている存在です」

「そんな存在が、易々とIS学園に侵入してたとは……」

「で、ですが、なぜそんな重大なことを黙っていたのです?」

セシリアの問いに、俺たちは言葉を詰まらせる。言ってしまうえば一夏たちを信用してなかったって事になるからなあ……。

「……すまねえ。こんな話を信じてもらえるわけが無いと思っただ」

「他の人とは違う者が蔑まれるという話を、よく耳にしました。それが怖くて……。本当に申し訳ありません」

「あ、頭を上げてくれよ! 今まで不思議に思っていたことが、これで殆ど説明されたもんだしさ!」

「そうですね! いつものように豪快に笑ってくださいな、真さん!」

「一夏……セシリア……」

みんなの顔は、化け物を恐れるような顔では無かった。それどころか信頼しているということを証明するかのようになり、目がキラキラしている。鈴が、二かっとなんて笑って、みんなを代表するかのようになんて言う。

「これからは隠し事無しで、アタシ達に見せてよ! あんた達の事もっと知りたいんだからね!」

本当の仲間を見つけたのかもしれない。俺と相棒はそう思った。

### 39話 影のぶととき男

駅前のデパートでラウラの私服を買ったシャルロット達は、オープンテラスのカフェで昼食をとっていた。

寝るときはいつも全裸な上に、私服は軍服しかないというラウラ。そのことに頭を抱えたシャルロットは二人で服や小物を買うことにしたのである。だが、ラウラとシャルロットの容姿に目を付けた女性店長によつて、ラウラは見事に着せ替え人形にされたのである。

今でこそ普通にラザニアを食べているが、その前のラウラはまさに疲労困憊といった顔をしていた。

「(それにしても、何で突然、もっと可愛いのが良いとか言い出したんだらう?)」

ラウラはドイツ軍の試験官ベイビーだ。生まれてから軍人として育ってきたせいも、オシヤレといったものに疎かった。色々薦めてみても、「面倒くさい」「どうでもいい」といった言葉の繰り返しだった。

それが、いざ試着室に入つてしばらくすると、「もっと可愛いのが良い」と言つたのだ。それも顔を赤らめて。

「(……ははーん? もしかして……)」

あの顔は見たことがある。自分も好きな男子、一夏について語る筈や鈴の顔とそっくりなのだ。つまり……

「ラウラってさ、ミツルのこと好きなんですよ?」

「っ!? ゲホッゲホッゲホッ!」

突然の質問にむせるラウラ。その後顔が赤くなつたことが、答えを示していた。プルプルと震えながらシャルロットを見ると、ニヤニヤといやらしい笑みを浮かべていた。

「と、突然何を言い出す!?!」

「いやー、福音戦の時に二人ともいい雰囲気だったからさ? もしやと思つたんだよね」

「ええい、ニヤニヤするな!」

「で、どうなの? さつき『かわいい服が良い』って言つたのって、ミツル絡み?」



「う……うむ……」

恥ずかしそうに、小さく頷くラウラ。その小動物を思わせる仕草にキユンとしたが、何とか踏み止まって話を続ける。

「そっかく。でも、ミツル達から話されたことは驚きだったね」

「そうだな。だからこそ、あのような訓練も出来るのだな……」

「あのような訓練？」

「うむ。一度、真とミツルによる訓練を見せてもらったが……」

思い出すのは、二人による組手。いや、あれはもはや喧嘩のようなものだった。真がミツルを殴れば、お返しにと言わんばかりにミツルが蹴り飛ばす。時に互いの拳がぶつかり合う時もあったが、あれは速すぎて見えなかった。知っている人が居れば、某奇妙な冒険のオラオラと無駄無駄のラツシユ比べに見えたことだろう。

ラウラが話す内容に、シャルロットは顔が引きつる。

「た、確かに二人ともモンスターと戦ってるって言うなら、それくらいは出来そうな気もするけど……」

「あれは、それなりの長い経験を積まなければできないものだろうな」  
そんな感じで雑談をしていた二人だったが、ある女性に声をかけられた。

「ねえ！ あなた達、バイトしない!？」

「……………え?？」

@クルーズ。巷で人気の、メイド&執事喫茶である。その店長である女性によると、本社からの視察が来るという時に、バイトの二人が駆け落ちしたのだという。困ってる様子だったこともあって断ることも出来ず、結局手伝うことになったのである。

「でも意外だね? ラウラとかは断ると思ってたよ」

「これも一つの経験だ。ミツルもこの喫茶店と似たような事をしていくのだろうか? 私も体験してみたくてな」

「あはは、やっぱりミツル絡みなんだね……」

フンスと胸を張るラウラ。そんな彼女に話しかけるシャルロットは複雑な気持ちだ。

「確かに男装はしたけれどさあ……。だからって執事服を着る運命になるなんて思わなかったよ……」

店長から「似合うから」という理由で渡された執事服。やはり自分は男っぽい部分があるのだろうか、少しだけ思ってしまう。

「でも……ラウラの言う通り、経験の一つかもね」

ラウラの言葉を思い出して、クスリと笑った。

「ふう、結構疲れるなあ」

注文の入ったテーブルに紅茶を配り終えた後、ほんの少しだけ一息つくシャルロット。その美しい容姿が注目の的となり、視線を大量に感じたのだ。主に同性から。

「真や一夏の気持ちだが、今になって分かった気がするよ」

ふと、ラウラのことになった。何せ転入時に一夏にビンタをかましていたほどだ。さすがに見ず知らずの客にそのような事はしないだろうが、やっぱり心配だ。

そこで、先ほどラウラが向かったテーブルへ目を向けると……

「お、お待たせしました。ホットケーキとコーヒートのセットと、こちらはチーズケーキと紅茶のセットです」

「はい、よく出来ました。奉仕するのであれば丁寧に。それを忘れてはいけませんよ?」

「は、はい!」

何と、丁寧な接客をしていた。まだぎこちなさはあるが、それでも予想以上に良い出来だった。

「ミルクと砂糖はお入れになりますか?」

「いえ、こちらで調節するので大丈夫ですよ」

「かしこまりました。それでは、ごゆっくりどうぞ」

そう告げてテーブルの元を去る。

「すごいよ、ラウラ! 結構上手いよ!」

「そ、そうか? 実は、先ほどあちらのお客様から注意を受けてな

……」

「さっきのテーブルの人？ ……つて、ええ!？」

シャルロットは、そのテーブルに居る人物に驚きの声を上げる。何せその席にいる男は、仲間に瓜二つだったからだ。

黒い髪に整った顔というその男は、右目を隠していればミツルと間違えてしまう程のそっくりさんだった。この店のものではない執事服を着ているのがとても目立っている。そんな男の目の前に座る女性性は、赤い髪をしていて、まるでどこかのオフィスで働くOLのような服装をしていた。

「ふむ、美味しいですね。いつか、お嬢様にもコーヒーを出してみましようか」

「少し苦いです……」

「それなら、砂糖とミルクを入れてみましょう。まろやかになるはずですよ」

そんな二人は、仲良さげに談笑していた。窓から見える景色も相まって、とても絵になる光景だった。

「(あの話し方……。ますますミツルにそっくりだ)」

「(あれ？ あの男の人の声、どこかで聞いたことあるような……)」  
「全員動くんじゃねえ!」

突然、大きな声と銃声が響く。三人の男たちは、ジャンパーにジーパンに黒覆面、手に持った銃に鞆から飛び出た紙幣と、漫画で見るような強盗の姿をしていた。

《犯人一味に告ぐ。君たちは完全に包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返す——》

外には、ライオットシールドを構えた警官たちが見える。しかし、このあまりにもテレビで見そうな光景に……

「警察の対応……」

「古……」

そう呟かざるを得ない。しかしその態度が、追い詰められてピリピリしている強盗達を刺激してしまった。

「あんだとゴラァー!」

バババババババツ！ 天井に無数の穴が開く。辺りに悲鳴が響く。そんな中、シャルロットとラウラはカウンターに身を隠しながら、様子をうかがっていた。

「サブマシンガンにショットガンにハンドガンか……」

「敵は、警察が逃走用の車を用意するまで持久戦に入るつもりだろうが、あそこまで神経質となれば精神的疲労が起こるだろう。その隙を突いて……）」

ISの代表候補生は、もしもの時に備えて訓練をしている。だからこそ冷静に状況把握を行っていた。しかし、ある席を見て二人はギョツとした。

「やれやれ……。せつかくのデートだというのに、何と殺風景になってしまったのでしょうか。おまけに、硝煙の臭いで紅茶とコーヒーの香りが台無しです」

ミツル似の男が、呆れたような顔をしていた。他の客が身を寄せ合っているのに対し、その男は女性を守るように立っていた。

「何だとテメエ!?!」

「ここは飲食を楽しむ場です。射撃を楽しみたいのであれば、別の場所でないさい」

「偉そうなこと言ってるんじゃないやねえぞ、兄ちゃんよお!」

「……やれやれ。聞く耳も持たないようですね。仕方ありません。お相手しましょう」

「影夜さん……」

「大丈夫だよ、こあ。私は死なない」

心配そうにしているこあと呼ばれた女性の額に、影夜と呼ばれた男は軽くキスをする。

その余裕そうな態度に、リーダーと思われる男がついにキレた。

「ふ、ふざけんじゃねえええええ!」

ハンドガンを構えると、再び悲鳴が上がる。だが影夜は笑みを浮かべたままだ。

「皆さん、頭をお守りください」

それと同時に数発の銃声がする。思わず目を瞑るシャルロットと

ラウラだが、強盗リーダーの声で目を開けることになる。

「な、な、な……………!?!」

「どうしました？ 威勢の割には呆気ないですねえ」

なんと、影夜は無傷だった。彼の右手にはいつの間にか、ケーキを切るためのナイフが握られている。さらにその足元には銃弾とおぼしきものが。

「じ、銃弾をナイフで弾き落とすやがった!?!」

「そのような物騒なものは、この場で使つてはいけませんよ?」

「ひ、ひいつ!?!」

今度は、銃がバラバラに切り落とされる。高い金を払って買ったであろうハンドガンは、カランカランと音を立てて切り落とされた。

「この野郎!」

別の男が、サブマシンガンを構えて引き金を引く。

ガン! ギギン! ガン! ギン! ガン! ガガン!

金属の音が響く。そこに影夜の苦痛の声は無く、むしろ強盗の悲鳴のようなものが聞こえていた。

弾切れになったところを、影夜は銃を切り落とすことで無力化させる。ショットガンを持つ男も、同様にして無力化された。

「ば、化け物だあ!」

「何なんだ……………何なんだよテメエはよお!?!」

強盗達は震える指で、影夜を指さす。そんな彼らに、影夜は答えた。「私は、内に化け物を秘めている、しがたい執事でございます」

そして、外で構えていた警察隊も、中の状況が変わったことを察したのか突入態勢に入る。

だが、リーダーの男はいきなり立ち上がった。

「ク、クソオ! 捕まってムシヨで暮らすくらいなら、化け物を道連れにして死んでやらあ!」

革ジャンを広げると、そこにはプラスチック爆弾が腹巻きのように巻かれていた。しかし……………

「飲食の場には、爆弾もNGですよ?」

「なっ……………ぐえっ」

かなり離れていたというのに、影夜はすでにリーダーの近くにいた。そして爆弾の導線を全て切り、最後は男の鳩尾に拳を打ち込んだ。そして、警察隊が突入する。

辺りが騒がしくなる中、ラウラとシャルロットは啞然としていた。

「な、何て男だ……」

「あれ？ さっきの人は……？」

周りを見ても、影夜とこあは居なかった。まるで、影のように消えてしまっていた……。

IS学園の学生寮。そこにある談笑をするためのスペースで、ミツルは両親と話をしていた。

「……と、言うことがあつてだな」

「父さん……。相変わらずチートだよ……」

「でも、その姿は本当に格好良かったんだよ！」

「母さんは相変わらず惚気すぎ！」

父親の規格外っぷりと、母親のデレデレっぷりに呆れてしまう。まあ、そんな二人を敬愛している訳だが。

「紫さんに境界を弄ってもらって母さんが消滅しないようにしたのも、デートのため？」

「それもある。だが、お前のことも気になってな」

「俺の？」

「何でも、手ごわい敵と戦ったそうじゃないか。心配でな」

「父さん……」

「父さんはね、ミツルが幻想郷のことを話したりしたときは、本当にソワソワしてたんだよ？」

「だが、その心配は無用だったようだな。外の世界にも仲間が出来たようで、安心したよ」

すると、遠くから足音が聞こえて来た。影夜と小悪魔は頷くと、立ち上がる。

「……もう、行っちゃおうの？」

「今回は目立ち過ぎたからな。あんまり他の人に見られるとまずいとになる」

「大丈夫。あなたには頼れる相棒も、仲間もいるでしょ?」

「わぶつ、母さん……」

小悪魔がミツルを抱きしめる。母の温もりと香り、鼓動が、寂しい気持ちを和らげていく。

「ミツル。今はまだ大きく動けないが、時が来たら……父さん達も駆けつけるからな。だから、強くなれ」

「……ありがとう、父さん」

頭に手をのせ、ワシヤワシヤと息子の頭を撫でる影夜。ミツルは笑みを浮かべた。

「それじゃあな、ミツル」

「みんなと仲良く、ね?」

「うん。父さんと母さんも、元気で」

開かれたスキマへと向かって、歩き始める二人。その背中を、ミツルは名残惜しそうに見送る。

ふと、影夜が何かを思い出すように振り返った。

「好きな人との時間も、楽しく過ごすんだぞ?」

「な!?!」

「お嬢様も妹さまも、みんな楽しみにしてるからね」

悪戯が成功したような笑みを浮かべると、二人はスキマの中へと消えていった。残されたミツルは、顔を赤くしたまましばらくそこに立っていた。

番外編 もしも真が、アーキタイプブレイカーの世界に送り込まれたら

女性にしか動かせないと言われているパワードスーツ、インフィニット・ストラトス。それを動かせる男子が存在した。名は、織斑一夏。彼は、インフィニット・ストラトス（略してIS）の操縦者を養成する学園『IS学園』で、様々な出会いや事件がありつつも、学園生活を送っていた。

しかし、突然の脅威が訪れる。

イマーシユ・オリジス  
絶対天敵。

機械のような体を持ちながら、どこか地球上の生物とも見て取れる姿をした敵が現れたのだ。通常兵器も効果が無く、有効手段はISによる攻撃のみ。地球外からやって来たと言われるこの敵を、最初は戸惑いながらも、一夏とその仲間たちは倒してきた。その道中には新たな出会いもあった。

ファン・ランイン  
台湾代表候補生、鳳乱音。

タイ代表候補生、ヴィシユヌ・イサ・ギャラクシー。

オランダ代表候補生、ロランツイーネ・ローランディファイルネイ。

カナダ代表候補生、ファニール・コメットとオニール・コメット。

ギリシャ代表候補生、ベルベット・ヘル。

ロシアの予備代表候補生、クーリエ・ルククシエフカ。

衝突も度々あったが、それでも乗り越えて、絶対天敵を倒してきた。そして今日も、襲撃してきた敵を迎え撃つために彼らは飛ぶ。

しかし、彼らは知らない。その戦場で、驚きの出会いがあるという事を……。

「はああああー！」

一夏の専用機『白式』の攻撃が、カマキリのような姿をした敵を切



り裂いた。敵はそのまま爆発の炎に消えていく。

《お疲れさまでした。ただちに帰投してください》

一夏のクラススの副担任、山田真耶の通信が入る。今日も倒すことが出来た。そう思っていた矢先のことだった。

《っ!? イ、絶対天敵<sup>イマージュー・オリジス</sup>の反応を確認！ 凄い数です！》

真耶の慌てるような声に、一夏たちは上を見上げる。

「ヒッ……！」

イギリス代表候補生のセシリア・オルコットが、そのおびただしい数に小さな悲鳴を上げた。無理もない。何せ、ハチの姿をした敵が、空を覆いつくすのではないかと思う程の群れで迫っていたのだから。「な、何よアレ……！」

「まるでバツタかイナゴの大群じゃない……！」

乱音と、中国代表候補生の凰鈴音<sup>ファン・リンイン</sup>はその光景に固まってしまう。

一方、フランス代表候補生のシャルロット・デュノアとドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒは、その大群に混じって、先ほどのカマキリ型が地上に降下してきたのを確認した。

「くっ！ 先ほどの戦いでエネルギーは消費したままだ……！」

「ど、どうすれば……！」

全員、先ほどの戦いでシールドエネルギーは消費してしまっている。武器が多いシャルロットの専用機『ラファール・リヴァイブ・カスタムII』でも、これほどの数を相手にするのは難しい。

絶望的。この場にいる全員がそう思った……その時である！

「ツインファイアアアアアアアアアアア！」

第三アリーナに響く謎の声。それと同時に、2本の熱線が絶対天敵を飲み込んだ。その熱線はゆっくりと右方向へと進み、さらに絶対天敵を飲み込んでいく。

「あ、ISの反応があるー！」

「あれは……何だ?！」

「フルスキン<sup>フルスキン</sup>……?！」

「全身装甲……?！」

日本代表候補生の更識簪と、近くにいたロランとクーリエが、熱線を撃ったISを見つけた。

それは異様な姿だった。岩のような装甲を全身に纏い、宙に浮いているのだ。その機体の周りに浮いている2つの竜の頭みたいなものが、熱線を吐いたのだろう。

「っ！ 危ない！」

ヴィシユヌが声をかけたのは、IS学園代表候補生である布仏本音。本音が慌てて振り返ると、そこには、先ほどの全身装甲のISが、カマキリ型の絶対天敵を蹴り飛ばしていた。ヴィシユヌが声をかけたのは、そのカマキリが本音を襲おうとしていたからなのだが……。「ますます不思議ね……」

「見た目は鈍重な感じだけど、今のは瞬時加速を使ったから……？」

ロシア代表の更識楯無と、共にいたベルベットが、突然現れたISに疑いの目を向ける。だが、そんな二人を乱入者はチラリと見ると、すぐに地上に降りて来た絶対天敵の方へ視線を戻す。

「グルアアアアア！」

獣のような唸り声をあげると、見た目とを裏切る速さで敵に接近した。

カマのような部分が振り下ろされるが、乱入者はそれを片手で受け止める。そしてグググという鈍い音がしたかと思えば、そのカマの部分をもぎ取ってしまった。その光景に、場にいた全員はおろか、管制室にいた真耶や千冬も驚いてしまう。

「オラア！」

悲鳴を上げる暇も与えずに、そのもぎ取った腕を相手に突き刺した。さらにかかと落としで脚を砕いてバランスを崩させると、何度も拳で殴りつけた。

「…………おえっ」

「こ、これは…………」

「なんて残酷な…………」

コメット姉妹と専用機を持つ篠ノ之箒が、目の前で繰り広げられている残虐ファイトに、顔を引きつらせていた。

そしてそんな残虐ファイトをしてる乱入者の後ろから、赤い色をしたカマキリ型絶対天敵が迫りくる。

「グリアアアアア！」

すると、先ほどまで殴っていた相手の残骸を投げつけて、攻撃を中断させた。それなりに重い絶対天敵を持ち上げた拳投げ飛ばすとは。あまりにも非常識な光景に、一夏たちは唾然としたままだった。

こうして一方的な戦いが終わり、辺りは静寂に包まれる。乱入者は、相手から噴き出るオイルのようなものを浴びたせいか、かなり汚れていた。先ほどの戦い方を見ていた者たちからすれば、それはまるで返り血のようにも見えた。

この状況を破ったのは、ラウラだった。いくら絶対天敵を倒したとはいえ、それは一時的にすぎないかもしれないのだ。この混乱を利用したテロリストかもしれないのだ。専用機『シュヴァルツエア・レーゲン』のレールカノンで乱入者に向けて威嚇する。

「質問に答えろ。お前は何者だ」

「ちよっ、ラウラ！」

「嫁よ。気持ち分かるが、相手はいきなり現れたのだ。私はどうも不審に思うのだ」

「……………」

「答えろ！ 何者だ！」

全員が、警戒の視線を向ける。だが相手から返ってきたのは、予想外の言葉だった。

「やれやれ。並行世界とはいえ戦友に武器向けられるなんて、傷つくなあオイ」

そして乱入者は、機体を解除する。

「なっ……………!?!」

相手の姿は驚くべきものだった。

黒の中に緑のメッシュが入った髪、強気な感じのする黒い瞳、傷のある顔。野性的とも言えるような雰囲気だが、驚いたのはそこではな

い。

相手は……男だったのである。

「改めて自己紹介だ！ 俺の名前は東風谷真！ IS学園の二年生だ。並行世界のだけどな！」

## 40話 狙われる学園（前編）

ある日の事だった。いつものように登校していたんだが、おかしいことがあったんだ。

「なんで、こんなにクモの巣が貼りつくんだよ！」

ここまでに来る途中で、何度も顔面にクモの巣が貼りついてきやがった！ いや、一度や二度ならまだ分かるぜ？ でも10回以上貼りつくなんておかしいだろ！

「クモが大量発生してるのかあ……？」

虫や魚の大量発生っていうのはよくある事らしいからな。俺は、今度こそ貼りつかないことを祈りながら登校した。

……結局、教室に着くまでに4回ぐらい貼りついたけどな！

「え？ お前らもか？」

「そうですよ。もうあの粘ついた感触はウンザリですわ！」

「何度も制服にくっ付いて……。もう最悪だよ」

セシリアは「キイーツ！」と叫びそうなくらい怒ってるし、シャルは溜息をついている。聞けば、他の女子もクモの巣が貼りついたりして、不快感を味わったらしい。

何だ？ 何というか……。ヤバい予感がする。

そう思っていると、織斑先生と山田先生が入ってきた。全員席に戻り、静かになる。

「今回は重要な連絡がある。今日の3時間目に行なう予定だったISの実習だが、中止とする」

教室がざわざわと騒がしくなる。

「静かに！ 学園にある訓練機全てに、クモの巣が大量に付着している。これは整備課の教師による報告だ。訓練機の洗浄および点検のために、本日はISの実習を中止するようにとのことだ」

「また、アリーナでの訓練機の貸し出しも本日は禁止です。3時間目は自習にしますから、テスト勉強などに活かしてくださいね」

こうしてSHRは終わった。すると、この教室にいる専用機持ちが俺のところへ来る。

「なあ、真。これはいくら何でも……」

「ああ……。おかしいぜ。学園にあるIS全てにクモの巣だど?」

「織斑先生は洗浄と点検のためとは言ってますが、恐らく、機体の不具合による事故を防ぐためでしょう」

「もしかして、だけど……モンスターの仕業とか?」

「一夏の言葉に、俺たちは固まってしまっ。確かにモンスターだったら、ありえないような現象を引き起こすのは可能だが……」

「心当たりがあると言えば……あいつか」

「あいつ?」

「馬鹿でかいクモだよ。人よりもはるかに大きい。本で読んだことがある」

「私だったら、出会った瞬間に気を失いますわ……」

「だが、それならば探すことも可能ではないのか? なぜ今まで見つかってないんだ?」

「それはな……人に化けてるからだ」

「なっ……!?!」

「モンスターの連中の一部には、凄いパワーを秘めた宝石を体内に宿していることがある。それが幻想郷へやって来た時に、空気中の魔力やら霊力やらと反応を起こして、人の姿になったんだとよ」

これは、紫さんを中心に、父さんやナナシ先生が言っていた事だ。あくまで仮説だと言っていたが、あり得そうな話だと思う。

「あと、長い年月を生きた生物が知能を持つって話もあるくらいだし、モンスターにも当てはまるらしいぜ」

「長い年月を……?」

「猫又とかが良い例さ。一夏も、猫又くらいは聞いたことがあるだろ?」

「あ、聞いたことある。なるほど……。猫又の原理で、モンスターも妖怪みたくなるって事か?」

猫又の原理とは、面白い言い方をするなあ。

「まあ、言っちゃまえば擬人化だな。今回は、その擬人化モンスターが侵入している可能性が高い」

「でも学園のセキュリティは、ずっと前のラウラの騒動とかをきつかけにかなり強化されてるはずだよ？」

「……そのデカイクモは、大型ながら隠密行動が得意なんだよ。そいつが擬人化したとなりやあ……」

「なんと……。それなら学園のセキュリティを掻いくぐる事も出来そうだな」

「ひとまず、俺と相棒で調査してみる」

相棒のことだ。きつと、このクモの巣現象について行動するはずだ。

「おそらく、ネルスキュラだと思っただわ」

「でしょうねえ。クモの巣を作るモンスターとなれば……」

3時間目。俺と相棒は教室を抜け出して、敵を探していた。一夏たちにはあらかじめ伝えているし、相棒が別クラスの鈴と簪にも伝えたらしい。

モンスターの攻撃は、たとえ擬人化していようとその一撃一撃が強力だ。下手すりゃ、パンチ一発でシールドエネルギーを持っていかれる可能性だつてある。それに、ISを持ってない奴らに対してISで挑むと、小回りの差で向こうが有利になるしな。だから一夏たちには、もしもに備えて教室を守るように伝えておいた。連中が俺たちを狙ってるなら、教室にいない方が、本音たちを巻き込まなくて済む。

「しかし、これはまるで私たちを誘っているような……」

「何か言ったか？」

「なぜ私たちが不審に思うようなことをしたのかと、気になったんですよ。まるで誘われてるみたいで……」

「へっ。そんなら誘いに乗って、相手をボコボコにすれば良いだけだろ？」

「……はははっ、あなたならそう言うと思いましたよ」

相棒が苦笑いしながら、敵の気配を探る。

「どうだ？」

「……難しいですね」

「ふーむ……。なら、二手に分かれて探すか？」

「敵を見つけたら、ISの通信機能で連絡するって感じですか？」

「ああ。こういう時って、ISは便利だよな」

それぞれのルートを伝えると、俺と相棒は軽く拳をぶつかり合う。

「それじゃあ……」

「ああ。お互い死なないように」

こうして、二手に分かれることにした。

さて、こうして二手に分かれたものの、中々見つからないもんだ。

「気配みたいなのも感じないしなあ……」

モンスターの中には、集中することでやつと探り当てることが可能な奴だっている。フルフルとか、今回のターゲットのネルスキュラとかのような奴だ。

幻想郷で大型モンスターを相手にすることは、滅多にない。俺がなぜモンスターの名前を知ってるかという点、ナナシ先生の本を読んだり、父さん達から話を聞いたからだ。俺が戦ったことがあるのはアオアシラとかドスファンゴ、アルセルタスとかがほとんどで、ディアブロスとかアグナコトルのような奴らは戦ったことない。

……まあ、「あんな奴らが暴れ始めたらヤバイ」って父さんたちは言ってたけど。

「やつぱり居ない……誰だ！」

近づいてきた気配を察知して、振り返る。

そこには、水色の髪に赤い瞳という、簪に似た生徒がいた。リボンの色からして二年生か？

「噂の男子生徒くん？ 授業のサボりは関心しないわよ？」

「……そりゃ申し訳ないっす。ですが、どうしても抜け出さないといけない用事があります」

「それは、一般生徒が来ることの少ないこの場所に居ないといけない



「ほどののかしら？」

「てことは、先輩は特殊な生徒って訳つか」

先輩は、俺を疑いのまなざしで見ている。あれだ。顔は笑ってるが目は笑ってねえってやつだ。

「特殊……そうね。特殊な方だと思うわ」

先輩が、手に持っていた扇子を広げる。そこには「学園最強」と書いてあった。

「私の名前は更識楯無。IS学園の生徒会長よ」

……厄介な人に目をつけられた気がするぜ。

## 41話 狙われる学園（真視点）

楯無と名乗った先輩。先輩は生徒会長だと言ったが……まさか、犯人に目星がついているのか？

「逆に聞きたいんですけど、そういう先輩こそこんな所で何してるんすか？」

「私は生徒会長。生徒の安全を確保するために、会長権限を使ってこの騒動を調べてるの♪」

いったん扇子を閉じて、また開く。そこには『会長の務め』と書いてあった。すげえ！ どうなってんだソレ!?

「まさか会長とは思いませんでしたよ」

「入学式の時もいたわよ？ 忘れられてたなんて、お姉さんショック。ヨヨヨ……」

「泣き真似だと分かってるんで、止めてください」

「それなら、どこへ行くこうしてるのか教えてもらえないかしら、東風谷真くん？」

「……………」

実はこれ、歩きながら話してるんだよなあ。話を逸らそうとしてたんだが、気づいてたのか……。てかどうしようか？ 俺の勘じゃこの先にモンスターが居る感じがするんだよなあ。会長にまだ俺の能力のことは話してないし……。

「ちよいと喧嘩売られたんで、買いに行くだけっすよ」

「あら、随分なものを買うのね。私も買ってみようかしら？」

「……まどろっこしいのは嫌いなんすよ。単刀直入に『お前は何者だ』って聞いたらどうなんすか、会長？」

「……………」

おつ、黙り込んだ。俺も黙り込んでたし、おあいこだ。

一方で会長は、少しだけ表情が険しくなる。

「分かってますよ。声は明るくても、視線は明るくねえ。……会長権限とやらで俺や相棒のこと、調べたんでしょ？」

「……鋭いわね。ええ、そうよ。あなた達の出身校に血液データ、全て

において怪しすぎる。そして今年起きている騒動。まさかとは思うけど……」

「それについての関与は、否定できるっす。断言できる」

「その証拠は？」

「……目の前っすよ」

俺は歩みを止めている。そして俺の視線の先に居るのは……

「臨海学校の時以来だな、ヴァレッタさんよお！」

「あの時の続きをしに来たぞ、東風谷真お！」

ラグィアクルスこと、ヴァレッタだった。そういやここは人工島だから、海を泳いできてもおかしくないな。

「知り合いかしら？」

「敵という意味で、ですネ。……そら来た！」

「っ!？」

俺と会長が後ろに飛び退くと、青白い光がバチバチと走っていた。電気の球でも放ったんだろう。その証拠にヴァレッタの手の平から、煙が見えている。

「あの時はISに邪魔されたが……今度こそ貴様を殺す！」

「俺の首持っていても、腹の足しにもならねえよ！」

「安心しろ、人間だろうが何だろうが食い尽くす奴もいるからな！」

「うわあ、安心できねえ！」

口で言い争いながら、ヴァレッタが放つ雷の攻撃を避けていく。

「東風谷くん!? 相手は何者かしら!？」

「見りや分かるでしょ! モンスターっすよ!」

「……まあ、あんな攻撃できる時点で人間なのか怪しいけど……」

会長も必死になって避けている。やっぱり、IS学園の生徒会長だけあって実力も確かなのかもしれないな。

これは、俺たちの戦いに力を貸してもらったらかなりの戦力になるかもしれない。なら、能力を隠す必要もないよな？

「会長お！ ちよいと暑くなるぜえ！」

「へ!？」

腕を鎧化させて、一気にヴァレッタとの距離を詰める。そこから可

燃性ガスを噴出と同時に、霊力で腕を包み込ませる。狙いは奴の顔面だ！

「だらあ！」

「ブグア!?」

「東風谷くん、離れなさい！」

「っ！」

急いでバックステップで離れる。すると、水のようなものがヴァレットに纏わりついた。何だ……ありや。

だが会長はそんな俺の様子を気にせず、指を鳴らす。

「ポチっとな♪」

その瞬間、ヴァレットに纏わりついていた水が爆発した。……はあ!?

「ちよ、会長！ 何なんスカあれ！」

「私のISの武器の一つよ。ナノマシンが入った水と言えば良いかしら？ さて、結構な爆発だったから倒したと思うけど……」

「……会長、そんなんで倒せるんだったら、今ごろ俺はダイナマイトとかで倒してるっすよ」

「え？……っ!？」

そう。爆弾だけで倒せるなら苦労はしない。爆発の煙が晴れると、体をバチバチと発光させているヴァレットがいた。会長は、驚いたように目を見開いている。

俺はすぐさま飛び蹴りを放つ。当たると同時に鎧化させて、威力を上げる。だが、片腕で防がれた。

「甘いわあ！」

「ぐ、がああああああ!？」

「東風谷くん！」

奴は放電を利用して俺を痺れさせる。鎧化してるのは足だけだったから、体に凄い激痛が走る。そんな俺を見た会長がランスのようなものを展開して、そこから弾丸を放つ。

「馬鹿が！」

「っ！ しまっ……」

「があああ!?!」

俺を盾にして会長の攻撃を防ぐ。鎧化したから何とかかなったが、これは痛いなチクシヨウ……! 頑丈つてのも考え物だぜ……。

「あ、ああ……」

「ふっ、仲間を撃つてシヨックか?」

「ならば!」

「むっ……」

俺は倒れこんでしまいが、会長は不思議な剣でヴァレッタに戦いを挑む。普通の剣とは違い、鞭のような形をしている。

「はあっ!」

「ぐ……巻き付いてくるか。厄介だな」

「無闇に引きちぎろうものなら、その右腕はズタズタになるわね」

「……だから人間は愚かなのだ」

「なっ……」

ヴァレッタは左手で、右腕に絡みついた剣のような物を引きちぎった。もちろんその手は傷だらけになるし、左腕からは肉が斬られる音が響く。金属製であろう床、つまりヴァレッタの足元には血だまりが出来る。

だが、それもつかの間。シュウウウという音を立てて傷が塞がる。「ラストイー! ネイルを無理やり……。確かに、ただの人間ではなさそうね」

「そこに倒れてる男もな」

「東風谷くん……?」

「場を乱そうとすんじゃないやねえよ、馬鹿野郎……」

痛む体に鞭を打って起き上がる。にしても、ヴァレッタが変な言い方するもんだから、会長の俺を見る目がまた険しくなっちゃった。

「幻想郷が狙えなくなったなら、今度はこの世界を作り変えるつもりか?」

「(幻想郷……? 世界を作り変える……?)」

「我が主の無念を晴らすためだ!」

「我が主我が主とうっせえんだよ!」

「黙れえ！」

ヴァレッタの野郎は拳に雷を纏わせると、俺へと殴りかかる。顔を鎧化させて防ぐが、ピリピリと肌をなぞるような感覚がうつつとうしい。すぐに足に炎を纏わせて蹴りを放つが、同じように雷を纏った足に防がれる。だが、俺の炎が聞いたのか苦痛の表情を浮かべる。

「東風谷くん、離れて！」

「うおっ、またかよ!？」

会長が、スライムのように動く水を操ってヴァレッタを包み込む。俺は距離を取りつつ、熱線を撃てるように手に炎を溜め込む。すると、奴は体を青白く発光させた。すると水はあっけなく蒸発した。

「何度も食らうと思うか？ 消えろ、女」

「っ！」

「会長お！」

俺は会長をタツクルで突き飛ばすと、その雷を受け止める。鎧化しても痛い……白斗さんの容赦ない攻撃に比べたら、どうってことねえ！

「ガルアアアア！」

「ルオオオオオ！」

竜の雄叫びを上げると、俺は奴の横腹に蹴りを放つ。その足を掴まれると、ジャイアントスイングで投げ飛ばされた。すぐに口から熱線を放つ。ついでに手から放つ火の玉もくれてやらあ！

「むんぬあああああ！」

結構大きめの雷の球が、ヴァレッタから放たれる。それが着弾すると……距離を取っていたはずの俺まで、電撃が届いた。

「グガガガガガガ!？」

「オアア！」

「グウツ！」

体がダメージを受けた所に、奴のタツクルがぶち当たる。俺の体は水切りの石のようにポンポンと跳ねる。これは結構効くな……。

だが倒れるわけにはいかねえ。俺が倒れたら……俺が死んだら、父さんや母さんが悲しむ。神奈子さまに諏訪子さま、相棒に、俺を鍛え

てくれた様々な師匠たち、そしてこの世界で出会った一夏たち……。何より……笑顔で俺といつもおやつを食べるアイツ。彼女の泣き顔だけは絶つつつ対に見たくねえ！

「死ぬわけには……いかねえだろうがよおおお！」

「っ！なるほど……それが竜の血を継ぐ人間の強さか！我らモンスターと渡り合える強さなのか！」

「グオオオオオオオ！」

俺は立ち上がり、奴の顔面に拳をめり込ませる！ 鎧化した拳はもはや一種の鈍器だ。さらに鎧化した頭を、奴の頭にぶつける！ 頭突きというやつだ。

ふと、ヴァレッタの背後に会長の姿が見えた。ランスを展開し狙いを定めている。

「会長も決心がついたみたいだな……！」

「グウツ!？」

「撃てえ、会長！」

「ハアアアアアアア！」

「ブ……グウウ……！」

ヴァレッタの肩を掴み、逃げられないようにする。俺が叫ぶと同時に四門のガトリングガンが火を噴いた。今度はヴァレッタが俺の盾になつてから、こつちには少しだけ流れ弾が当たる程度だ。銃声が止むと、血にまみれたヴァレッタの姿があった。

「グ……ググ……」

「東風谷くんと違って随分なダメージね」

「俺は鎧化してダメージを軽減してましたから」

投げ捨てるように手を放すと、ヨロヨロとおぼつかない足取りで歩き、俺の方へ振り返る。そして拳を構えた。

「構えろ東風谷真……。死ぬならば……貴様の拳を受けて死にたい……」

「……上等だ。テメエの全力で来やがれええ！」

「ラアアアアアア！」

俺の炎の拳と、奴の雷の拳がぶつかり合う。その時に生じた衝撃波

によって、会長は髪を押さえて片目を閉じていた。

一瞬だけ沈黙が訪れるが、ヴァレッタの腕から血が噴き出ることですぐに終わりを告げた。

「ふ……ははは……」

彼は小さく笑うと、そのまま倒れた。俺はサムズアップするように親指を立てる。

「お前が先に倒れたから……俺の勝ちだぜ、ヴァレッタ……」

すると、ランスを収納した会長が歩いてきた。その目は疑いの目でなく、幻想郷について尋ねた一夏たちのような目をしていた。

「東風谷くん……」

「お疲れっス」

「……あなた達のことについて教えてちょうだい。この敵についても」

「ははは……。とりあえず、このクモの巣騒動を解決してからにしましょうや」

「え？ 今の男が犯人じゃないの？」

「だったら、戦いでクモの巣を利用してるはずっスよ。本当の犯人は……」

……相棒が相手をしているはずだ。



## 42話 狙われる学園（ミツル視点）

さて、真さんと分かれた私ですが……

「答えろ十六夜。授業をサボって何をしている？」

よりによつて最悪な人に捕まりました。真さんのクラスの担任、織斑先生……。この世界では『世界最強』とも呼ばれている人です。

そんな先生はISスーツらしきものに身を包み、腰にはいくつものブレードをさげ、髪型は箒さんのようなポニーテールにしています。見る人が見れば美しいと思うかもしれませんが、私はそれどころじゃないです。隠密行動のつもりがあつさりバレたということで、足が止まっています。

「どうした。やましい事でもあるのか？」

「ぐ……」

「警告だ。すぐに教室へ戻れ。でない……お前を謹慎処分にしなればならない」

「随分とまあ恐ろしいことを……。ですが、それは受け入れることはできませんね」

「……ほう？」

「私が教室へ戻れば、敵さんは私を追うでしょう。クラスのみんなを巻き込むわけにはいかない」

「つまり、お前はこの騒動の犯人を知っていると聞いたのか？」

「知ってるというよりは、察しがついてると言いますか」

しかしこうして見ると、ここら一帯のクモの巣の量が多くなってきましたね。しかも、粘度も高くなってるような気がします。これは……もしかしたら当たりを引いたかもしれませんね。こうなると、織斑先生にも私たちのことを話さないといけませんかね。

「織斑先生、気付いてますか？ 他の場所に比べて、やけにクモの巣が多いことに……」

「薄々気付いてはいたがな。犯人がいる可能性が高いな……」

先生は私を追及しようとしません。どうやら私たちについて考えるよりも、潜んでいるであろう敵を倒すことを優先したようです。

「……………」

「……………」

二人同時に足が止まりました。間違いないですね……。居ます。

「はっー!」

「っ!?!」

張り巡らされているクモの巣の隙間へナイフを投げると、その影は飛び出してきました。

相手の姿は、言うならば忍者でした。白い装束を着ていて、口元を隠しています。目の色は水色です。

「予想外。迅竜の力を持つだけのことはある…」

「私もかなり集中しなければ探れませんでしたかね」

「敵は十六夜を知っている……。だがこの感じ……。敵対関係にあるという事か?」

「作戦は成功。後はお前たちを殺すだけだ」

「作戦、だど?」

なるほど。やはり、このクモの巣騒動は、私と真さんをおびき寄せするための作戦でしたか……。

相手が短刀を構えて来たので、私もナイフを構えます。すると、織斑先生もブレードを相手に向けました。

「生徒の安全を確保するためだ。その為なら……。手を汚そう」

「気を付けてくださいいね。相手は人の姿をしていますが、人外の能力を持っていますので」

「ふむ……。了解した」

私が駆けると同時に、相手も突っ込んできました。ナイフと短刀がギリギリと音を立っています。

「名はシノビ……。影蜘蛛ネルスキュラ!」

「……お命、頂戴!」

腹を蹴ると、シノビの後ろから、織斑先生がブレードを振りかざします。……が、シノビの手から糸が放たれてブレードに絡みつき、その衝撃を吸収されました。

「ちっ! 和らげたか!」

「ふんっ！」

「チイツ！」

引き寄せられそうになるのを見た先生は、糸に絡まったブレードを離して予備の物に切り替えます。

「なるほど。ただ者ではない、か」

「お前の生徒にも、そのただ者ではない存在が2人もいるがな」

「東風谷と十六夜のことか？ 悪いが、例えそうだとしても生徒を守る者に味方するぞ、私は」

後ろから斬ろうとしますが、足元までクモの糸でネバネバしてるため、スピードが思うように……！

「ぐ、お……！」

「十六夜！」

振り向いたシノビに、腕を刺されました。しかも目眩もします。これは……毒ですか……。クモはクモでも、毒グモか……。

「こいつもくれてやる」

「がつ、はあ!？」

「っ！ 馬鹿な、ISだと!？」

別方向から殴られ、壁に叩きつけられました。見ると奴の背中から、機械の腕……いや、クモの脚？みたいな物が生えています。さっきの先生の発言がその通りなら、あれはIS……？

「アメリカの第2世代IS『アラクネ』……！ テロ組織に奪われたと聞いたが……」

「使えるものは、例え人間の道具だろうと利用する。そうでもないかと、東風谷真も十六夜ミツルも倒すことはできん。見ろ」

「……っ!？ 十六夜、平気なのか!？」

痛む体を無理やり動かして立ち上がりますが、先生が驚愕の表情をしています。それもそうでしょう。ISの攻撃を受けても立ち上がってるのですから。

「体は痛みます……。平気では無いですね……」

「ちっ、ならこれはどうだ!？」

アラクネの脚から砲弾が放たれますが、甘い！

「らあ！」

私のISに収納されているブレードで弾きます。ISのブレードなので簡単でしたね。

「織斑先生。ISの部分展開の許可を」

「承認の前に武器を展開してらるだろう……。まあ、そうでなくとも承認してるつもりだ。緊急事態だからな」

「ちいっ！」

シノビがバックステップしながら、糸の塊を放ってきました。ギリギリで避けるも、着弾したところには粘着質の糸が広がります。当たっても駄目、避けると足場が狭められる……。

いえ、何も床だけが足場ではありませんね。

「十六夜！」

「はい！」

2人同時に走り出すと、今度は壁を駆け上がります！

「やあああああ！」

「っ！ やられるかあ！」

「ぐうっ！」

私が前から、先生が後ろから攻めようとします。しかし、私は短剣で防がれ、先生の方はアラクネの脚で反撃されました。ブレードが盾になったおかげで、何とか助かったみたいです。

「くそ！ こうなったら……！」

体がどんどん熱くなります。まるで血管にお湯がながれてるような……。そんな熱さです。

「ガアアアア……！」

体中からベキベキと音が鳴り、制服が破ける音がしました。すると私の頬には黒い鱗が浮かび上がり、腕には刃のようなもの、そして……。尻尾が生まれました。

「姿を現したか、迅竜ナルガクルガ！」

「グギャアアオオオオオ！」

「(十六夜、お前は……)」

よっしやあ！ ちよいとばかし口が悪くなっちまうが、能力でぶち

のめしてやる！

「らあー！」

「ぐうっ!？」

尻尾を振るって奴の脇腹を殴りつける。そこへ先生が後ろから斬りかかるが、アラクネの脚で防がれちまう。

「甘いな」

だが、片手でブレードを取り出して脚の先端に突き刺しやがった！あれってISのブレードだよな？ それを片手で振るうとか……。

銃口の中に突き刺したもんだから、脚の一本が暴発した。

「ゴオオツ!？」

「十六夜！ アラクネの脚を潰すのが先だ！ あれは連射も可能だぞ！」

「了解！」

やらせまいとシノビが襲ってくるが、俺も腕のブレードを構えて飛びかかる。

ガギインツ！という音が鳴り、俺とシノビが同時に着地した。

「ぐ、がああー！」

「これで……2本！」

最初に見たときは4本だったから、先生のも合わせて2本潰したことになる。

「いや、3本だ」

「ぎいっ!？ お、女あ！ キサマ本当に人間か!？」

「人間だ。鍛えればこれくらい、どうという事はない」

「父さん達と同じタイプか……」

俺がアラクネの脚を潰し、シノビが俺に集中したほんの一瞬を突いて、3本目を破壊した。にしても、鍛えれば強くなるって言うあたり、父さん達と同類かよ……。

「だけど、むしろチャンス！」

「はあああっ!！」

「っ！ させん!！」

「しまっ……!！」

俺が腕のブレードで斬りかかった瞬間、シノビは片腕で防いできた。そしてそこへ、今度は黄色い棘を俺の右腕に突き刺してくる。

「肉を切らせて骨を断つ、かよー！」

「ぐっ、うう……」

「あいつも呻き声をあげてるが、俺の方はもつと不味い。刺さった部分から血は流れてるし、そもそも感覚が無い。次は神経毒で、俺の腕を麻痺させたって事か……」

「だあクソ！　ISでやられたダメージと、二つの毒のダメージ、そして血も流し過ぎた！　目の前がグラグラしてやがる！」

「大人しく……するんだな」

シノビから糸が放たれて、俺は呆気なくグルグル巻きにされる。もうちよつと緩く巻いてくれないかねえ。

「これでトド……っ!？」

「……………」

「織斑……先生……………」

「十六夜、まだ意識はあるな?」

俺にトドメを刺そうとするシノビだが、先生が背中から突き刺したことで動きが止まる。俺には、シノビの腹から血濡れのブレードが生えてるよう生えてるように見える。そして俺のそばへ駆け寄り、糸を斬ってくれた。

「助かります……………」

「出血が酷いな……………。すぐに離脱するぞ」

「そうですね……………。ですがっ!」

俺は自由になった右手にラファールのマシンガンを展開し、先生の脇をくぐるような姿勢で撃つ。

「ぐ、ぎ、が、あ、ぎやあああああああー！」

「全弾持っていきやがれ……………」

先生に飛びかかろうとしたシノビが、マシンガンの弾を受けてズタズタになっていく。いくら高い再生力を持つモンスターでも、これだけのダメージを与えれば。

「っ！　まだ動けるといふのか!？」

「ぎつきの神経毒といい、亜種の手も持つてると見た。なら、生命力もかなりのものだろうな」

「十六夜……ミツルうああああ！」

「らああああああ！」

短剣で斬りかかろうとするシノビと、腕のブレードで走る俺。パキッ！という音が鳴り、そして……

「俺の……勝ちだ」

俺のブレードは短剣を砕き、そのまま奴の頭を切り落とした。目の前には大量の血を流して絶命したシノビの姿があった。

……ふう。

「十六夜!? しっかりしろ、十六夜！」

ダメージを受け過ぎた上に、少しはしやぎ過ぎましたかね……。

織斑先生の声が聞こえますが、私は回復のためにゆっくりと目を閉じました。

### 43話 増えていく仲間たち

ヴァレットタとの戦いを終えをた後、俺は会長によって保健室へ連れてこられた。俺は自力で動けるくらいピンピンしてるが、念の為に検査したいんだとか。別に大丈夫なだけだよお……。

「……とか思ってた数分前の俺を殴りてえ」

「あはは……。面目ないです……」

「I Sの攻撃を受けていながら、会話ができるレベルなんて……」

目の前には、体の所々を包帯で巻いている相棒の姿があった。二種類の毒を受けた上に、何とモンスターもI Sを使ってきたんだとか。今はベッドの上で、上半身を起こしている状態だ。

ちなみに保健室には、会長と織斑先生、あと何故か山田先生まで保健室に来ていた。何でも、織斑先生が呼んだんだとか。俺たちの協力者は多い方が良いとか、そういう理由らしい。

「ミツル！」

突然、保健室の扉が勢いよく開かれた。声の主は、相棒に恋しているラウラだ。傷だらけの相棒を見たたん、顔が青くなる。

「あ、ああ……。そんな包帯まみれで……」

「そ、そんなに泣かなくても……。私は頑丈ですし……」

「それでもだあ……!」

あーあー、泣き出したよ。突然の事に相棒もアタフタしてる。すると、開け放しの扉から一夏たちも入ってくる。

「真、ミツル、大丈夫か？」

「俺は大丈夫だけどよ、相棒がこの通りだ」

「……ラウラに泣かれて慌てる姿しか見えないわね」

「あれだけ包帯だらけなのに動けることに驚こうか、鈴!？」

「うーし、ちよいと真面目になろうか？ 相棒も早く泣き止ませろつて」

「私ですか!? 私が悪いんですか!？」

ほら、会長とか先生たちが驚いてるもん。俺と相棒について一夏たちが知ってることに驚いてるもん。



その後、自分たちの能力について、敵対しているモンスターの存在について、そして生まれ故郷の幻想郷について説明した。最初こそ「何言ってるんだコイツ」みたいな表情だったが、俺たちが能力を使っているのを見たこともあって、すぐに納得してくれた。

「人間に恨みを持つモンスター、神や妖怪などが住まう幻想郷、そしてモンスター能力者か……」

「も、もう聞くだけでお腹一杯です……」

「山田先生、私もです」

俺や相棒と共闘した織斑先生や会長はともかく、何も知らなかった山田先生は目がグルグル回ってる。それはもう漫画のように。

「二夏、シャル。あの時に部屋に現れた紫さんを覚えてるだろ？ あの方が幻想郷の創設者なんだ」

「え、ええ!? それは初耳だよ!」

「そんな凄い人と話したのかよ、俺たち……」

「……二人に聞きたい。また、モンスターは来るのか?」

俺たちが説明するところには泣き止んでいたラウラが、尋ねてくる。この質問に対する答えは……

「ああ。間違いなく来る」

「今回の騒動は、私たちをおびき寄せるために仕掛けたもの……。次も同じように攻めてくるかもしれないし、正攻法で来る可能性もあります」

「一応聞きたいのですが、その正攻法というのは?」

「大量のモンスターを引き連れたの、学園襲撃」

「っ!」

どれだけの数がいるかは分からないが、間違いなく大規模な戦いになる。下手すれば学園の一部の施設が破壊されてもおかしくない。これがジャギイとかブナハブラのような小型モンスターなら、まだ何とかなる。ISのマシンガンとかガトリングガンとかぶっ放せば殲滅できるからな。

問題は、今回のような人化モンスターが一気に攻めてきた場合だ。そうになると、勝つのは難しい。父さん達は外の世界では行方不明扱いされてるから、例え来れたとしても短時間だけだろう。

「となると、学園祭とかの延長・中止も視野に入れるしかないわね」「申し訳ないっす、俺たちがこの世界に来なければ……」

「いや、例え東風谷たちがISを起動せず学園こくえんに入学しなかったとしても、モンスター達は襲撃していただろう。ここには、訓練機とはいえISが何機もあるからな」

「私も副担任として、そして一人の人間として東風谷くんに協力します！ 何かして欲しいことがあったら、いつでも言ってくださいね！」

「楯無さん、織斑先生、山田先生……ありがとうございます」

その後、相棒を休ませるためということもあって、俺たちは解散した。だが、なぜか俺だけ会長に呼び止められた。今は会長の後ろを歩いている。

「会長？ どこへ歩いてるんですか？」

「生徒会室よ。私の信頼できる幼馴染みにも、同じことを話してもらいたいの」

「協力者は多い方が良く、というやつっすか？」

「その通り♪」

「何度も言われりゃあ、そりゃ覚えますっつて」

そんな会話をしてるうちに、生徒会室と書かれた扉が見えた。会長が開ける。

「ようこそ、生徒会へ」

「嘘だろオイ……」

室内を見た瞬間、俺は驚きで目を見開いちゃった。

そこには、眼鏡をかけた三年生のリボンを着けてる人と……ルームメイトである本音がいたからだ。生徒会に所属してるなんて聞いてねえぞ?!

「東風やんく？ どうしたのく？」

「あ、えつと……。会長、マジで話さないといけないんスカ？」

「ええ。あ、その前に虚ちゃんのことを紹介しないとね」

「初めまして、東風谷くん。私は布仏虚。妹がいつもお世話になってるわね」

え？ 布仏って……。それに妹……。まさか!?

「本音!? お前、姉さんがいたのかよ!？」

「そうだよく？」

「何で教えてくれなかったんだよ！」

「聞かれなかったからさく。てひひく」

ぐうう！ そんな可愛い笑顔で返されるとなにも言えねえ！

「あー、えつと、布仏先輩って呼べばいいっスカ？」

「虚で良いわ。本音とかぶるでしょう？」

「じゃ、じゃあ虚先輩で……」

「さて、自己紹介も終えたことだし、話してもらいましょうか。本音ちゃん、真面目なお話だからちよつとお菓子食べるのはストップよく」

……。話すしか、ないか。

「……と言うわけっス」

「……………」

会長たちに話したのと同じことを、本音たちにも話した。

「東風やんは……。戦わないといけないの？」

「ああ。連中は、俺や相棒が目障りらしいからな。いろんな手段を使って襲ってくるかもしれない」

「嫌だ……。嫌だよ……。東風やんが戦うなんて嫌だあ……」

「……こればかりはどうしようも無いんだ、本音」

くそ……。んな顔されたら、こっちまで悲しくなるだろうが……。

すると、虚先輩が話しかけてきた。

「東風谷くん。私たちに出来ることはあるかしら？」

「そうっスね……。あんまり他の生徒に知られたくないんで、うまい具合に情報操作してくればありがたいかと」

「それなら何とかなるわ。織斑先生も協力関係にあるなら、なおさらよ」

「モンスターの存在を知った以上、私も全力を尽くすわ」

「良かった。虚先輩と会長は協力してくれるみたいだ。でも問題は……」

「……………」

さつきから、しょんぼりと俯いている本音だ。本当は知らせたくなかった。巻き込みたくなかった。でももしかしたら、どれだけ先延ばしにしたって、結局は話さないといけない運命だったのかもしれない。

「本音」

「う〜……………」

「ごめんな。どうしても、俺は戦わないといけない」

「でも、それで東風やんが死んじゃうのは嫌だよ……………」

「……………おいおい。本音は、俺が死ぬとでも思ってるのかい？」

「……………ほえ？」

本音がキョトンとした顔で俺を見る。泣いていたのか、少しだけ目元が赤い。

「確かにモンスター共は強いさ。だがな、『勝てない』なんて一言も言っていないぜ？ それにな……………」

「それに？」

「俺は、『女にしかISを動かせない』って常識をぶち壊してる一人なんだぜ？ 俺がやられるなんて常識もぶち壊してやるさー！」

「東風やん……………」

「だから、信じてくれ。俺がボロボロになって何日間も眠ってたなんてこと、あったか？」

「あっー！」

「……………へへっ。明るい顔になったな。やっぱり本音には泣きっ面は似合わねえよ」

本音の顔が、パアアツと明るくなる。そうそう。本音には明るい表情がベストつてな。

「改めてよろしくな、本音」

「うん！ でも、東風やんが超能力者でも、東風やんは東風やんだよ。よろしくね」

本音の笑顔に、俺も思わず笑っちゃまう。

だけどこの時、先輩二人が暖かい目をしていたことに気付かなかつたんだ。

「あらあら、本音つたら……」

「東風谷くんもまんざらでは無さそうだし、くっ付くのも時間の問題かしらね」

## 44話 開花

夏休みに入り、いろんな奴らが帰省を始めた。だが一夏たちは、学園に残ることになった。モンスター共が物量作戦で来たときのために、そして、ISを使ってきたときにも対応出来るようにするためだ。だが……

「どうしたよ一夏。そんな気難しい顔して」

「ん？ えつとな……」

一夏が気難しい顔をしていた。尋ねて見ると、意外な奴の名前が出て来た。

「箒の様子がおかしい？」

「ああ。まるで避けられてるような気がして……」

「そういや、俺や相棒に対してはビビってるような反応してたなあ」

「何があったのか聞いても、『何でもない』の一点張りで……」

「なるほどねえ」

一夏の幼馴染みで、束さんの妹である箒。彼女の様子がおかしい。まるで何かに怯えてるような、そんな感じだという。

何かに怯えてる、ねえ……。

「見えないものが見えるようになったとかか？」

「そうかもしれない。だけどそれって、幽霊が見えるようになったとか、そういう感じか？」

「幽霊かどうかは分からないけどな。仮にそうだとしたら、俺と同じように能力が目覚めてるかもしれない。まあ、変身することは無いかもしれないけどな」

「そっか。にしても、今日は全然姿を見ないな……」

「うくん、声かけてみるか？」

「そうしよう」

と言う事で寮へと戻り、箒の部屋のところへ。一夏がノックする。

「箒ー。いるかー？」

『い、一夏か!？』

「ああ。今日は姿を見てないけど、どうかしたのか？」

『ま、待ってくれ！ その前に、外に何かいるか？』

「外？ いや、ここにいるのは俺と真だけだけど……」

『そ、そうなのか……？』

何だ？ やけに怖がってるような声だが……。

俺がそう怪しんでいると、ゆつくりと扉が開かれた。その表情は少し怯えている。

「っ！ ひいひいひい！」

「箒!? どうしたんだ!?」

「おい、どうした!?」

「止めるお！ 近づくなあ！」

俺たちの姿を見た瞬間、顔を青ざめてジタバタと暴れ始めた。ど、どうしたんだ!?

「も、靄が！ 靄があ！」

「落ち着け箒！ 靄なんて無い！」

「うわあああああ！」

「ちっ！ 箒、すまねえ！」

「あっ………」

箒の首の後ろを強く叩いて気絶させた。当て身つてやつだ。

一夏は困惑した表情になっている。箒のこんな姿を見たことなかったんだろう。

「箒……。どうしちゃったんだよ……」

「うーむ……ん？」

箒から不思議な力を感じた。俺は彼女の額に手を置いてみる。この暖かい感じ……まさか！

「原因判明だぜ、一夏」

「分かったのか!? それで、箒は一体……」

「……霊力が高まってやがる」

その後、箒を保健室へ運び、相棒も呼んだ。男子三人で話し合う。

「それで、霊力ってのは何なんだ？」

「まあ、言っちゃえば生命力みたいなものだな。だから霊力が高まる  
と、気配とかに敏感になるんだ」

「ですがそれは、今まで普通に生活していたのが、突然幽霊などが見え  
るようになってしまったようなもの。箒さんは、自身に何が起きてい  
るのかよく分かっていません」

「つまり箒は、俺たちの気配に敏感になったって事か？」

「ああ。オーラみたいなのが見えてしまったてるんだらうよ。特に俺や  
相棒は、モンスターの力も持っているからな。無意識に放ってるオー  
ラを見ちまったのかもな」

「ひとまず、私たちはオーラを抑え込みましょう。そうすれば、彼女も  
話しやすいはずですよ」

俺と相棒は大きく息を吐いて、体の力を抜く。ちょうどその時、箒  
が目を覚ました。

「ん、んう……」

「箒！」

「いち、か……？」

「よう、お目覚めみたいだな」

「っ！ 真……それにミツルも……」

「少々説明したいことがありますよ」

箒と向かい合うように、俺と相棒が座る。彼女の隣には一夏が座  
り、少しでも安心させようとしている。

「箒。お前、最近変なもの見えてるだろ？ 例えば、人の体から滲み出  
てる靄のようなものが」

「な、なぜそんな事が分かるんだ!？」

「お前が喚きながら言っていた『靄が』って言葉から、察したんだ」

「……ああ。臨海学校が終わった頃から、一夏や真、千冬さんや山田先  
生からも変なものが滲み出てるのが見えたんだ。特にその、真やミツ  
ルなんかはとても濃くて……」

「やっぱりな……。それも、お前を運ぶときに感じ取ったんだが、お前  
からは俺の母さんと似たような感じがしたんだ」

「早苗さんと、ですか？ という事は、まさか!？」



「相棒の思ってる通りだぜ。箒には、神の加護がかかっている」

「ま、待ってくれ二人とも！ 話が飲み込めない！」

一夏が慌てて止めたから、いったん話すのを止めた。

しかし、さつきも俺が言ったように、箒には神の力に近いものが流れてる。となれば、これは強力な力だ。暴走すればどうなるか分かったもんじゃない。

「さつきの説明の前に聞きたいことがある。箒の家って、神社だったりするか？ だとすれば納得のいく話だ」

「あ、ああ。私の実家は神社で、剣道場もやっていた」

「今は道場は開かれてないけど、神社の祭りはまだやっていて、箒は神楽舞をやってるんだ」

「……………」

「ま、真？」

「ドンピシャじゃねえかよ……。ここまで仮説が合いすぎると逆に怖いな」

ひとまず深呼吸をして、自分を落ち着かせた。

「神様ってのはな、信仰心がエネルギー源なのさ」

「信仰心？ 祈ったりとかか？」

「それだけじゃない。参拝に来てくれるだけでも、神様にとっては嬉しいのさ」

「なるほど、分かりましたよ。ISの登場で、篠ノ之という名は有名になりました。観光スポットみたいな感じで、遠くから神社を訪れる方もいますね」

「そうだ。地元の人からも親しまれてる上に、遠くの地方、それも外国まで篠ノ之という名は広まっている。神社で祀られてる神様にとってはウハウハだろうな」

「その、千冬さんや一夏は、私の父さんが開いていた道場で剣道をやっていたんだ。それも影響してるのか？ 二人は世界で有名だから……………」

「間違いなく、影響はあるだろうな。だが何より……………箒が神楽舞をやっていることの影響が大きい」

「箒が神楽舞を?」

「どういうことですか?」

これには、相棒も小さく首を傾げていた。

「神楽舞つてのは漢字で書くと、『神様を楽しませる舞』だ。神様が楽しい事好きなのは昔からさ。天照大御神だって、外でのどんちゃん騒ぎに興味を持って、天の岩戸からひよっこり出てきたんだからな」

「では私は、神楽舞をやっていたから、さつき真が言っていた『神の加護』とやらを授かったと?」

「そう言うこつた。神様や仏様に仕える人つてのは、何かしらの加護やご利益を得てる。だがな……」

俺が少し声のトーンを低くしたら、箒と一夏の顔は真剣な顔つきに変わつた。大事な話だつてことを分かつてくれたみたいだ。

「神様の力つてのは、それはそれは強大だ。扱い方を間違えれば、とんでもねえ被害が出ることもある」

「ではどうすれば……」

「だから、俺と相棒がいるんじゃねえか」

「ふふつ、幻想郷のことを知るメンバーがまた一人、増えましたね」

「え、え? 一夏、どういう事なんだ!」

「ははは……。信じられかもしれないけど、二人は実は……」

前とは違つて、今度は俺と相棒、そして一夏の三人で説明した。普通ならありえないような事の説明に、箒の反応は驚きという、当然の反応だった。

「そうか……。どうりで、霊力とか神とかに知ってるような口ぶりだったのか」

こんな感じで、最後は納得してくれたけどな。

「さて、ひとまずはアリーナで修行するのが一番かもな」

「幻想郷へ行かせることは出来ないんですか?」

「あー、出来るかもしれないねえけどよお……。霊力の扱いが不安定な奴を、妖怪やモンスターがうろうろしてる世界へ放り出すのか?」

「あ……」

つたく、相棒は……。

すると、箒が少しおかしそうに笑っていた。

「ぷつくく……。何となく真がボケで、ミツルがツツコミ役かと思っ  
たが……。ミツルも抜けてるところがあるんだな……。あははは！」

「なあっ!? そんなに笑わなくても良いでしょう!?!」

「そういや、臨海学校で風呂に入ってる時だったんだがよお……」

「真さんも言わなくて良いですから!」

俺と相棒が箒と笑っていたが、この時は気付かなかったんだ。

「(……あれ? 何で、俺……)」

一夏が、少し羨ましそうに俺と相棒を見ていたことに。

## 45話 ぶつかる姉と妹

箒が、俺や相棒のように靈力を扱えるようになって数日。俺は本音と一緒に食堂へ向かっていた。確かにモンスターに警戒するのは大事だが、警戒しすぎて体も頭もガチガチになっちまったら意味がない。息抜きてって奴だ。

「そう言えば、しののんって不思議パワーが使えるんだよね？」

「ん？ ああ、箒のことか。まあまだ制御とかは難しいけどな」

箒の力はヤバイものだった。アリーナで特訓するときに、彼女自身の靈力を手加減せず思いつきり放つてもらったら、火傷するんじゃないかと思う程の炎が噴き出たからなあ。制御するのはもう少し時間がかかりそうだ。

「しばらくは、靈力の出し過ぎで疲れることが多いだろうな」

「ほええ〜!! それって大丈夫なの〜？」

「大丈夫だ。終わった後のサポートとかは、一夏に任せてる」

「おりむーに？」

「ああ。ほれ、箒って一夏のことを……な？」

「なるほど〜。二人つきりと言うわけですなあ〜」

「そういう事でござんすよ……ってな」

二人して時代劇っぽいやり取りをしていると、食堂に着いた。ここっで定食とかラーメンとかの他にも、ケーキとかパフェとかスイーツ系もあるみたいだ。俺にとつて外国のお菓子つてのは珍しいものだから、何にしようか迷ってしまう。

「あれれ？ かんちゃんのみっちーだあ〜」

「んお？ 本当だ。どうしたんだ？」

本音が指さした先には、困った顔をしている相棒と、何やら真剣な顔つきになっている簪の姿があった。

「よっす、相棒に簪」

「おや、真さんに本音さん」

「あつ……。良いところに」

「どうしたの〜？」

俺たちも座り、話を聞くことにした。

「実は、簪さんがですね……」

「真くん！」

「うおっ!？」

突然大きな声を上げて立ち上がる簪。俺と本音が驚いてると、頭を思いつきり下げた。

「私を弟子にしてください——」

「か、かんちゃん!？」

ゴンツ!という鈍い音が聞こえた。そりやあ、あんだだけ勢いよく頭を下げたら、テーブルにぶつかるわな。

「……で、俺たちの弟子になりたいって?」

「う、うん……」

ヒリヒリという音が聞こえそうなくらい額が赤くなってるが、簪は涙目のままで話し続けた。ちなみに、本音は彼女のメイドさんだけあって、心配そうに見ている、

「何でいきなり?」

「それは……」

福音戦の時は専用機がなかった簪だが、この間ようやく届いたという。なぜ到着が遅れたかというのと、一夏の専用機を作るために人員を割く話があったそうだ。だが、束さんが白式を作ることになった事で、簪の機体に人を回せるようになった。……のは良いものの、武装を作り上げるのに時間がかかったと言う。

なぜ俺たちの弟子になりたいかというのと、負傷した相棒を見て、「自分も早く戦えるようになりたい」と思ったからなんだとか。

「それに……私は無能なんかじゃないって、証明したい」

「あ? 誰かに言われたのかよ?」

「……………お姉ちゃんに」

「お姉ちゃん?」

「真さん。簪さんのお姉さんは、楯無さんです」

「おいおいマジかよ……。んな事言う感じじゃないけどなあ」

確かに、敵には容赦しないって雰囲気を見せてたけど、妹を無能扱いするのかわ?

俺が首を傾げていると、意外な声が出た。

「うくん、それってかんちゃん勘違いじゃない?」

「本音?」

「確にかいちよーは、『貴女は貴女のままでもいいさ』って言ったよ。でも、それは悪口じゃないと思うな」

「で、でも……」

「聞いてきたらどうですか?」

「……え?」

「分からないことがあったら聞く。これは姉も妹も関係ないだろう?」

「でも……怖いよ……。また何か言われるんじゃないかって……」

………しゃあねえ。少し話してやるか。

「……あれは、俺がこの世界で言うところの中学生にあたる時だった」  
「……?」

「俺は強くなりたかった。とにかく誰よりも強くなりたかった。だから俺は、『禁忌』に手を出そうとした」

「禁忌……?」

「ああそうさ。それを察知した父さんと母さんが駆けつけたから、大きな事態にはならなかったけどな。その時に、俺は父さんと殴り合ってた」

俺は目を閉じ、思い出す。

懐かしい。父さんにやられた記憶だったのに、不思議と嫌な気分じゃない。

『お前は何しようとしてるのかわかってるのか!』

『分かってないのは父さんだろうが! 俺は強くなりたいたいんだ! 何で分からないんだよ!』

『ならば教えろ! なぜ強くなりたいたいんだ!』

『俺は………!』

きつとあの時、殴り合いながらも父さんに気持ちぶちまけたから、吐き出したいもの全部吐き出してスッキリしたから、嫌な気分じゃないんだろうな。

「お前には、近いところに家族がいるじゃねえか。それなのに言いたいこと言えないなんて、もったいな過ぎるぜ？」

「言いたいことを……言う……」

「自分に打ち勝ちなさい、簪さん。強い武器があっても、恐怖で手が震えては意味が無いのですよ」

「かんちゃん！」

簪は俯く。うーむ、やっぱり俺のような過去をおくってる訳じゃないから、意味が無かったか……。

「……ヒーローも、怖い真実に立ち向かった。頑張るのは……自分」  
「ん？」

「……頑張る！」

何かを言った後、簪は顔を上げて、決意してくれた。小さく握りこぶしを作って。

「わーい！」

「ふふ、スッキリしたような顔じゃないですか」

「まだまだ。お姉ちゃんに聞きたい事聞いて、本当の意味を知ってからだから」

「その意気だけ、簪！　こりゃあ、トレーニングに付き合うのもアリかもしれないねえな」

「……え？」

不思議そうな顔で俺を見る簪。おいおい、もう忘れちゃったのか？

「俺たちの弟子になりたんだろ？　俺たちは武術をやってるわけじゃないから、何かを教えるつてのは難しい。だが、お前の模擬戦の相手にはなれるし、体力づくりなら任せとけ！」

「能力が無くても戦えるように、私たちは敢えて厳しいトレーニングをしていますよ。それでも構いませんね？」

「……もちろん！」

その時の簪の笑顔は、とても良いものだった。

目の前では、簪と会長の機体がぶつかり合っている。今いる場所はアリーナ。えーつと……。

「何でこうなった？」

「簪さんが生徒会に行つて、単刀直入に言われた言葉の意味を聞きましたね」

「かいちよーは、その意味を教えたね。でもその事にかんちゃんが怒っちゃつて……」

「会長も言い返して、今に至るといふわけか」

会長の言葉の意味は、『あなたにはあなたの良いところがあるのだから、私の真似をしなくても良い』という意味だった。会長というか姉がコンプレックスだった簪にとって、それは嫌味に聞こえたのかもしれない。

真実も知つて、めでためたしなら良かったんだ。だが簪はこれまでの不満が爆発して、どうして距離を取るようなことをしてくるのか、ストーカー紛いな事をするのかと、それはもうマシンガンのように言い放つた。もちろん言われつ放しの会長じゃない。自分の家柄の事、その当主になることで生じる責任の重さなどを教える。お互いに不満に思っている事を言い合つていくうちに『ISで決着をつける』みたいな流れになって……今に至るわけだ。

「しつかし、会長と簪の家が対暗部用暗部で、本音と虚さんの家はそこに代々仕えてるとはなあ」

「かんちゃんも凄いいけど、私も凄いのだ」

「転んでお茶をぶちまけたりしてそうだけどな」

「こくちやくくん？」

「イデデデ！ 耳引つ張るな！」

本音って力が無いイメージなのに、滅茶苦茶痛いぞ!? どうなってるんだ!?

「すごい喧嘩だな」



「おや、ラウラさん。どうしました？」

「実はドイツからレーゲンが返されてな！ 改めて異常が無いかをチェックしてたのだ！」

「フンスー！と胸を張るラウラ。本音に謝った俺は、相棒とラウラの会話に混ざる。耳が左耳がヒリヒリする……。」

「そういや、お前の扱いはどうなったんだよ？」

「うむ。まず私自身についてだが、精神が不安定状態にあったこと、強制的にISを使わされたという事で処罰は軽くなった」

「ほう、それはそれは……」

「教か……織斑先生の証言が無かったら、どうなっていたことか……。感謝してもしきれないくらいだ」

『『私自身は』ってことは、他にも何かあったのかい？』

「うむ。それは、我が軍と祖国にも非があつたのだ」

「ドイツにも？」

話を聞くと、ラウラの機体にはもともとVTシステムというものが組み込まれていたらしい。ブリュンヒルデ、すなわち織斑先生の動きを真似させるという代物だ。だが、パイロットの人権を無視したものであるから、アラスカ条約でも研究・開発が禁止されてるという。

ではなぜあの時、モンスター姿になったのか？ 簡単だ。狂竜ウイルスと反応したんだ。

VTシステムってのは、パイロットの精神が不安定な時に強制発動するそうだ。だからあの時、狂竜症に侵されていたラウラの精神にシステムが反応した。だが、それをウイルス自体がシステムを飲み込んでしまった。その結果があつたのだ。

……まあ、これは相棒が立てた仮説なんだけどな。

「研究をしていた軍の一部も、それも黙認していた政治家も、裁判にかげられたよ。どれだけ批判が殺到したかは……分かるだろう？」

「ええ。暴言を投げかける民衆に頭を下げる姿まで想像できました」

あ、相棒の奴いつにも増して毒の威力が強いな。ラウラが酷い目に遭ったからか？

「(ラウラさんの眼に関することも浮き彫りになるでしょう。人体実

験というのはこの世界ではいい目で見られない。ましてや彼女の人生を捻じ曲げるような結果になった挙句、改善もせずに放置させていたのです。……永遠に周りから責められ続けるが良い、裁かれてる者たちよ……)」

「どうした、ミツル？ 顔が怖いぞ？」

「おっとすいません。しかし……なるほど。ラウラさんも戦えるというわけですね？」

「うむ！ まあ階級は大尉になり、定期的にレーゲンの報告書を書かないといけなくなっただがな。それでもこうしてミツルたちと学園に居れるのは嬉しいぞ！」

その時、ラウラがにっこりと笑った。

「っ！ ええ、ええ。私も嬉しい限りですよ」

少し相棒の顔が赤くなった。はっはーん？ 惚れ始めたか？

……俺も、いつか……。

「みんなく！ そろそろ決着決着く！」

本音が俺の肩を揺すりながら、簪と会長の方を見る。

簪の機体は、打鉄の後継機かつ発展型の『打鉄式式』。量産機の打鉄と違って機動性が高く、武装も中々だ。何せ荷電粒子砲だけでなく、マルチロツクオンシテムで48発もの小型ミサイルを発射できる。射撃特化かというところでもなく、薙刀で会長の蛇腹剣と刃をぶつからせていた。

『山嵐』、いつけええええええええ!!」

『清き情熱』！」

小型ミサイルの群れと、霧状に散布したナノマシンの爆発が、お互いの相手を襲う。父さんがグラビモスの能力でガス爆発を起こしたのと同様かそれ以上の爆発が起こり、二人の姿は土煙で見えなくなった。

「どうなった!？」

「土煙が晴れば分かるのですが……」

「うゝ、どっちが勝ったのゝ?」

土煙が晴れてきた。ゆっくりと姿を現したが、二人の機体はボロボ

口だった。そして……。

「お姉ちゃんの勝ち、だね……」

「ここまで削られるなんて……過小評価しすぎてたみたいね……。ゴメンね、簪ちゃん……」

「私も……ゴメンなさい……」

簪の機体が解除されて、遅れて会長の機体が解除された。ふらついてる簪を会長が支えて、アリーナを出ていく。

「……本当に一件落着、だな」

「そうだね」

「どうなるかと思いましたが、仲直り出来て良かったです」

「これぞ、日本の言葉で『喧嘩するほど仲が良い』というやつだな！」

俺たちは、観客席で笑いあった。

……爆発のクレーターがたくさん出来たアリーナを、見ないようししながら。

## 46話 砕ける鎧

ビーツ！ ビーツ！ ビーツ！

学園中に警報が鳴り響く。そのけたたましい音は、普通なら生徒達を不安にさせるものだろう。だが、今は不安になる生徒はいない。そもそも生徒達が、夏休みのために帰省しているからだ。

では学園に残っている俺たちはどうか？ 不安になる奴はいなかった。俺たちからモンスターの事をあらかじめ聞いていた一夏たちは、「とうとう来たか」と言いそうな顔つきだった。

「山田先生。敵は？」

「アリーナに、強力なエネルギー反応があります。さらに、学園周辺に複数のIS反応！」

「聞いたな？ アリーナはモンスターが侵入した可能性がある。複数のISも恐らくモンスターが使用しているのだろう。学園周辺は織斑、更識姉妹、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰が迎撃に当たれ！ 東風谷と十六夜はアリーナへ！ 篠ノ之と布仏姉妹は山田先生を補佐しろ！」

「了解！ 行くぞ相棒！」

「ええ！」

織斑先生の指示のもと、俺と相棒はアリーナへ走ろうとする。だが、そんな俺の服の裾を、本音が掴んだ。

「つとと……。どうした、本音？」

「東風やん……。あのね……」

「ん？」

「……………頑張って！」

「……………おう！ お前も、サポート頑張れよ！ だけど危なくなったら逃げるんだぞ！」

本音の激励を受けて、俺は手を振りながら走っていった。

「ミツル……。死ぬな」

「分かっていますよ。ラウラさんこそ、お気をつけて」

相棒も、ラウラから激励を受けて来たようだ。俺の後を追うように走ってくる。

「さてさて、敵さんも大胆に攻めて来たな」

「アリーナのシールドを破ってきましたか……。強大なモンスターか、それとも複数のモンスターか……」

「どちらにせよ、ぶちのめすだけだ！」

飛び込むようにアリーナへ入ると、侵入者と思われる奴らが二人いた。一人は藍色の髪をリーゼントにしたような男だ。上半身は裸だが、下は学校の制服のズボンのような物を履いている。

もう一人は、ボサボサした橙色の髪をしている男だ。額からはナイフのような角が、腕には金色のような鱗が生えている。既に戦う準備は出来てるってことか……。

「お出ませ」

「迅竜の方をやる。……抜かるなよ」

「へっ、分かっただけだ」

リーゼント男が肩をゴキゴキ鳴らしながら、ゆっくりと歩いてくる。

「よお、東風谷真さんよお。俺の名はティーレン。ブラキディオスって呼ばれてんだ。早速で申し訳ないが……死ねやオラァ！」

「あつぶねえな、この野郎！」

拳を緑色の粘液で覆うと、ジャンプしながら殴りかかってきやがった！ 何とか避けられたが、地面に粘液が広がる。

「私はラム。千刃竜セルレギオス……。主の遺志のために！」

「くっ！ こいつ、鱗が武器か！」

橙髪の奴は相棒に攻撃を仕掛けたか……。俺がティーレンの攻撃を避けていくうちに、相棒との距離を離されちまう。

ティーレンの攻撃方法は、見た感じは俺と同じ、拳で戦うタイプか……。だが俺には、熱線って武器がある！ まずは奴から距離を取って……

「オラア！」

「っ!？」

ば、馬鹿な!? 鎧化して腹を守ったつてのに、殴られただけで凄  
い衝撃だ! こいつ……強い!

「だがこんなの、父さんの拳骨に比べりゃあ!」

「どうかねえ?」

「あ?」

その瞬間、ボガン!という音と共に腹に衝撃が走り、遅れて痛みが  
襲ってくる。思わず腹を押さえてのたうち回る。

「ご、が、ああああああ!？」

「へっへっへ……。流石の岩竜も、俺様の『爆破』には耐えきれねえか  
!」

「ばく……は……!？」

奴の言葉が確かなら、俺の甲殻を爆発させたつてことだ。だが俺に  
爆弾を仕掛ける様子なんて見せなかつたぞ? まさか……あいつの  
能力は、触れたものを爆発させるのか!? なんだその、どつかの漫画  
に出てくる殺人鬼のスタンドみたいな能力はよお!?

と、とにかく今の状況はヤバイ! 俺は既に、ティーレンの得意な  
間合いに入つちまつてる! 体は痛むが、気合いでどうにかなる。避  
けながら対策を考えねえと!

「ほれほれえ! ジャブ、ジャブ、ジャブ、ジャブ、ジャブう!!」

「ふっ、クツ……ソがあ!」

チクシヨウ、完全に調子が狂つちまつた! 今までの俺だつたらお  
構いなしに相手を殴つてたつてのに……。今は避けるので精いつぱ  
いだ。

完全に俺の油断だ。殴ってくるなら殴り返すだけだと、調子に乗つ  
てたんだ。相手は、俺に対して強力な武器を拳に秘めてやがった。い  
くら頑丈な俺の甲殻でも、爆発を何発も受け続けたら……。

「右ストレートお!」

「ぐっ、はあ……! なめんなよクソがあ!」

顔面に鋭いパンチを受けたが、腕を鎧化し、さらに炎を纏わせて殴

りつける！ ティーレンの右腕を殴ってやると、効いたのか少し顔をしかめた。

「っ、とと……。良いパンチしてんじゃん」

「爆発は厄介だがなあ、俺だって伊達に傷だらけじゃねえんだよ！」

「だが、爆発無しでも俺の拳は痛いぜえ！」

「ぶぐうっ!?!」

お返しと言わんばかりに、顔面にパンチを受けた。物凄い衝撃で、グラグラするような感覚に陥る。だが、地面を転げまわることには無く、俺は頭をブルブルと振ってティーレンを睨みつける。

奴は、そんな俺の様子に少しだけ驚くような表情をした。

「ふうん？ 伊達に傷だらけじゃないってのは本当のようだなあ。能力を使つてないのに、俺のパンチに耐えてるたあな」

「ようやく認めやがったか」

「だなあ。俺は自分勝手に奪うだけ奪ってく人間は大嫌いだが、テメエのようにしぶとく俺に挑もうとする人間は好きだ」

すると、ティーレンの奴は自分の手に唾を付け、手入れをするかのようにリーゼントに塗りたくる。

「敬意を表して、俺も本気出すとするか」

「っ！」

「らあっ！」

「うおお!?!……なんてなあ！」

「ぐっ、ぬう!?!」

目つきが鋭くなった瞬間、拳が打ち込まれそうになる。何とか姿勢を低くすることで回避することが出来た。俺はその隙を逃さず、手の平に炎の塊を作つて奴の腹に押し込む！

その瞬間、爆発の音と共に炎が噴き出し、ティーレンの体を燃やす。霊力で炎を球状に作り、押し込むことで破裂させたんだ。爆発のお返して奴だ。

「このまま……！」

奴の腹に拳をめり込ませた瞬間……殴った場所が爆発する。

「がっ、ぐっ!?! またか!?!」

「へっへっへっ……。俺が殴っても爆発、お前が殴っても爆発。俺の全身が爆弾よ！」

マ、マジかよ……。鎧化で攻撃しようにも、ティーレンの方がスピードは上。どうすりや良いんだよ……。

俺が一瞬動揺したのが、奴に悟られた。

「吹き飛びやがれえ！　そしてえ！」

「っ！　しまっ——」

ティーレンは地面を殴る。すると地面が一瞬光り……。大きな爆発と共に俺は吹き飛ばされた。そして、そのまま地面へ叩きつけてくれれば良いものを、奴はアツパーカットで再び俺を打ち上げる。そのまま俺よりも高くジャンプし、俺の鳩尾に拳を叩き込んだ。

「そのまま死ねえ！」

感じたのは、吐くんじゃないかと思う程の腹への圧迫感と、ドゴオン！という凄まじい音。遅れて背中と腹の痛みがやって来た。

「い……ほ……」

起き上がろうにも起き上がれない。痛みで叫ぶことも出来ない。周りに少しだけ土が見えるってことはクレーターでも出来たのか。

動くことのできない俺に、ティーレンは近づいてくる。当たり前だ。俺を殺しに来たんだから。

逃げろ　逃げろ　逃げろ　逃げろ　逃げろ！

動け　動け　動け　動け　動け！

体がぞわぞわとした感覚に包まれ、俺の本能は危険信号を送り続ける。だが現実是非情だ。俺がそう思っただけでも、体は動いてくれない。それどころか、ゆっくりと目の前の景色が暗くなる。

「クソっ……たれ……」

そしてついに、目の前が真っ暗になった。



## 47話 飛び交う刃

私の目の前に居る男……。名前をラム。私が投げナイフを扱うように、奴は刃状の鱗を投げてきます。

「だが、その程度!」

手持ちのナイフで弾きます。しかし、それは満足のいく弾き方ではありませんでした。

「っ! どれほどの切れ味を……!」

私のナイフは、奴の鱗に当たった部分が欠けていました。これはつまり、鱗の切れ味は私の武器よりも上だという事です。予備はまだ大量にあります、これが尽きることも考慮しなくては……!

「ふっ!」

「うおっつとつと……はあっ!」

「くっ!」

鋭い爪で襲い掛かってきたのを避けて、それと同時にナルガクルガの能力を発動します。……うっし! これで少しは奴のスピードに追いつけるはずだ!

「速い……。やはりテイレーンの相手がお前じゃなくて正解だ」

「誉め言葉として受け取っておくぜ」

「だからこそ、戦い甲斐がある!」

俺の腕のブレードと奴の鱗がぶつかり、音と火花を立てる。すると飛び蹴りをかまそうとしてきた。

「よっしや掴んだ!」

「お、おとおお!!」

俺を蹴るために突き出した足を掴み、ぐるぐるとハンマー投げのように振り回す。ジャイアントスイングって奴だ! 投げ飛ばして奴が無防備になったところを、すぐに腕のブレードで斬りつける。

「ぐっ、ううっ……。ゴオオオオオオ!!」

ラムは腹を押さえながらも目を見開き、叫び声をあげる。その瞬間、鱗が逆立ち、斬りつけたはずの大きな腹の傷が音を立てて塞がった。

「モンスターは自己治癒力が強いっていうが、こうも目立つような塞ぎ方を見せられると驚いちまう。」

「ま、モンスター能力者の俺たちも出来るけど」

「ウルアアアアアアアア！」

「さつきから叫んでんじやねえよ、うるせえなあー！」

するとラムは、さつきの倍以上の鱗を飛ばしてきた。怒り狂ってるせいか、広範囲の攻撃で俺を攻撃するつもりらしい。避けると逆にダメージを食らいそうなので、腕を交差させてガードする。

すると、頬や腕が痛み出し、血が流れるのを感じた。真と違って甲殻を持たない俺は、攻撃を受けると普通に出血する。唯一硬いのは、腕のブレードだけだ。

「だらっしやあー！」

「ぎ、い、ででででで！ 痛い痛い！」

「痛いかな!? 痛いだろう!? 痛いよなあ!?!」

ガードして動けなくなったところへ、ラムの奴は俺の傷口に爪をねじ込んできやがった！ しかもグリグリと動かしてくるもんだから、その痛みは尋常じゃない。

「このっ、このっ、このっー！」

「が、ぐ、ごほっ!?!」

「お返しだー！」

「ぐっ、ううー！」

ラムは俺の腹を何回か殴ったあと、腕を掴んで俺ごと振り回し、投げ飛ばす。されるがままの俺は、地面を転げまわる。

「がつ、あ、ああ……」

少しだけふらつく体を起こそうとしたとき、『それ』が視界に入った。

それほど深くはないクレーターに倒れる、真の姿を……………。

「ま、と……? ぐあああっー！」

「よそ見してんじやねえぞおー！」

「このっ！」

すぐにナイフで蹴りを防ぎ、応戦する。

まさか、真がやられたってのか？ まさか、そんな……。あいつは、今までどれだけナイフで傷つけようが倒れなかった男だぞ。嘘だ……嘘だ……。

「嘘だあああああ!!」

俺の専用機『夜影』に収納されてるマシンガンを展開し、引き金を引く。

「ぐっ、ぬう！ ISとやらの武器か！」

「真おー！ いつまで寝てやがんだあ！ 起きろお！」

ラムは、弾丸が掠ることも構わずに突っ込んでくる。それでも俺は、弾切れになるまで撃ち続けた。

そして、弾切れになったと同時に、マシンガンが切り刻まれた。

「お前は俺が『参った』って言わせるんだからよお……。あんな奴に負けんなよ！」

俺にはまだ予備のマシンガンがある！ 少しでもダメージを……

！

「甘いんだよお！」

「まだ、まだあ！」

予備のマシンガンも切られて爆発する。しかし、すぐにブレードを両手に展開して切り刻む。鱗は硬いようだが、傷が全く通らないわけではない。右手にあるブレードで腹を斬り、その後かささず左手のブレードで胸部を斬り上げる。

「このまま……。ぐうっ!?!」

「調子が……。出てきたようだな……。」

片手でブレードを押さえただど!? だが、まだ尻尾がある！

「ふっ！」

「ぬうんっ！」

俺の尻尾の棘とラムの鱗が飛び交い、お互いに刺さってしまった。痛みを感じた俺とラムは、瞬時に距離を取る。

尻尾がジンジン痛みやがる……。だがラムも、さつきブレードで

斬った部分にとげが刺さったからか、苦痛の表情を浮かべていた。その隙を逃さず、一度は取った距離をもう一度詰める。走り、ジャンプして——尻尾で薙ぎ払うように振るう！

「だらあっ！」

「ゴボオッ！」

対応が遅れたラムは尻尾の一撃を頭に受け、地面を転がる。奴はすぐに起き上がり、俺がさつきやったように尻尾を振るって、広範囲に鱗を飛ばしてくる。飛ばしてきたうちの数枚が太ももや脇腹に刺さるが、俺は走る。

「クキィィィィ！」

今度は腕を振るって鱗を飛ばしてきた。それと同時に、俺は右目を隠していた前髪をかき分ける。

他の者が見たら、右目は赤、左目は黒のオツドアイに見える事だろう。だが、これは生まれてからのものではない。かつて父のように強くなりたいと願った俺が犯した、過ちの証……。悪魔とモンスター、二つの視力が合わさり、常に暴走状態にある右目だ。普段は視力のバランスを取るために、そして他の人に気味悪がられないように隠していたが、解放したことでよりハッキリと、奴が飛ばしてきた鱗が見える。

「っ！ ぐうっっ！」

頭に痛みが走る。大量の視覚情報を脳が処理してるため、その負担はとんでもない。早めにケリを着けなければ。足の動きを速め、腕のブレードを振るう。

「がっ……ホゴッ……ギ、ガアアア！」

「うっ……！」

首を斬るが、完全に切断したわけではなかった。だが、ラムは雄たけびを上げながら、鋭い爪を腹に突き刺してきた。

「フウーツ、フウーツ、フウーツ……！」

そして、奴はそのまま崩れ落ち、息絶えた。

「最後の抵抗……てか」

幸い、刺し貫かれるというようなことは無かったが、それでも痛い。

さて、敵も倒した。早く真を助けないと――  
「ゴオオオオアアアアアアアアアア!!!」

「なっ!? この声……真、なのか?」

空気が震えるような咆哮が聞こえて来た。俺が何度も共に戦ってきて、そして何度も聞いた声……。だが、あれはあまりにもおかしすぎる。何というか、まるで全てのこと怒っているかのような咆哮だ。

俺がそう思っていると、今度は大砲や戦車とは比べ物にならない爆発音が聞こえた。み、耳がおかしくなる……!」

「まさか、本当の本当にブチ切れしたんじゃないだろうな……!」

俺は痛む体に鞭を打って、真の元へ向かった。

## 48話 IS学園防衛戦（前編）

真やミツルがアリーナで戦っている間、一夏たちは学園周辺に現れたISの相手をしていった。だが、目の前に現れた機体を見て驚愕した。

「あれは……あの時の無人機か!？」

「嘘でしょ!?! あんなのをアリーナに行かせたら……」

かつて無人機と戦ったことのある一夏と鈴は、その厄介さを知っていた。一機だけでもアリーナのシールドを破ることが出来るほどだ。もし真たちが戦っているアリーナへの侵入を許せば、二人は窮地に立たされるだろう。それだけではない。オペレーターとして残っている筈たちも危険にさらされる。そう思っただけで、一夏は頭に血が上る。

「やらせねえ……やらせねえよ!！」

「ちよっ、一夏!！」

一夏が無人機の群れへ突っ込もうとする。鈴が急いで引き留めようとするが、彼は止まる気配が無い。

「おおおおお……ぐえっ!？」

だが、首に巻きついたワイヤーのようなもので、無理やり動きを止められる。その正体は、ラウラの専用機『シュヴァルツェア・レーゲン』によるワイヤーブレードだった。

「何すんだラウラ!！」

「貴様はバカか! 一機でも手こずりそうな相手だというのに、多数の相手が出るわけないだろう!！」

「だけど、早く片付けないと何が起こるか分からないだろうが!！」

「だからこそこうして、集まってるではないか!！」

一夏の気持ちは分かる。少しでも多く相手をして、自分たちの後ろにいる仲間を守らないといけない。だが、だからと言って単機突撃するのは、「守るため」とはイコールで繋がらない。

「鈴とお前の口ぶりからして、前回も相手したことがあるのだろう。だが、向こうには無人機を操る輩がいるはずだ! 何かしらの対策を

施している可能性もある！」

「ぐっ……」

「ラウラちゃんの言う通りよ、一夏くん」

「た、楯無さん……」

「まずは、一人につき一機相手をするわよ！ 私たちが防衛線の一部であることを念頭に置いて！」

「「はい！」」

ラウラが一夏を諭し、楯無が全員に指示を出す。

全員が同じ場所にいる事、彼女たちも自分と同じように仲間を守る意志があることを、一夏は悟った。それと同時に、先ほどまでの激情がゆっくりと冷めていく。

「……お前の相手は、俺だ！」

一夏は、かつての無人機を砂色にしたような相手に向かって、雪片を握りながら叫んだ。

セシリアの相手する無人機は、全体的に水色で腕が長く、扇状の尻尾のようなものが生えている機体だ。ロボットやパワードスーツにありそうな顔の部位が見当たらず、戦いに不要なものは外したという意図が見て取れる。

相手は飛行する機能が備わっていないのか、常に地面に足をつけた状態で、セシリアに攻撃を挑んでいた。ISは空を飛べる。ただ上空から一方的に攻撃して撃破できる……はずだった。

「くっ……！ 水とはいえ、何て威力……！」

現在のセシリアは、全身を水で濡らし、地面に足をつけている状態にある。なぜか？

相手は厄介な能力を持っていた。尻尾を使って辺りに板のようなものをばら撒くと、球状になった水を腹部の砲口から放ってきた。それだけなら避けるだけで済んだ。実際にセシリアは避けた。だが、水球はばら撒かれた板に当たると、反射してセシリアに命中したのだ。水風船を叩きつけられた時よりも、何倍も痛い。おまけに髪やIS

スーツがびしょ濡れで、不快感もある。

さらに厄介なことに、相手は鈍重そうな見た目をしていながら、ススイとレーザーを避けていく。このまま上空から撃ち続けても無駄だと判断したセシリアは、相手と同じ土俵に立つことにしたのだ。

「ですがこの程度……！　今まで戦ってきた真さん達に比べれば！」

セシリアは歯を食いしばって無人機を睨むと、出力を最大にし、B「兵器『ブルー・ティアーズ』を敵の死角から撃つ。相手の無人機は全身装甲のためか、そもそも長期戦を想定していないのか、バリアで守られているということは無い。しかし、それを補うかのように硬い装甲となっていた。

死角から撃たれた無人機はよろめくが、体勢を立て直し、腕を振るわせた。

キイイイイン！

「うっ、ああっ！」

思わず耳を塞いでしまう。その一瞬の隙を、無人機は見逃さなかった。距離を詰めると、その長い腕で彼女の頭をはたいた。鈍器で殴られたような衝撃で、視界がグラリと揺れる。そこへ腕による追撃が入り、セシリアは木に叩きつけられた。

「ブ、ブルー、ティアーズ……！」

先ほどの音響攻撃によって、『ブルー・ティアーズ』が二基も破壊されたようだ。だがセシリアは、死にたくないという思いと、仲間たちを守る思いでひたすら攻撃を命じる。それは、気品も上品もない、ただ生きるために必死にあがく滑稽な姿に見えるだろう。だがその目には、相手を睨み抵抗する、言わねば炎のような輝きがあった。

背後からレーザーを撃たれてるにも関わらず、無人機はのっしのっしと歩いてくる。「無駄だ。俺にはそんな攻撃は通じない」とあざ笑ってるように見える。

その様子に対して彼女は——ニヤリと笑った。

「あなた、学習能力がありませんのね」

!?

その瞬間、大爆発が起こった。スカート状のアーマーにマウントさ



れているミサイルビットを、至近距離で爆発させたのだ。自滅覚悟の攻撃。セシリアの目の前には煙が広がっている。

「……………」

無言で、エネルギーライフル『スターライトMk-III』を構える。セシリアは分かっていた。こういう場面で油断すると、手痛いしつぺ返しをもらう。煙がゆっくりと晴れてきたところで、引き金を引いた。「チェックメイト、ですわ……………」

むき出しになった内部のパーツを焼かれた無人機は、手に内蔵していた砲口をセシリアに向けたまま、爆発した。

「さて、と……………」

自慢の金髪は少々ボサボサになり、爆発などの煤で肌も汚れている。しかし、彼女にはそんなことを気にする余裕は無かった。

「ブルー・ティアーズは二基だけ、スターライトとインターセプターは問題なし。されどシールドエネルギーが心許ない…………。ですが、無いよりマシですわね」

こうして撃破できたが、相手は数で押ししてくるだろう。補給をする時間すら惜しかった。セシリアはふうと一息つくつと、機体をいったん解除した。

「私は、スナイパーとして援護しましょう。狙撃に適した地点は…………」  
相手に見つからないように慎重に移動しつつ、支援役に回ることを決めた。

「だああもう！　ちょこまかと鬱陶しいわね！」

鈴が『双天牙月』を構えて、自分をおちよくるかのような仕草をする無人機を見る。相手は爪が長く、胴体の砲門から火炎弾を放つといった行動を見せた。

だが何よりも鈴を苛立たせたのは、びよんびよんとステップしながら攻撃を避けられることだった。接近戦に持ち込もうとすればバツクステップで避けられ、『衝撃砲』を撃てば垂直にジャンプして避けら

れる。

「キーンッ！　顔があつたら絶対にムカつく表情してるわコイツう！」

すると無人機は両腕を広げ、大の字の姿勢で鈴に飛びかかってきた。腕の先には鋭い爪がキラリと光る。

「冗談じゃないわよ！」

ギリギリのタイミングで避けるが、着地と同時に砲門がこちらを向いているのに気が付いた。すでにその中心は発光している。苛立ちによる熱が一気に冷えた。

「やば……」

その瞬間、衝撃と共に鈴は吹き飛ばされた。体を尋常じゃない熱が襲い、警告のブザーがうるさく鳴り響く。今のは生命に危険と機体が判断したのか、大きくエネルギーは減っていた。

「あちち……。機体のリミッター解除しておいて正解だったわね……」

鈴たちの機体は、普段はリミッターが掛けられている。周囲への安全も配慮した、いわゆる「競技モード」という状態だ。競技モードだと、自身の武器の威力や機体のエネルギーなどが大きく低下する。

だが、臨海学校の時や現在のような状況に限り、そのリミッターを解除することが許されている。こちらは「軍用モード」と取れるような状態で、武器の威力やシールドエネルギーが極めて高い。

もし競技モードのままでの戦いに臨んでいたら、鈴は先ほどの火球攻撃で炭になっていただろう。

「シールドエネルギーが高くて、髪が焦げちゃったらどうしてくれるのよ！」

目の前の無人機に向かって、『衝撃砲』を放つ。威力は弱めの連射だが、相手の動きを止めるには十分だった。その間に『双天牙月』の連結を解除し、二刀流になる。

「手数で決めるわー！」

先ほどまで詰められなかった間合いを詰め、ブレードで斬りつける。すかさず反対の手に持つブレードで新しい傷を作り、その後には蹴

り飛ばす。

無人機もただやられる訳ではなく、今度は水球を飛ばしてきた。炎だと警戒していたために思わず動きが止まり、放たれた3発のうち1発を受けてしまう。

「いったあ……。水にも切り替えられるっての……。？」

そこで、鈴は気付いた。相手の攻撃の方法に。

近づけば手に持つ武器で斬りつけ、遠くからならば砲撃する。これは基本的な攻撃だが、相手はその方法を使っている。では逆の事をすれば倒せるのか？ それは、否である。

「(あいつ……。アタシの武器とその戦い方に似てるわね)」

遠距離攻撃をしている時に接近戦に持ち込めば、連射してそれを妨害してくるだろう。だからと言って砲撃に持ち込めば、猛スピードで接近して攻撃される。

ならばどうすれば良いのか？ 相手と同じ戦法をとれば良いのだ。

「ごり押しも手段ってね！」

『双天牙月』を手に、ブースターを全開にして突っ込む。相手は撃ち落とすためか、胴体の砲門を開いて攻撃してくる。

「かかったー！」

すぐさま急停止し、『衝撃砲』を撃ち込む。単発だが威力は高いタイプだ。限界まで圧縮された空気の砲弾は水球をかき消し、そのまま無人機へと命中する。

「隙を見せすぎたわづてのおー！」

斬りつけられたダメージと、砲撃のダメージ。そこへ一層力が込められた鋭い斬撃が、その装甲を切り裂いた。ギギギつと一瞬だけ痙攣するような素振りを見せて、完全に沈黙した。

「二丁あがりつと。……。正直、エネルギーがキツイわね」

先ほどの火球によるダメージで、シールドエネルギーが大きく減ってしまった。だが、鈴はニヤリと笑う。

「だったら……。当たらなければいいって話よね！ 補給の暇もなさそ

うだし！」

『双天牙月』を連結させると、無人機の反応がある場所へ向かう。「とつとと終わらせるわ……」

ただ一言、そう呟いた。

ラウラが相手するのは、腹部の砲門が体の半分を占めるのではないかと見まがうほどの、巨体だった。頭部のようなものからは、まるで虫のような目が見える。一步動いたたびに小さな揺れが起こる。

「まずは相手の装甲を確認する！」

4本のワイヤーブレードを一齐に射出し、前後左右から攻める。相手は鈍重な動きをしているため、避けられるという事はなかった。しかしその分装甲が硬いのか、カキンツという音を立てて弾かれる。

「やはりな……。これを受けても耐えられるだろう!？」

相手が倒れないと知ってなお、リボルバーカノンで砲撃する。口径88ミリの実弾が直撃し、煙が上がる。次の弾を装填する間に、ラウラは大声で叫ぶ。

「シャルロット！」

「任せて！」

背後からショットガン『レイン・オブ・サタデイ』を両手に持ったシャルロットが飛び出す。絶え間ない銃声が響き、煙の中に火花が散る。

「今のでダメージ入ったと思う？」

「分からない。あの重装甲……。入ったとしても僅かだろう」

煙が晴れると、砂色の装甲がほんの少しだけ煤けた無人機が立っていた。巨体に隠れていて見えなかった尻尾が、先端のハサミのようなものをガチガチと鳴らしている。どことなく怒っているようにも見えるその姿に、二人は一瞬だけ恐怖を感じた。

すると、無人機はドタドタという表現がふさわしいような姿勢で、二人に向かって突っ込んで来る。普通のISならば「遅い」に入るであろうスピードだが、その重さがとんでもない威力を生み出すには、

十分な速度だった。

「散開しろ！」

すぐに二人は散開し、相手の体当たりが直撃するのを避ける。無人機はそのスピードを急に止めることは出来ず、大きな隙をさらしてしまった。

「仕掛けるぞー！」

「分かったー！」

ラウラは右手にプラズマ手刀を、シャルロットはパイルバンカー『グレイ・スケール灰色の鱗殻』を展開する。接近戦でトドメをさすつもりだった。

しかし、突然視界が、黄色いガス状のもので遮られる。

「うっ!? ゲホッ、ゲホッ！」

「こ、これは催涙ガスか……!?」

「く、臭い！」

二人は、そのガスのあまりの臭さに悶絶する。思わず吐くのではないかと思うぐらいの臭さだった。吐いたら吐いたで、色々と終わりそうな気もするが。

これは、無人機の元となっている機体……ゲネル・セルタス亜種のガス攻撃である。本来ならばこのガスにはフェロモンが含まれているため、雄の個体であるアルセルタスがやってくるが、これは動きをトレースしてるだけの無人機。フェロモンは含まれていないし、雄は来ない。だが悪臭は再現されている。

「っ！ ラウラ、あいつのお腹が！」

「むっ!?」

咳き込みながらも目を向けると、無人機の腹部にある砲門が何かを溜めていた。嫌な予感が出て再び散開するが、シャルロットの方へ尻尾が伸びた。先端のハサミに体を挟まれ、持ち上げられる。

「ぐっ、離せ！ 離せよおー！」

胴体を挟まれているためにシールドエネルギーがどんどん減っていく。だが、持ち上げているシャルロットを砲門の近くへと持ってきた。

チャージされている砲撃は、まだ行われていない。その状態で砲門近くまで寄せられている。嫌な予感がした。

「う、嘘でしょ!? 嫌だ! 嫌だよ!」

「シャルロット! このデカブツがあ!」

シャルロットの悲鳴を聞き、ラウラにも焦りが生まれる。エネルギーが減り続けている状態で、もし砲撃を受けたら……。

最悪の結末を想像してしまったラウラは、効かないと判断したはずのワイヤーブレードを射出する。狙うは巨体を支える脚。そこへワイヤーを絡ませ、引き寄せて転倒させる……はずだった。

「ぐっ、ぎぎっ……! 重すぎる……!」

考えてみればそうだった。動きが遅く装甲が硬いという事は、その重量も相当のものであるという事だ。ワイヤーブレードを使用した時間が、タイムロスとなってしまう。やがて狙いを定めるような動きも止まり、シャルロットが吹き飛ばされる……その直前だった。

「せいやあああ!」

!?

気合の入った叫び声と共に、尻尾の先端……ハサミの根元の部分にブレードが直撃する。さらに!

バシユンツ!

青いレーザーが、先ほどのブレードが直撃した部分とは反対の場所に命中する。その衝撃に、無人機はたまらずシャルロットを放した。

「よつと。大丈夫?」

「り、鈴!」

シャルロットに駆け寄ったのは、無人機を倒してきた鈴だった。どうやら先ほどのブレードは、連結した『双天牙月』をブーメランのように飛ばして当てたらしい。

「やけに大きなエネルギー反応があると思ったら、随分とデカイ相手ね」

「まさか、今のレーザーはセシリアか?」

「遠距離から狙撃で援護するなんてね。多分、向こうも無人機を倒したんでしょね」

鈴はシャルロットを立たせると、軽く背中を叩く。

「ほらほら、二人とも。あのデカブツは驚いて隙だらけよ。とつと決めてるわよ!」

「もう……。美味しいところ取りのつもり?」

「だが、今はそのような事を言ってる場合ではあるまい?」

リボルバーカノンを構え、無人機を睨みつける。

「私の後に追撃してくれ。装填、照準、共によし! Feuer!」

狙うは腹部の砲門。無人機は防御の姿勢を取ろうとするが、時すでに遅し。砲門から撃ち込まれ、姿勢が崩れる。そこへ追撃するようにセシリアのレーザーが、胴体と足の関節部分を狙い撃ち、動きを鈍らせた。

そんな無人機に接近するのは、連結を解除した『双天牙月』を手にする鈴だ。

「せい……。やああ!」

大きくバツを描くように、一気に斬りつけた。鈴はすぐに横へ退き、シャルロットへ道を譲る。

その手には、さつき打ち損ねた『灰色の鱗殻』が。

「さつきのお返し、いや倍返し、いやいや百倍返しだよ!」

当てるのは鈴がつけた傷の交差部分。最も装甲が削れてる場所。ゴリツと押し付け、その凶悪な一撃を打ち込んだ。

ズガンツ! ズガンツ! ズガンツ! ズガンツ!

高速で杭が撃ち込まれる光景に、ラウラと鈴、そして遠くからハイパーセンサーとスコープで覗いてるセシリアは顔を青くした。

シャルロットを怒らせたらヤバイ。

それが、三人が思った事だった。

なお、パイルバンカーを打ち込まれた無人機は、シャルロットが満足するまで撃ち終わった瞬間に爆発した。

## 49話 IS学園防衛戦（中編）

クリアバツシヨン  
「清き情熱！」

楯無が指を鳴らすと、彼女の周りを囲んでいた小型の無人機が爆発した。しかし、煙が晴れない内に同じ無人機が襲いかかってくる。

「お姉ちゃん！」

楯無の背中を襲おうとしていた機体が、簪の手に持つ薙刀によって斬られる。

「数が多い……！」

「私たちには数で攻めようとしてるみたいね……。」

鋭い爪で襲いかかる小型無人機を、蛇腹剣でズタズタにした。

楯無たちが相手をしているのは、セシリア達が戦っている機体とは異なり、小型で、武装も鋭い爪のみというシンプルな相手だった。

しかし問題は、その数が異常に多いこと。先ほどのように広範囲の爆発で数を減らしても、ウジャウジャと出てくるのだ。いくら強力な武装を積んでいるミステリアス・レイディや打鉄式でも、疲労やシールドエネルギーの消耗によって動きが鈍くなるのは時間の問題だ。

「お姉ちゃん、下がって！」

「っ！」

『山嵐』で怯ませる！」

目の前に表示された複数のポインターが、ロックオン完了の合図に変色した。それと同時に小型ミサイルを発射させた。

目の前が炎と土煙に包まれるが、それでも無人機はザツザツと音を立てて歩いてくる。

「東風谷くん達に向けられる戦力にしては、多すぎるわね……。」

「それに、これってISなのか分からなくなってきた……。」

「ISに似せた何かってことかしら？」

ISコアには限りがある。だからこそ希少で、無駄に破損させることは出来ない。にも関わらず、相手はまるで捨て駒にするかのように襲ってくる。



では、ISではなく別のロボットかということ、これほどの数を同時に遠隔操作するというのはとても困難だ。

「相手が何であれ、学園を襲うなら容赦しないわ」

「来るよ！」

「っ！」

再び、爪を鋭くした無人機が襲ってきた。すぐにガトリングランスで蜂の巣にする。簪もすぐに薙刀で斬り伏せた。

相手が襲ってきたのは迎撃し、どちらかが危険になれば援護する。その戦いを繰り返すが、相手は止まることを知らなかった。

「どれだけののよ!？」

「弾薬も、エネルギーももう僅か……」

2人とも、長時間による戦いで疲労していた。そこへ追い討ちをかけるように、今まで相手してきた無人機を大型化した機体が現れる。

「嘘…………」

「私たちを疲労させてから仕留める気ね……!」

大型無人機が猛スピードで迫ってくる。狙いは……簪だ。だが、疲労の蓄積によって反応するのが遅れた。簪が気付いた時には、タックルによって吹き飛ばされていた。

「簪ちゃん!!」

急いで駆けつける。気を失っているだけだったが、先ほどの攻撃でエネルギーが尽きてしまったようだ。

だが、無人機は冷酷な狩人。2人まとめて始末しようと、2人のもとへ迫ってくる。楯無は迎撃しようにも、近くに生身の状態である妹がいるため、迂闊に武器を振るえない。

万事休すか……。そう思った時だった。

「だらっしやああああ!!」

大声と共に、青白い球が無人機を貫いた。無人機は悲鳴を上げることもなく地に伏せる。

「嬢ちゃんたち、大丈夫かい？」

2人に声をかけたのは、茶髪に茶色い瞳をしていて、トカゲのような鱗を頬に浮かべている男だった。

「お見事です。人間でありながら、無人機軍団を倒してしまうとは」

「お前が、無人機を操っていた親玉か！」

辺りに無人機の残骸が散らばる、木々が生えた学園の庭の中でも開けた場所。そこで一夏は、無人機を操っていたであろう人物と対面した。

その人物は、いかにも魔法使いという姿をしていた。声の高さと顔つきからして、女性だろう。

「半分正解ですね。正確には、竜玉や鳥竜玉と呼ばれるものをコアにした機械です。コアにはモンスターの動きを封じ込めています。相手を見つければ、それこそ本物のモンスターのように動いてくれるのですよ」

竜玉というのがどういうものか分からなかったが、ISのコアの代わりになると言うのならば、かなりのエネルギーを持つのだろう。

「つまりお前は、人化モンスターと言うことで良いんだな」

「そうですね。申し遅れました。私、霞龍ことオオナズチと申します。ナズチとお呼びください」

「霞龍……………」

「私に戦闘の意思はありません。どうか、その機体をしまっていただけませんか」

「……ここまで攻撃しておいて、はいそうですかかって従える訳ないだろう！」「…………やはり、そうですか。分かりました。そのまま構いません」

一夏にとってキツイ言葉で突っぱねたというのに、ナズチは怒ることもなく、むしろ少し悲しげに受け入れていた。その様子に、一夏は少し罪悪感を覚えてしまった。

地面に静かに正座し、一夏を見るナズチ。どちらも口を開くことな

く、ただ風が吹く音と戦鬪の音が聞こえるだけだった。

どれほど時間が経ったのか。最初に話したのはナズチだった。

「遙か昔、とある世界にて平和な時代がありました。竜と人間が過ぐす世界です。竜は人間を食べ、人間に狩られてその恩恵を与える。人間は竜を狩ることで食物を得て、時に竜に襲われる。そのような関係にありました」

「竜と、人間が……」

「しかし、突如その関係は終わりを告げました。人間はいつしか、竜を簡単に葬ることが出来る武器を次々と作り上げていきました。街も見える見るうちに発展していきました。いわゆる、産業革命という時代です」

「ま、待ってくれ！ 確かに産業革命という時代はあった。だけど竜がいたというのは伝説で……」

「言ったでしょう、『とある世界』と。あなたならば、私たちがどのような存在か分かるはずです」

そう言われて、理解した。目の前にいる女性は……いや、モンスター達は、並行世界と呼ばれる場所から来たのだ。

「人間はどんどん数を増やし、その胃袋を満たすために竜を狩り続けました。しかし、それも最初の話。やがてその狩りは、食糧を得るためのものでは無くなっていきました」

「どういう……ことなんだ」

「人間はモンスターを虐殺し、人工の龍を作り上げたのです。いわば、人工生命体。クローンでなく、死肉をつなぎ合わせ、その器に命を宿した存在。それを用いて……更にモンスターを駆逐しようと企んでいました」

一夏の頭はパニックになっていた。死体をつなぎ合わせて命を宿らせる？ フランケンシュタインじゃあるまいし。ふざけてるのだろうか。だが、本当だとしたら、その世界の人間の文明は高度な物だったことになる。

「これに、我が主は激怒しました。モンスターを殺し、その死を侮辱するように扱う人間に」

「だから、お前たちは人間を滅ぼすって言うのか！」

「……この話には、まだ続きがあります。もうしばらく、付き合ってください」

「……………分かったよ」

一夏は、気付けば機体を解除して胡座をかいていた。続けますと彼女が言うと、再び語り始める。

「我々はその時、飢えに苦しんでいました。住処を追われ、食糧もなく、たださまよい歩く日々……。しかし、その時に手を差し伸べてくださったのが、我が主ミラボレアス様なのです」

ナズチは思い出す。体力が減り、歩くことも困難になりつつあった時に現れた主を。

『我は、このような世界にした人間を、竜たちの死を侮辱する人間に戦いを挑む。どうだ？ 我の配下にならぬか？ そして、再び繁栄を取り戻さないか？』

飢えと寒さによる苦しみ、そして人間への憎悪があるナズチは、差し伸べられたその手をとって立ち上がったのだ。

「そして……我々は人間への報復を行いました。老若男女、平民王族関係なく殺していきました」

「……………」

「しかし、相手も竜を葬れる武器を手に入りました。我々にも、人間に果敢に挑み、そして死んでいった仲間がいます。こうして戦い続け、お互いに滅亡寸前の事態になりました」

「それで、どうなったんだ。それが真たちとどう繋がる？」

「人間の抵抗が大人しくなる頃には、我々も疲弊してしまいました。そして、傷を癒すための眠りにつきました。その眠りはとても長いものでした。人間が、そのような大規模な戦争があったことを忘れてしまうほどに」

「まさか、それでお前たちは幻想郷に……」

「その通りです。我々は涙を流しました。緑がある大地を、日の光を浴びて輝く川を再び見ることが出来たのですから」

しかし、とナズチは続ける。

「同時に我々は、人間などの種族がいることに危機感を覚えました。また同じように破壊されるのではないか。私たちは繁栄するための場所を求めていました。我々にとって、もはや人間は憎悪と恐怖の対象であり、優先的に攻撃しなければならぬ生物だったのです。ですが、それ以上の脅威が幻想郷に存在していました」

ゴクリと、一夏は唾を飲み込む。既に一夏は、彼女の話に聞き入っていた。

「モンスター能力者……。人間でありながら、我々と同等の力を持つ存在。東風谷真の父親も、十六夜ミツルの父親も、強力な力を持っていたのです。その者たちの子供も、その力を受け継いでいます」

「だから、だから二人を狙うのか!? お前たちにとって脅威だから！

だからこの学園を！」

「最終的に、モンスター能力者やその協力者たちによって、我々は同志を失い、挙句の果てには主を失った。……。あなた方に分かりますか！

命を救ってくださいった恩人を失った悲しみを！ だからこそ我々は生きねばならない！ あの方のご遺志である『モンスターが繁栄できる樂園』を作り上げるためにも！ だからあの二人を、そして世界中のISも破壊しなければならぬ！」

ナズチが立ち上がると、一夏も慌てて立ち上がった。『雪片式型』を展開して警戒する。

「この世界は、もはやISに依存しています。ISもどきであるこの無人機が暴れたことが公表されれば、その信用は失われる。深くなっていた男性と女性との溝も、より深くなるでしょう。最悪、戦争でしようかね。ISが強いからと何も対抗策を考えてない訳が無い。戦争は長期化し、ついには絶滅するでしょう。依存していたISによって自らの首を絞めるのですよ」

「だったら俺たちが止めてやる！ 確かに俺たち人間の歴史は、戦争や環境破壊がある。今もそうだ。だからと言って……。絶滅するのをただ見てられるかよ！」

一夏がハッキリと大声で言う。その表情に、ナズチは自分たちの顔を重ねた。滅びに抗うその顔。それは、同志を倒し主をも倒した者た

ちと同じだった。

「……ふっ、そうですか。我々も滅びるわけにはいかず、あなた達も滅びるわけにはいかない。お互いに譲れないからこそ、争いは続くのかもしれません」

ゆつくりと歩いてくるナズチに、一夏がブレードを向けて無言の威嚇をする。だが彼女は歩みを止めない。

「私の役目はここまでです。自分の命は、自分でけじめをつけます」  
するとナズチは、ブレードを掴み……自ら首に突き刺した。

「っ！　なんで……」

ブレードを引き抜くが、彼の顔は暗いものだった。

「なんで……死んでも笑ってられるんだよー」

死んでもなお笑っているその顔は、果たして安らかな笑みなのか、それとも侮蔑の笑みなのか。それは彼女しか分からない。

50話 IS学園防衛戦（後編）

……体が動かねえ。そして寒い。なんだかフワフワするような感じがする。俺、どうなったんだっけ？ ティーレンって奴と戦って、一方的にやられて……………。

……そうだ、思い出した。そのまま奴のトドメの一撃を受けちゃったんだ。つてことは俺、死んだのか？

ふざけんなよ…………。相棒との決着もまだ着いてねえぞ。俺が勝てなかつた人たちとのリベンジも果たしてない。

そして何より…………本音に告白してない。こんなんじゃあ、約束を守れてない！ 戻らねえと…………！ 俺が死んだら、本音たちまでやられちゃう！ そんな事させるかよ！

体が一気に熱くなってきた。さっきまで感じていた痛みも無くなった気がする。凄い力だ。もつと、もつと放出すれば、ティーレンを倒せる！ もつと、もつと……………………………………！！

《お兄ちゃん、駄目えええええ！！》

「ゴオオオオオアアアアアアアア！！」

「ば、馬鹿な！ お前、まだ動けるのか!？」

アリーナに咆哮が響く。それは管制室にいる千冬たちも耳を塞ぐほどの声だった。

ティーレンの目の前に立っているのは、確かに真だ。だが、顔つきが違う。

一夏たちなら見慣れたであろう不敵な笑みは、今は寧猛な笑みを、それこそ獲物を前にした獣のような笑みを浮かべていた。目は血走り、血管は浮かび、体から湯気が出ているような雰囲気さえ感じられる。

ティーレンを何よりも驚かせたのは、その殺気だった。彼の本能は

察していた。「目の前の敵は本気で殺しに来るぞ！」と。

「フシユウウウウウウウ………」

ビキビキと音を立てて、真の全身がバサルモスの甲殻に覆われる。その時、管制室にいた本音はその様子を見て、恐怖を抱いた。

「いつもの東風やんじやない……。いつも東風やんは暖かい感じがしたのに、今は怖いよお………」

同じく管制室にいた箒も、その姿に恐怖を感じた。

「何だあれは……。まるで殺意の塊ではないか………」

顔まで甲殻に覆われた真だったが、その姿をミツルが見たら絶句するだろう。

目は金色に光り、まるで狂竜ウイルスに感染したかのような赤黒いモヤがかかっている。

これは、モンスター達のいた世界では『獰猛化』と呼ばれる現象だった。

「くっ！ この気配、俺たちと同じようになってるのか!？」

「ゴアアアアア！」

恐怖のようなものを本能で感じとったティーレンは、その場から離れようとする。しかし、その寸前に真が猛スピードで距離を詰めて、その硬い拳で殴りつけた。

普段のバサルモスならば、あり得ない速度だった。そのスピードに混乱するティーレンだったが、管制室にいた真耶は、真が距離を詰める一瞬の間だけISのシールドエネルギーが発生していることに気付いた。

「まさか、ISとモンスターの力を同時に……?」

そう。瞬時<sup>イグニッション・ブースト</sup>加速を利用して、動きが鈍いという弱点を補っているのだ。

機械と能力の併用。それは、今の真にとって、鬼に金棒というレベルを超えていた。

「ガアッ！ ゴアアッ！ グガアアアア!!」

「ぐふっ！ ぶぐっ！ があっ！」

ティーレンは殴られながらも、全身に粘菌を纏わせて真の拳にダ



メージを与えようとする。

だが、たとえ殴った所が爆発しようとも、真はダメージを受けてる感じがしなかった。それどころか、より殺気が強くなっている気がする。赤黒い煙が両方の拳に移ると、バチバチと音が鳴る。

その拳がティーレンの顔面に振り下ろされた瞬間、ボキンツ！という音が響いた。

「っ——」

「コフー、コフー、コフー！」

アリーナには、真の荒々しい呼吸が響く。断末魔を上げることもなく、ティーレンは絶命した。

ミツルが彼の元へ到着したのは、ティーレンが死んでからだ。自身の相棒の恐ろしい姿に、目を見開く。

「真……。お前まさか、能力が暴走してるんじゃないだろうな!？」

「グルルルル……」

「お前ってやつは……。本当の本当にバカ野郎だ!!」

ナイフを抜き、ナルガクルガの能力を使って真に接近する。右手のナイフを振るうと見せかけて、左足で蹴りつける。だが、真の纏っている甲殻を蹴ったところで、ビリビリとした痛みが走るだけだった。予想していたとはいえ、その硬さに顔をしかめる。

そして、真を制止しようと思っただけなのだが、かえって彼を刺激してしまった。モンスターの本能に吞まれつつある彼にとって、もはやミツルですらも『排除するべき敵』と判断してしまっただのだ。

「俺を蹴ったな……？ ナラ、才前モ敵ダ！」

「真、正気に戻れ！ 敵を倒す代わりに自分を見失うなんて何考えてんだ！」

「ウオオオオオオオ!!」

ナイフを振るう腕と、拳を振るう腕、そして攻撃を避けるために動く体。これらの残像が見えるレベルのスピードで、二人は戦っていた。ナイフを振るえば甲殻で折られ、投げつければ弾かれる。熱線を撃てば避けられ、炎の球を投げつけければISのブレードでかき消される。時々互いの拳がぶつかり合うことで、周りの土が吹き飛ぶこともあった。

「ヤラセネエ、ヤラセネエゾ！ 相棒モ本音モ、全員モンスター共ニ殺サレテタマルカ！」

「その敵はもういないんだって！ 早く正気に戻れ！ お前このままじゃ、本当にモンスターになっちまうぞ！」

「ガアアアアア！」

ミツルの顔面に頭突きが炸裂する。鼻血が出るほどの威力で、目の景色がグラグラと揺れる。すぐに立て直し、腕のブレードで斬りつけた。

「ぶつ、ぐつ、この野郎！」

「ラアア！」

「ガツハア！」

真のアップラーを受け、大きく吹き飛ばされる。二度目の頭部への攻撃で、ミツルは立ち上がるのも億劫だった。

「はあ、はあ、真……………」

「フシユウウウ……………」

「目え覚ませ、真お!!」

「グルアア！」

赤黒い拳がバチバチと鳴り、ミツルへと振り下ろされた！

「こうなったのは、俺のせいかもしれないな」

突然、真の体が突き飛ばされた。千冬達からは、突然現れた裂け目から飛び出して、そのまま真にタックルする男の姿が見えただろう。ミツルは驚きのあまり、目の前の男の名前を叫んだ。

「ま、護さん！」

男の正体は、真の父親である東風谷護だった。呼ばれた護はミツルに向けると、申し訳無さそうな顔で応える。

「やあ、ミツル君。色々聞きたいだろうが、まずは息子を止めるのが先だ」

すぐに真へ視線を戻すと、片手を出す。その瞬間、衝撃波と轟音が響いた。あまりの衝撃にアリーナにいたメンバーは目を閉じてしまう。

目を開けると、真の拳を片手で受け止めている護の姿があつた。手のひらがグラビモスの甲殻に覆われているところ以外は、何も変化がない。

「真。このままでは、お前の魂はモンスターの本能に呑まれるぞ。それで良いのか？」

「グガアアア！」

目の前に父親がいるのも分からないのか、もう片方の拳で殴る。顔に当たっているが、これも鎧化で防がれる。

「真。お前は昔言つたな。『誰も傷つけないから強くなりたいたい』と。『自分を守ることと傷ついでしまう人が出ないように、強くなる』と」

「グ……………」

真の動きが鈍くなる。その姿は動揺してるようにも見える。

「だが今のお前には、守りたい者がいるんだな。学園でそれほどの仲間が出来たんだな」

「グ、ガ……………」

突き出していた真の腕が震える。

「仲間を思うのは良い。だが、それでお前は守りたいものを傷つけ、悲しませるのか？」

「ア、ア、ああ……………」

ただのうなり声から、徐々に人間の言葉へ戻っていく。護から離れ自身の手を見つめる。己の姿に戸惑っているようだ。

「真。お前がかつて悲しく感じていたことを、今はお前の仲間が感じ

「ているんだぞ」

「ああああ……………」

赤黒い煙が薄くなり、人間の姿へ戻っていく。

「東風やん—————!!」

護が声のした方へ振り向くと、『打鉄』を身にまとった少女…………本音が、真のもとへ向かっていた。すぐ近くまで来ると機体を解除し、真に抱きつく。

「もう、大丈夫だよお…………。私も、織斑先生も、しののんも、お姉ちゃんにかんちゃんも、皆いるよ…………。でも、東風やんが東風やんじやなくなるのは嫌だよお！」

「う、ああ…………」

「東風やん…………消えないでえ…………」

「う、ぐ、ああ…………！」

「うああああああああ!!」

泣いている本音の声を聞いて、真は叫びながら元の姿に戻った。その光景を見ていた護は、優しく微笑んでいる。

元の姿に戻った真は、抱きしめている本音を、同じようにギュツと抱きしめた。

「俺って本当に馬鹿だな…………。俺が味わいたくない思いを、本音たちに思わせてたなんてよ」

「東風やんは、ちよつぴりお馬鹿さんだよ」

「ははは、そうかもしれないねえ。…………ごめんな、本音」

少し頬を膨らませる本音に、真は自嘲気味な笑みで返す。すると突然、真の体の力が抜け、座り込んでしまった。

「こ、東風やん!? 大丈夫!?!」

「強い力を一気に使い、反動が来たのだらう」

護の声を聞いた真は、気まずそうな顔になった。

「父さん…………俺…………」

「……………」

護は、真を背負った。

「父、さん……………」

「ついこの間まで子供だと思っていたのになあ。だが、この世界でも仲間が出来てホツとしたよ。そしてすまないな、ミツル君。君を大変な目に遭わせてしまったて」

「いえ、そんな事ありませんよ。だって……………私は真の相棒ですから」  
「ふっ、そうか」

護たちはアリーナを出る。

しばらく歩くと、一夏たちの姿が見えた。

「あっ、真！」

「ミツル!? どうしたのよ、その傷!」

「ていうか、そちらの方は誰ですの!」

一夏に鈴、セシリアが詰め寄ってくる。傷だらけな上に見知らぬ男までいるのだから、混乱するのも無理はない。だが、詰め寄られていた2人は、彼らの後ろにいる男に驚いていた。

「よお、護。何とか止められたか」

「まあな。この子が真に声をかけていなければ、もっと危なかったかもしれないが」

「ほう? そいつはご苦労様だったな」

不良っぽい口調で護と話しているその男は、真にとって兄貴とも言える人物だった。

「は、白斗さん!」

「よお真。随分派手に暴れたらしいじゃねえか、ええ?」

「うう…………… 面目ないっス」

「そう思ってたんなら、とつとと傷治して全員に謝んな。俺はここにいる嬢ちゃんたちに、色々と説明しなきゃならないからよ」

「それなら、俺も加わった方が良いだろうか」

「ばか野郎。せっかくの再会なんだから息子と話でもしてこいや」

「……………ありがとう。そうさせてもらう」

「白斗さん、お久しぶりです」

「おうミツル、久しぶりだな。そしてお疲れさん。暴走した真の相手をした後でも歩けるなんて、なかなかやるじゃん」

白斗はミツルの頭をワシヤワシヤと豪快に撫でる。撫でられてる本人は少し顔を赤くして照れている。

「お前も休んできな。激しい戦いで休みたいだろ？」

「では、お言葉に甘えて」

真たちは、保健室へ向かう。その道中、真はどこか懐かしい気持ちがあった。

「(そういえば、久しぶりかもしれないな。父さんにこうやっておんぶされるの)」

幼い頃は、よく夕方まで遊んでいた時に護が迎えに来て、帰り道は今のようにおんぶされていたのを思い出した。

そして、同時に後悔も芽生えた。それは、今回の暴走。かつて力を求めて引き起こした大騒動も、護と早苗が止めた。

また、迷惑をかけてしまった。それも今回は護にミツルに本音にグラボオスのISコアにと、どれだけの人に恐怖や悲しみを与えただろう。

「父さん」

「ん？ どうした、真？」

「…………ごめんなさい」

「…………そうだな。だが、それで自分の過ちに気付けたのなら、これ以上怒ることは無いさ。また一つ、力の扱い方について学べたな、真」

「本当に…………本当にごめんなさい……………」

護の背に顔を埋めているが、嗚咽がやけに大きく聞こえた。

## 51話 父の懺悔、一夏たちの願い

保健室まで父さんにおんぶされ、今はベッドの上。俺は、相棒と共に父さんから話を聞いていた。え？ さっきまで泣いてなかったか？ き、気のせいだ！

「人化モンスターの狙いは、竜玉をコアにしたISもどきを作って人間世界を崩壊させる、か……」

「そうだ。俺たちは出来るだけ勘づかれないように紫さんのスキマを利用し、様々な国へ行つてその進行を抑えてきた。それでも、完全に止められたわけじゃない」

「なぜ、そんなコソコソとやるんですか？」

「この世界へ来て感じたことだが、ISというのは既に、世界経済を支える『柱』の一部になっている」

「経済を支える『柱』？」

父さんが言うには、今は『IS経済の時代』らしい。ISの装甲や武器に使われる合金の開発・研究、コンピュータや計測機器の他に医療技術の発達、国家代表および代表候補生の雑誌にISのテレビゲームと、『IS』という存在は、とてつもない金を動かしているのだという。非合法な人体実験やISの軍事利用、男性と女性の溝という問題もあるが、もはや『ISをこの世界から無くす』という考えは危険らしい。

『柱』の一部が無くなればたちまちバランスが崩れ、最悪の場合、今までに無いほどの大不況が起こるだろう。失業率も高くなり、最悪、暴動や戦争が起こる可能性もある」

「ヤバいじゃねえか……」

「そうだ。俺たちとしてもそれは防ぎたい。目立つような対処をしてしまえば、ISに関してのトラブルを巡って世界中が騒ぎになる。今の時代は、どんな疑惑もあつという間に世界に広まってしまう時代だからな」

どうやら他の国でISもどきが暴れたって話は無いから、まだ世界は混乱してないみたいだ。だからといって、油断も許されねえ状況だ

が。

「モンスター達は、真やミツル君、そして俺たちを消すことを優先しているようだな」

「へっ！ 今回は情けない姿見せちゃまったが、次はこうはいかねえ！」  
「ええ！ せつかくの学園生活を壊されてたまるものですか！」

「……すまない。二人とも」

突然、父さんが頭を下げて来た。俺と相棒は顔を見合わせる。

「俺たちがもつと早く対処に出ていけば、こうはならなかった。お前たちを巻き込んで、本当にすまない」

深く頭を下げる父さん。

……何言ってるんだよ。

「父さんは、俺を鍛えてくれたじやねえか。色々とバカなことをやった俺を見捨てないで、むしろたくさんの事を教えてくれた。謝る事なんかねえよ」

「そうですよ。それに、こういうのも何ですが、この戦いが無ければ、私たちは常に能力を持っていることを隠さないといけませんでした。皆さんは私たちを信じて戦ってくれてるんです！ むしろ護さんたちに協力させてください！」

「お前たち……」

父さんは俺たちを驚いた表情で見ている。だが、すぐに苦笑いした。こういう時の父さんの苦笑いってのは、たいてい『ありがとう』って言う時の笑みなんだ。

「全くお前たちは……。協力も何も、まずは怪我を治すのが先決だろうに。だが……。ありがとう」

ほら、言っただろ？

その頃白斗は、片手に持った竜玉を見せていた。

「これが、敵がコア代わりに使っていた竜玉だ。長い年月を生きてきたモンスターの体内で結晶化して出来る奴だ。言っちゃえば、モンス



ターから採れる宝石だな」

「これがコアになるのか……」

「最初に襲撃してきた機体のコアを解析しても、エラーが出るわけですよ」

千冬と真耶は、竜玉をまじまじと見る。機械油のせい或少し汚れているが、それでも美しいと思えるほどの光を放っていた。

一方、楯無は戦闘時に駆け付けてくれた時の事を話す。

「あの時はあなたが来てくれましたが、素手で破壊して、その……竜玉を抉り取りましたよね？」

「まあな。聞けば、無人機つてのはシールドエネルギーとやらが無いんだろ？ だとしたら後はただ動き回る鉄屑だ。遠慮なくぶち抜かせてもらったぜ」

その発言に、少しか顔が引きつる楯無。ISの装甲というのは特殊合金で出来ている。ミサイルや銃弾を受けても搭乗者の傷を少なくするのは、それのおかげでもある。だが目の前の男は、ISをスクラップにするのを、をまるで普段から行ってるかのように答えたのだ。

その規格外な答えに反応を示したのは、楯無だけではなかった。箒は、思ったことを口にする。

「白斗さん。あなたも、能力を持ってるんですか？」

「お、真とミツルから聞いたのか？ だとしたら話が早い。その通りだぜ」

白斗は右腕の爪を鋭くして、青白い電流を走らせる。その頬はトカゲのような鱗に変わっていた。その変貌に、箒たちは目を見開いた。「俺は、轟竜つてモンスターの方が扱えるらしい。まあ、一口に轟竜と言っても色々種類があるらしいけどよ」

「その、辛く……なかつたんですか？ いきなり異能とも言えるような力が手に入ってしまったって……」

「そりゃあ、辛かったさ。ガキの頃に能力が目覚めたから、ちよつと怒ったり泣き喚いたりするだけで辺りに電気をまき散らしちまう」

聞いていた全員は、黙ってしまった。幼い頃というのは、良い意味

でも悪い意味でも純粹だ。変だと思えるものを弾いてしまう。白斗もそうだったのだろうかと思ってしまう。

「だが、影夜……ミツルの親父の場合は、俺よりももつと酷いぜ？ 両親を殺された挙句家も燃やされ、周りからいつも痛めつけられて、助けてくれた女も殺されたって言ってたな」

「そんな……！」

「護は護で、信じていた人間に裏切られたって言うしよ。だから、あんなに子供を溺愛するんだろうな」

少し寂しげな顔をする白斗。再び語り始める。

「だが、能力をもって後悔はしてねえ。そうでなければ幻想郷に来ることもなかったし、護たちに会うこともなかった。そして……今の妻と暮らすこともなかったさ」

白斗の先ほどまでの大人な顔が一変し、デレくと顔が緩んだ。しかしすぐに引き締まった顔に戻る。

「要は、力を持つってのは気持ち次第さ。誰かを守りたい・支えたいと思えば、あとはそれが成し遂げられるようにひたすら特訓だ」

あくまで俺の場合はな、と付け加えた。その言葉は箒たちの胸に……特に一夏の胸に響いた。

「(誰かを守りたいのなら、成し遂げられるように特訓……)」

白斗が他の質問に答えてる中、一夏は一人で悶々と考える。

「(俺は、自分が弱いせいで誰かが悲しむのが嫌だ。だけど俺はまだ弱い。だから、せめて皆の足を引っ張らないようになりたいんだ)」

でも、本当にそのまま良いのか？ 一夏の頭にそんな声が響く。

「——い！ おい、一夏！」

「ん、んっ!? ほ、箒か……」

「ポーっとしていたぞ。どうしたんだ？」

目の前で、箒が心配そうに一夏を見ていた。周りを見ると、セシリアたちは専用機を修復するために整備室へ向かうところだった。

「一夏は行かなくて良いのか？」

「いや、俺は……まだ大丈夫かな。セシリア達のダメージが大きいみたいだし、後で良い」

「そうか……」

すると、足音が遠くなるのが聞こえた。白斗がどこかへ行くこうと  
してるみたいだ。慌てて呼び止める。

「は、白斗さん！」

「ん？ お前は……確か、一夏だったか？」

「はい。あの、これからどこへ？」

「んー、護の野郎が話し込んでるみたいだし、来なかったことについて  
文句でも言いに行くつもりだったが」

「そ、そうですか……」

「だが、そっちのポニーテールの嬢ちゃんは用があるみたいだな」

すると、箒が一夏より前に出て、頭を下げた。

「お願いします。私を鍛えてください！」

「……へえ？ お前も能力持ち……それも目覚めたばかりだな？」

「はい。真たちにも鍛えてもらってるのですが、モンスター達が今回  
のように攻めて来たのであれば、もう猶予はないんです！」

「なるほどねえ。一夏くんはどうするよ？」

「お、俺ですか？」

「どことなく、嬢ちゃんを心配してる目をしてたからな。俺の特訓は  
キツイぜ？ 昔、真やミツルを鍛えてやった時には、二人そろって吐  
いてたからな」

白斗の笑みは、獰猛な笑みだった。敵に回したらヤバいと、一夏と  
箒の本能が訴えるほどだ。

一瞬、足がすくんだ。だが、二人の答えは決まっていた。

「箒だけじゃないです。俺も、鍛えてください！」

「一夏もか？ 俺の能力もある。ISとか大丈夫なのか？」

「今のままでは駄目なんです！ たとえ白式を手にしても！」

白斗は一夏をじっと見つめる。だが、一瞬だけ笑うと二人に背を向  
けた。

「ついて来い。モンスターを相手にした時の立ち回りを自分で考え  
な」

「は、はいっ!!」

二人の気合の入った返事に、白斗は再び笑った。

## 52話 保健室での語り合い

保健室で護と真たちが談笑していると、アリーナの方角から爆音が聞こえた。まさかもうモンスターが襲撃してきたのかと2人は身構えるが、護は笑った。

「おそらく、白斗だろう。誰かを鍛えてるんじゃないか？」

「うっわあ、マジかよ……」

「あの人は、ひたすら攻撃を避けて、痛みに慣れたり逃げ回る体力をつけたりする修行ですよ……」

誰が受けてるのか分からないが、2人は心の中で合掌した。白斗から直々に鍛えられた2人からすれば、彼の修行は「凄まじい」の一言に尽きるからだ。

「拳で殴られたりするだけでもとんでもないのに、パチンコ玉を磁力で撃ってきたりするんだもんなあ」

「クレーターが出来るほどの威力というおまけ付きですよ……」

真たちは、どこの第三位だと言いたくなくなった。

「ふふっ。だが、何よりもお前たちは愚痴っていたじゃないか。『熱線やナイフが咆哮でかき消される』ってな」

白斗の修行は、攻撃を当てることも可能だ。だが、それをティガレックスの咆哮でほとんど無効化される。熱線は勢いが弱まり、ナイフは粉々にされる。2人は初めて見た時の事を思い出したのか、ぐつたりとしながらベッドに倒れ込んだ。

だが、何も白斗だけが強いわけではない。2人は目の前にいる護からも修行を受けたし、影夜にリオ、ナナシといったかつての英雄からも修行を受けている。いずれも、勝った事は無い。

「どれ、白斗がやり過ぎてないか見てくるよ。お前たちはゆっくり休みなさい」

「ありがとう、父さん」

「……ああ。どういたしまして」

護が浮かべる微笑みは、真が幼い頃に見た笑みと同じものだった。

護が保健室から出て行くと、真は大きく息を吐いた。

「あくっ！ 何か、ベッドがめちやくちや気持ち良く感じる！」

「それほど体が……んんっ！ 疲れてたんでしよう……ふうっ！」

ミツルも力が一気に抜けたのか、息を吐く。その時だった。グウッ！という凄まじい音が鳴った。ミツルがジト目で真を睨むと、当の本人は苦笑いしながらポリポリと頬を指で搔いていた。

「真さん……」

「悪い悪い。だけど力が抜けたとたん腹が減つてよお」

「確かにお腹は空きましたが……」

真が空腹だと言ったとたん、自分も空腹を感じた。しかし体が痛むために、食堂へ行くことすら出来ない。

すると、保健室のドアが開いた。そこには本音とラウラがいる。

「東風やんく。ご飯持ってきたよ」

「おお、本音！ ナイスタイミング！」

「ミツル。持ってきたぞ。私の手作りだ」

「えっ！ あ、ありがとうございます」

二人が持っているお盆には、おにぎりの山が出来ていた。普通の人間が見れば、食べきれぬのかと疑問に思うだろう。だが、今まで常識な光景を見て来た彼女たちからすれば、この量は普通の事だった。

「護殿から教えてもらったのだ。『二人は大食いだから』とな」

「私たちだけじゃなくて、かんちゃんにお姉ちゃん、セツシー（セシリア）にデュツチー（シャル）も手伝ってくれたんだ」

「これは……。ありがとうございます」

「ふふん、どういたしまして」

確かに簪やシャルロット、セシリアも手伝った。だが、半分以上は本音とラウラが作ったのは秘密である。

なお、セシリアは鈴や楯無、虚に教えてもらいながら作ったのは余談である。

「そんじゃあ、いただきます！」

「めしあがれ〜♪」

真が片手で1つ掴むと、その大きな口でおにぎりを食べる。てつきり塩を振ってるかと思つたが、塩の味はしなかった。その代わりに断面から緑色の何かが見えたので、また一口かじる。すると、ポリツという食感と共に僅かな塩味を感じた。

「なるほどな！ きゅうりの浅漬けを中に入れてんのか！」

自然と笑顔になり、もう一つに手を伸ばそうとする。だがその手を本音が優しく止めて、お茶を渡す。

「一気に食べると、喉に詰まっちゃうよ？ はいお茶」

「お、おう……。サンキュ」

ふと彼女と手が触れることに気付いた真だったが、本音は気付いてないのかニコニコと笑顔のままだ。少し照れながらも湯呑に注がれた緑茶で一息つく。

その頃ミツルも、中の具が一つ一つ違うおにぎりを美味そうに食べていた。

「んっ、酸っぱい！」

「お？ 梅干しに当たったな？ 私も食べてみたが、不思議な酸っぱさだな」

「ですが……むしろ食欲が湧きます！」

ラウラからお茶を手渡されて一息ついてから、どれに手を伸ばそうか考える。そして「これだ！」と思つた瞬間に真に横から取られた。

「あ、それは！」

「へっへっへ。相棒も狙ってたのか？ 悪いが先に取ったモン勝ちさ」

「くうう！」

「ふ、ふふっ……」

「くっ、くくっ……！」

「ん？」

子供っぽい一面に、本音とラウラは思わず笑ってしまう。それに気づいた男二人は首を傾げた。

おにぎりの取り合いという一悶着もあったが、部屋が壊されるといふような大きな被害もなく、完食した。

「あゝ、食った食った！ ごちそうさん！」

「お粗末さまでした〜」

「ご馳走様、ラウラさん」

「うむ、お粗末様だ！」

窓を見ると、もう暗い。かなり時間が経っていたようだ。

「それじゃあ、私たちも部屋に戻るね……」

「おいおい、そんな寂しそうな顔すんなって。美味しい飯も食ったし、あとはグッスリ寝れば明日には回復してるさ！」

「本当〜？」

「ああ。だからほれ……ニパーって笑ってみ？」

「……ニパー！」

「へへっ、やっぱり本音は笑顔が似合ってたあ」

「あうゝ。恥ずかしいよ〜」

「悪い悪い。……また明日な、本音」

「……うん。おやすみ、東風やん」

「私も戻らねば」

「そうですね……。そういえば、今日は外でかなり戦っていたそうですが、大丈夫ですか？」

「明日辺りには、レーゲンの調子を見ないといけない。それと、ユカリとか言う人がモンスターの手物を持ってきてくれるらしいから、ちよつとした勉強会も予定されている」

「紫さんが……。あとでお礼しなければなりませんね」

「しっかりと勉強させてもらうぞ。ミツルたちがどのような生き物と戦ってきたのかを……」

「傷が治り次第、私たちもサポートに回りますから、無理はしないように」

「ふっ、分かっているさ。……おやすみ、ミツル」

「ええ、おやすみなさい」

こうして二人が保健室から寮へと戻っていった。しばらくの間静寂が訪れる。

最初に喋り始めたのは真だった。



「相棒……。お前って、ラウラと仲良いよな」

「そう言う真さんだって、布仏さん……。本音さんと仲良いですよね」

「なあ、相棒」

「なんです?」

「……。もしもさ、もしもの話だぜ? 俺たちがモンスター共に負けたら、どうなっちゃうのかな?」

「そりゃあ、悲しむ人が出てくるでしょう。本音さんは大号泣間違いなしです」

「じゃあ俺もお返しするぜ。相棒が死んだら、ラウラが泣くだろうな。『馬鹿者が』って言われるかもしれないぜ?」

「それは勘弁ですね」

再び静かになる。だが、こうやって語り合うのは久しぶりだと、二人は偶然にも同じことを思っていた。

「白斗さんの修行受けた奴、どうしてるかな?」

「シャワー浴びてベッドに倒れこんでるんじゃないですかね?」

「俺たちも初めの頃はそうだったよなあ」

「ご飯なんて喉を通りませんでしたねえ」

「咆哮受けた時のお前、今でも覚えてるぜ? あまりの声のデカさに、

気絶した上に漏らしたんだよな」

「ちよつ?! 何で覚えてるんですか!?!」

「面白いからに決まってるだろ?」

真はカラカラと笑う。

「真さんだって、ナナシさんのモンスター講座聞いているときに、睡魔に負けて突っ伏しそうになって、墨汁に額を突っ込みましたよね?」

「ちよつと!?! それ一夏たちに言うなよ!?!」

「さあ、どうでしょう? 絶対にやるなど言われてやるというのが、外の世界のお約束らしいですからねえ」

「絶対に言うんじゃないぞ?!」

昔話に盛り上がるが、やはり疲労のためか大声で笑う程の賑わいは無い。二人ともしばらく黙るが、その日最後の締めくくりは、真の言葉で終わった。

「相棒」

「はい」

「……絶対に勝とうぜ」

「……ああ！」

コツンと軽く拳をぶつけた。

### 53話 復活のコンビ、再来の男

俺、復活！ 飯食って、ぐっすり寝て、今の俺のテンションは最高だぜ！

「ふっ、ふっ……！ よし」

相棒も、腕やら足やらを軽く伸ばして、調子がいいことを実感してるようだ。

「相棒も絶好調のようだな！」

「ええ！ どうやら、私はジツとしてるのが苦手なようです」

「へっ、それは俺もだぜ」

しかし、と俺は時計を見る。時計の針は午前10時過ぎをさしていた。

そう。傷を癒すために体が求めていたのか、俺たちは普段よりも爆睡していた。ついさつき軽めの朝食（大盛りご飯とみそ汁）を済ませて、歯を磨いて服装を整えたばかりだ。

「一夏たち、どうしてるかな？」

「勉強会をするって聞きましたが……」

ひとまず保健室を出て、よく皆で喋っていた場所へ向かった。要するに食堂だ。

「おーっす！」

「真！ それにミツル！」

俺が声をかけると、一夏たちがこっちを振り向いて嬉しそうな表情になる。それを見て、本当に心配させてしまったんだなど、後悔した。

「二人とも、もう大丈夫なの!？」

「ええ。心配をおかけしました」

「まったくよ！ でも、本当に元気になったみたいで安心したわ」

「言っただろう、鈴。二人は絶対に明日には起きてこっちへ来るとな」

ラウラが少し自慢気に胸を張る。多分、文字で表現するなら『ドヤア』が合うかもしれない。

「本当にすまなかつた。もう、二度とあんな事はしない」

「当たり前だ！ もしまたやりそうになったら、今度は思いつ切り殴るからな！」

「はははっ、そいつは勘弁だぜ」

俺も一夏たちに頭を下げた。最悪な結末になっていたかもしれないなかつたんだ。二度とやってたまるかよ。

謝罪を終えてから一夏たちの机を見ると、少し古めかしい本が沢山積まれていた。

「モンスター図鑑ですか。よく読んでましたねえ」

「凄いな。飛竜種に鳥竜種、牙獣種……。全部ナナシ先生が書いた奴じゃねえか」

「ほう、東風谷たちの恩師か？」

「まあ、師匠みたいな人でもありますよ」

モンスター図鑑を読んでいた織斑先生が、顔を上げて尋ねる。正確には、人じゃなくて妖怪だけだな。でも見た目は人間だから、あながち間違っていないのか？

すると、相棒がある本を見つけて頬を引きつらせていた。

「ま、真さん。これ……」

「これは……！ 紫さんめ……」

「これ、知ってるの？」

簪が読んでいたのは、『幻想郷竜人伝』と書かれた本だ。

これは、言ってしまうえば父さん達の武勇伝だ。ヒーロー好きの簪らしいと言えば、簪らしいけどよ……。作者は誰か分からないけど、所々盛られてるんだよなあ。例えば、父さんが雷を操る男と戦うシーンなんか、一度は死んでしまうものの復活するなんて感じに書かれている。読んでいた父さんは苦笑してたっけ……。

「あー、これは伝記のようなもんだから、鵜呑みにするのは止めとけ」  
「そうなの？ 結構気に入ってたんだけど……」

危ねえ！ 簪のやつ、マジで信じてそうな感じだった！ 下手したら父さんにサイン求めてたんじゃねえか？

「そう言えば、父さん達の姿が見えないな？」

「護さんなら、『協力してくれる奴を迎えに行ってくる』と言って、白斗さんと一緒に外へ行つたわ」

俺の疑問に答えてくれたのは、ヴァレットとの戦いで協力してくれた、生徒会長こと楯無先輩だ。『飛竜種の書』を読んでいたらしいが、まだ捲ったページは少ない。

それにしても、父さんに協力してくれる人って誰だ？ 心当たりが多すぎて逆に分からないぞ。

「全く。能力に目覚めたばかりの子に貴方の修行をさせるとは、何を考えてるのですか」

「へーへー俺が悪うございました！ 外の世界に来たつてのにお説教かよ」

「もう良いだろう二人とも。今は目の前の事態に集中すべきだ」

「……………え？」

「お、おい相棒……………まさかとは思うが……………」

遠くから聞こえてくるのは、聞き慣れた声。一夏たちも気付いたのか、声のした方へ顔を向ける。

ん？ シャルロットとラウラが驚いたような顔をしてるが……………。

「よう、お前ら！ 頼もしい助っ人連れてきたぜ！」

「俺が知る限り、おそらく天狗といい勝負になるほどの速さを持つ男だ」

「初めまして、皆さん。私の名前は十六夜影夜。ミツルの父でございます」

丁寧な口調で、これまた丁寧に頭を下げる人。俺の師匠の一人……………影夜さんだ。

すると、影夜さんがシャルロットとラウラを見て、意外そうな顔になった。

「おや？ そちらのお二人は確か、喫茶店で働いていた……………」

「シャ、シャルロット・デュノアです！ あの時は助かりました！」

「ラウラ・ボーデヴィツヒです！ まさかあの時の方が……………」

二人は、まるで有名人に会ったかのようにパニックになっている。一方の影夜さんは苦笑気味だ。

「なあ、相棒。影夜さん何やったんだ？ 二人とも知ってるらしいが」  
「簡単に言えば、父さんと母さんのデート先でトラブルがあって、その時に父さんが少し暴れたんですよ」

「影夜さんが暴れるって、どんな事態だよ!？」

「あの様子からして、父さん達のデート先で二人はアルバイトか何かをしていたんでしょうね」

普段はおっとりしてる影夜さんが暴れるって、本当に何があつたんだよ!？」

シャルロット達が落ち着いてから、一夏たちは休憩に入った。本音は頭から煙出して机に突っ伏している。

「お勉強疲れた〜……」

「でも、結構いい感じにノートにまとめてるじゃねえか」

本音って、のんびりとした雰囲気とは裏腹に、ノートを取るのが上手い。チラツと見てみたが、分かりやすく書かれていて読みやすかった。

すると、影夜さんがお盆を持ってきた。

「2人ともどうぞ、紅茶になります」

「ありがとうございます、影夜さん。ほら本音。これ飲んでリフレッシュしな」

「ありがとう〜……」

紅茶を受け取った本音が一口飲むと、一瞬だけ目が見開いた。そして勢い良く立ち上がる。

「うーまーいーぞー!!」

「それは何よりです」

本音の反応に、嬉しそうに微笑む影夜さん。よく見るとセシリアや虚先輩、会長も驚いたような顔をしていた。

「こ、これは……虚ちゃんの良い勝負……！」

「うう、駄目です！ チエルシーを裏切るとは……でも……！」  
「……………負けました」

俺も何回か飲んだことがあるけど、影夜さんや咲夜さんが淹れる紅茶って、香りが良いんだよなあ。相棒の淹れるお茶も美味しいけど、本人曰わく『私はまだ2人に及ばない』とのことだ。

「それにしても、まさかミツルの父親が来るとはな」  
「確か、あの人って能力が原因で……」

一夏と箒が影夜さんを見る。たぶん、普段から笑みを絶やさないあの人に、白斗さんから聞いた過去があるとは思えないんだろう。  
すると、父さんが来て2人の肩に手をおいた。

「そんな顔をするな。あいつは今、幸せな毎日を送ってる。過去を乗り越えてるんだ」

「過去を……乗り越える……」

ん？ 一夏が何か呟いたが、よく聞こえなかったな。

「そうだ真。休憩終わったらミツル君とアリーナに来てくれ。挟れた土とかを元に戻すぞ」

「……………え？」

冗談だろ、父さん？

## 54話 アリーナ整備

俺と相棒、そして父さんは、クレーターまみれのアリーナを整備していた。確かに俺が大暴れしたのもあるけどよお……。俺たちが戦った時よりも酷くなつてないか？

「これ絶対に白斗さんの分も入ってますよね？」

「だよなあ……。しかも手作業でこれ埋めるのか……」

「まあまあ。これもトレーニングの一環だと思えば良い」

トレーニングになるなら……良いのか？ 何か上手く丸め込まれた気がする。

まあ、俺にも原因はあるんだろうけどな。ちゃっちゃと埋めますか！

「キツイ……………」

重労働な上、土を運んで埋めるという単調な作業が延々と続いている。おまけにこのアリーナはとてつもなく広い。終わりが見えない。

「時々休憩を挟んでるけどよ、それを上回るほどキツイな……」

「ですね……」

「そういや、一夏たちは今頃何やってんだらうな？」

「休憩を終えたら、専用機持ちの人たち全員が父さんたちに鍛えてもらうそうです。別のアリーナで」

「マジで?! またこの作業するって事になったら、キレル自信があるぞ!？」

影夜さんに白斗さんが暴れてまたクレーターができるか、ミサイルやレールカノンといった強力な飛び道具でクレーターが出来るか。どちらにせよ修復するのが俺たちになったら、それはちよつと俺は怒らざるを得ないぞ?。

「いえ、普通の筋トレらしいですよ？ 腕立て伏せとか」

そ、そうか。それなら安心だ。また同じ作業をするのは嫌だからな。



「しかし、人化モンスター達ってどれくらい居るんだろうな」

「無人機の投入をしようと言うことは、兵の数は少ないと思われませんが、それほど多くは無いですか？」

「問題は、その少ない戦力が強すぎると厄介なんだよ」

ヴァレットにティールン、俺が戦ってきた人化モンスターは誰もが強かった。今こうやって生きているのが夢なんじゃないかと思うくらいだ。

「モンスターは、時にとんでもない能力で環境に影響を与えることもある。この世界では、それが災害以上のものに匹敵するかもしれない」

「だから、この世界で暴れられると厄介なのか」

「それに、その力に目を付けて、無理やり人間に力を宿らせるという事を考える外道が現れるかもしれない」

「それは……防がないといけませんね」

モンスターの能力は強い。小さな傷なら自然に治っちゃうし、重傷を負っても栄養摂って眠ればたちまち回復する。鍛えれば身体能力も人間を超える。きつと、羨ましいと思われよう。

だが、それはあくまで生まれつきの能力者であった場合に限る。普通の人間に無理やり宿らせるなんてしたら……モンスターの力に耐えきれず肉体が壊れるか、耐えきれたとしても理性を失って新しいモンスターが生まれてしまう、つまり暴走する危険性が高い。

紫さんは、かつて俺たちにこう言っていたことがある。『本当の化け物は、欲に目がくらんだ人間なのかもしれない』と。ひとたび大きな利益を目の当たりにすると、例えばそれが人の道から外れていようと手にしたくなるのだと言う。もしモンスター能力を作ろうとしている奴がいるなら、そいつはまさに化け物なんだろうな。

「少し休憩にしよう。二人とも、冷たい緑茶で良いかな？」

「はい。ありがとうございます」

「俺もそれで良いぜ」

だいぶ地面が元通りになってきたので、少し休憩をはさむことにした。父さんが、近くの自販機で買ってきたであろう緑茶を渡してくれ

た。

「んっ、ゴクツ……はあく！ 美味しい！」

「いい飲みっぷりですねえ」

よっほど喉が渴いてたのか、一回で半分ほどの量を飲んでしまった。自分でもビックリだ。

「……………」

「ん？ 父さん。上を見てどうかし——」

「二人とも散開しろ！」

「っ!!」

父さんの叫びと同時に、俺たちは避ける。すると、父さんを中心に衝撃波が起こり、遅れて土埃と爆音が巻き起こる。

「休憩の所すまねえなあ、能力者さんよお！」

「やれやれ、派手な登場だな」

そいつは、肌も髪も真っ黒で、目が赤く光っていた。頭から牛のよ  
うな角が生えている。服は腰蓑だけだ。だが、盛り上がるような筋肉  
が、相手の力強さを物語っている。

「早速だが、死んでもらうぜえ！」

「ぬううん!!」

角持ち男が殴り掛かると、父さんが受け止める。両手で受け止めて  
いるにもかかわらず、父さんはわずかに後退した。な、なんてパワー  
なんだ……………!

「父さん！」

俺は地面を蹴って援護に向かう。右腕を向けつつ、ISのセンサー  
のみを起動。カーソルは角持ち男を的確に捉える。ロックオンの文  
字が出ると同時に熱線を発射!

「くらええー！」

「ぐっ、おおお!!」

父さんが、熱線の飛ぶ方へ男を投げ飛ばす。

「熱いな……。だが、大したことねえよ！」

熱線は確かに当たった。だが、火に強いモンスターなのか効果は薄  
い。

「俺の名前はラージャン……じやなかった。ドナーだ！　ちよいとばかり、喧嘩に付き合ってもらうぜ！」

ニヤリと獰猛な笑みを浮かべ、モンスターの気配を一気に放ってきた……！

## 55話 金獅子との戦い!

ドナーと名乗った男が、父さんに向かって殴りかかる。

「ぬうらあー!」

「ぐっ、ううっ……!」

父さんが顔をしかめている……!? そんな顔をしているのを見たのは初めてだ。それはつまり、相手はそれほどまでのパワーを誇るということだ。

「相棒、行くぞ!」

「はい!」

俺は『グラビオス』のブースターで、相棒は持ち前の瞬足でドナーに接近する。

「はああっ!」

「ダラア!」

相棒がナイフを突き刺し、俺が膝蹴りで深く突き刺さるようにした。その隙に父さんが、奴の顎を蹴り上げる!

「いってえ……。少しハイになり過ぎたか」

少しフラフラしているが、倒れるという事は無かった。困ったような顔をしながらナイフを抜いて、相棒に投げつけやがった。相棒はすぐに回避し、ラファールのマシンガンを展開、発砲した。

「うおっとー! コイツは痛い!」

痛いと言いつつも、あいつは笑ってやがる。弾丸は確かに当たっている。命中した所の肉は抉れて、血が噴き出す。だが、その量が僅かな事から、あいつに与えられてるダメージは少ないということだ。

「そんじゃあ……。返すぜ!」

「なっ!?」

ドナーが拳を地面に叩きつけると、風圧と振動が襲いかかってきた。何とか姿勢を立て直そうとするが、その隙を突いて俺に殴りかかってきた。急いで両手で受け止める。

「何て……。馬鹿力だ……。!」

受け止めた腕がガクガクと震える。吹き飛ばされないように踏ん

張っているが、足の裏が地面を削り、俺をゆっくりと後ろへ押しつけていく。

「パンチと見せかけて、どっせええい！」

「うおおお!」

突き出していた手で俺を掴み、ハンマー投げのようにグルンと一回転したあと、壁に叩きつけられる。

痛い……。頭が揺れる……。

「こんのおお！」

「効かないっての！」

相棒がナイフを振るうが、筋肉を硬くしているのかあっさりと折られてしまう。

「なら、これだあ！」

「ブツ!」

すぐにナルガクルガの尻尾を生やして、ドナーの頭を殴る。これには対応できなかつたのか、姿勢を崩した。

「ふんっ！」

「グッ！」

そこへ父さんがすぐに距離を詰めて、鎧化した拳で殴りつけた。

「ファイアあああ！」

すかさず俺が口にエネルギーを溜め込んで、熱線の形で発射した。これで少しはダメージを与えたはずだ……。

「いってえな……! ガキは大人しく倒されろ! 俺のほうが先輩だぞゴラア！」

「随分としぶといチンピラだな」

「ああ!? チンピラだったか!? チンピラって言ったろ！」

「真さん早く立って! 何か嫌な予感がする！」

「言われなくても……!」

俺が立ち上がると、ドナーに変化が起きた。腕の筋肉がさらに盛り上がり、血管が浮き出る。髪はバチバチと音を立てながら金色に変化していく。あれは……静電気か？

「テメエ等は潰す……! 命乞いしてもぶつ殺す！」

「沸点の低いモンスターだな」

俺と相棒は驚いてるが、父さんはそんな時でも静かに拳を構えるだけだ。

「ミツル君、真。今以上に本気を出さないと……最悪死ぬぞ」

「っ!!」

父さんから放たれるのは、俺が幼い頃に感じた以上の強い気配……

！俺は思わず全身を鎧化し、相棒は全身の毛を逆立てた。

これが……幻想郷を救った男の力ってやつなのかよ……!?

「良いねえ！ 最高だあ！ お前のような奴は殺し甲斐があるぜえ！

ガキ共はお前の後にしてやるよお！」

「言ってる。俺たちの力を継ぐ子供たちの力を……甘く見るなよ」

ヤバい……！ これ以上言葉がないってくらいに、アーリーナがヤバい事になりそうな気がする！

## 56話 VSドナー（前編）

「オラアアアア!!」

「ウラアアアア!!」

雄叫びがアリーナに響き渡る。ドナーの拳と父さんの拳がぶつかり合い、一瞬遅れて衝撃波が発生する。土煙が俺たちに降りかかった。

「わっぷ!?!」

「目に砂があ!?!」

目に砂が入って見えないが、音からしてまだ殴り合ってる。急いで全身を鎧化し、いつドナーの注意がこちらに向いても良いようにする。

「まずはお前だ!」

「上等!」

どうやら、父さんを先に狙ったのは俺たちへのフェイントだったらしい。俺が土煙で動きが鈍っている所を襲いかかってきた。目がまだ開かないが、声のする方向へ腕を振るう。奴の拳とがぶつかり合い、ビリビリとした感覚が走る。

「ふっ!」

「どこ狙ってんだマヌケ!」

「そこかああ!」

「んなっ!?!」

俺の拳はいつもと比べてキレが悪く、ドナーもすぐに避けた。

これが狙いだ。

声を出して罵倒してくるが、そうしてくれたお陰でドナーが避けた方向が分かった。すぐに、その方向へ回し蹴りを決める。生身の人間の足を勢いよく回し、ドナーの肉体に届く寸前につま先を鎧化することで威力を高める。

それと同時に目の痛みもなくなり、やっと目を開けられる状態になった。

「くっそ……。テメエ俺と似てると思ったが、中々やるじゃねえか」

「それでも微動だにしねえってのかよ……!」

ドナーは少し顔をしかめてるが、俺が蹴りつけたにもかかわらず、吹き飛んだり転倒するということは見せていなかった。

「こりゃあ舐めてかかると痛い目見るな」

「真お!!」

相棒の声を耳にした瞬間、俺はその場から退避する。相棒はナルガクルガのブレードと尻尾を出しているが、どこか様子が違ってている。

腕は確かにブレードが生えているが、その周りが金属に覆われている。爪もラファールを装着した時のように装甲に覆われている。尻尾もどこか、ロボットのような金属質の印象があった。

「相棒……?」

俺はその異様ともとれる姿に驚いていたが、父さんは冷静に見ていた。そして鎧化している手を前に突き出し、いつでも熱線を撃てるようにしていた。

「まさか……。専用機に能力を反映……。真と同じ状態にしているのか」

「はあああ!」

「危ねえ! そんな恐ろしい鞭は振り回すもんじゃないぜ!」

「くっ、おとおお!」

「相棒!」

「ミツル君!」

機械となった尻尾を打ちつけようとするが、ドナーはニヤリと笑いながら掴み、相棒ごと振り回す。

俺と父さんは急いで助けようとするが、それは不要だった。

アリーナの壁に投げつけられたかと思いきや、壁を蹴ってダメージを無効化し、さらに背中ของブースターを噴かせてドナーへの距離を詰めた。

「動きが直線的すぎるぜ、もやし野郎!」

「それは百も承知!」

突っ込みながら展開したマシンガンを、近距離で発砲する。ドナーは手で銃口を抑えて暴発させた。



「そこを……」

「俺たちが……」

「叩く!!」

相棒に注意を向けていた隙を突いて、父さんと同時に右ストリートを打ち込んだ。モンスター筋力による一撃だ。だが、それで奴が倒れるとは思えない。すぐに3人同時に退避した。

「あつはつはつは！ 面白い！ やっぱ面白いぜ人間はよお！ 群れるとこんな強くなりやがる！」

「よく言いますね。人間を滅ぼそうとするくせに」

「あー？ 確かに人間が居なくなれば、俺たちモンスターは住みやすい。だが、俺にはそんな気は微塵もねえよ」

「何ですって？」

「俺は戦いが好きだ！ 弱いやつをいたぶるのも、強いやつと血を流しながら戦うのもたまらねえ！ そこに人間とモンスターの区別なんかねえんだよ！」

俺たちは衝撃を受けた。ここまで戦いに生きようとする奴を、俺は生まれて初めて見た。だからこそ、こいつが仲間だったらと思う。俺は拳を握るのを躊躇いそうになる。

だが、今のドナーは俺たちを殺しに来ている。チンピラのような口調ではあるが、放たれている殺気は本物だ。ここで躊躇しようものなら、ドナーにも失礼だし、何より本音たちが危機にさらされちまう。

再び拳を握った。

「さーてと、お前らの攻撃を受けまくったからなあ。俺ももう少し動かねえと釣り合わねえよなあ」

ドナーは右腕を地面に突き刺す。すると、奴の周りがグラグラと揺れだした。

「ミツル君。俺と真の後ろにいなさい。真。迎え撃つぞ。これは嫌な予感がする……」

すると、ドナーは地面を……いや、土の塊を持ち上げた。デカイ。土とは言え、ダメージを与えるには過剰なほどの固さがあるだろう。急いで拳を構える。

すると、ドナーはそれを俺たちに向かって投げた！

「潰れやがれええええええええええ！」

「迎え撃つぞ、真！」

「おう！」

「ダラララララララララララララララア！」

俺と父さんで、高速の拳のラツシュを打ち込んだ！

57話 VSドナー（後編）

かなりの硬さを持つ土塊に、俺と父さんは拳を打ち込む。だが、それは隙を晒すことにも繋がっていて……

「潰れやがれ……俺の拳でなあ！」

「っ！」

「やらせません！」

ドナーが俺たちの所へ迫るが、相棒が専用機に入れてたのであろうブレードを使って、奴の拳を防いだ。そのおかげで、土塊を壊すことが出来た。

「チッ！」

「お返しだぜ！」

「ゴアアアア!!」

「がっ!? ぐうっ！」

俺が殴ろうとした瞬間、ドナーの口から金色の光線が放たれた。このビリビリした感じ……電気か？

「ミツルくん！ 奴の光線はくらうな！」

「はいっ！」

すると、今度は腕に力を溜め始めた。

「グオオオオオ………！」

みるみるうちに筋肉が盛り上がり、腕に僅かな電気が走っているのが分かる。

「あれだけの腕の太さなら！」

「よせ、相棒!!」

瞬時加速を使ってドナーに詰め寄る相棒。手に握るのは、ISでの戦闘に使うブレードだ。

だが、ブレードを振るっても、ゴンツッ!という音を立てて弾かれた。

「ぐっ、硬い……!?!」

「くたばれナルガクルガあ！」

「ごっ……ふっ………！」

「相棒おおおお!!」

口に例の光線を溜めようとしている。腹を殴られて動けない相棒に駆け寄ろうとする。だが……駄目だ！ 間に合わねえ！

「ゴアアアアア!!」

「っ……………う?」

「ぐっ……………おお……………」

「父さん!」

父さんが、相棒の盾になった。背中からプスプスと煙が上がっている。

「何してやがる相棒! 早く動け!」

「わ、私の……………私の油断のせいで……………」

「父さんがその程度でやられるわけねえだろ!」

「そう、だぞ……………。この程度……………大したことない」

そう言う父さんの顔は、笑っていた。

そうだ。父さんは、俺たちに不安を抱かせないように笑っている。

本当は痛いはずなのに。

「くっ……………すみません!」

すぐに相棒はマシンガンを展開し、ドナーを撃つ。膨張した腕で防いだようだが、ダメージは受けてないと見た。

「その豆鉄砲、いい加減ウゼえなあ! ガアアア!」

「うっ、ぐううう! 今です!」

「よっしやあ!」

短い光線を放ち、マシンガンを破壊するドナー。その一瞬を突いて、俺は鎧化した足で奴の背中を蹴りつけた。

「いってえ、なっ!」

「ぐ、この……………」

俺の足がドナーに掴まれると、地面に思いつき叩きつけられた。小さいクレーターが出来上がる。

「吹き飛ばやあ!」

ドナーが上を向くと、口から何か球のようなものを作り出す。まさか、さっきの光線を球状にしているのか!?

「やらせねえええ!」

俺の機体に着いているグラビド・ヘッドを展開し、さらに俺の手のひらにも炎を集中させる！

「死ねええー！」

「トライ・ファイアああああ!!」

炎と電気がぶつかり、爆発が起きる。

「はああああー！」

「ぬうらあ!!」

煙の中から相棒と父さんの声が聞こえてきた。ドナーを攻撃してるのかもしれない。

俺もすぐに起き上がって、煙の中へ飛び込む。

そこには、腹に火傷を負いながらも俺たちへ殺気を飛ばすドナーの姿があった。

「最高だあ……最高だぜお前らああ!! これほど血が熱くなるのは、ボレアスさんの時以来だあ！」

「貴様……まだ動けるのか！」

父さんが拳を打ち込むと、ドナーは少しよろめく。奴の口からは血が垂れている。

「もつとだ……！ もつと……！ 最期まで俺を熱くさせろおおお！」

ドナーが口に笑みを浮かべながら、血管が浮かび上がるほどに膨張した腕を振りかぶってくる。

そこまで言うのなら……上等だ！

相棒がすり抜ける瞬間にドナーを切りつける。すれ違うように俺と入れ替わり、俺がアツパーを打ち込む！

「ぐっ……！ 重っ……！」

「弱味を見せるな、真お！」

俺が打ち込んで、数秒遅れて父さんがアツパーを打ち込んだ。

「ごっ、はあっ……！」

「相棒！」

「はい！」

相棒が俺の後ろから走ってきた。俺は身を屈める。

すると、相棒は俺を踏み台にして、そこからナルガクルガの能力を発動する！

「はっ、むんっ、せやあっ!!」

「ぐっ、ぬっ、がああっ!」

相棒に切りつけられて出血したドナーは、重力に従って落下していく。

すると、父さんが俺を持ち上げた。

「トドメを!」

「いつくぜええ!!」

父さんの怪力によって、俺はドナーへ向かって投げ飛ばされる。

これで終わりだ、ドナー!

「うららららららららららららららららららららららあ!!」

拳のラツシユを打ち込むと、ドナーは地面では無くアリーナの壁にめり込んだ。奴はすでにボロボロだ。

「カフツ……。最高の合体技じゃねえか……。胸が高鳴って仕方ねえ……」

「はあ、はあ、はあ……」

「へっ……。『まだ足りねえ』って目をしやがって……。安心しな。もうそろそろリーダーも来るだろうよ……」

「なんですって!?!」

「いけねえなあ……。俺たちのリーダーだつてのに……。お前らが勝つのを望んでやがる……」

ドナーは、笑いながら事切れた。

それにしても、このモンスターを率いるリーダーが来るつてのか……。どんな奴なんだ……。

遠い無人島。遙か昔に人が住んでいたのか、神殿の残骸がある。

その遺跡の頂上にて、黒いローブを纏った男が天に向かって跪いていた。

「ボレアス様……。我らは必ずや貴方の悲願を……ぐっ！」  
胸を押さえる。男の背中からヒビが現れ、そこから純白とも金色とも取れる光が漏れていた……。

## 58話 男子たちの想い

「お前たちは馬鹿か!？」

ドナーとの戦いのあと、俺と相棒は正座させられていた。怒ってるのは織斑先生で、俺たちを取り囲むように山田先生や一夏たちがいる。

「モンスターへの襲撃があったからと言って、お前たちは『報・連・相』も出来ないのか!」

「い、いえ、緊急だったため……」

「ミツル、変に言わない方が良いわよ。先生かなりご立腹だわ」

相棒が言おうとするのを、鈴に止められる。チラツと見ると本音も怒った顔をして、「しつかり説教を受けろ」と目が言っている。

ちなみに、父さんも同じように正座させられて、影夜さん達から説教を受けている。何て言われてるのはかは、よく分からないけど。

「テメエは馬鹿か! 紫さんから貰った通信札で、いつでも呼び出せただろうがよ!」

「いや、本当にスマン……」

「……まあ、俺たちも異常に気付いてすぐに駆けつければ良かった。俺も悪かったよ」

俺と相棒、そして父さんは、他の人たちからの説教を受けた。言ってることが正論だから言い返す事も出来ないし、何より、本音にまで怒られたのがメチャクチャ心にダメージを受けちゃった……。

説教から解放された後、俺と相棒と一夏の3人は、食堂で話をしていた。ドナーが最期に言った事が気になるからだ。

「この世界にいるモンスター達を、従えている存在か……」

「はい。私たちはともかく、人間である一夏さん達をも脅威と見ている可能性があります」

「俺たちが? なんで?」



「お前たちは、モンスターの能力が封じ込まれた無人機たちを倒してきただろ？　いくら能力の元となったモンスターが雑魚とはいえ、それは野犬の群れを全滅させるような事だぜ」

「そうか……。ISのおかげとは言え、敵からしたら兵力を潰された訳だからな。俺たちが脅威に思えるのか……」

「最悪、前回よりも大量の小型無人機だとかを投入してくるかもしれないよ。セシリアさん達のような専用機チームだけでなく、護さん達をはじめとした能力者も戦う可能性が……」

「能力者も？　ま、まさか！」

一夏の顔が青くなる。

「まさか、箒も戦うのか……!?!」

「恐らく、な」

「何でだよ！　箒は確かに能力を持つてるけど、戦いに出てた訳じゃないだろ！」

「そんな事を、敵さんが知るわけ無いだろうが！」

「そんな事……？　箒が『そんな事』だ!!」

その瞬間、俺の右頬に痛みが走る。何されたかはすぐに分かった。

一夏が俺を殴ったからだ。

「……………っ！　ぐ、ごめん！」

一夏は怒りに満ちた顔から一転し、すぐに青ざめた顔で俺に駆け寄る。まるで、「何で殴ったのかわからない」と思っているかのような顔をしていた。

おそらく、これは……。

「気にすんな。俺も、言い方が悪かった。すまん」

「本当にごめん……。でも、何か、箒のことを考えたらこう、頭に血が昇ったと言うか……」

困惑した表情で、自分の両手を見る一夏。その様子に、俺と相棒は一瞬だけ顔を見合わせて、頷く。

———　言うべきでしょうね。

———　そうだな。後悔しないためにも。

「なあ、一夏。お前は箒のことをどう思ってるんだ？」

「え？ 何でそんな質問を」

「前に読んだ漫画に、こんなセリフがあります。『質問を質問で返すな』……でしたかね。こちらの質問に答えてくださいな」

「ご、ごめん。箒のことをどう思ってるかだよな。そりゃ、箒は幼馴染で……あれ？ でも……」

箒のことを言おうとする一夏だが、自分で言っておきながら再び困惑し始める。

「何でだ……？ 俺にとって幼馴染で、親友で……、でも、何か違う……」

これは、もう少しかもしれない。俺は発破をかけることにする。

「箒がモンスターに殺されそうになったら、お前はどうするよ？」

「そんなの、絶対に助けるに決まってる！ ……あつ」

「ようやく、気付きましたかね」

「つたく、遅いんだよ」

自分の気持ちに気付けたようだ。これで、一夏も少しは生き残るために戦うことが出来るだろう。

「俺は、みんなを守りたい……。でも、それでも俺は……！」

「良いんですよ、全部言わなくて」

「それに、ちよつとくらい独占欲があってもいいだろ？」

「そういう、ものなのか？」

「そうですよ。ここでハッキリ言いますが、私はラウラさんが好きです」

……ん?! 今、相棒の奴サラツとんでもない告白しなかつたか?! 「相棒?! 薄々感じていたけど、マジか?!」

「マジですよ。正直言つて、大声で叫びたいくらいです」

「お、おお……。ミツルがここまでハッキリ言うのも珍しい気がするな」

「もう、とつとと戦いを終わらせて、告白したいぐらいです」

「真面目な顔して、凄いことを言うんじゃないか！ 本人がいたらどうする！」

「大丈夫です。ラウラさんの気配を感じないから、ここで言っていま

す」

相棒の奴、目がマジだ……！ 本気と書いてマジと読む奴だ……！  
「それよりも、真さんはどうなんです？ 本音さんと随分仲が良いみたいですが」

「あ、それは俺も気になる」

「相棒!? それに一夏まで!」

「もう、この際言っちゃったらどうです？ 本音さんも今ここにはいませんよ?」

「ミツルも言ったんだしなく。これは真も言う流れだろう」

相棒と一夏め、ニヤニヤした笑みを浮かべやがって!

「だ、だけどよお、ここで言ったら死亡フラグってのが出来たりしないよな?」

「大丈夫ですよ。常識をぶち壊すのが真さんでしょう?」

「そうそう。『俺、この戦いが終わったら結婚するんだ』みたいなことを言わなければ、大丈夫だって」

「そ、それなら……良いのか?」

それなら大丈夫、なのか?

それから俺は深呼吸をして、叫ぶほどではないが、ハッキリと言った。

「そうだな……。俺は、本音のことが好きだ。彼女とまた学園生活を送れるようにするためにも、この戦いは負けられない」

「……そうですね。私も同じです」

「俺も今、ハッキリと言える。好きな人を守るために、俺は戦う」

男子三人が、一斉に頷く。それぞれが好きな人を意識した今、もう俺たちは逃げる事が出来ない。

「だけど、上等だ。だったら徹底的に抗ってやる。相手が古龍だろうが何だろうが、ぶちのめしてやる。」

人間の意地ってやつを、モンスター共に見せてやる!

## 59話 修行、そして胸騒ぎ

俺と相棒と一夏が、自分の気持ちを確認しあってから、二日経った。今はアリーナで、父さん達と箒が能力の特訓をしている。

箒が炎の渦を作り出して父さんに攻撃してくる。だけど、グラビモスの甲殻に全身を包んでいる父さんは、涼しげな顔をしている。

「一点集中はお前さんの長所であり、短所だぜー」

白斗さんが後ろから襲い掛かってきた。だが、箒は空いている左手で小さな炎を作って、迎撃する。どうやら、奇襲にもある程度は対応できているようだ。元々剣を使うことがあるためか、箒の直感は大にできない鋭さを持っている。

「なら、次は己に靈力をかけてみるー」

「くっ!？」

父さんが鎧化を解除すると、今度は距離を一気に詰めて箒に殴り掛かってきた。反射神経も良いのか、父さんの拳をすぐに受け止める。自分自身に靈力をかけたお陰か、ダメージは小さいようだ。だけどそれだけ。力を受け止めることに精一杯なのか、拳を受け止める姿勢から次の動きに移すことが出来ない。

「なかなか良い反応だったがな。はい、おしまい」

「っ!？」

そこへ白斗さんが肩を叩き、箒が振り返ったところをデコピンで終わらせた。白斗さんのデコピンは洒落にならないくらいの痛さで、箒は額を押さえええうずくまってしまった。

俺も小さい頃、白斗さんのデコピンを何度受けたことか……。後で相棒から聞いたが、その時の俺は顔を青くして、額を押さえながらガタガタ震えていたそうだ。

箒たちの修行が終わった後、入れ替わるように今度は俺たちが特訓をする。

「らああああ！」

「見え見えだぜ！」

「と、思うじゃん？」

「っ?! フェイント……!」

一夏が雪片を振り下ろすと見せかけて、左手から荷電粒子砲が放たれる。しかも鈴が使う衝撃砲と同じように、威力は少ないが連射するタイプ。それを一発だけ撃ってきた。なるほど。その方法なら消費するエネルギーも少なくて済む。

「ふっ！」

「以前に比べて早くなりましたが、まだ近接武器の展開が遅い！」

「……っ?!」

「ほらほら、ミツル！ セシリアにばかり気を取られるんじゃないわよ！」

相棒の方も、セシリアたちと模擬戦をしている。

セシリアは近接武器の展開が苦手だったが、モンスターとの戦いを経て、「苦手だからとか言ってられませんわ!」と思っただけ。ブレードの展開が得意な相棒からの指導を受けて、近接武器『インターセプター』の展開がだいぶ早くなった。それでも、相棒から言わせれば遅いレベルらしく、それに関しては織斑先生も頷いていた。

相棒がセシリアに連続攻撃を仕掛けようとしていたが、そこへ鈴が乱入。衝撃砲の攻撃を避けつつ、相棒は応戦していた。

「なら今度は……!」

「ボク達が相手だね！」

「ラウラにシャルロットもかよ! 『グラビオス』の防御力なめんな!」

俺の方も、一夏と入れ替わるようにラウラとシャルロットが攻撃してきた。シャルロットはともかく、A I Cを持っているラウラは相性が悪すぎる!

だけど、シャルロットの機体は実弾兵器が多い分、俺には有利なんだよなあ!

「射撃の訓練を手伝ってくれよ!」

「っ！ シャルロット、撃つな！ あいつの機体は……！」

「しまった!? 確か、爆発や着弾の熱を吸収……！」

二人は気付いたようだが、もう遅いぜ！ 今回は肩のキャノン砲じゃなくて、手のひらの砲口だ！

「そらそらそらあー！」

「熱線を連射!? 今までではチャージして一気に撃ってきてたのに!？」

「ええい真！ お前はどこまで私たちを驚かせる!？」

「知らねえよ、そんなもん！」

「二人に集中しすぎだぜ！」

「うおおっ!？」

後ろから接近してきた一夏が、クロー部分にエネルギーを付与して襲ってきた。俺が避けると同時にすぐに付与状態を解除して、雪片で切りかかってくる。

こいつの攻撃は、一つ一つが強力な代わりには、消費するエネルギー量も尋常じゃない。だが一夏は、モンスター能力を持った無人機との戦いで、これから先の戦闘は長期戦になることを悟ったようだ。そこで彼は攻撃の回避とエネルギーの節約に専念することにしたそうだ。

「みんな、漁夫の利って言葉を知ってるかしら？」

『山嵐』、全弾発射……！」

別方向からの言葉に振り向くと、水のヴェールで簪を守っている會長と、小型誘導ミサイルである『山嵐』をロックオンし終わった簪の姿が。

「嘘だろオイ!？」

「真さんを盾にすれば……！」

「ナイスよミツル！」

「お前らふざけんな！」

相棒の言葉に従って、鈴はおろかセシリアやラウラ達までもが俺の後ろに隠れた。

「残念、一か所に纏まったらお姉さんの餌食よん♪」

その瞬間、水のヴェールが一気に俺たちを取り囲む……ってまさか

!?

「ポチつとな♪」

「「「ぎゃああああああ!!」」」

水の中に含まれているナノマシンが起爆し、俺たちは爆風に包まれた。

「お姉ちゃん、その攻撃好きだよね」

「格好いいでしょう?」

「……ちよつとだけ」

場所は変わって、整備室。エネルギーや弾丸の補充、破損個所の修理などを行うために、俺たちは集まっていた。

「……ねえ」

「どうしました、会長?」

「私はあるとき確かに、ヴェールを起爆させたのよね?」

「いやあ、あれは凄まじかったっすよ。鼓膜が破れるかと思いましたもん」

「なのは何で、ちよつと装甲が焦げてる程度で済んでるのかしら!?!」  
扇子を開いて「理解不能」の文字を見せる会長。見ると、簪も頷いている。

「そう言われても、あの時は俺の能力を使っただけっすよ」

「確か、バサルモスの能力だったかしら?」

「そうっす。俺の機体のエネルギーは基本的に推進力とかに使ってて、防御の方は能力を使ってますから」

「確かモンスターの図鑑には、バサルモスは火山地帯に住んでいることがあるって書いてあったわね。溶岩にも耐えるほどの甲殻なら、納得だわ……」

会長が「色々常識が崩れるわね」と呟いている。

すると、凄い遅い足取りで本音がやって来た。

「かんちやくん。補給と修理、終わったよ」

「ありがとう、本音。みんなは？」

「みんな自分で直したりしてたく。お姉ちゃんも居たから、そんなに大変じゃなかったよ」

「それでも、お疲れ様」

「えへへ」

簪からの労いの言葉に、本音はホニヤリと笑みを浮かべる。そんな笑顔に俺も癒される。

「およろ？ 東風やんの機体は煤だらけだね」

「会長の爆発と、簪のミサイルによる爆風を受けたからな」

「それでもピンピンしてるあたり、さすが東風やんだ」

「へへっ、そう言われると照れるな」

俺と本音の様子を、会長と簪は微笑ましいような目で見ていた。まるで無邪気に遊ぶ子供を見守る母親のように。

たぶん気付かれてるんだろうな。俺が本音のことを好きだということに。

だけど、まだ告白はしない。告白したら、色々と気が緩んでしまいそうだから。俺は内心慌てつつ、話題を変える。

「簪。モンスター能力を相手に見てみてどうだった？」

「攻撃の一つ一つが重いから、やっぱり被弾を最小限にしないとって思った。ISの絶対防御がどれだけ恵まれてるかも実感できたよ」

「なら良かった。モンスターは手強いが、結局は生き物だ。弱点は必ずある。能力を持った無人機でもな」

「なるほど……。それなら希望を持てるかも」

こうして俺たちが話をしていると、穏やかな空気をぶち壊すアナウンスとサイレンが響いた。

《学園付近に、多数の不明機接近！ 無人機のもよう！》

山田先生の、切羽詰まったような声が響く。つまり相当の数だということだろう。

「東風やん？」



「わずかなモンスターの気配を大量に感じる……。こりや、無人機の群れだな」

「モンスターの勘ってやつかしら？」

「はい。たぶん、相棒も感じていると思います」

「なら、早く行こう！」

簪と会長が、一夏たちのもとへ走っていく。

だが妙だ……。これだけ多くの無人機がいるなら、指揮してるモンスターも居る筈。なのに気配を感じない……。

「東風やん早く〜！ みんな行っちゃうよ〜！」

「お、おう！ すぐ行く！」

グラビオスを待機形態に戻すと、会長たちの後を追う。ちなみに、本音の走りがあまりにも遅かったので、途中から俺が背負って走った。

だけど気になる……。どうも嫌な予感がする……！

## 60話 襲撃と悔しさ

「先ほど、レーダーが無人機の存在を掴んだ。数は不明。しかし確実なことは、無人機の集団が学園を取り囲んでいるということだ」

織斑先生の説明に、俺たちは唾を飲み込む。モンスター能力が付与された無人機が、人工島である学園を取り囲んでる。つまり、相当な量の敵が来ているということだ。

「今は護さんたちが先行し、防衛に当たってもらっている。お前たちもすぐに合流しろ」

「織斑先生」

「どうした、十六夜」

「それほどの数ならば、指揮をする存在が近くにいってもおかしくないのですが、レーダーは無人機以外の存在をキャッチしなかったのでしょうか?」

「私も気になってはいた、しかしレーダーに反応しなかったということとは、レーダーの範囲外で指揮を執っている可能性が高い。おそらく、東風谷と十六夜、そして護さんたちを疲弊させるのが目的だろう。二人は出来る限り前へは出ず、指揮官を発見次第、対応を頼む」

「了解!」

「篠ノ之。お前は、実戦は未経験だ。専用機組が撃ち漏らしたものを迎撃するだろうが……山田先生の下を離れるなよ」

「分かりました。よろしく願います、山田先生」

「無理はしないでくださいね。あなたは生身で戦うことになるのですから。いぎとなったら私を盾にしても逃げてください」

こうして俺たちは、再び無人機の群れを迎撃すべく、外へ走って行った。

「るおおおおお!!」

父さんの叫びと共に、脚を掴まれた無人機が振り回される。そのま

ま投げ飛ばされて、四足歩行の無人機に激突し、爆発した。その爆発に他の無人機も巻き込まれる。

「俺様をなめんなっつうのお!!」

ティガレックスの爪を光らせた白斗さんが、別の機体を突き刺して、そのままディオレックスの電気を流し込む。回路をズタズタにされた無人機は、そのまま片手で投げられて、別の無人機と共に爆発四散。当然、他の奴もお陀仏だ。

「遅い！ 遅すぎます！」

影夜さんは腕のブレードで複数の無人機の胴体を一気に傷つける。無人機は影夜さんを迎えようと動くが、よっぽど深く斬られたのか、そのまま倒れこむ。父さんや白斗さんに比べると地味かもしれないが、一度の攻撃で倒してる数は二人と同等だ。

「なっ……」

「これが護さん達の戦闘……」

父さんたちの戦いを目の当たりにしたセシリアやシャルは驚いているが、この状況はまずい。俺たちよりも先に戦って敵を倒してるのに、それでも数は尋常じゃない。いくら父さん達でも厳しいかもしれない！

「驚いてる暇はねえぞ！ 父さん達と交代だ！」

「分かった！」

俺の掛け声で一番に飛び出したのは一夏だ。だが、ただの突撃じゃない。無人機が鋭い爪を振り下ろそうとするのを避けながら、父さんたちの所へ向かっている。

「俺たちも負けてらんねえな！ 行くぜ相棒！」

「ええ！」

俺は拳に炎を纏わせ、相棒はIS用のブレードを展開する。するとラウラが、肩のレールカノンを相手に向けた。

「道を作る！ 行ってくれ！」

「助かります！」

リミッターを外されその威力が凶悪なものになったレールカノン

の砲弾が、後ろにいる無人機ごと胴体に風穴を開ける。

「今だ！ 突っ込めえええ！」

「うおおおおお!!」

俺と相棒が突っ込んでいく。他の無人機が爪で俺を切り裂こうとするが……かすり傷を少し付けたに過ぎない。

「邪魔だあ！」

「どけえ！」

俺のパンチが無人機を吹き飛ばす。相棒の持つブレードが敵の腕や足をぶった切る。だが、数が減らないことに苛ついた相棒が、刃こぼれしたブレードを取り換えながら声を荒げた。

「ああああ！ 面倒くさい！」

「相棒!?!」

「一気にいきますよ！」

相棒の腕の装甲から、ナルガクルガのブレードを模したような刃が現れる。まさか、それで一気に敵を切りつけながら突っ込むのか!?

「遅れないでください！」

「分かってるっての！ セシリア！ 背中は何に任せる！」

「お任せくださいいな！」

俺と相棒は瞬時加速で一気に突き進む。無人機は後を追おうとするが、上空から遠距離の敵を狙撃していたセシリアが、その無人機を撃ちぬいて妨害する。

「行ってください、お二方……。空は私がやります！」

セシリアの視線の先には、ブナハブラやランゴスタ、ガブラスといった小型無人機の飛行タイプがいた。

「ブルー・ティアーズ、全機稼働！ 絶対に……絶対に仲間をやらせませんわよ！」

セシリアの頼もしい声を背に、俺たちは父さんのもとへ辿り着く。

「父さん、下がって！」

「っ！ 影夜、白斗！」

父さんの合図と同時に、影夜さんと白斗さんが下がる。

「ツインファイアアアアア!!」

グラビド・ヘッドから放たれる2本の熱線が、父さんたちの相手になつていた無人機を貫く。当然、一機を貫いて終わりではなく、その後ろにいた無人機を10機ほど巻き込んだ。

「一旦下がろうぜ、護！ 数が多すぎる！」

「そのつもりだ！ 真、ミツル君！ 下がるぞ！」

父さん達の言葉で、俺たちも撤退する。

「援護するよ！」

「吹っ飛びなさい！」

上空にいたシャルと鈴が、マシンガンや衝撃砲で周りの無人機を妨害する。

「しかし、これほどの数………」

「父さんも怪しいと思うの？」

「モンスターが居ないことも気掛かりだが、俺の気にしてることは、これほどの数を動かすためのコアをどこから手に入れたかだ……」  
「っ！」

言われてみればそうだ……！ モンスター能力を付与させた無人機のコアは、竜玉と呼ばれる寶石で代用されている。だけど竜玉は、モンスターの体内で長い時間をかけて生成される物だ。これほどの数を動かすには時間が足りない過ぎる。

「それによお、心なしか、前に一夏たちを襲った奴らよりも弱いな」

「白斗さんもそう思いますか？ 確かに、今ここにいる無人機たちは爪とかを使って襲い掛かってくるだけで、遠距離の攻撃をしきませんね。ジャギイやランポスをモデルにしているようですが……」

「何だ……？ 無人機の指揮者は、何を企んでいる……？」

父さん達の疑問が膨れ上がるが、ゆっくりと考える暇がないほどに無人機が襲い掛かってくる。

「東風谷くん、校舎の方まで下がって、そこでエネルギーを補給して！

私たちが食い止めるから！」

「多すぎ……！ 倒しても、どんどん出てくる……！」

ガトリングランスで敵を蜂の巣にする会長と、薙刀で相手を切りつけていく簪。すぐにでも加勢したい所だが、いつ敵の親玉が俺たちを

狙ってくるか分からない以上、従うしかない……。

「クソ……！ 齒がゆいったらありやしねえ！」

「真さん……」

みんなは、俺や相棒がいつでもモンスターと戦えるように前に出て戦っている。理由は分かる。でも……それじゃ俺は、何のために父さん達から修行を受けてきたってんだよ。

俺は、俺を守ろうとする仲間には傷付いてほしくないから、死んでほしくないから強くなるうって決めたのに……！

「クソ……！ クソ……！ クソお……！」

「……………」

悔しい声を抑えきれないまま、俺たちはエネルギーの補給へ向かった。

## 61話 豹変

真たちが前線から下がった頃、一夏は雪片を振るいながら相手の様子を伺っていた。

一夏は気付いたのだ。無人機の攻撃が単調すぎる事に。爪を振りかざしたり体当たりをしてくるだけで、ビームを撃ってきたりだとか炎を吐いてくるだとか、そのような攻撃が全く見られないのだ。

「特殊能力を捨てて、数で押しきろうって作戦か……？」

そう疑い始めた、その時だった。

——ギツ、ギギギツ

「っ!？」

つい先ほど倒したはずの無人機が、一機、また一機と起き上がったのだ。その様子はまるでゾンビのようだ。

「まさか、そんな……いや、でも……！」

嫌な予感がした。真たちから聞いた話に出てくるモンスターは、どれも常識では考えられない存在ばかりだった。モンスターは規格外、そういう認識だった。

だが、目の前の無人機たちは、いかにモンスターの力が付与されるとはいえ、規格外を通り越している。

「死んでも蘇るってのかよ！」

全身から黒いオーラを漂わせ、より激しく攻撃してきた。そこに連携などあったものではない。同時に襲い掛かったせいで衝突するような機体もいる。だが一つだけ言えるのは、先ほどよりも凶暴になって自分を狙ってるということだ。

「っ！ そうだ、箒！」

飛びかかってきた無人機を切り捨てて、校舎へ向かう。すぐにシエルトターに逃げ込めるよう、箒は校舎付近で戦っていたはずだ。だが、相手がこうして凶暴化した以上、彼女の身が危ない。

「くそっ！ どけ！ どけよ！」

ようやく好きだと自覚できた少女のもとへ向かおうとしているのに、目の前の無人機たちはそれを許さない。斬っても斬っても起き上

がっつては突撃してくる。両腕を切られたというのに体当たりしてくる機体までいる始末だ。

「箒！ 箒いいいいいい！！」

愛する人の名前を叫びながら、一夏は無人機の群れに飲み込まれていった……………。

セシリアがその異変に気付いたのは、空の敵をあらかじめ殲滅してからだった。簪からの小型ミサイルによる援護のおかげもあつて数を多く減らしたのだが、そこから増援が来る様子はなかった。圧倒的な数の暴力を仕掛けてきたにしてはやけに空が大人しいと思つて地面を見たときに、それは起こつた。

倒れていた無人機たちが、ゆっくりと起き上がったのだ。

当然、奴らは無傷ではない。頭が吹き飛ばされたもの、腕が片方だけ無いものもある。それなのに起き上がったのだ。しかも様子がおかしい。立ち上がる瞬間、カタカタと痙攣するように起き上がる姿は恐ろしい。おまけに黒いオーラが立ち上つてるように見える。

「まさか、これが能力ですの……………!?!」

ただ数で押してくるだけでも脅威だというのに、復活した拳句、凶暴化してるのだ。嫌な汗がダラダラと流れる。

すると、ハイパーセンサーがあるものを捉えた。先ほど撃墜したはずの虫の姿をした無人機が、地面を這つて移動してるのだ。

「冗談じゃありませんわ！ このままでは一夏さん達が！」

何より、自分が仕留めたはずの獲物がまだ生きていたという事実が、セシリアの体を突き動かした。BITのレーザーを乱射しながら、無人機の群れへと突つ込んでいった。

「いい加減、鉄くずになりなさいな！」

二度と移動が出来ないように、足を狙いながらセシリアは叫んだ。



「あ、ああ……あああ………!」

「ちよつとラウラ! しっかしなさいよ!」

無人機が豹変し始めた途端、ラウラの顔が青ざめ、ガタガタと震えた。赤い瞳がグラグラと揺れる。

「あ、あいつらは……まさか、まさか!」

「何よ、知ってるの!?!」

自分たちより前で戦っているシャルロットを援護するように衝撃砲を放ちながら、鈴はラウラに大声で尋ねる。

「あの時と同じだ! タッグトーナメントの時に、私が凶暴化して豹変した時と!」

「はあ!? つまり、あいつ等は狂竜化つてやつになってるの!?!」

「このおぞましい感じ……間違いない!」

かつて自分自身がそうなってしまったからこそ分かる、相手の異変の正体。だが、それはこの状況を打破できるものではなかった。

「シャル、聞こえた!? 相手は狂竜化してるわ! 攻撃を食らったらマズイわよ!」

「分かってるよ! こっちは避けるのに精いっぱいだよ!」

「ラウラもしっかりしなさいよ! こいつらを倒さないといけない事ぐらい分かってるでしょ!?!」

「す、すまん! だが、狂竜化してるならば……!」

ワイヤーブレードを射出し、無人機を貫通する。ワイヤーを引き抜くと無人機は倒れ、動かなくなった。

「やはり、コアを狙えば……! だが……」

右も左も囲まれてるこの状況に、ラウラは歯をギリツツと鳴らした。

「はあ、はあ……」

「倒しても復活するって、ゲームじゃないんだから……」

楯無と簪は、倒しても倒してもキリがない無人機に、心身ともに疲

れ始めていた。いかにロシア代表と日本代表候補性として鍛えてるとはいえ、ここのも連戦となつては限界も来てしまう。

「簀ちゃん、武器の方は大丈夫?」

「ミサイルは残弾ゼロ、荷電粒子砲はまだエネルギーがあるけど、撃破できるかは……」

「こっちはガトリングの弾が無くなっちゃった。後はラストイー・ネイルくらいね……」

「ナノマシンを使った水も、殆ど無くなりかけてるもんね……」

「つまり、私たちは近接武器で戦うしかない、か……」

絶望的だった。目の前の敵の後ろにも、無数の姿が見える。

だが、二人は逃げない。分かっているからだ。目の前の存在を放置したら、学園が、世界が崩壊するかもしれないのだ。

「世界の平和のためって言葉を使うとは思わなかったわね!」

「そうかな! ヒーロー番組にはよくある台詞だよ!」

二人は叫びながら、そして剣や薙刀を振るいながら突き進む。自分たちが移動すれば相手は追撃してくるだろうと読んでの行動だった。

「このまま無人機を引き付けて、校舎から引き離すわよ!」

「うん!」

姉妹は恐怖や疲労を無視して、ひたすら無人機の気を引き付けつつ戦い続けた。

「こんつつのおおお!!」

箒の手のひらから放つ炎が波となって、無人機を押し戻していく。

「いい加減に倒れてください!」

そこへ真耶がグレネードを撃ち込み、まとめて撃破していく。それでも、残骸を踏みつけてまで相手は侵攻してくる。

「箒さん、大丈夫ですか!」

「はい! 先生は!」

「私はまだ大丈夫ですが、このままでは……!」

表示されてる残弾のゲージが、赤く点滅していた。すぐにリロードする。これで何回目のリロードだろうか。

「(先輩、お願いします！ 貴女の力が必要なんです！)」

真耶は、自身の専用機の封印を解きに行つた先輩……千冬の応援を待つ。

戦闘が始まる前に、真耶は千冬からあることを頼まれていた。

『真耶。私は、パートナーの封印を解きに行つてくる。その間、箒を守ってやってくれ』

千冬の言うパートナー。それは、彼女の専用機である『暮桜』。その封印が解かれることは、ブリュンヒルデの復活を意味する。

だが真耶にとっては、千冬からの願いもそうだが、教師としての責任と山田真耶としての感情が入り混じっていた。その混ざり合った気持ちだが、彼女を強くさせていた。

一方、箒は嫌な予感がしていた。胸の奥がザワザワするような感覚……。まるで身内に何かあったのではというような感覚があった。

「(一夏……。無事でいてくれ……)」

箒にはただ、祈ることと戦うことしかできなかつた。

真とミツル、護と白斗と影夜の目の前にある男が立っていた。白い外套に身を包み、白金のような髪をしている。

「久しぶり、かな？」

「……何もんだテメエ」

男から放たれる気配に冷や汗を流しながらも、隙を見せないように真は振る舞う。目の前の男は穏やかな笑みを浮かべているが、その気配は殺気に近かつた。

「私は、天廻龍と呼ばれている……。もっとも、これは人間からの呼び名だがね」

「やっぱりモンスターでしたか……！」

影夜とミツルはナイフを構え、真と護と白斗は拳を構える。

「変わらないなあ、君たちは。そのナルガクルガの人間も、ティガレックスの人間も」

「俺たちを知ってやがる!？」

「特にナルガクルガ君には、吸血鬼の子をさし向かせたからねえ」

「っ！ 昔の妹様の凶暴化……！ 貴様かああ！」

「よせ、影夜！」

「父さん！」

影夜が能力を発動し、ナイフを投げながら腕のブレードで切りつけようとする。だが男から放たれる黒い球によってナイフは防がれ、影夜自身は吹き飛ばされる。

「ぐううっ！」

「君たち大人三人組は、主の仇だ。たつぷり絶望させるためにも、今は退場してもらおう」

男が指を鳴らすと、突然無人機が降りてきて護たちを羽交い絞めにする。

「うおっ!？」

「このっ！ 離しやがれ！」

「ミツル！ 真くん！」

無人機の手のひらに当たる部分から、クモの糸……正確にはネルスキュラの糸が放たれる。それが護たちの抵抗を弱くさせた。

「適当に場外に放り込んでおけ」

「ぐっ、クソオッ！」

無人機はそのまま上昇し、凶暴化した無人機の群れの中へ飛んで行った。男は真たちを見る。

「さあ、私を倒さないと無人機は起き続けるぞ？ 世界中でこいつらは戦い続けるぞ？ それを防ぎたくば戦え、東風谷真！ 十六夜ミツル！」

「言われなくてもそのつもりだあ！」

「覚悟しやがれ！」

「私には、黒蛾という名があった。だが生まれ変わった今、新たに名乗ろう」

男が翼を広げると、辺りの空が黒一色に染まる。

「我が名は白亜<sup>びやくあ</sup>！ 天廻龍シャガルマガラだ！」  
最終決戦が、始まる……！！

## 62話 それぞれの決戦！ その1

白亜が翼を広げた瞬間、紫色の粒子が辺りに広がった。禍々しい色をしているソレは、翼を広げたことによる風圧によって真たちに襲い掛かる。

「うおおっ!」

「これは……!?!」

避けようとするも、範囲が広いために粒子を体に浴びてしまう。ダメージは無いものの、すぐに体から生じる違和感に気付いた。

体が重く感じる。さらに、体の内側が熱い。まるで体内を熱湯が駆け巡っているような熱さだ。ミッルが真に声を掛けようすると、その異常さに驚いた。

「真さん、体が!」

「相棒もどうした!? 体から黒い煙出てるぞ!」

「慌てることはあるまい。お前たちは一度、それを見ている」

「なに?」

自身が放ったものを知っているのか、白亜はほくそ笑みながら、ソレが何なのかを教える。

「銀髪の娘……。ラウラと言ったかな? かつて彼女に与えたものと同じだよ」

「っ! 貴様かああ!」

懐からナイフを取り出して白亜の喉を切り裂こうとするミッル。だが、翼脚で腕を掴まれると地面に叩きつけられた。背中から押さえつけられ、メキメキという音が響く。

「うっ、があっ……!」

「相棒おおお!!」

真が拳を鎧化させて真が殴り掛かる。だが、それも空いている方の翼脚で押さえつけられた。ミッルと同じく地面に叩きつけられると察した真は、瞬時に全身を鎧化させて体重を重くする。

白亜がその重さに一瞬だけ動揺した隙を見て、ミッルが脱出する。

「燃えやがれ!」

「ぐっ、ぬううっ!？」

全身から可燃性のガスを噴出させると、白亜は顔をしかめて翼脚を引っ込めた。

「(なんだ? やけに大人しく引っ込めたな……)」

その様子を訝しげに思いながら、蹴り上げつつ足を鎧化して白亜の顔を攻撃する。

「この鈍重が!」

「言いやがったなこの野郎!」

再び翼脚を開いて真を叩き潰そうとするが、それを掴んで攻撃を中断させる。だが、いくら怪力を誇る真でも古龍のパワーはすさまじいもので、腕がプルプルと震える。

「(くっ! 思うように力が出ねえ……!)」

「真さん!」

体勢を立て直したミツルが走り出し、真を踏み台にして腕のブレードで切りつけようとする。普通の人間ならば気づかないような速さで接近したのだが、相手は古龍。反応してガードの姿勢を取る。

だが、それはフェイク。切りつけると見せかけて、ナルガクルガの尻尾を薙ぎ払うように振るう。そのまま横に吹っ飛ぶ白亜。ミツルは緩めることなく、その尻尾から棘を発射する。そこへ追い打ちをかけるように真が熱線を飛ばす。

「……倒れてるとは流石に思えねえな」

「むしろ、ここからが本番でしょう……!」

ミツルの答えが正解と言わんばかりに、土煙から紫色の光が輝いた。

一夏は荒い息を吐いていた。自分を取り囲む無人機たちは手足を切断され、地面に倒れ伏している。好きだと意識している人のもとへ駆け付けたいのに、それが未だに叶わない。

「畜生、まだ動けるっつてのかよ……!」

一夏の愚痴をあざ笑うかのように、無人機はギシギシと無機質な音を立てる。長期戦を考慮して零落白夜や雪羅を使わないでいた。だというのに、シールドエネルギーが少なくなっている。

「空が暗くなってから、他のみんなと通信が出来ない……」

箒たちが居るであろう校舎を中心に暗雲が立ち込めてから、まるでノイズが掛かったかのように通信が出来なくなった。遠くに見える空は青く晴れているから、この人工島だけに雲がかかっているのだろう。

「さすがにヤバいか……」

機体の状態からして、既に絶望的。だが死ぬわけにはいかない。自分が死ねばどれだけの人が悲しむか。「生きて帰ってきてこそ、本当に守り切ったと思えるのだ」と、自身を鍛えてくれた白斗も言った。

「俺が生きるためにも……まずはお前らが倒れろおおお!!」

そう叫んだ、その時だった。

「よく言った、一夏」

凜とした声が出たかと思うと、周りにいた無人機の上半身と下半身が切断された。無人機を次々と切りつけていく様子は、まるで影が襲い掛かっているかのようだ。

しばらくして、影の動きが止まる。その正体に一夏は目を見開いた。

「ち、千冬姉!」

「遅くなつてすまない。封印の解除とフィッシングに時間がかかった」

世界最強が、再臨した。



## 63話 それぞれの決戦！ その2

千冬が身に纏うは、専用機『暮桜』。かつて彼女を世界最強へと導いた相棒である。そして手にするは雪片式型の前身である雪片。

「束からもらった解凍プログラムのおかげだな。今回ほど、あいつに感謝したことはない」

「千冬姉、暮桜はもう使えないんじゃない？」

「……詳しくは言えんが、学園に封印してただけだ。使えないわけでは無い。それよりも、来るぞ！」

「っ！」

先ほどとは別の無人機が襲い掛かるが、二人が瞬時に反応し、上半身と下半身を真つ二つにする。

「ここを突破し、篠ノ之や山田先生と合流するぞ！」

「ああー！」

千冬がスラスターを噴かせて群れの中を突っ切る。彼女が通り過ぎた瞬間、無人機たちは胴体を切り裂かれていた。ISを纏ってない状態でもIS用のブレードを振り回せるのだ。パワーアシストが掛かっている状態になれば、千冬にとってブレードなど、下手すれば箸よりも軽いかもしれない。

「(は、速い！ どうやって振ったのか見えなかった！)」

「どうした一夏！ 早く来い！」

「分かっている！」

一夏も、妨害してくる敵を切り捨てながら、姉を追った。

「(いかん、炎を放ち過ぎた……！)」

箒は、あまりにも長い戦闘で疲弊しつつあった。元々体力は高いと自負していたが、倒しても蘇る無人機たちに、心身ともに疲れ始めていた。

「篠ノ之さん、大丈夫ですか!？」

「正直に言おうと、そろそろキツイです……！」 山田先生は？」

「こちらも、弾丸が……」

学園が所有している量産機『ラファール・リヴァイブ』。その追加武装であるクアッド・ファランクスで戦っていた真耶も、消費が激しかった。4つのガトリングガンから放たれる弾丸の雨によって、無人機は次々とハチの巣にされていった。しかし、それに追いつくかのように第2波、第3波とやってくるのだ。膨大なパスロットを持つために、そこには大量の弾丸を入れていたはずだった。それなのに今は容量の空きを示すアイコンが目立つ。

「先ほどから、皆さんと連絡がつきません……。あの暗雲が通信をジャミングしてるのでしようか」

「真、ミツル、頼む……！ 敵のリーダーを……！」

犬のような姿勢をとる無人機が飛びかかってきた。箒はすぐに反応し、手に炎を宿す。

「（炎が腕に巻き付くイメージ！ 私の霊力で巻き付いた炎を操り、解き放つ！）」

右手を前に突き出し、炎の渦を解き放つ。高温に耐えきれなくなったのか無人機は装甲をドロドロと溶かして爆発した。だが、それと同時に箒も片膝をついてしまう。

「（限界、なのか……!?!）」

「篠ノ之さん！」

その隙を他の機体が見逃がすわけがない。別の機体が飛びかかってきた。そこを真耶がショットガンで撃ちぬく。

「（動きを統制している頭、次に手足!）」

数発の銃声で敵をしとめると、ガトリングガンを外す。そしてスラストで加速し、箒を抱きかかえて後退した。

「撤退しましょう！」

「申し訳ありません……」

「謝る必要はありません！」

だが、撤退すると言ったものの、すでに周りは囲まれている。校舎へ逃げ込めば無人機もそれを追うだろう。そうすれば別の所で戦っ

ている真たちに被害が及んでしまう。

「どうすれば……!」

その瞬間、空から人參型のミサイルが降ってきた。

「……え?」

突然の出来事に固まってしまふ真耶。だが、その後に聞こえてきた声に驚いたのは、箒だった。

「箒ちゃんに手を出してんじゃねえよ、鉄くず共」

不思議の国のアリスを思わせるドレス。機械仕掛けのウサ耳。そんな変わった服装をする人間をするのは、ただ一人。

「ね、姉さん……?」

「イエーッス! 箒ちゃんの頼れるお姉さん、束さんだよ! 遅れてゴメンね〜!」

戦場に似つかしくないトーンの声と笑顔。篠ノ之 束の登場だった。

護たちは、己の拳を振るって無人機を攻撃していた。そこには躊躇というものは無い。

「この俺をなめんなあ!」

白斗が相手の頭部を掴んで、地面に叩きつける。その衝撃によって内部の部品が圧迫され、機能を停止した。

「影夜! さつきから体がおかしいぜ! 暴れているときは体が軽い、止まってるると怠く感じる! こいつはきつと……!」

「ええ! 『奴』が放っている狂竜ウイルスによるものでしょう!」

二人の声を聞きつつ、護は無人機の胴体に拳を撃ち込む。

「(……む?)」

その時『何か』が触れたため、掴み取る。周りにコードのようなものが繋がってたため、ブチブチと乱暴に引きちぎった。

「どうしました護さん……って、これは！」

「どうやら、これが無人機のコアだったみたいだな」

「狂竜結晶……！」

狂竜ウイルスの結晶体、狂竜結晶。これが無人機を動かしているようだ。突然の凶暴化も納得だ。

「確かに、ウイルスを操れる『奴』ならば、量産も簡単でしょうね」

「これほどの数を生み出せるとは……！」

「だが、こんなものが世界に流れれば……。ましてや軍事利用されれば、最悪なことになる！」

「ちくしょう！ あいつを早くぶちのめさねえといけないって事かよ！」

その時だ。自分たちを呼ぶ声がした。

「護さん！」

「君たちは……更識さんだったか」

「すみません……。敵が多すぎて、こっちまで撤退してきたんです……」

簪が申し訳なさそうに、自分の後ろへと視線を送る。そこには簪と楯無を追ってきた無人機たちがあった。

「私も簪ちゃんも、武器がいつ壊れてもおかしくない状態で……」

疲労困憊といった様子の二人を見て、護はほんの一瞬だけ目をつむった。

「影夜、白斗。真たちの所へ向かう前に、ちよいと体を暖めるぞ」

「分かりました。少しは運動しないといけませんね」

「へへっ。まだ暴れ足りないところだったんだ」

そんな三人を見て、楯無は驚きを隠せない。

「(さつきも無人機と戦っていたのに、まだ戦えるの!? 本当にこの人たちは人間なの!?)」

彼女の驚きをよそに、三人は無人機へと突っ込んでいった。

## 64話 それぞれの決戦！ その3

真たちがいる場所は、地面が抉られたり壁が破壊されたりと、悲惨な状態になっていた。真とミツルの制服はボロボロになり、傷や出血も目立っている。

「はあ、はあ、はあ……………」

「相、棒…………ぐあぁー！」

「ふっふっふっ。近づけまい？」

白亜はニヤリと笑う。彼が真たちによって大ダメージを受けてから、学園上空にある暗雲が更に厚くなった。

そこから2人は、手を出すのが難しくなった。真が得意の殴り合いに持ち込もうとした瞬間、紫色の雷が命中したのだ。

「ウザってえな！ ビリビリビリビリよお！」

もちろんタダでやられる訳もなく、時には接近して殴ろうとする。しかし、バリアのような物が真の拳やミツルのナイフを防いだ。

「これは…………まさかISのバリア!?」

「首から下げてるそのネックレスか！」

「使いようによっては、人間の兵器も役に立つな」

鼻で笑いながら、翼脚で真を殴り飛ばす。強烈な一撃に、真は意識が飛びそうになる。

「クッソお！ ちまちまとしか攻撃出来ないなんてガラじゃねえ！）」

再び起き上がり、自分の専用機に呼びかける。

「一気に詰める。行けるか？」

《任せて！》

学園に来たばかりの頃はカタコトだったグラビオスが、今ではすっかり流暢に喋れている。そのことに少しだけ笑みを浮かべると、ブースターを一気に点火させる。

「うっ、おおおおおおお!!」

「ダメージ覚悟の突進か！ 無駄なことを！」

真の拳と白亜のバリアがぶつかり合い、バチバチという音と青白い

光が発生する。真が苦し気な顔をする一方で、白亜は余裕そうな笑みを浮かべていた。

「モンスターと言えども、この壁は突破できまい」

「俺を……なめんじやねえ……！俺を誰だと思つてやがる……！」

体を支える足が、地面を抉る。そんなことも気にせず、真は拳を打つ姿勢を崩さない。

「俺は、常識をぶち破る男だああああああ!!」

その瞬間、バリントツ!という音を立てて、バリアが砕け散った。白亜の目が驚愕に見開かれる。

「なっ!?!」

「相棒お! 今だああ!」

「はああああああっ!」

真がバリアを攻撃している隙に、ミツルは後ろへと回り込んでいた。IS用のブレードを持つ両腕は制服の袖が破けるほどの筋肉で膨れ上がっている。

「スラツシュ!」

白亜の背中に、大きなXの字が切り刻まれる。それは翼脚の付け根を完全に寸断し、大きいダメージを与えた。さらにその衝撃で、白亜は前へとよろめく。

「ぬっ、ううう……」

「ふんっ!」

「があっ!?! こ、東風谷真お! それは……角だけは……角だけは止めろおお!」

やけに慌てふためく白亜。その様子に真は『あること』について確信を得る。

「ナナシ先生が言っていた。『古龍と呼ばれる生き物の特異的な能力は、角が関係しているかもしれない』って。どうやら本当だったみたいだな!」

そして、角を握る右手に炎を纏わせる。白亜の表情が苦痛に歪む。  
「ぎっ……!」

「そして俺の炎の攻撃に対しての怯み……。お前は炎が弱点だな！」

「や、めろ……。俺を見るな……。見るなあ……！」

「これで終わりにしてやるよ！」

「やめろおおおおお!!」

バキンッ！

「う、あ……。ああ……」

「これで決着だ。こうすれば無人機たちも——ん？」

白亜の異常に気付き、怪訝な顔になる。白亜は頭を抑えながら、真から一步二歩と下がっていく。その間に白亜に向かって黒い霧が集まっていく。

「真さん……。これは、もしかして……」

「やつべえ……。もしかしたら俺、やらかしたかもしれねえ……！」

「G A!!」

おぞましい叫び声と共に、霧は渦となって白亜を包み込んだ。

渦が晴れた瞬間、その異様な姿に二人は鳥肌が立った。

髪は黒と白で半分となり、右手の爪も黒く染まっている。顔は左半分が焼けただけ、真によって砕かれた角の付け根がその痛ましさを増大させていた。何より——左側の眼球が無くなっていた。元々は眼球があつた窪みの中は黒く、中心に光る赤い点が不気味さを醸し出している。

では右半分は無事かというと、そうでもない。右目から光はなくなり、口の端からは狂竜ウイルスに感染したものの特有の黒い煙があふれている。

白亜は、角を砕かれたことによってウイルスのコントローラが出来なくなってしまうのだ。

「何てこった……。最悪な展開だぞ、何やってんだ俺は！」

「言ってる場合じゃないでしょう!? 行きますよ真さん! 本当の本当にラストバトルです！」

「お、おう！」

ミツルはブレードの刃を入れ替え、最悪な事態を招いてしまったと後悔した真は拳を構えなおす。

理性を失った白亜は、再びおぞましい叫び声を放った——！



## 65話 それぞれの決戦！ その4

真たちがファイナルバトルへ突入しているころ、ラウラはひたすら防戦に徹していた。ワイヤーブレードで複数の無人機を貫き、レールカノンで別の群れを吹き飛ばす。

だが、それも限界が近づいていた。わらわらと湧き出てくる無人機に、ひたすらエネルギーや弾薬、そして体力と精神力が削られていく。

「(シャルロットも、限界が近い……！ どうすれば……！)」

武器のバリエーションが豊富なシャルロットのラファールも、足元に散らばる葉莖の数から相当長い時間撃ち続けていることがわかる。それほど敵の数が尋常ではないのだ。

「くっ……！ シャルロット、下がれ！ このままでは突破される！」

「でも、ラウラが一人になったらどうするのさ!？」

「そんな事知るか！ だが、お前も限界だろう！」

怒鳴るような声になりつつも、プラズマ手刀で敵を溶断する。

「私はまだ大丈夫だ！ お前の方が補給を優先したほうが良い！」

「でも、ラウラだってカノン砲の弾少ないでしょ!？」

「それでもなあ！」

押し問答と化している間にも、無人機は次々と葬られていく。そしてそれ以上に湧いて出てくる。中には壊れた部分を、既に事切れた機体からちぎり取って修繕してくる個体までいる始末だ。

「本当にゾンビみたいな奴らだ！」

「こういうのは映画だけで良いのに！」

すると、上空から弾丸の雨が降り注ぎ、それに続いて影が敵を次々と斬りつけていった。

「っ!？」

「あれは……学園の量産機?」

シャルロットとラウラの目の前に立つのは、学園が保有している量産機、ラファール・リヴァイブと打鉄。だが操縦者は頭をすっぽりと覆うようなヘルメットを着けているため、素顔がわからない。

「あー、お前ら。とつとと補給行ってきな」

「(変声機か……。何者なんだ?)」

「今からマップデータを送るから、そのルートを進みなさい。特にドイツの子。貴女に渡したいものがあるって、篠ノ之博士が言っていたわよ」

「篠ノ之東だと!?!」

「ほら、とつとと行った! 出来るだけ早く戻って来いよな!」

何が何だか分からないままに進むラウラとシャルロット。その様子を見届けた量産機の操縦者は、敵の方へ向き直る。

「なあ、スコール。学園のもんパクッておまけにリミッター解除して参戦してるけどさ……。いけると思うか、これ?」

打鉄を纏っているオータムが、ラファールを纏っていたスコールに話しかける。

「あいつらは、私たちを海上に落とした上に、組織も潰した敵よ? いけるじゃなくて、行くの」

「へっ! だと思ったよ。そんじやあ暴れるとすつかあ!」

二人は一気に駆けだした——!

二人が急いで飛んできた先に、目的の人物はいた。アリスのような恰好を思わせるドレス、機械的なウサ耳。間違いようがない。

「ラウラ、シャルロット!」

「箒! 無事だったのか!」

「何とかな……。山田先生も、この通りだ」

「あれは、博士の手助けがあつたからです。お二人も無事で何よりでした」

東の側にいた箒と真耶も、疲労してるのか少し汗をかいているが、目立った外傷はなかった。安堵していると、東が苦笑しながらラウラたちのもとへ来る。

「はいはい、感動の再会と言いたいたいところだけど、今は無人機の群れを何とかするのが先だよ。ってことで、まずはその金髪ちゃんから!」

「僕のこと!？」

「時間もないし、一気に行くからね」

「ちょ、ちよつと待って!? ひゃんっ!?」

東が背中から機械のチューブのような物を伸ばすと、装甲の隙間などからエネルギーを注入していく。さらにシャルロットの胸元の辺りにチューブを差し込むと、東は残像が見えるほどのスピードでキーボードのようなものを動かしていく。チューブが刺さったときに変な声が出たのはご愛敬だ。

「弾薬補充とエネルギー補充を同時に、しかもあんなスピードで……」

「姉さん、そこまで凄かったのか……」

「いや〜ん! 箒ちゃんに褒められちゃった〜! ってことで、ホイ完了!」

「あ、ありがとうございます……?」

「お次は銀髪ちゃんだけど、君にはパッケージを装備してもらってから、時間かかるよ」

「パッケージ、ですか!？」

「そう。もうまどめて吹き飛ばした方が良さだろうからね! というわけで、くーちゃん!」

すると、東の掛け声とともに、ラウラと同じ銀髪の少女が現れた。目を閉じているだけでも不思議な感じが漂ううのに、ラウラにとつては懐かしさのようなものを感じた。

「お前は……」

「クロエ・クロニクルと申します。色々とお話したいですが、時間がありません。エネルギー補充及びパッケージの換装を行ないます」

「あ、ああ……」

東とクロエによつて、淡々と換装が進められる。ラウラはどこか気まずさのようなものも感じながら、目の前のモニターに表示された装備を見た。

「これは……パンツァー・カノニアではないか!」

それは、80口径レールカノン『ブリッツ』を両肩に装備し、4枚

の物理シールドが左右と正面を防御するという、完全な砲撃装備であつた。

「良いかい、銀髪ちゃん……いや、ラウラちゃん。君には重要な任務を与えるよ」

「え……？」

それは、まさに無人機と戦っている仲間を救えるかもしれない作戦だつた。

IS学園にある複数の施設の内、損傷が少ない建物。その屋上にラウラは居た。側にはシャルロットが護衛についている。

《では、改めて作戦を説明します》

クロエの淡々とした声が聞こえる。

《あなたのレールカノンで発射する砲弾は、滅龍炭という物質を高密度に圧縮したものです》

「滅龍炭……。まさに、モンスターを討つための砲弾か」

《なんでも、開発者はミツル様の故郷の方だとか》

「なるほど、納得だ」

《内容は簡単です。モニターに、着弾予測地点が表示されますね？》

「ああ。私はそこに砲弾が着弾するように、射角を調整する」

《そして、学園生の退避が完了次第、私が合図します。それと同時に撃ってください》

「了解した」

《……………》

「どうした？」

《いえ、何でもありません。シャルロット・デュノアが護衛につきますので、貴女はどつしりと構えていてください、ラウラ・ボーデヴィツヒ》

「分かった。では、作戦を開始する」

通信は切れていないが、クロエは心の中で、静かに妹の無事を願う。

「(貴女には想い人がいるのです。死んだら、姉として許しませんよ)」

射角を調整し終わると、仲間たちから次々と通信が入ってきた。

《ちよつとラウラ!? 何かあんたがとんでもない砲撃するって聞いたんだけど!?!》

《鈴さん、落ち着いてくださいまし! ラウラさん、私たちは避難完了ですわよ! 思いつきり撃ってくださいな!》

鈴とセシリアは、相変わらずだ。自分を相手にタッグを組んだ時以来、コンビ仲が良くなっている気がする。

《ボーデヴィツヒ。話は束から聞いた。頼りにしているぞ》  
《決めてやってくれ、ラウラ!》

憧れの教官と、仲間の一夏の声がある。彼女のおかげで挫折から抜け出せたし、彼のおかげで沢山の仲間と出会うことが出来た!

《ラウラちゃん、こっちもOKよ。護さん達が突破口を開いてくれたおかげね》

《頑張つて、ラウラ!》

《嬢ちゃん。思いつきり決めてやりな!》  
《ナナシが作った特殊な砲弾だ! ぶちかましてやれ!》  
《お願いします、ラウラさん!》

出会ったばかりでまだ交流も少ない先輩に、同じ代表候補生の簪。そしてモンスターという脅威に対して責任をもって戦い続ける人たち。

《私たちも退避完了よ》

《つたく、人使いが荒いぜ博士!》  
《うるさいな! あっ、もうみんな退避してるよ!》

《ラウラ! 私たちは信じているぞ!》  
《頑張ってください、ボーデヴィツヒさん!》  
《ラウラン、頑張れ!》

《私たちサポート班も、信じています!》

裏から支えてくれる人たちえもが、自分を応援してくれている! 「いよいよだね、ラウラ」

「シャルロット」

「どうしたの？」

「私は……仲間というものを改めて実感できたよ」

「……そっか。ラウラ、本当に嬉しそうな顔してる」

「ミツルにも、伝えたい。きつと彼も頑張ってるだろうから……」

「じゃあ、そのためにも成功させないとね！」

「ああ！」

すると、クロエから通信が入った。

《良かったですね、ラウラ。沢山の激励を貰えて》

「うむ。敵の状況は？」

《こちらの狙い通りに、着弾予想地点に集まっています。これより、カウントを開始します》

カウントが始まる。ラウラは唾をゴクリと飲み込んだ。

《3……2……1……！ 発射！》

「いっけえええええええええ！！」

砲口にバチバチと赤黒い雷が集まる。黒い球が徐々に大きくなる様子に、ラウラは叫ぶ。

「シャルロット、耳を塞いで口開けろ！ 鼓膜が破けても知らんぞ！」

「っ！」

言われた通りにする。その瞬間、二人を凄まじい衝撃波が襲った。

「うっ、ぐうっ！」

「うわああっ!？」

衝撃波の原因は、先ほどの黒い球が発射されたからだだった。砲弾は放物線を描き、予想地点へ綺麗に着弾する。

その瞬間、赤黒い雷が走るドーム状の爆風が発生した。

「うわあ……」

「何て威力だ……！」

だが、この砲撃によって、専用機持ち達が苦戦していた無人機の殆どが、消滅した。

「いよいよ、白亜を討つだけである……！」







真つ白な空間に、愛する両親の声が聞こえた。

『……産まれてきてくれて、ありがとう』

『ふふふつ。旦那様、とてもやさしい顔になってますよ?』

『そ、そうか?』

真は理解した。これは、自分が赤ん坊の時に聞いていた会話なのだろう。

『旦那様、この子の名前はどうしましょうか?』

『……実はな、決まってるんだ』

『まあ、そうなんですか?』

『この子の名前は……真。真実の真しんと書いて、真まことだ。』

『まこと……』

『人間は、真の強さだとか、そういう物にたどり着くのは困難かもしれない。だが、その過程を経て強くなることは出来る。真という場所まで目指して成長してほしい。だから、真だ』

『なるほど……。ふふつ、良い名前ですね』

『(父さん……母さん……!)』

涙があふれそうになる。自分の名前に込められた意味を、今この時に知ることが出来たのだ。そして、どういう思いで名前を付けたのかも。

『(そうだ。俺はまだ……戦える!)』

白い空間が眩しくなっていく。その時に頭に浮かんだのは、まだ想いを伝えていない少女だった。

『(負けてられねえよ! 本音のためにもな!)』

そして、目も開けられないほど眩しくなった。

「グ……?」

白亜は、己の腕に何か触れているのを感じた。己の腕の先には、息絶えようとしてる獲物がある……はずだった。

「……………つ!!」

その獲物は生きていた。しかも、腕をつかみ返してではないか。

その指先から炎があふれ、あまりの熱さに放してしまう。

「グギイイツ!？」

「ゲホツ、ゲホツ! あー……ようやく放しやがったな」

「良かった……。無事だったのか!」

「相棒、感動の涙はまだ早いぜ!」

白亜は拳を地面に打ちつけ、再び礫を飛ばしてくる。真は熱線を放つ。その時にミツルにアイコンタクトを飛ばしていた。

「(ふっ、そういうことか! 付き合うぜ真!)」

ミツルはIS用ブレードをブーメランのように投げつける。だが、白亜を通り過ぎてしまった。

「本命はこっちだ!」

真が手のひらから熱線を放った。その威力を察したのか、簡単に避けられてしまう。だが真はニヤリと笑った。

その瞬間、白亜の背中から熱線が当たった。そう。ミツルが投げたブレードで熱線を反射し、命中させたのだ。

「ギヤアアアアアアア!」

「よっしや、ヒット! 今度は正面からだぜ!」

炎に苦しむ白亜の頭を掴み、勢いよく地面に叩きつけた。大きなクレーターが出来る。

「ウウウウ……! グオアアアアアア!!」

「ごっふっ!? 痛いなあ、オイ!」

頭から大量に血を流しているにも関わらず、白亜は傷付いた腕で真を殴る。左の眼窩に浮かぶ赤い点は、まるで全ての者に恨みを込めているかのようにも見えた。

「……相棒。終わらせるぞ」

「……承知」

真の機体の武装である『グラビド・ヘッド』が展開される。ミツルの機体も、持てる限りのブレードやマシンガンが展開された。

「これで終わりだ……トライ・ファイアアアアアアア!!」

「いっけええええええ!!」

二つの砲門と右手から放たれる巨大な熱線。ブレードから放たれ

る斬撃波と弾丸の雨。

これらが、白亜に降り注いだ。

——ああ、ボレアス様……。

まるで長年待ち続けて再会したかのような声。それが二人の耳にした、白亜の最期の声だった。

「……こいつ等はさ、自分の住処を求めて戦ってただけなんだよな」

「ええ、そうですね……」

「何というかさ……。あんまり嬉しくない勝利だ」

「……はい」

学園を覆っていた暗雲は晴れ、太陽の光は、浮かない顔をする二人を照らしていた。

## エピローグ

敵との決戦を終え、千冬たち大人組は学園の修復に努めていた。千冬の目の前では、戦いに協力してくれた護たちが、突如現れた謎の女性——確か八雲 紫と呼ばれていた——と共に、何か話し合っている。

「では、ウイルスの心配はしなくて良いんだな」

「ええ。戦ってる間にナナシを送り込んで世界中を調べさせたけど、ウイルスの反応があったのはここだけ。だけどそれも、白亜という男が倒れたことで消えてなくなったわ」

「ただ純粹に、真とミツルだけを狙ってたってことか。ウイルスさえ使えば世界支配なんぞ簡単だったろうに。……舐めプかよ」

「そう言えば、戦ってくれた戦士たちはどうしてるの?」

「今は、戦いの傷を癒しています。特に真くんとミツルは、治るのに時間がかかるそうです」

「そう……。じゃあ、お邪魔しちゃ悪いわね」

「どうやら、世界へのウイルスの飛散は心配しなくて良いようだ。すると、珍しく協力してくれた友人がやって来た。」

「ちーちゃん」

「束か。どうした?」

「……暮桜は、どうするの?」

「……聞くと思ってたさ」

千冬は、手にある専用機の待機形態を見る。コア人格とも話し合っていて、決めたこと。それは……

「封印はしない。だが、練習機と同等のリミッターはかけるつもりだ」「やっぱり、世界中のおバカな連中が狙ってくるから?」

「そうだ。ただ狙ってくるだけなら、封印すればいいだろう。しかし……」

千冬は校舎を見る。あの建物の一室で、自分よりも格段に若い教え子が、そして弟が傷を癒しているのだ。

「今の私は、教師としての織斑 千冬だからな。専用機を持つという

「ことはどういふことなのかも、教えてやる必要がある」

「……そっか。分かったよ」

「そういうお前は どうするつもりだ。途中から協力してくれたあの三人……いや、ラウラに似た少女を除いて二人は、今は壊滅したとはいえ元はテロリストだぞ」

「相も変わらず、逃避行を続けるさく。それにあの二人、中々に役立つし」

「……相変わらず、いや、人と接する辺りは変わったか」

苦笑する千冬。笑う束。二人の目の前では、話を終えた護たちが瓦礫の撤去をやっていた。

「束。マドカのことなんだが……」

「今度の休みにでも、ちーちゃんの家に行かせるつもりだよ。その時はいつくんも……ね？」

「ああ、分かっている。マドカのことです一番傷付いてたのは、あいつだったからな」

「その時までにお部屋も片付けておくんだよ？」

「最後の一言は余計だ！」

「ぬにゃああああー！」

ニヤニヤと笑う束に、千冬はアイアンクローをかけた。事務処理に追われる真耶とクロエは、そんな二人に手伝いを求めるのだった。

「新学期。多くの生徒が学園へやってくる中、校門へ向けて歩く二人組が居た。本音と真だ。

「すっかり元通りになってるね」

「俺たちが傷を治してる間に、父さんたちが修復を手伝っていたらしいぜ」

「感謝感謝」

大量の無人機による攻撃の跡はすっかり無くなり、アリーナや校舎といった建物も元通りになっていた。これも、戦闘を終えた後でも体

力の残っていた大人組や、束たちの力があつてこそだろう。

「おはようございます、真さん、本音さん」

「おう、相棒」

「ラウラン、おはよう」

「おはよう。二人とも元気そうで何よりだ」

そこへ、ミツルとラウラの二人が現れた。その二人は……恋人のように腕を絡ませて歩いている。

戦いを終えてから倒れたミツル。目を覚ました時に目に入ったのは、心配そうに見つめるラウラだった。そしてミツル自身も、彼女の無事に安堵した。

『私と、恋人としてお付き合いしていただけないでしょうか』

真摯な顔で告白され、ラウラが断るはずもなかった。そこからである。二人がバカップルのようになり始めたのは。

「ふふっ、とても仲睦まじいですわね」

「おう、セシリア。おはようさん」

「真さん、ごきげんよう」

カップルらしい姿を見せつける二人に苦笑を浮かべるセシリア。

その後ろから、見慣れたメンバーがやってきた。

「何よ何よ、見せつけてくれるじゃない」

「どうりで他の人たちも騒いでるはずだよ」

「おや、鈴さんにシャルロットさんまで」

「この流れだと……」

すると、ラウラの予想した二人組がやって来た。

「おはよう、みんな」

「お、おはよう……」

「何だよ箒、いつまで恥ずかしがってんだ？」

「こ、このつなぎ方はまだ慣れない……」

一夏と箒の二人組である。しかも、手と手のつなぎ方は、俗にいう『恋人つなぎ』である。一夏が堂々としてるのに対して、箒は顔を赤くしている。その様子に他の生徒たちは大騒ぎだ。

「うそ、織斑くんと篠ノ之さんが!？」

「いや、でも織斑君が無意識でやってるんじゃないよ……」

「でも見て！ 織斑くんも若干顔赤いよ！」

「て、事はもしかして、もしかしなくても……!?!」

「「キヤアアアアアアアアアア!!」」

周りから黄色い歓声上がる。そのせいで更に顔を赤くする筈、

そう。あの戦いの後、一夏は彼女に告白した。最初こそ戸惑った筈だったが、返事は当然……

『ふ、不束者だが、よろしく頼む……』

そしてその告白シーンを、彼に惚れていた鈴とシャルロットは見ていた。当然二人は泣いた。部屋で大泣きし、風呂場でお互いに涙を流しあつた。そしてそれ以上に、二人は闘志を燃やしたのだ。

「(筈。アタシは諦めるつもりはないからね!)」

「(卒業までが勝負！ 初恋を諦めるつもりはないんだから!)」

「(ふ、望むところ！ 私とて慢心するつもりなど毛頭ない!)」

「(絶対に俺のことか何かで、火花散らしてんだろうなあ……)」

密かに火花を散らしてるつもりのある三人だが、一夏を中心にバレバレだった。

「あらあら、とても賑やかね〜」

「あんな公衆の面前でイチャイチャしてたら、目立つのも当然」

「みなさーん、あまり騒がないでくださーい」

今度は楯無に簪、虚がやってきた。あまりにも騒がしいため、虚が野次馬たちを散らせる。

「ここまで来たら、真くんもやるべき」

「か、かんちゃん!?!」

「何言ってるんだ!?!」

思わず顔が赤くなる本音と真。それをからかうように、楯無と虚が追い打ちをかける。

「虚ちゃん、あの告白は凄かったわよね〜」

「はい。とても大胆かつシンプルで、しかも私たちがいる前でという勇気が要る場所にも関わらず……」

「うわああああ!?! 解説するの止めてくださいよ!?!」

「お、お姉ちゃん〜！」

真はあの戦いのあと、蓄積したダメージが祟ったのか、倒れてしまった。それを付きつ切りで看病してくれたのが、本音である。

そして傷が治り、立ち上がることも出来るようになったときに、真は思い切って想いを伝えた。

『俺は、本音が好きだ！』

すごくシンプルな、しかし想いを伝えるには十分な言葉。それには本音も顔を赤くしながら「は、はい……」と小さな声で返事してしまふほどだった。

「嘘でしょ、男子三人にもう恋人出来てるなんて……」

「夏休みの間に何があったというの!？」

「これは、ぜひ聞いてみないと!」

大人しくなったはずの野次馬たちが、再び騒ぎ出す。真は冷や汗を流した。

「これはヤベエな……」

「ど、どうしよう〜！」

「こうなったら……本音、掴まれ!」

「え? うひゃあ!？」

真の取った行動に、周りからは「おお〜!」と歓声があふれる。

「おやおや、お姫様抱つことは」

「ふっ。真も案外やるな」

「どうする筈? 俺たちもいつかアレやるか?」

「ばっ、今やったら恥ずかしくて死んでしまうぞ!」

カップルたちはその行動に暖かい目をしたたり、自分たちもやってみようかと考える。

「あらまあ、大胆」

「恋人つなぎを通り越してるわね……」

「ワイルド〜! ヒューヒュー!」

「本音ちゃん、幸せそうねえ」

「ふふ、顔は真っ赤だけどね……」

「良かったわね、本音……」



他の仲間たちは、その行動に少しだけ顔を赤くしたり、本音へのエールを送ったりしていた。

「は、恥ずかしいよ〜!」

「大丈夫だ! 教室に入っちゃえば、あとは織斑先生と山田先生がなんとかしてくれる! 行くぞお!」

真は、愛しい人を抱きかかえると、風のように走るのだった。